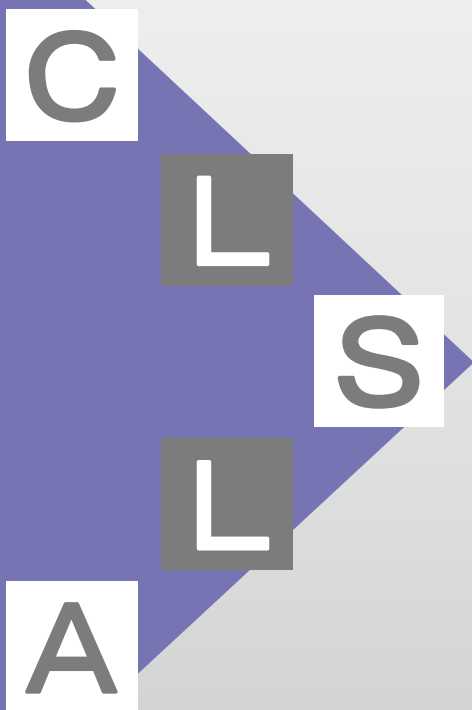


学習支援センター（SLAサポート） 年次活動報告書 2016年度

Annual Report 2016 / Center for Learning Support(SLA Support Office)



東北大学
高度教養教育・学生支援機構
Institute for Excellence in Higher Education,
Tohoku University

学習支援センター（SLA サポート）
年次活動報告書
2016年度

2016年度ダイジェストトピック10

【前期セメスター】



アカデミック・スキルセミナー実施

ライティング支援の拡充のため、「アカデミック・スキルセミナー」を前期セメスター中に実施。ライティング以外の内容も盛り込んだ。

[関連ページ → p.37,73]



自主ゼミ支援イベント実施【NEW】

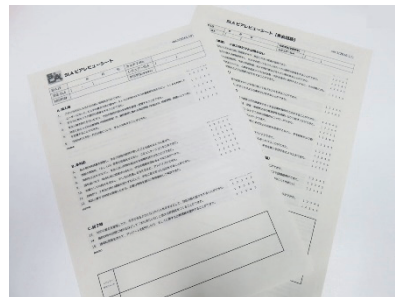
自主ゼミをすでに行っている学生だけでなく、これから始めてみたい学生への支援として、自主ゼミ体験談を話題提供する企画を実施した。

[関連ページ → p.45]



研修合宿

9月中2泊3日の研修合宿を実施。S L Aによる前期活動報告会、副センター長による講義、学習支援を定義するワークショップを実施。[関連ページ → p.83-87]



ピアレビューシート開発・実施【NEW】

シニアS L Aを中心に「ピアレビューシート」を前期セメスター中に開発。後期セメスターは試行実施し運用方法を検討した。

[関連ページ → p.11-16,90-91]



【後期セメスター】



企画担当 SLA 創設【NEW】

11 月より「学びを創る」支援を専門に担当する S L A を新たに雇用。大学での学びを広げ・深める学びの機会の提供を目指す。 [関連ページ → p.17-20,41-42]



共通研修の実施

担当分野の壁を越え、S L A としての成長を図る機会として 2015 年度より実施。本年度は、後期セメスターを中心に全 5 回実施した。 [関連ページ → p.94]



シニア試作「初任者研修」【NEW】

先輩（シニア）S L A を中心に、新規メンバーを対象とした研修教材を作成し、一部実際の研修も実施。

[関連ページ → p.11-16,90]



AcademianTalk 開催【NEW】

企画担当 S L A 初の学習企画。「Academian Talk」および「Academian Talk+」の 2 タイトルの下、計 4 つの企画を実施。 [関連ページ → p.41-42、75]



CLS「学びの転換」セミナー【NEW】

学習支援センターが企画する、学内外の学生・教職員に向けた学習企画。S L A の共通研修の場としての役割も持つものとして、本年度新たに実施。

[関連ページ → p.47-56]



「卒業プレゼン」実施【NEW】

他大学の実践を参考に「卒業プレゼン」を採用。卒業生に後輩に引き継ぎたいワードを 3 つ以内でプレゼンしてもらう。人から人へ、実践を繋ぐ一つの仕掛けである。

[関連ページ → p. 11-16,82]

巻頭言

とものすすめ

学習支援センター長 芳賀 満

生物は自然界の中に生きて、自然環境という舞台に適応して進化する。しかし人間のみは自然界の上に文明界を自ら創造し、文化環境という舞台に適応して進化する。人間は自然界の一部ではあるが、文化環境による自己異化を遂げた反自然的存在である。例えば我々は服を着て靴を履き装身具を身につけ、建物を立て地を耕し、神殿と原発を作る。こうして人間は、自然という造物主から進化を奪い取り、未来を自己決定する極めて不遜な存在となった。

しかし本来人間は、自然史の微小部分であり、粟粥が煮えるほどの束の間の異化でしかないはずだ。先ずこの自省が必要である。文明とは利器であり、それは諸刃の剣であることは、福島原発事故で身に染みたまはずだ。

一方、C.レヴィ＝ストロースの« Le monde a commencé sans l'homme et il s'achèvera sans lui. » (*Tristes tropiques*, 1955.「世界は人間なしに始まったし、人間なしに終わるだろう」川田順造訳『悲しき熱帯』中央公論新社 1977年)との言葉はあまりに偉大で、冷たい。では、我々自身を突き放すことなく、同時に自らに盲信することもなく、なるべくの永続を図るにはどうしたらよいのであろうか。

たしかに人間は自然界の頂点に立つが、そこに至った戦略は弱肉強食ではない。野獣と遭ったら食べられてしまうほどに我々は弱い。人間の基本戦略は共に働くことにある。まさに「人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。やはり向う三軒両隣にちらちらするただの人」(夏目漱石『草枕』)なのである。その我々両隣の人たちどうして、精妙に言語を駆使し、表情や体でも意思を疎通し、意地と寛容をやりくりし、智や情の交流を図り、そして物を作り事に当たる。それがこの人の世と文明と、そして幸いをつくった。ならばそれを大事にしよう。

いま机上の茶碗、いま肌着にしている紀州産「綿ふらねる」でさえそうだ、と言うのは幸田露伴である。蒟蒻の粉しかり、だれがこのような便利でいいもの、「人間の幸福」を作ってくれたのか。「人の世の幸福の多くして厚き世を、文明の世といひ、幸福^{とも}乏くして薄き世を、未開の世といふ」が、もし今が文明の世ならば、それは多くの人々が徳澤を遺し、世に一つなり二つなりの幸福を添えていってくれたからに他ならない。そうして、振り返りみれば我々の衣食住の「幸福」とは、「多くの人々の頭より出で手より出でたる恩恵の糸によって間罅も無く膝^{かが}られたる」美しい手毬子のようなものではないか、と『文明の庫』(明治31年)にある。文明とはこのような手毬子であり、それを手渡し合う「幸福」であるはずだ。

我々はそのような場でありたいと願っている。

目次

巻頭言 「とものすすめ」 芳賀満 ----- 3

◆2016年度事業概要・成果----- 5

第1部 論考・センタースタッフによる年次成果報告----- 7

1. 利用学生アンケートから見る2016年度の傾向 鈴木真衣(7)
2. 学習支援チューター育成のための“知の継承・共有”デザインとその取組み 足立佳菜(11)
3. 企画発信型学習支援をなぜ「強化」するのか—企画担当 SLA 新設の経緯を踏まえて— 佐藤智子(17)

第2部 活動報告 ----- 21

- 1 センター概要 ----- 21
- 2 センター活動・実績報告 ----- 28
 - 1) 理系科目支援(主に、物理・数学・化学)(29)
 - 2) 英会話支援(34)
 - 3) ライティング支援(37)
 - 4) 学習イベント企画(41)
 - 5) 利用学生評価(43)
 - 6) 自主ゼミ支援(45)
 - 7) 授業連携型学習支援(46)
 - 8) CLS”学びの転換”セミナー開催報告(47)
 - 9) その他活動(学内連携、訪問受入、講演、学内貢献活動、広報活動、研究活動)(57)
- 3 部会活動報告 ----- 58
 - 1) 物理部会(59)
 - 2) 数学部会(63)
 - 3) 化学部会(66)
 - 4) 英語部会(69)
 - 5) ライティング部会(72)
 - 6) 企画部会(75)
- 4 SLAの採用と育成・研修実績報告 ----- 78
 - 1) SLA募集・採用活動(79)
 - 2) 活動説明会・活動報告会(80)
 - 3) 研修合宿(83)
 - 4) 「シニアSLA」の開発と活動(88)
 - 5) SLA育成・研修体制の整備(92)
 - 6) 共通研修(94)
 - 7) 他大学調査・合同研修の実施(104)
 - 8) 振り返りシートおよび個別ヒアリング(109)
- 5 SLAによる活動振り返りレポート ----- 111
[卒業生] 廣津孝(数学担当D3)、島森拓土(化学担当D3)、相澤紗絵(物理担当D1)
五十嵐聡(物理担当M2)、林田友利(ライティング担当M2)、千葉俊平(数学担当M2)
津久井崇史(物理担当B4)、笹川一平(企画担当B4)
[現役生] 早坂遼一路(物理担当B3)

第2部内掲載論稿一覧

- 大学生による自主的な「学び合い」はどのように実現できるか？
—学際研究コンテスト Xstudy (クロススタディ) の事例から学ぶ—
学生団体「Xmajor」OB・OG 大植沢真・木下浩之・星田佳祐・中村友洋・児玉菜(48)
- 「自立した書き手」を育てる文章チュータリング —気づきを促す質問をしよう—
早稲田大学グローバルエデュケーションセンター・准教授 太田裕子(53)
- 福島大学における「学びのナビ」実践開発 —SLAによる学習支援との相違点を探る—
福島大学総合教育研究センター 鈴木学(95)
- 障害のある学生への支援について
学生相談・特別支援センター 佐々木真理(98)
- カウンセリング・マインドの理解 —「共感的理解」とは?—
理学研究科キャンパスライフ支援室 岩淵将士(101)

◆資料

- A. 利用学生アンケート結果(全データ) ----- 129
- B. 研修合宿ワークショップ成果物 ----- 142
- C. 2016年度発行ポスター ----- 150
- D. 2016年度活動略歴 ----- 155

◎2016年度事業概要・成果

1. SLA サポートシステムの開発・実施（総合）

- 目標：① 理系科目支援：効率的なサポートシステム運営へと改善しつつ、SLA の育成を通してサポートの質を向上させる。正課教育への情報フィードバックを進め、大学教育改善に寄与する。
- ② 英会話支援：SLA を増員して規模の拡大を図り、支援体制の安定化を図る。
- ③ ライティング支援：ニーズの創出を含めた支援体制の構築を図る。
- ④ 授業連携型支援：教員への聞き取りを実施し、実践の蓄積と公開を行う。
- ⑤ 自主ゼミ支援：環境支援の維持および自主ゼミ立ち上げの支援イベントを実施する。

■活動・達成状況：

- ① 理系科目支援：前期・後期ともに 32 名の担当 SLA を雇用。前年度から引き続き、平日に窓口を開設し、個別の質問対応による学習支援を行った。利用者数（のべ人数／実数）1,767／356 名。正課教育への情報フィードバックについては 5 参照。
- ② 英会話支援：前期 11 名・後期 10 名の担当 SLA を雇用。「英会話カフェ」と「1 on 1 英会話」の 2 形態で学習支援活動を実施。利用者数（のべ数／実数）518 人／130 名。
- ③ ライティング支援：前期・後期共に 5 名の担当 SLA を雇用。個別対応型学習支援の他、セミナー型の学習支援としてアカデミックスキルズセミナーを実施した。利用者数（のべ人数／実数）61／56 名。
- 全体として利用学生アンケートでは平均満足度 96 点（有効回答数 1,367 件）と高評価。
- ④ 授業連携型支援：グローバルラーニングセンターと連携し FGL プログラム学生の支援を行ったが、利用推進における運営上の課題解決のため、連携方法を改善した。
- ⑤ 自主ゼミ支援：教室貸出を中心に 4 ゼミ（106 名）の支援を実施した。イベントは 3-②。

2. SLA サポートシステムにおける英会話支援（SLA de 英会話）の開発・実施

- 目標：前年度拡大した活動規模を維持し、かつ継続利用者を増加させる。日本人 SLA と留学生 SLA の比率のバランスを図りながら、安定的かつ多様なサポート体制を構築する。
- 活動状況：英会話担当 SLA を年間 6 名新規雇用し、前期 11 名、後期 10 名（うち留学生は前期 6 名、後期 4 名）雇用。留学生 SLA の比率は前期 54.5%、後期は卒業者がいたため 40%であった。「英会話カフェ」「1on1 英会話」によって多様な学習ニーズに対応するとともに、質保証を図るため対応の標準化を進めた。継続利用者の増加は次年度課題。

3. 学習イベント（企画発信型学習支援）の開発・実施

- 目標：①先輩学生が自身の学生経験や研究内容を紹介する「先輩×学問ゼミ（仮）」を実施し、自身の専門の枠を超えた学習の機会を創出する。
- ②「自主ゼミ交流会」の企画により、課外における集団学習創出の機会を提供する。
- ③「SLA 式アカデミックスキル入門セミナー」を実施し、ライティングスキルを中心とした大学生に必要なスキルについてのセミナーを実施する。その際、単なる知識提供ではなく、学生ならではの情報提供に努める。
- ④ 企画発信型学習支援の運営体制を強化する。

■活動・達成状況：

- ① 授業（基礎ゼミ）内で5名のSLAに話題提供をもらい開発の端緒とし、その内容をセンターのホームページに掲載するなど、学習情報の蓄積を進めた。
- ② 自主ゼミ体験談企画を実施し、一部の参加した学生はその後自主ゼミを実際に始めたという成果はあったが、集客数やその後の展開においては課題が残った。
- ③ 6回に及ぶアカデミックスキル入門セミナー開催し、延べ40名の参加があった。
- ④ 【新規】企画発信型学習支援の安定的な運営体制を整備するべく、企画担当SLAを新設した。学問領域の壁を超えて学際的な学びを促すことを目指すAcademian Talk、および多文化共生を目指した学習イベントであるAcademian Talk+シリーズの企画を計4回開催し、合計で約25名の参加があった。
- ⑤ 【新規】SLA研修と連動する形で、一般公開型の（学内外教職員、大学院生対象）学習イベント「CLS学びの転換セミナー」を2回開催した。

4. 学習支援者（SLA）育成プログラムの開発・実施

- #### ■目標：
- ① 学習支援者の成長要素や資質の分析を行い、SLAサポートシステムの改善に役立てる。
 - ② 研修合宿や他大学との連携研修の機会を設け、多角的な視点でSLAの活動を捉えられる人材を育成する。
 - ③ SLA学生同士の学び合いを促進し、持続的な組織運営の基盤を構築するため、「シニアSLA制度」を運用する。その中で、学習支援活動をより俯瞰して捉える人材の育成を図るとともに、SLA学生同士の学び合いを促進することで、持続的な組織運営の基盤を形成する。
 - ④ 科目別の部会活動を充実させると同時に、共通研修も取り入れる。SLA育成におけるOJTの質の向上を図るため、リフレクションを促す仕組みを導入する。
 - ⑤ 学生相談・特別支援センター等、学内他組織と連携し、学生の力を活用した学習・学生支援組織の運営について研究を進める。

■活動・達成状況：

- ① 学習支援者に求められる資質を明らかにし、来年度に向けて、研修メニュー体系的な整理とプログラム化への土台をつくった。
- ② 同志社大学学習支援・教育開発センター（良心館ラーニングコモンズ）との合同企画により、学生スタッフ交流・研修会（2日間）を実施。また、SLA研修合宿を9月に（2日間）実施し、対象SLAの33.3%（16名）が参加した。
- ③ シニアSLA制度の運用を継続し、6名のシニアSLAを任用。
- ④ 科目部会は全9回定期開催できた。出席率は前期平均70%、後期平均69%。共通研修は前5回開催し、参加者数平均13.8名。学習支援に対するSLAの理解とセンター側での概念整理を深めることができた。
- ⑤ 同志社大学と合同研修を実施（2日間）。他大学との研修を実施することで本学学習支援事業の特徴を整理できた。

5. 学修情報フィードバックシステムの構築

- #### ■目標：
- 理系初年次科目を中心とした学修情報を担当教員・委員会に継続的にフィードバック可能なシステムを設計・試行し、正課教育の改善に寄与する。

- #### ■活動・達成状況：
- 対応事例の記録方法を見直し基礎データを蓄積。フィードバックは次年度予定。

利用学生アンケートから見る 2016 年度の傾向

センター員 鈴木真衣

1. はじめに

学習支援センターでは、毎回利用した学生にアンケートの記入を依頼している（詳細は 43 ページ参照）。このアンケートでは、対応満足点などを記入するほかに、任意で記入するコメント欄がある。本稿では、これらのアンケート内容から、2016 年度の傾向を考察する。

なお 2016 年度のアンケート回収枚数は 1,413 枚（回収率は前年度から 1 割増の 6 割）であり、コメントについては記述がある 925 枚を分類の対象とした。

2. 2016 年度のアンケート

(1) 学習支援ごとコメントの分類

SLA の学習支援で恒常的に行っているのは、個別対応型学習支援の理系科目及びライティングと、企画発信型学習支援の英会話である。これらの活動の形態は異なるため、それぞれについてコメントを分類したものが、表 1、2 である。

<表 1> 理系科目・ライティングについてのアンケート分類

分類		具体的な単語例	数	割合
問題解決		解決した、わかった、すっかり、助かった、納得	252	25.7%
対応の わかりやすさ	わかりやすい	わかりやすい	145	42.4%
	丁寧	丁寧、詳しく	116	
	基礎から	1 から、基礎、基本、根本、定義、意味、未履修	37	
	じっくり	長時間、根気強く、何度も	44	
	具体化	イメージ、図、具体例	38	
	プロセス	解き方、考え方、段階、方針	36	
対応の速さ		短時間、あっさり、すぐ	16	1.8%
SLA の態度・好感		親切、優しい、すごい、おもしろい	31	3.9%
SLA の話	アドバイス	アドバイス、ポイント、勉強の仕方	14	1.7%
	余談	研究の話、雑談	6	
利用学生の学び		学んだ、気づいた、深まった、考えさせられた	65	6.6%
利用学生の意 欲・気持ち	意欲	がんばりたい、勉強したい、また来たい	75	7.6%
	楽しい	楽しい	17	
	嬉しい	嬉しい	11	
	自信	自信がつく、不安が解消	7	
共に学ぶ（場について）		一緒に考える、一緒に解く、議論	36	3.7%
問題・課題について		難しい、恐ろしい	21	2.0%
不満・要望		（解き切れなかった、時間がなかった等）	8	0.8%
感謝		ありがとう、感謝	180	-

[注] 1 つのアンケートに分類内容が複数含まれることもある。各分類の割合は、感謝を除いて算出した。

理系科目・ライティングにおいては、「わかりやすさ」「問題解決」に関するコメントが多く、この 2 つで全体の 6 割以上を占めた。「わかりやすさ」について、「わかりやすい」という言葉以外で多かったのは「丁寧」で、その他「基礎から」「じっくり」「具体的」「プロセス」については同程度の数

が見られた。また、「共に学ぶ」ことについても同程度であった。

＜表 2＞英会話でのアンケート分類

分類		具体的な単語例	数	割合
楽しさ		楽しい、おもしろい	89	31%
会話（場について）	話せる機会	話せた、沢山話せた	39	17%
	話題	色々な話題、ディスカッション、プレゼンテーション	9	
利用学生の学び・練習	学び	ためになる、勉強になる、コツ、スキル	35	24%
	難しさ	難しい、力不足	21	
	上達	慣れてきた、力を伸ばせた	5	
	ペース、初心者	ゆっくり、わかりやすく、合わせる	9	
意欲		できるようになりたい、また来たい	58	20%
SLA の態度・好感		丁寧、親切、すごい、話しやすい	25	7%
不満・要望		（ミスを指摘してほしい、スピードが速い等）	4	1%
感謝		ありがとう	35	-

英会話においては、「楽しさ」に関するコメントが最も多く、他に「話せる機会」についてが多かった。それぞれの学習支援で共通して多かったものは、「学びになる」「意欲的になる」というコメントであった。

（2）2015 年度との比較

2016 年度のコメントを 2015 年度と比較したものが表 3 である。2016 年度は 2015 年度に比べ、「学びになる」という記述の割合が増加した。「共に学ぶ」「話す機会」など場についての記述も増えているため、理系科目・ライティングなら一緒に考えること、英会話なら利用学生に話させることが増加し、その結果として「学びになる」というコメントが増えたということが要因の一つとして考えられる。一方、SLA の態度・好感についての記述は減少した。2015 年度はこの記述が印象レベルで増加したのだが、それが元に戻ったか、より減少した可能性がある。

＜表 3＞2015 年度とのコメント内容分類比較

分類		2015 年度	2016 年度	差
問題解決		22.9%	20.0%	-2.9%
SLA	対応内容（わかりやすさ等）	30.8%	27.9%	-2.9%
	態度・好感	18.6%	14.0%	-4.6%
利用学生	学び	3.0%	8.2%	5.2%
	意欲	9.5%	10.4%	0.9%
	気持ち	9.8%	9.6%	-0.2%
場について（共に学ぶ・話す機会）		2.1%	5.9%	3.7%
問題について		2.1%	3.2%	1.1%
不満・要望		1.2%	0.9%	-0.3%

[注]2015 年度のコメントが記入されているアンケートは 916 枚。数値は学習支援ごとではなく合計値。

次に、対応総合点について比較する。2016 年度のアンケートの対応総合点の平均は 96.0 点で、2015 年度を 0.5 点上回り過去最高を記録した。前年度過去最高であった 100 点の割合は 70%から 2%減少し、90 点台の割合が 16%から 5%増加した。また 80 点台以下の割合が 2%減少した。

(3) 2012 年度との比較

2012 年度と比較した結果が表 4 である。2016 年度は「丁寧」の割合が 4%増加したのに対して、「気軽さ」「SLA への好感」の割合は 3~4%減少した。また、2012 年度では見られた「共感・理解」についてのコメントは 2016 年度では見られなかった。

＜表 4＞2012 年度とのコメント内容分類比較

分類	2012 年度	2016 年度	差
わかりやすい	27%	26%	-1%
丁寧	24%	28%	+4%
自己のレベル・ペース（基礎から、じっくり）	15%	16%	+1%
SLA への好感	14%	11%	-3%
プロセス理解	7%	6%	-1%
気軽さ	4%	0%	-4%
共に学ぶなど、場について（システム）	4%	6%	+2%
先輩の知恵（アドバイス）	3%	3%	0%
共感・理解	1%	0%	-1%
迅速さ	1%	3%	+2%

[注] 2012 年度回収したアンケートは 229 枚。2012 年度の分類に合わせて 2016 年度の該当する部分を比較した。

3. 考察

まず学習支援のタイプごとのコメントについて、理系科目・ライティングにおいては、対応の「わかりやすさ」についての記述が約 6 割と多かった。SLA は一方的に教えるのではなく、利用学生の分からない部分を探り、そこを支援するのを主とすることを目指している。利用学生に応じた支援を心がけているため、「わかりやすさ」の記述が多かったのではないかと考えられる。

英会話においては、気軽に楽しく英会話ができるよう SLA 側では企画やゲームを準備し活動している。最もコメントが多かったのが「楽しさ」であったことは、それが好印象だったのではないだろうか。ただし、楽しむだけではなく何かしらの学びを得てもらうべく、SLA 側は対応中に、わからなかった言い方をホワイトボードに書くなどの工夫をしている。

どちらの支援活動でも共通して見られた「学びになる」「意欲的になる」というコメントからは、SLA の学習支援を積極的に利用してもらう意義があるのではないかと考えられる。

次に、2016 年度の傾向について考察する。2016 年度は前年度に比べ、「共に学ぶ」「学びになる」というコメントが増加し、4 年前と比べて「丁寧」というコメントの割合が増加した。2016 年度はピアレビューや共通研修などの研修体制を整えたり、担当科目部会で対応事例検討をすることが定着してきた年度であった。例えば、2016 年度は「具体化」についてのコメントが 15 以上増加したのだが、これは図などを用い、わかりやすくイメージをもってもらい工夫を担当科目部会内で共有してきたことが要因の一つだと考えられる。対応満足度では平均点が過去最高となったこともあり、SLA がより利用学生の学びになるような対応をより意識できてきたのではないだろうか。

また、「共に学ぶ」というコメントが増加したが、SLA の学習支援のコンセプトは「学生同士の学び合い」であり、利用学生と一緒に考える対応を推奨している。利用学生にもその良さがより伝わったり、コンセプトが浸透してきている可能性が考えられる。

その一方で、2016 年度は「SLA の態度・好感」が前年度より減少した。これは前年度が多かったのかもしれないが、可能性としては、研修体制が整えられて対応を丁寧に行おうと SLA が意識するあまり、利用学生との距離が近づきにくくなっていたことが挙げられる。対応総合点では前年度に比べ 100 点の割合が減り 90 点台の割合が増加したが、何か学生が物足りなさを感じた可能性も考えられる。

また 4 年前と比較すると「気軽さ」が減少し、「共感」に関するコメントは見られなくなった。「気

軽さ」については、気軽に利用できるとちょっとした疑問でも聞きやすいという学生がいる一方、自分ではあまり勉強をせずに答えを教えてほしいという依存的な利用の学生も来るようになるため、どのように利用学生に認識してもらえばよいか検討が必要である。「共感」がなかったことについては、共感的な言葉を SLA がかけることが減った、利用学生側がコメントを寄せるほどのものではなかった、などの可能性が考えられる。

4. おわりに

利用学生のアンケートから、2016 年度は研修体制等が整い、利用学生の学びに資する対応が前年度よりできたのではないかと考えられる。一方、SLA の態度・好感の記述が減り、利用学生との距離が近づくことが減った可能性も考えられる。

今後、SLA はより訓練された学習支援者として 1、2 年生に接するのか、もう少し身近な先輩として接するのか、どのような在り方が本学の 1、2 学生の資質・能力向上に役立つのであろうか。SLA の学習支援において、質の向上・保証と、親しみやすさ・利用しやすさとのバランスをいかにとるべきか、今後の課題として検討していきたい。

[参考資料]

鈴木学・足立佳菜 (2013) 「SLA(Student Learning Adviser)利用学生の傾向分析」 大学教育学会第 35 回大会自由研究発表資料

学習支援チューター育成のための“知の継承・共有”デザインとその取組み —ピアリフレクション・ピアインストラクションの試行を中心に—

センター員 足立 佳菜

1. はじめに

本稿では、学習支援を担う学生チューター同士が、相互にそのスキルを高め合う相互学習・相互育成促進のための取組みの一つとして、2016年度に開発・試行実施したピアレビューと研修教材作成の取組みについて暫定的な成果と課題を踏まえ、報告する。各取組みの報告にあたっては、現状のSLA研修体制の全体構造と各取組みが必要となった経緯を示し、各取組みの位置づけをpushさえたうえで、その内容について報告・考察する。なお本稿は年次活動報告書内における論考であることを活かし、細かな実践上の経緯や具体的な方法等の詳細情報も割愛せず掲載した。

2. 取組みの背景状況

(1) 背景状況

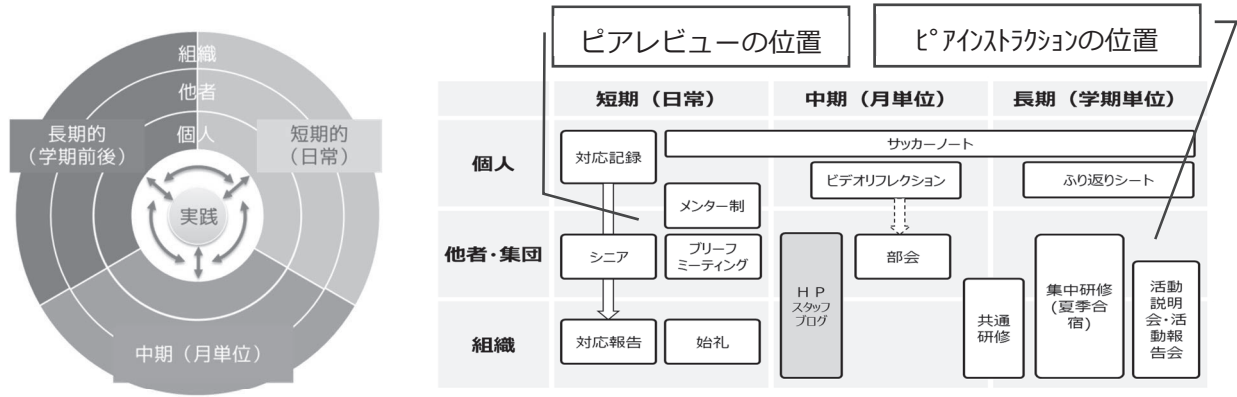
本センターは学部3年生から博士課程後期学生までの幅広い学年層を含む学生約50名を抱える組織規模のセンターである。研究大学において、大学生への学習支援を担う支援主体となるSLAは、学業に熱心な学生がほとんどであり、研究活動との両立の中で週1回3~5時間という短時間勤務が基本となっている。また、毎年度3割程度の構成員が入れ替わる流動性の高さが運営課題として不可避の状態にある。その一方で、博士課程後期まで進学する学生の存在により、少数ではあるが一定数長期間にわたって活動に従事する学生を得られることが特長的な組織でもある。

こうしたセンターの状況において、持続可能な組織運営と学習支援内容の質保証・維持向上を図るには、SLAの育成とSLAの知識と技術の共有・継承を可能にする組織デザインが必要不可欠である¹。育成にあたっては、知識レクチャー型の研修プログラムも有益ではあるが、本センターにおいては、日々の活動の中で文脈と個々の状況に応じたOn the Job TrainingをSLA育成の中核に据えてきた。これは、外面的な背景としては、学生の多忙さや週に1度というやや単発的な活動の中での実効性を考慮した結果であるが、本質的な理由としては、SLAつまり学習支援者として自身の活動をふり返る(リフレクション)ことが学習支援者に必要な中核的な能力であり、これを重視してきた結果と捉えることができる。この「ふり返り」を実質化する育成活動としては、従来、センター員がSLAに個別に行う「対応報告」がこの役割を担ってきた²。しかし、規模拡大・業務拡大によるセンター員のマンパワー不足を一つの契機としながら、より積極的には、本センターが掲げる「ともそだち」(学び合い)学習の体現と持続可能な組織運営を図るという組織の成長段階に応じた課題実現のため、近年はSLA育成をSLA同士で行う活動に重点を置き、これを推進するSLAメンバーの組織化も含めた方法構築を試みている³。

(2) 育成関連活動全体像における位置づけ

本センターにおけるSLA育成はOJTを中核としていると述べたが当然OJTのみを行っているというわけではない。SLA育成関連活動は、短期的(日常的)・中期的(月単位)・長期的(学期単位)という期間スパンと、個人・他者(集団)・組織全体という他者関与レベルの層を掛け合わせ、現在、図1のような全体像を描いている。この中で本稿が扱う取組みは、「短期的」×「他者(集団)」と「長期的」×「他者(集団)」に位置づく取組みである。

なお、図1の育成関連諸活動について補足すると、ここに挙げた活動全てが同じ力量で実施されるものではない。サッカーノートは個人裁量であるがふり返りシートは全員提出必須という違いや、部会ミーティングのように原則全員出席を基本とはするが実態として適わないものもある。あるいは、「〇〇強化週間」のように時の課題と状況に応じて意図的に重点を変える場合もある。



<図1 SLA 育成のためのツール・活動全体構造>

3. 2016 年度の取り組み

こうした SLA 育成に関する課題背景のもと、2016 年度行った特徴的な取り組みは「ピアレビューシート」の作成およびピアレビューの試行と SLA 自身が作成する研修教材の作成という取組みであった。これについて取り組みの詳細を報告する。

(1) ピアレビューシートの開発

①経緯と目的

ピアレビューシートは、前年度より体制構築を進めてきた「シニア SLA」の共通プロジェクトとして打ち立てた取組みであった。直接的契機としては昨年度の公立はこだて未来大学への調査訪問等により発想を得たこと、学習支援者育成の体系的整理がセンターの課題となる中で SLA 成長段階や SLA に求められる資質能力の基準の共通化・見える化が内部要請されつつあったことを発端としている。また副次的な目的としては、シニア SLA つまり後輩 SLA を指導・育成する立場としての役割を期待する SLA らの養成、指導力向上という意図も含まれていた。これに関してより文脈に即して状況を補足すれば、開発段階にあったシニア SLA の共通項を構築し行動指針の基盤とすることで、実質的なスキルの向上とシニア SLA としての自信を醸成する意図があった。ただしこれはあくまでセンター側の副次的意図であり、ピアレビューシート作成の目的自体は、前述の通り①SLA 資質の共通化・言語化を図る媒体を作成すること、②SLA 同士間の学び合い（対応の研鑽、相互リフレクション）を可能にする媒体を作成することである。なお、シートを使用する対象としては、活動の発展段階や所属人数の比率の関係上、まずは理系分野におけるチュータリング支援を対象としたピアレビューシートの開発を目的とした。

②作成過程

作成は、シニア SLA3 名とセンター員 1 名（筆者）の 4 名が実質的な担い手となって行った。その他、都度他メンバーの意見をもらうなどの関与はある。

中心的役割を果たしたシニア SLA3 名の属性は表 1 の通りである。幸い、理系分野における 3 分野全ての SLA が携わる形となった。そして、形式的にも 3 年以上の活動実績があり、実質的にも SLA における学習支援の在り方について日頃から考察を巡らしているメンバーであり、それぞれ体現される形としては異なるタイプのチュータリングスタイルをとる SLA で構成された。

作成時期は 2016 年 5 月～10 月、作成手順としては、①初回ミーティングの実施；他機関の事例を参照し方針検討・共有、②個別作業；同一ファイルを共有し、個々に加筆更新（項目、文章、チェック形態、全体構成等）、③最終ミーティング；項目の最終選別、文章表現調整、④センター員による

<表 1 作業従事学生属性>

学生	担当	学年	SLA 活動期間
A	物理	D 2	2010～2011 2014～
B	数学	D 2	2011～
C	化学	D 1	2013～

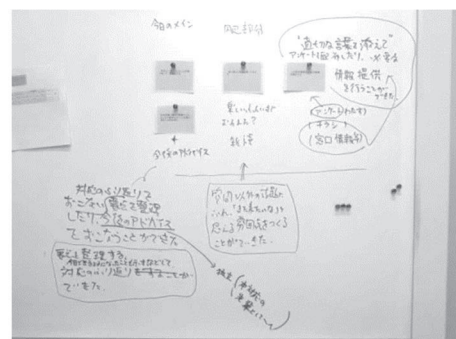
文章表現調整・統合、デザイン調整、⑤文書上による最終確認という手順で行った。なお、プロジェクトチーム内でのシート完成後、実際に運用にあたる最初の段階で他メンバーからの意見を基にした修正が加わった。シニアを配したシフトの一部でシート検討作業が自発的に行われ、これが運用一週目の段階だったために、この意見を取り込んだものを運用版シートとしてスタートさせた。

作成時の検討課題は、第一に評価方法、第二に項目内容、第三に形式的な表記方法についてである。以下、やや詳細になるが、作業経緯の記録を含め記述する。

第一の点については、チェックリスト型（やったかやっていないかの☑）か5段階評価型か等について議論を行った。結論としては、5段階評価方式となったが、これは先行事例にならった側面が強い。ただしこの検討から派生して、本シートは、「査定」をするわけではなく、「対応力の向上」に資するためのシートであるという目的が作成メンバーの中で改めて認識されるに至った。

第二の点については、ピアレビューシート作成の本丸である。詳細な経緯は次の通りである。まずは約2名が叩き台として自身の思う評価項目リストを作成し、それぞれのファイルを見ながらコメントを足していった。なおこの際“項目数”については特に制限を設けなかったが先行事例を共通に想起していたこともあり、大体15項目前後を想定していた。その後一定程度の段階で、2名の叩き台の集約をセンター員が行い、以降はこの集約版に全員がコメントを足し、修正を重ねる方法をとった。そして概ね項目が出揃った段階でミーティングの場を設け、直接項目についての議論を行った。ミーティングでは、それまでに作成した集約版シートの項目一つにつき一枚の紙に落としたものをセンター員が準備し、その紙を卓上で動かす形で重複整理や加除を行った。この整理作業を通して、各項目自体の見直しとともにカテゴリ化作業を行った。その効果として、例えば、“先輩としての良さを活かす”という観点が入りていないのではないか？”といった指摘がなされ、修正に加えられていった。最後に、表現方法の違いで意図が伝わりにくくなることを鑑み、議論が集中した項目数個について、「文章表現」としてどのように結実させるかも話し合った。その後、ミーティング時の話をもとに、最終的な文章表現の調整をセンター員が行い、シニア SLA に確認作業を依頼し、完成とした。

第三の点については、主に体裁面についての検討点である。ひとつは、チェック項目は簡潔にわかりやすくしたいものの、これを優先すると各項目が具体的にはどのような行動をさせているのか伝わりにくくなってしまいうという課題があった。そこで、チェック項目は表面で収まるようにし、裏面にその項目が示す具体的な行動例の例示をかなり詳細に掲載する形とした。もうひとつは、運用初期段階で加わった修正であるが、「メモ書き」のスペースをなるべく多く取りたいという要望であった。暫定版においては、シート表面末尾にレビュー者とレビューイのコメント欄を配してはいたが、それ以外は項目リストが表形式で等間隔に並んでいる形態であった。しかし、実際にレビューをしてみると、レビュー者はメモを取りながらの方がやり易く、またレビューの目的を鑑みても、「1・2・3・4・5」という数字よりは、その数字の意味が書きたい・知りたいという要望があった。ただし紙面の都合もあるため、各項目ごとではなく3つに分かれたカテゴリーごとに空白を配する形に修正した。



<図2 最終ミーティングの様子>

③運用状況および暫定的成果と課題 —SLAによるふり返りを踏まえて

後期セメスターは、実際にシートを使用してピアレビューを行ってみるフェーズに移行した。実際に実施した回数はこのべ33件であった。運用を通して得られた課題と知見は主に次の4点である。

第一に、SLA から寄せられた「疑問」で興味深かったものとして、「レビュアーはレビュー中に対応に関与して良いか」という検討点があった。例えば、レビューをしながら「1（低評価）」をつけるような行動があった場合に、それをただ評価するだけではなく、対応の改善に関与すべきではないかという意見である。SLA とも意見を交わしたのち、センターとしては、レビューは「査定」ではなく、またそもそもよい学習支援を生むためのスキル向上の媒体であるという目的から鑑みれば、レビューの中断と対応への関与はあってよいという方針とした。本件を通じて筆者が運営上の知見として得たものは、「レビュー」という用語の持つ強さを把握していなければ、容易に目的が転倒する事態もあり得るということである。上記の声をあげてくれた SLA たちは、「関与すべきである」という意味でセンターに方針の確認と統一を求めていたのではあるが、それであっても、「ピアレビューをする」という行為や言葉に含まれる狭い意味での評価（「査定」「管理」）のニュアンスに敏感にならなければ、実施者である SLA たちの中で「対応について話し合うよい雰囲気」を生むための活動が、逆効果に転じてしまう危険性を持っていることを体感した事例であった。

第二に、当初強くは想定していなかった異分野間メンバーでのピアレビューも環境次第で有効に働くという点である。試行実施期間中、積極的にピアレビューを実施したシフトにおいて、理系分野の中での物理・数学・化学の横断はもとより、英会話・ライティングメンバーも巻き込んだピアレビューが何度か行われた。そして、レビュアー・レビューイ共にく大きく不都合があったという声は聴かれず、それぞれに学びを生んでいる様子が窺えた。むしろ一部の事例では、他分野の対応に触れた場合の方が気づきが生まれたケースもあり、これについては想定外の効果であった。しかし、内容のわからない他分野の対応については、長時間の対応になると負担も大きくなるため、対応の導入と終末に重点をおいてレビューに参加するという方法も工夫としてあり得ると考えられる。

第三に、根本的な課題としては、レビュー実施の推進と実施頻度や強制力のバランスの問題である。本年度は、自発的な状況においた場合にどの程度実施されるかを観察する意味合いもあり、ピアレビュー実施を強制する方法は採らなかった。結果、リーダーシップをとる SLA の存在の有無で実施数に偏りが生じた。ただし、ピアレビューは、“手の空いている” SLA が 1 名以上いることが前提となって成り立つ活動である。そのため学生対応が比較的定期的に発生するシフトではそもそもピアレビューは実施しづらい。また他分野間のレビューが可能であったとしても、やはり同分野メンバーの方がよりリフレクションに深みが増す傾向があるが、これについても、同分野 SLA が 2 名以上配置されているシフトでないとは実施は困難である。「学生対応」を行わず、「SLA 育成」に専念する SLA の（臨時）配置等でこれらの課題を克服する可能性も理論上はあるが、予算や活動の実質化等を鑑みて、実態を調整していく必要がある。こうした実践上の限界を鑑みながら、「ピアレビュー」という育成方法の重点度（頻度、強制力等）や SLA 成長段階と照らし合わせた際によりこれが効果的・必要となる時期などの考察を行っていくことで、他の育成方法・活動と組み合わせながら、育成活動総体の中で当該活動を活かす道筋が生れてくると考えられる。

<表 2 SLA によるピアレビューの評価>

<p>★ピアレビューを実施して分かった利点</p> <p><レビューされる利点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の対応スタイルが分かる ・自分の弱点を知ることが出来る <p><レビューする利点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・他の SLA の対応が勉強になる ・他部会の対応ノウハウを学べる <p><全体にとっての利点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・議論に発展 例) 複数対応について、ライティング対応の技術を理系で活かす方法 <p>★ピアレビューの活用法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一度きりでなく繰り返し実施することが重要 ・他の SLA を交えてリフレクションを行うと活発な議論ができる ・レビューのコメントと議論の内容を自分の対応にどう反映させるか考える

※2017/2/27「SLA 活動報告会」発表資料から文字のみ抜粋

最後に、第四点目の知見として、SLA 自身の声を踏まえておく。積極的にピアレビューを実施したシフトメンバーでピアレビューについて振り返りをしてもらい、これを SLA 全体に向けた報告資料を作成する形で総括してもらったのが表 2 である。これを見る限りでも、自身の対応の省察、他者の対応からの学びが実感として得られたことが窺われる。また、SLA の対応（学習支援の在り方）

について他分野メンバーも含めて「議論」ができること自体に意義を見出していることがわかる。そしてこのピアレビューの効果を導くには、「繰り返しの実施」が重要であることを強調していた。それは、「自身の傾向（強み・弱み）」が見えそれを実感するまでに何度かあるいは複数人のレビューを受けることが必要であるとの彼らの実感に基づいている。

これらの効果と課題をどのように実践の中に埋め込んでいくかが今後の課題である。

（２）SLAによる研修教材作成・引継ぎ機会の創出

①研修教材の作成

SLA内における“知の継承・共有”を促進する意図から、また組織の成熟度にも鑑み、SLA自身がSLAの研修教材を作成するという試みを行った。本年度は、主に部会別に作成を依頼したが、物理担当者が作成したスライドは理系全般に使用可能な物となった。担当したのはシニアSLAである。シニアSLAがないライティング部会については部会全体に本件について提案し、担当を決めて資料作成を行った。以下、本作業についての検討課題3点と利点1点について総括する。

検討課題の1点目は、英語部会での事例に基づく考察である。英語部会で作成した研修資料は実際に後期セメスター新規メンバーに対する研修としてインストラクションを実施した。センター員が行う研修よりも具体的な内容に触れており活動のイメージを掴むことに効果は見られたが、新規メンバーは最初の頃に触れる情報量が多いため、実施時期が課題に残った。

検討課題2点目は、個人作業で作成してもらった“知見”をどの程度センターの公式見解として認めるか・伝えるかという点である。これは作業過程においてどの程度自由度を持たせるかという点とも重なる。当然ながら、センター方針と大きくズレる物は認めない・調整するとしても、それぞれの経験値・知に基づく「言葉」こそ重要であるという側面も守らなければこの作業自体の意味が薄れてしまう。しかし全体への波及場面では、これを一つの“参考”として受け取る姿勢の醸成も同時に重要となると考えられる。

検討課題3点目は、「資料」ではなく「口頭」で、資料作成者が育成対象SLAに対しインストラクションを実施する機会の創出という課題である。資料として媒体が残ることにも意義はあるが、やはり、媒体に接触する心理的負担の軽減や強調点の伝わりやすさなどを加味すると、口頭でのプレゼンの機会を得られる方が効果は高まりやすい。しかし、作業の開始時期、成果物の完成時期、人員の入替時期等のスケジュール構成や、そもそも対象全員が集まる場を頻回には設定できない関係上、これをどのような形で実現するかは今後の課題となる。

一方、本作業の最大の利点は、理系なら理系、英会話なら英会話の“具体的”“個別的”な「言葉」を使用することで、より実践的な研修材料の作成が可能となったことである。分野領域の具体的事例に即した言葉という意味での具体性と実際に学生支援の最前線に立ってきたSLA自身の経験知を織り交ぜた言葉という意味での具体性という両側面で、SLA内に共有されやすい研修教材作成に寄与できる可能性が見出された。

②引継ぎ機会の創出 —合宿成果物の共有、卒業プレゼン

上記に挙げた課題に通ずる部分もあるが、“SLA 個人個人の経験知”をより“直接的に”、次代のSLAに伝える機会の創出として、ア) 集中研修(合宿)のワークショップで作成した成果物を合宿不参加者に対してプレゼンをし共有する場を設けたこと、イ) 年度末の活動報告会において「卒業3分プレゼン」を実施したことが本年度の新たな取り組みであった。

ア)については、これまでもセンター員が編集する形など何らかの形で成果物を次の活動に消化・昇華させる取り組みは行ってきたものの、SLAに再度発表をお願いすることは諸々の負担を考慮してこれまで行ってこなかった。しかし、本年度の合宿ワークショップの課題が「次世代に継承したいこと」そのものをテーマとして扱ったこともあり(本書該当ページ参考)、また、その合宿での振り返りにおいて、参加したSLAから「継承というと“次世代”を念頭に置きがちであるが、この合宿の場にはいない“同世代”のメンバーとの共有も最も身近な継承として重要である」という課題提

起がなされたことを契機として、後期セメスター始めに行う「後期活動説明会」の場で合宿成果物の発表時間を設定した。これは、「後期活動説明会」自体の構成の微調整や、合宿不参加者に対しおおまかな文脈を共有する工夫などが発生する。しかし、SLA からあがる小さな“改善の種”を即時実践に活かしていく重要性を改めて再認識した。

イ) については、直接的な契機としては、早稲田大学ライティングセンターに訪問調査に伺った際に得られた発想を基にしている。毎年度実施していた「年度末活動報告会」の場では、卒業生から“挨拶”をもらう場は設置していたが、より「SLA/学習支援者としての知見の引継ぎ」を意識した3分程度のプレゼンを卒業生に任意で依頼をし、同世代間における継承の場の創出を行った。本年度実際に「卒業プレゼン」を行ってくれたSLAは8名(2名で1つの発表あり)であり、表3のような項目に基づく発表が行われた。「活動報告会」終了時に参加者が執筆する「コメントペーパー」においては、それぞれ印象に残ったフレーズ等が異なる様子が見受けられ、各々がSLAないしSLAにおける活動に対して自分なりの見解を醸成する一助になったことが窺われた。

4. おわりに

以上、SLA=学習支援チューター育成のための“知の継承・共有”を促進するための2つの取り組みについて、経緯や経過とともに課題と成果を考察してきた。タイトルにおいては、ピアレビューの一連の取り組みをピアリフレクションとし、SLAによる研修教材作成・引継ぎ機会の創出のための取り組みをチューター内インストラクションと総称した。どちらの取り組みにしても、SLA自身にSLAの育成役を担ってもらう取り組みは、実践上は時間・費用などの調整も加味しながら創出していく非常に現実的な運営を要する。しかし、技術的な側面での継承のみならず、経験知や思い、信念といったSLAがSLAとして築いてきた漠としたコンセプトも取り込みながら“継承・共有”を実現していく方策は、実態を伴った持続的組織運営には不可欠であると考え。これらの実現をセンターの重要な運営課題として、引き続き取り組みを改善していきたい。

[注]

1) 同様の趣旨の課題提起は椿本ら(2012)からもなされている。また、ライティングセンターを運営する佐渡島(2014)は「アカデミック・ライティング教育という領域における実践的知識」の「教諭」「開発」「蓄積」伝承」を検討する着眼点として「実践現場において『ライティングについて語る言語』の共有が重要」と提起している。○椿本弥生・大塚裕子・高橋理沙・美馬のゆり「大学生を中心とした持続可能な学習支援組織の構築とピア・チュータリング実践」『日本教育工学会論文誌』36(3)、2012。○佐渡島紗織「[書き方]を指導すれば[内容]は深まる—大学改革につながる実践的知識の共有—」『大学教育学会誌』36(2)、2014年。

2) 足立佳菜・鈴木学「学習支援者のための「振り返り」観点とプロセスの創出—東北大学学習支援センターのSLA実践を事例として—」『大学教育学会誌』38(1)、2016年5月。

3) 拙稿「2015年度SLA育成・研修体制改善の取り組み—リフレクションサイクルの再考—」『学習支援センター(SLAサポート)年次活動報告書—2015年度—』東北大学高度教養教育・学生支援機構学習支援センター、2016年8月。

<表3 卒業プレゼン項目>

学生A

- ①大学生に対する学習支援とはどうあるべきかを考える
- ②わからない原因を探ることが重要
- ③楽しむ

学生B

- ①SLA活動を楽しむ
- ②楽しさを表現し(学生や他のSLAと)共有する
- ③場づくり

学生C

- ①良い対応とは、ピンボールのようなもの

学生D

- ①個々のPDCA
- ②学問の楽しさを発信

学生E

- ①傾聴スキル
- ②雑談をしよう!

学生F

- ①学生が気軽に話せる場

学生G

- ①学生のあるがままを受け入れる
- ②学生の興味を引き出す

※2017/2/27「SLA活動報告会」発表より

企画発信型学習支援をなぜ「強化」するのか

企画担当 SLA 新設の経緯を踏まえて

副センター長 佐藤 智子

1. 課題設定

学習支援センターは、全学教育段階（主に学部 1,2 年）を対象として¹⁾、高校から大学への「学びの転換」を中心に、「学生の主体的・自律的な学習を、実践的に促進・支援」（学習支援センターの使命より）すべく、幅広い学習支援事業を行っている。その各種学習支援事業の主軸となっているのが、「SLA（エスエルエー）」と呼ばれる学生スタッフ（学部 3 年生以上）である。

学習支援センターでは、2016 年度の後期から、企画担当 SLA を新設した。今までは「個別対応型学習支援」（窓口での相談対応）に重点を置いて SLA サポート事業を進めてきたが、今回の「企画担当 SLA」新設は、そちらの体制が一定程度整備されたタイミングで、大学における学習支援の今後の展開を見据えて、「企画発信型学習支援」²⁾を強化しようとしたことである。本稿では、その構想や導入の経緯、新規 SLA 採用等を記録し、筆者が、大学での学習支援の現状と課題をどのように捉えたのかを整理をする。

企画担当 SLA を導入する以前から、「企画発信型学習支援」の取組は行ってきていたため、今回の企画担当 SLA 新設は、「企画発信型学習支援」を開始したものではなく、「強化」する意図で導入したものである。

2. 企画担当 SLA 新設の理由

（1）東北大学 1,2 年生の学習支援課題

2016 年度前期までの活動の中で、学習支援センターとして、あるいは筆者個人として、次のように、本学学生の学習支援課題を認識していた。

第 1 に、本学の学生は、勉学や学問に対する高い興味関心や、それに真摯に取り組もうとする十分な意欲を持っているが、その反面、授業時間外に学生同士で自発的・自主的に学習しようとする文化や雰囲気が不十分だと考えられている。

第 2 に、全学教育段階での授業に関連する学習についても、理系科目に関連する相談・質問は非常に多いのに比して、文系科目、特にレポート作成に関する相談は極めて少ないという実態があった。学習支援センターの利用傾向（相談窓口利用のみ）を見てみると、理系科目支援などでは、「授業で課された課題の解き方が分からない」等で積極的に質問に訪れるものの（理系支援利用者は 2015 年度後期でのべ 786 人）、ライティング支援の利用は非常に限定的であった（ライティング支援利用者は 2015 年度後期でのべ 21 人）。このことから、文系科目の学習支援に課題があるとの認識があった。特に、唯一解が定められない問題や、最適解の判断が困難であるような問題、例えば、哲学的な問いに対して思考したり、複雑な社会課題の解決に向けて意欲的に考えアイデアを深めたりするような学習に対しての関心が低いのではないか、と思われた。

第 3 に、全学教育段階での授業においても、基礎ゼミを除いては、多様な学部の学生が共に学ぶことのできる場がほとんどない状況である。さらに言えば、少なくとも全学教育の授業では、多様な学年の学生が共に学ぶ機会がない。このことから、学際的な視点で多様な学生が集って共に学ぶ合うことのできる場を、学習支援センターで創りたいという思いがあった。

第 4 に、多くの 1,2 年生の中で、教養教育に対する関心の低さ、意義の認知の低さが見られた。「早く専門分野を勉強したいのに、全学教育の授業は意味がない」と漏らす 1 年生は少なくない。結果として、学生の間で参照される「鬼仏表」の存在が物語っているように、「楽単（楽に単位が取れる）」授業に学生の履修が集中する状況があることが、全学的な課題である。

(2) 学習支援課題の解決に向けたアプローチとして

上記4点の課題に取り組むため、筆者の中では、次のようなアイデアがあった。第1に、多様な学部の学生、多様な学年の学生が、一緒に学べるような学際的な学習機会を創出することである。そのためには、先に科目の枠組みがあるような授業ではなく、問題解決型 (Problem-Based) やプロジェクト型 (Project-Based) の学習の場を企画したいと考えていた。

第2に、各科目に関する知識の習熟を目的とする学習支援だけではなく、アカデミック・スキルと呼ばれるものを含む、汎用的な能力 (論理的思考力、批判的思考力、コミュニケーション力、チーム力、行動力など) の育成を目指す学習支援を強化できないか、というアイデアである。そのためには、個別対応型の学習支援だけでは限界があるのではと考えられた。

第3に、教養教育の意義については、3年生以上の学生であるSLAからは「自分も1年生の時には意義があるとは思えなかったけど、今になってよく分かってきた」というような声が聞かれた。そこで、もっと「先輩」学生であるSLAが、窓口で待っているだけではなく、積極的に、幅広く学ぶ楽しさを伝えられる場を増やせると良いのではないかと考えた。

以上の理由から、学習支援センターにおいて、もっと「企画発信型学習支援」を強化すべきと判断し、企画担当SLAの新設に繋がることとなった。

(3) SLAの組織運営体制上の課題

SLAの構成は、2015年度後期の実績で見ると、理系科目支援担当SLAが36名、英会話支援担当のSLAが10名、ライティング支援担当のSLAが5名、合計で55名であった。彼らの所属学部/研究科の内訳を見てみると、文系 (人文社会科学分野) 学部/研究科が (文学部、経済学部、教育学部など) 10名、理系 (自然科学分野) の学部/研究科が45名であった。学年別で見ると、学部生が20名、大学院生が35名 (修士課程20名、博士課程15名) であった。

「企画発信型学習支援」は、既述のように、学習支援センターの取組、SLAの活動として、それ以前からも行っていた。しかし、それを強化しようとするに当たっては、次のようなSLAの組織運営体制上の課題があった。

第1に、「企画発信型学習支援」を強化する上での、SLAの採用条件の問題である。窓口対応での学習支援が中心だったSLAの活動においては、SLAの新規採用の時点でも、学習イベント等の企画に関心があることを要件にはしておらず、学習イベントの企画を得意とするSLAを採用していたわけでもなかった。SLAにとっても、当初はSLAの活動として求められていなかった事をしなければならなくなることは、本意なものになりかねず、意欲を下げる原因にもなり得る。

第2に、企画発信型学習支援を行うSLAの適正の問題である。何事においてもそうであるように、学習イベントの企画や実施等の「企画発信型学習支援」についても、それを得意とする学生と、そうではない学生がいる。学習イベントの企画や実施を行っていく上では、学生の現状を分析し、新しい発想で課題解決のアイデアを考え、実際にそれを実施するための行動力が求められる。このような活動をしてもらう上では、文系学部の学生にも、その専門的な知識を活かしつつ大いに活躍してもらいたい思いがあったが、SLAには文系学生が少なかった。SLAに文系学生が少ないことで、文系学生の学習課題を把握しにくくなっているのでは、という課題認識もあった。

第3に、「企画発信型学習支援」の専任SLAを雇用するメリットである。特に大学院生のSLAは、研究室の予定や自身の研究活動で忙しく、週に3~5時間を超える勤務を困難としている場合も少なくなかった。また、窓口対応と、企画の開発や実施に必要な知識やスキル、経験等に異なる部分もある。そのため、企画に特化して活動するSLAを雇用したほうが良いと考えるようになった。

第4に、「ともそだち」理念の再考も1つのきっかけであった。学習支援センターでは、「ともそだち」をコンセプトにしている。しかし、大学院生の比率の高いSLAの現状を見ると、同じ学生同士とはいえ、やはり大学1年生と博士課程院生との間には、非対称性が強く、「教えてもらう学生」と「教えるSLA」という関係性をどこまでも脱却できない感覚があった。しかし、理系科目支援にしても、英会話やライティング支援にしても、学習支援の質保証という観点からは、どうしても大

学院生の雇用が必要な側面もあった。その一方、企画担当の SLA に求めるアイデアや行動力等は、むしろ時間的な余裕があり、柔軟な発想で思考できる学部生のほうが、その能力が発揮できるのではないかという期待も感じていた。

3. 企画担当 SLA の新規採用

(1) 企画担当 SLA 新設の経緯

筆者は、2016 年 4 月、東北大学学習支援センターに副センター長として赴任した。赴任後、センター員と共に、SLA の採用や育成、組織体制の構築・再編に関わって多角的な協議を重ねた。その中で、上記のような課題認識と課題解決に向け、「企画担当 SLA」の新設というアイデアを抱くに至った。

2016 年の前期 Semester を終えた 8 月の段階で、企画担当 SLA 新設のアイデアを検討の俎上に載せる。複数回の検討の後、検討だけを長く重ねるよりも、試行的に導入した上で、その課題と可能性を検討するほうが良いと判断した。そこで、2016 年 9 月に募集開始、10 月に採用試験と面接を行い、新規の企画担当 SLA として 6 名の採用を決定し、11 月より活動を開始した。

(2) 企画担当 SLA の採用試験について

学習支援センターで初めての「企画担当 SLA」を採用するに当たって、採用試験をどうするか検討する必要があった。理系科目担当の SLA 等とは異なり、特定の専門科目に関する知識を問う試験は必要ないと考えていた。企画担当 SLA に求めたかったのは、主に、①(初年次学生を中心とした)学生や大学の学習機会、学習環境に対する自分なりの分析と問題意識、②自らその問題解決に取り組もうとする意欲と行動力、③柔軟な発想力、④チームで動くための自律性や協調性、マネジメント力の 4 点である。そこで、次のような内容の採用試験を行った(説明文の一部を省略)。

【課題】 次の A~C のうち 1 つを選び、SLA として企画を提案してください。

- A) 東北大生に自発的に読書をする習慣を身につけてもらうための学習支援のアプローチと具体的な実施計画を提案してください。
- B) 東北大学には多くの留学生がいます。留学生は日本人学生とは質的に異なる学習課題を抱えていると考えられますが、その課題がどのようなもので、その課題解決のためにどのような学習支援が必要か、その支援につながるような企画を具体的に提案してください。
- C) 研究大学である東北大学は、どの専門分野を学ぶ学生であっても共通して身につけるべき能力の育成を重要と考えています。そのような能力とはどのようなもので、その能力を東北大生が習得する上での課題とはどのようなものか、その課題に取り組むための学習支援のアプローチと具体的な実施計画を提案してください。

上記の課題について、事前に問題の内容を通知し、当日は、30 分間でプレゼンテーションに使用する資料等(レジュメ、スライドなど、形式は任意)の準備をしてもらう。30 分後、プレゼンテーションを 10 分程度で行ってもらうという形を採った。

この試験により、東北大学の学生の現状や課題について分析する力、その課題の解決にどのように取り組むかの発想力、そして限られた時間の中で課題に取り組むマネジメント力と、最後に、自分の考えを他者に伝えるコミュニケーション力などの社会的スキルを測ることとした。

(3) 企画担当 SLA 応募者の志望動機

2016 年度、第 1 期となる企画担当 SLA は、6 名の採用となった。彼らの志望動機は、以下のようなものであった。

- ・チームで企画を行い実現する経験を積みたい。
- ・企画提案をして、準備、実施、評価までのプロセスに関わることが好きであるため。
- ・SLAの「ともそだち」というコンセプトに共感した。
- ・様々な学部の学生が自分の考えを発信し、議論する場をつくりたい。学部1,2年生のうちに、多様な価値観に触れることが大切だと考えている。
- ・文系学生にとっての学習機会を拡充させたい。文系学生は、理系と比べて、学んだことをアウトプットする機会、そしてアウトプットしたものを誰かに見てもらう、共有できる場がすくない。自分が本当に理解しているのかあやふやなままレポートを提出し、フィードバックがないまま単位が取れてしまう。
- ・文理問わず多様な学生と、学習を通じた関わりを持ちたい。(サークル活動では、様々な学部や学年の学生と知り合えるが、学習についての話はしにくい場合が多い。)
- ・同じ学部や同じ分野の狭い関わりだけでなく、多種多様な背景を持っている多様な分野の学生と、新しい交流を持ちたい。
- ・東北大学は総合大学で、様々な学問分野に対して図書館などの豊かな学習環境があるにも関わらず、実際には同じ学部内の狭い範囲で、高校の延長のような一方向型の授業が多い。豊富な資源が一般教養教育に活かされていないように感じる。
- ・SLAという場を通して、自分の今までの経験が生かせるのではないかと考えた。
- ・自分自身が学部生の頃に困っていたことの経験を生かして、企画を立案したい。
- ・東北大学の先生や先輩にお世話になったので、その恩返しとして、卒業までの時間には、自分が後輩たちの役に立ちたい。

多くの応募者に共通していたのは、①自分の今までの経験に基き、後輩のためになるような活動をしたい、②文系・理系含めて、多様な学部、専門分野の学生と関わる場が欲しい、後輩たちに対してもそのような機会を創出したい、③自分の考えを発信し、多様な価値観や意見に触れられるような、議論できる場をつくりたい、という点であった。この動機の背景には、東北大学は総合大学であり、多様な学生がおり、幅広い分野を学べる学習環境があるにも関わらず、それをあまり活かせていないのではないか、という課題意識があると考えられた。

4. 今後に向けて

学習支援センターで企画担当 SLA を新設した後、彼らがどのような活動をし、その中で何を思考し、何を試行してきたのかについては、当年次報告書の他稿を参照していただきたい。

筆者の立場からの半期の振り返りとしては、企画担当 SLA の活動に大きな可能性を感じたと同時に、様々な課題も見えてきた。これらの可能性と課題については、2017年度の活動も踏まえ、改めて分析・考察することとしたい。

[注]

- 1) 「主に」学部1,2年生を対象としているが、形式的に学年が3年生以上であるという理由のみで対象から外してはいない。学習支援の内容や水準が専門教育の範疇に該当するものではなく、全学教育段階での学習の支援をするというセンターの方針に合うものであれば、学部3年生以上の学生であっても学習支援の対象としている。例えば、留学生への日本語支援などでは、学部1,2年生に限定していない。
- 2) 「個別対応型学習支援」は、学生からの相談に応じて個別にその相談や質問に対応する形態であるのに対して、「企画発信型学習支援」は、学生からの質問・相談を待つのではなく、SLAから積極的に学びの機会を提供する形態であり、学習支援のアプローチの取組でもある。

1. センター概要

学習支援センターは、2014年度の高度教養教育・学生支援機構の発足に伴い設立された業務センターの一つである。その前身となったのは、高等教育開発推進センターにおける「SLA サポート室」の活動（2013年度）であり、さらにはそれ以前の「全学教育学習支援プロジェクト—SLA（Student Learning Adviser）制度の実践—」（総長室付け、2010年度～2012年度）の活動が土台となっている。

（1）理念・使命

学習支援センターの使命には、次の3点を掲げている。

- (1) 学生の主体的・自律的な学習を、実践的に促進・支援し、研究大学で学ぶ学生としての資質を育成する。
- (2) 初年次教育や学習支援に関する国内外の動向を調査研究し、東北大学の学習支援の質的向上に寄与する。
- (3) 教職員・学生の間「学び合い」文化を醸成し、学習共同体（ラーニング・コミュニティ）の形成に寄与する。

2014年現在、学習支援センターの支援対象は学部1・2年生であり、1・2年次学生にとって、“学び”という観点で最も身近な組織であることが、本センターの役割である。また、本センターの学習支援の特徴は、学習支援主体が「SLA（Student Learning Adviser）」と呼ばれる学生スタッフであることにある。「学生による学習支援」の在り方を模索し、開発していくことも本センターの使命の一つである。

（2）事業

学習支援センターが行う業務は、次の4点である。

- (1) 全学教育段階のリメディアル・レベルアップ学習支援の開発・実践を行う。
- (2) 学習支援の組織開発および支援者育成システムの開発・実践を行う。
- (3) 情報還元による正課カリキュラムの改善・充実に貢献する。
- (4) 全学教育範囲における学習支援ネットワーク（部局間連携体制）を構築する。

本センターでは、高大接続の円滑化と大学教育における学びの実質化に対応するため、大学初期段階での学びのスタート・アップ支援の充実方策を提案・実施する。大学4年間につながる基礎創りを大学での学びの出発点である1・2年次に行うことが重要である。その際、研究大学における支援としては「リメディアル」的支援と同時に、「レベルアップ」的支援を開発・実施していく。

また、研究大学において、「学生同士の学び合い」を核とした学習支援を組織することは、本センター固有の特徴である。この組織開発の一環として教育専門スタッフ（教職員）の充実を図るため、教育（実践）志向型大学教員の在り方を模索・提言する。また、支援主体学生として「学習意識の高い先輩学生（学士課程後期学生、大学院生）」を育成することが本センターの鍵である。この教育支援人材育成システムの開発・提案を行う。

なお、本センターでは、学習支援活動を①個別対応型学習支援、②企画発信型学習支援、③授業連

携型学習支援、④自主ゼミ支援の4形態で展開している。このうちの①・②における具体的な支援内容は、主に物理、数学、化学、英会話、ライティングの5分野（セクション）である。

[個別対応型学習支援]

学部1～2年生からの個別の学習相談・質問に対応する形態の支援。SLA ラウンジに待機しているSLAが平日2～5講時の間、主に物理・数学・化学・ライティングの質問に対応している。

[企画発信型学習支援]

個別対応型のように質問を待つ形ではなく、SLAから学びの機会を提供する活動の総称である。主に英会話支援の活動や学習イベントの開催がこれにあたる。

[授業連携型学習支援]

TAのような形で授業ごとにSLAを配置し、担当授業の受講生を対象として学習支援を行う。具体的な活動内容は、連携する授業毎に異なる。

[自主ゼミ支援]

自主ゼミ活動をしている・したい学生を支援する活動。具体的には、①活動場所の提供、②備品貸出、③相談受付、④自主ゼミ交流会の実施などを行うことで、活動の円滑化・促進を図っている。



<図 1-1. 学習支援形態による概念図> *学習支援センターHPより

(3) SLA とは

SLA (エスエルエー) とは、Student Learning Adviser の略で、東北大学における学生による学生のための学習支援スタッフのことを指す。主に学部 3 年生～大学院生の幅広い層の先輩学生たちが、SLA として全学教育を受ける学部) 1・2 年生の学習サポートを行っている。SLA による学習支援のコンセプトは学生同士の“学び合い”である。「ともと学ぼう、ともに育とう、『ともそだち』 Together we learn, Together we grow,TOMOSODACHI!」をキーフレーズに、学習支援を行っている。

—“先輩の力”の考え方

SLA を核とする本センターの学習支援は、「先輩の力」を活用したサポートであることが特徴である。これまでの活動から、「先輩の力」には次のような有効性がある。

①わからなさや面白さへの共感

学部 1・2 年生にとって、教員へ質問することは物理的にも感情的にも思いのほかハードルが高い面がある。そのような大学の環境において「先輩」という存在は、学問について誰かに聞くという行為を身近にしてくれる良さがある。また、つい数年前までは学部 1・2 年生だった「先輩」たちは、その経験から、どこでつまずきやすく、何がわからないのかの“ツボ”を教員よりも熟知した存在であると言える。同時に、わからなさだけでなく、面白と感じる“ツボ”についても、同世代ならではのアンテナを働かせて共感できる。利用学生から「一緒に喜んでもらったのが嬉しかった」という声も聞かれ、そんな素朴な「喜び」を自然と生み出せるのも「先輩」が有する潜在的な力である。

②ロールモデルとしての少し上の先輩たち

キャンパスが点在する東北大学では、1・2 年生が少し上の先輩が学ぶ姿を見られる機会は少ない。そのような中で、先輩学生である SLA たちは、「大学での学び」に苦勞をしたり楽しんだりした様々な経験を持ち、いずれも「大学での学び」に何かしらの意義を感じそれを志そうとする学生たちである。そんな先輩の姿や経験値に触れることで、1・2 年生たちは自分なりの大学での学びの過程を思い描くヒントにすることができる。

③共に考える存在

SLA は、先輩として後輩をサポートできる存在であるが、その一方でやはり学生であるため、必ずしも質問に的確に答えたり、ベストな方法で教えたりできるわけではない。試行錯誤しながら、質問に来る学生たちと「共に考える」という光景も、質問対応の場ではよく見かける光景である。この姿勢が自然と成り立つのは、大学での学びの過程を共に歩む学生同士だからこそである。利用学生から聞こえてくる「答えだけでなく考え方を教えてくれる」「(自分自身が) 成長できた感があった嬉しい」といった声からは、「共に考える」という、教え—学び合う支援の在り方の意義を感じることができる。

(4) SLA 採用・育成体制

①採用の流れ

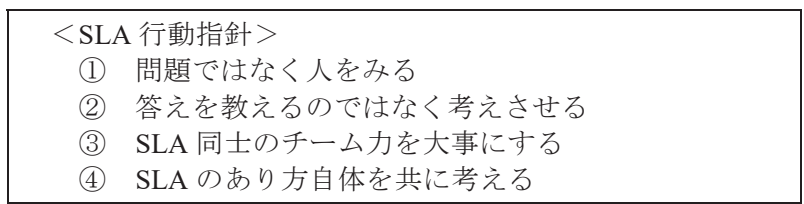
募集～採用活動の流れは、次の通りである。募集は、公募制と主に SLA による推薦・紹介制を併用している。ただし、公募と推薦・紹介の違いはファーストコンタクトの違いだけであり、以降の流れや内容に違いを設けてはいない。SLA の活動に興味を持った学生には、まず 30 分程度の「説明会」

を受けてもらう。SLA の活動の様子を知ってもらい、希望と実態のミスマッチを防ぐ目的である。「説明会」後、正式な応募の手続きが必要となる。正式な応募を受けた後に、個別に「面接+試験」を実施する。「面接」は約 30 分の所要時間で、a)志望動機、b)支援（教育）観、c)学習観、d)人となりに関する幅広い質問を行う。その後、約 1 時間の所要時間で「試験」を実施する。「試験」は、理系・ライティング・英語によって形態が異なるが、筆記試験は一部であり、口頭試験を多く取り入れている。

②育成指針

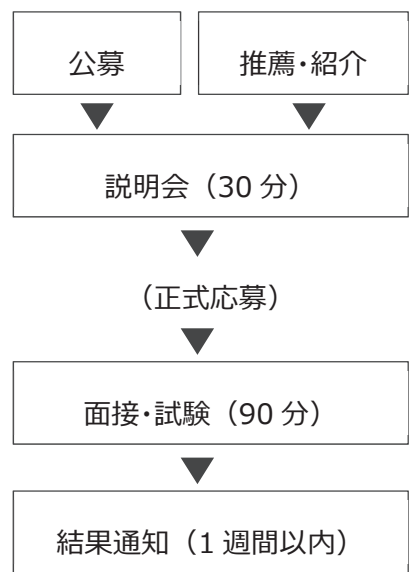
2010 年度の SLA 活動開始以来、SLA 活動コンセプトとして掲げているのが、「ともと学ぼう、ともに育とう、『ともそだち』」である。このコンセプトには、「学生の力を活用した学習支援」を行う組織として、大きく 3 つの意味が込められている。1 つは、利用学生（主として学部 1・2 年生）の中に「学び合いの文化を生む」ということ、1 つは、学部 1・2 年生を支援することを通して、SLA 自身も学ぶということ、1 つは、SLA 同士も学び合い高め合おうということである。SLA は、「正解を知る」存在でもなく、「知識を教授する」（だけ）の存在でもない。対象学生自身が学び・学び合う力を身に付けていくサポートをすることが SLA の役割である。そして、「学生」であることの良さを活かし、学習支援のあり方自体を考え変革していくことも、SLA に期待されている役割である。

こうした理念に基づき、SLA には次の 4 つを「行動指針」として示している。

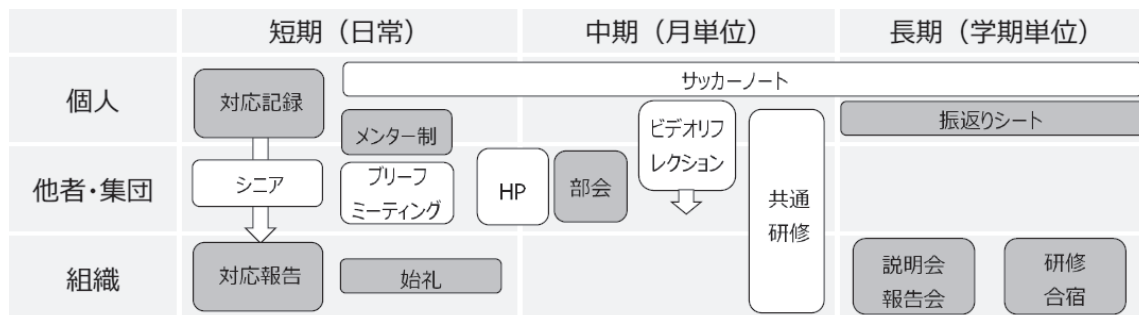


また、研修のあり方としては、次のようなポリシーを SLA には示している。すなわち、SLA として活動する上では、①学問（専門）スキル、②教育スキル、③対人スキル、④社会人スキルが必要である。このうち、①については、採用された時点で最低基準は満たしている・またはその見込みがあるものとして、「育成の対象」としては重要度が低く自己研鑽に負うものとしている。センターとしては、②・③を中心としながら①以外のスキルについての研修を行うという方針である。その研修方法としては、個別指導と OJT を基本とすることを掲げ、センター員だけでなく、先輩 SLA の力も借りながら、実践・現場に即したスキルの獲得を目指すものとされている。

この前提の下、「研修の機会」として位置づけているのは図 1-3 のような活動である。ここに示す通り、個人・集団（グループ）・全体の単位と短期的・中期的・長期的の研修活動を組み合わせる形で、SLA 育成に関わる活動を組織している。しかし、担当分野を超えた学習支援者としての共通資質・能力を育成する場や、特に Off-JT の整備が不足していることが従来の課題であった。そこで 2016 年度は、特に新規メンバーに向けた Off-JT の整備、共通研修の機会の充実を図っていた。あわせて、2015 年度より開発を行っている「シニア SLA」（後輩 SLA 育成役）の配置とその活動内容の開発・実施を引き続き行った。本年度はシニア SLA と「ピアレビューシート」を共同開発し、OJT 研修をより充実させるためのツール開発を行うとともに、これにより SLA 組織内の自己成長力の強化・改善を図った。



<図 1-2. SLA 採用までの流れ>



<図 1-3. SLA のための研修の機会>

③部会活動

上記の中で SLA にとって重要な位置を占める「部会活動」の性格は以下の通りである。

学習支援センターでは、SLA の担当科目（物理、数学、化学、英語、ライティング）毎に部会を設置している。部会活動の主な目的は、①SLA の交流促進、②科目に紐づく対応スキルの向上、③SLA 全体のチーム力の強化（情報共有促進を含む）の 3 点である。部会活動の定期的な活動は、毎月 1 回（90 分）の定例会の開催である。定例会は二部構成を基本としており、前半 45 分は 1 カ月の間の情報共有、後半 45 分は勉強会としている。また、各部会には「部会長」が決められている。

なお、部会活動は、SLA 学生たちの完全な自治運営で行われる類の活動ではない。部会（定例会）への参加を SLA にとっての研修の場の一つとして位置付けていることや、その時々センター全体の課題と呼応させながら定例会のトピックを設定する必要もあるため、活動全体の情報を把握しているセンター側がフレーム設計する側面も強い。その際も、日々の活動の中で個々の SLA の声を拾いながら各部会の方向性を調整していく。つまり、「センター（員）」と「SLA」が協同で「部会活動」を創る関係構図を描いている。部会活動が SLA だけで行われるものではないことは、センター運営上の意図や課題と連動しているためであり、本センターの特徴である。一方で、部会運営における SLA の自律性を高める動きは常に課題として捉え、改善を続けている。

(5) センタースタッフ構成 (2016 年度時点)

センター長 関根勉 (高度教養教育・学生支援機構 教授、放射化学)
 副センター長 中川学 (同 准教授、日本近世史)
 佐藤智子 (同 准教授、生涯学習・社会教育)
 センター員 足立佳菜 (同 助手、学習支援 [高等教育]・道徳教育史)
 鈴木真衣 (教育・学生支援部 教務課、事務補佐員)
 SLA 2016 年度前期 50 名、後期 55 名

▶2016 年度 SLA 体制

2016 年度の SLA は、前期は 50 名、後期は 55 名体制で運営した。ただし、このうち前期・後期共に 2 名については授業連携型支援での活動者であり、活動場所・形態を異にする。

新規採用者数は、前期 11 名、後期 12 名であった。

<表 1-1. SLA 人数推移>

	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度
前期	21	38	37	36	46	62	50
後期	30	37	37	37	49	55	55

(単位:名)

■前期セメスター

全 50 名 (途中採用・途中退職含む)。

○継続 39 名 / 新規 11 名 (新規のうち 2 名はセメスター途中の採用)

○留学生数 : 9 名

<表 1-2. SLA 所属別人数【'16 前期】>

	文	教	経	理	工	農	国文	情報	合計
博士	2	1		10					13
修士 2	2		1	7				2	12
修士 1			1	9	1		1		12
4 年				5	1				6
3 年			1	4	1				6
2 年						1			1
合計	4	1	3	35	3	1	1	2	50

<表 1-3. SLA 担当別人数【'16 前期】>

	物理	数学	化学	ライティング*	英会話	授業	合計
博士	3	4	2	3	1		13
修士	7	5	2	2	8		24
学士	6	2	1		2	2	13
合計	16	11	5	5	11	2	50

■後期セメスター

全 55 名

○継続 43 名／新規 12 名

○留学生数：8 名

<表 1-4. SLA 所属・学年別人数【'16 後期】>

	文	教	法	経	理	工	国文	情報	教情	合計
博士	1	1			9					11
修士 2	2			1	7		1	2	1	14
修士 1	3				9	1				13
4 年				1	8	1				10
3 年		1	1		3	2				7
2 年										0
合計	6	2	1	2	36	4	1	2	1	55

<表 1-5. SLA 担当別人数【'16 後期】>

	物理	数学	化学	ライティング	英会話	企画	授業	合計
博士	2	4	2	2	1			11
修士	7	5	2	3	7	3		27
学士	7	2	1		2	3	2	17
合計	16	11	5	5	10	6	2	55

2. センター活動・実績報告

|| Summary ||

学習支援センターでは、SLA が学習支援を行う「SLA サポート」として①物理・数学・化学を中心とした理系科目支援、②英会話支援、③ライティング支援、④企画発信型支援を行っている。またセンターが行う支援として⑤自主ゼミ支援、⑥授業連携型支援を行っている。

■SLA サポート

①理系3科目（物理・数学・化学）支援

個別対応型（チュータリング）の支援を行っている。2016年度の利用者のべ数は、年間1,767人（前期972人、後期795人）であった。昨年度と比較すると利用者数は減少した。本年度の特徴は、継続利用の学生の中でも、10回以上利用する学生の利用が顕著だったことである。

②英会話支援

複数人で話すタイプの「英会話カフェ」とマンツーマンタイプの「1 on 1 英会話」の2種の活動を展開している。利用者数は518人（前期312人、後期206人）であった。昨年に引き続き、留学前・後に利用する学生が多い。

③ライティング支援

個別対応型（チュータリング）支援と企画発信型の2形態で支援を行っている。前期 Semester 中はセミナー開催を中心に、後期 Semester はチュータリング対応を中心に行った。セミナーの利用者数は40人、チュータリング窓口の利用者数は61人（実数56名）の利用があった。窓口利用者のうち、連携授業の受講生の利用は67%であった。一般利用の増加については引き続き課題である。

④学習イベント

11月、企画発信型学習支援を専任で行う企画担当 SLA を創設・採用し、試験的に活動を行った。2016年度は後期中に全4回の企画を実施した。企画の一部において、附属図書館との連携企画を実施し、イベント関連の企画展示を行った。

■センターにおけるその他の支援

⑤自主ゼミ支援

今年度の登録は4ゼミ（名簿登録学生数106名）であった。また、自主ゼミを促進するためのイベントを開催したが、参加者は5名だった。

⑥授業連携型支援

活動授業は前期2授業・後期1授業であり、主にグローバルラーニングセンターとの連携関係による活動を行った。ただし、運営上の課題が生じてきたことにより、現状の授業連携型支援の在り方を本年度をもって停止し、再度、運営方法を検討することとなった。

1 理系科目支援（主に、物理・数学・化学）

理系3科目の学習支援は、物理・数学は平日2～5講時、化学は平日3～5講時に窓口を設置し、個別対応型学習支援の形態で支援を実施している（表2-1-1）。2016年度の利用者数について、2016年度の利用者のべ数は、年間1,767人（前期972人、後期795人）であった。以下、本年度の利用および活動の特徴を3点あげる。



① 利用者数

昨年度と比較すると、利用者数は564人減少した。利用者が減少したのは工学部、農学部であり、一昨年度利用が急増した科目「数学物理学演習」（工学部生必修）の利用者減少が影響していると考えられる。一方、理学部生の利用は増加した。質問分野・内容の傾向に大きな変化はないが、例年に比べ化学の利用が少なくなった。

② リピーター増加

セメスター別に利用者のべ数を見ると、前期セメスターは前年度の6割程度の利用者数だったが、後期セメスターは前年度をやや上回る数となった。しかし実数で見ると、後期セメスターは前年度の7割程度であった。複数回利用するリピーター学生が多く、のべ数が増加したと考えられる。このリピーター学生の増加が今年度後期セメスターの特徴である。後期セメスター中の21回以上利用者は、前年度0人に対し今年度6人（後期利用者数の3.4%）であった。「リピーター学生」への評価は、依存的利用の場合と積極的利用の場合と大きく2つに分けられるが、本年度のリピーター学生の多くは自学を積極的に進めていることが多く、彼らの自立学習を支える継続的支援を可能とするため、SLA間での情報共有体制の改善を図った。

③ 蓄積データの還元体制強化

理系科目支援の運営にあたっては、当センターで蓄積している質問事例データ情報を恒常的にフィードバックする体制を構築するため、蓄積されたデータの整理方法の改善を行った。

<表 2-1-1. 2016 年度前期・後期 SLA 配置数（理系）>

前期	月			火			水			木			金		
	物	数	化	物	数	化	物	数	化	物	数	化	物	数	化
2 講時				1	1		2	2		2	1		1	1	
昼休み	1	1		1	1		2	2		2	1		1	1	
3 講時	2	2	1	1	1		2	1	1	2	2			2	
4 講時	2	2	1	2	1	1	2	1	1	2	2		1	3	
5 講時	2	2	1	2	1	1	2	1	1	2	2		1	3	

後期	月			火			水			木			金		
	物	数	化	物	数	化	物	数	化	物	数	化	物	数	化
2 講時							2	2		1	2		2	2	
昼休み							2	2		1	2		2	2	
3 講時	2	1	1	3	1	1	2	1	1	2	1	1	1	1	
4 講時	2	1	1	3	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	
5 講時	2	1	1	3	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	

■□ 詳細データ □■

① 利用者数

利用者延べ数は 1,767 人で前年度比 75.8%、利用者実数は 356 名で前年度比 68.9%、対応件数は 1,627 件で前年度比 80.7%であった。月別に見ると、4～7月の利用者数の減少、8・11・12月の増加が特徴的である。

<表 2-1-2. 2010～2016 年度の理系支援利用者のべ数変遷>

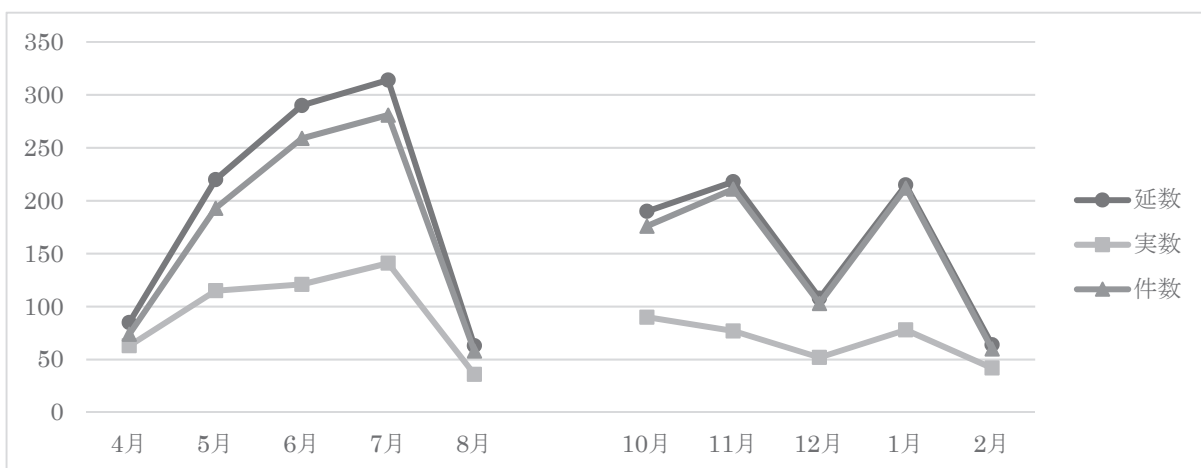
	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
前期	85	901	1,125	916	1,682	1,545	972
後期	304	433	761	421	1,121	786	795
合計	389	1,334	1,886	1,337	2,803	2,331	1,767

(単位:人)

<表 2-1-3. 月別理系支援利用者数【理'16】>

	日数	対前年度差	延数(人)	対前年度比	実数(名)	対前年度比	件数(件)	対前年度比
4月	9	-3	85	47.0%	63	52.9%	74	49.0%
5月	16	-2	220	68.1%	115	65.3%	193	68.4%
6月	22	+3	290	59.8%	119	55.9%	259	61.5%
7月	20	-2	314	62.8%	141	60.5%	281	67.5%
8月	8	+3	63	112.5%	36	94.7%	58	116.0%
10月	14	-4	190	96.4%	90	84.9%	176	102.3%
11月	20	+1	218	122.5%	78	82.1%	211	117.9%
12月	16	-2	108	87.8%	52	66.7%	103	101.0%
1月	16	-2	215	87.0%	78	62.4%	212	100.5%
2月	8	+3	64	156.1%	42	135.5%	60	193.5%
合計	149	-4	1,767	75.8%	356 ^{※1}	68.9%	1,627	80.7%

※1 実数合計は、月別合計の累計数ではなく、年間の実数を表す。



<図 2-1-1. 月別理系支援利用者数推移【理'16】>

② 科目別利用傾向

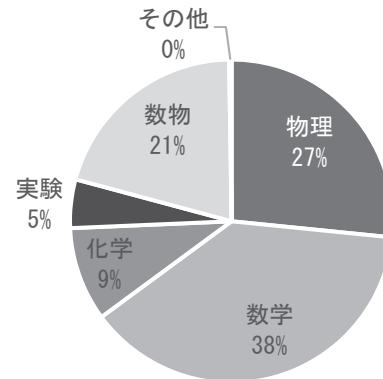
科目別の利用傾向は、数学>物理>化学の順であり、これは例年の傾向と相違ない。

※「数学物理学演習」を「数物」と表記している。以下同じ。

<表 2-1-4. 科目別利用件数【理'16】>

物理	438
数学	631
化学	155
実験	80
数物	339
その他	4

単位：件



<図 2-1-2. 科目別利用割合【理'16】>

③ 目的別利用傾向

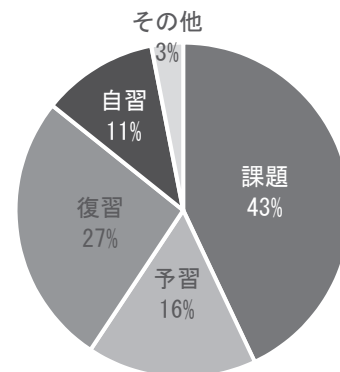
傾向は例年通りであるが、今年度は課題での利用割合が減り、復習での割合が増えた。

<表 2-1-5. 目的別利用件数【理'16】>

課題	633
予習	241
復習	389
自習	165
その他	45

単位：件

※未回答を除く



<図 2-1-3. 目的別利用割合【理'16】>

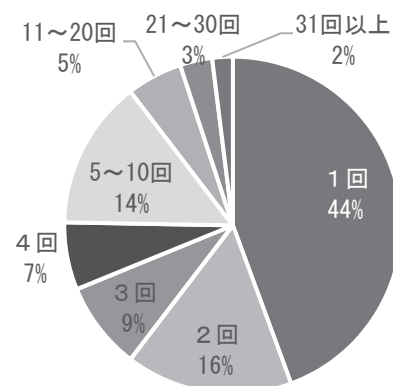
④ 利用回数別利用者数

例年通り、1、2回利用する学生と、何度も利用する学生に分かれている。

<表 2-1-6. 利用回数別人数（実数）【理'16】>

利用回数	人数
1回	158
2回	57
3回	30
4回	23
5~10回	51
11~20回	19
21~30回	11
31回以上	7

単位：人



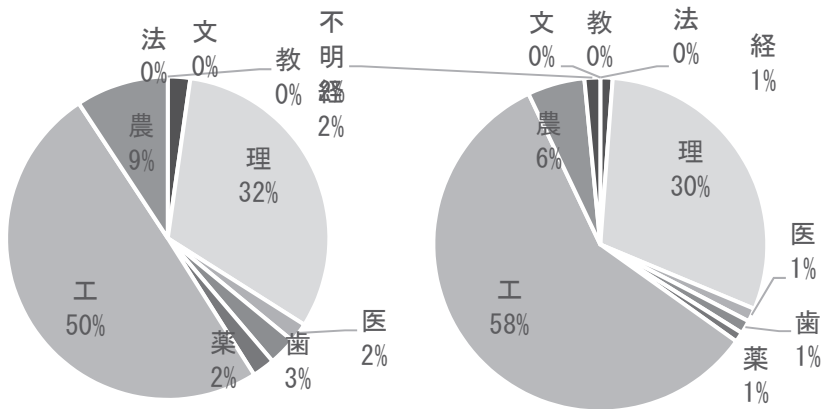
<図 2-1-4. 利用回数別利用割合【理'16】>

⑤ 学部別利用者数

実数は、工学部生が5割に減少し、理学部生が3割に増加した。延べ数で見ると、工学部生が前年度より500人近く減少し、理学部生が90人近く増加した。

<表 2-1-7. 学部別利用者数【理'16】>

学部	実数(名)	延数(人)
文	0	0
教	0	0
法	0	0
経	8	21
理	113	532
医	7	23
歯	10	23
薬	8	17
工	177	1,026
農	33	98
不明	—	27
合計	356	1,767



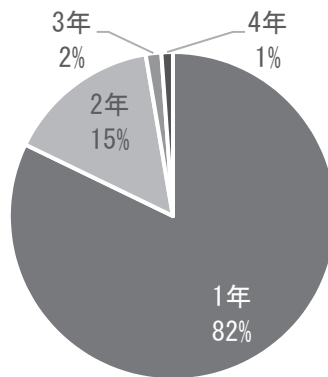
<図 2-1-5. 学部別利用割合（左：実数、右：のべ数）【理'16】>

⑥ 学年別利用者数

昨年度と変わらず、1年生が8割利用している。また、4年生の利用者数がやや増加した。

<表 2-1-8. 学年別利用者数（のべ数）【理'16】>

学年	人数
1年	1,452
2年	268
3年	27
4年	20
合計	1,767



<図 2-1-6. 学年別利用割合（のべ数）【理'16】>

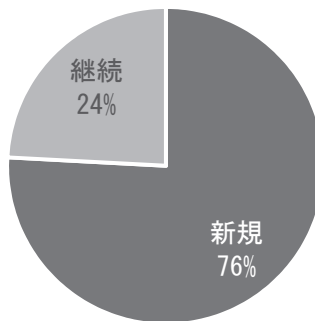
⑦ 新規・継続別利用者数

昨年度と変わらず、新規利用者が7割、継続利用者が2割であった。

<表 2-1-9. 新規・継続利用者数（実数）【理'16】>

	2016年度
新規利用者	270
継続利用者	86

※「新規利用者」=2016年度初めて利用した学生、「継続利用者」=前年度以前も利用したことがある学生



<図 2-1-7. 新規・継続利用者割合（実数）【理'16】>

⑧ 授業別利用者数

利用者数が多い上位7授業は、順位の変動はあるものの、例年と変わらない結果であった。

前期semesterについて、一昨年度急増した工学部専門の授業「数学物理学演習」の質問が落ち着いた。それに伴い工学部生の利用が軒並み減少し、昨年度の半数を切る利用者数の授業もいくつかあった。

一方、後期semesterでは、前期semesterほど利用者数は減少せず、数学の授業においては前年度を上回った。これは、熱心なリピーター学生がいたことが影響している。

＜表 2-1-10. 2015年度・2016年度上位7授業別利用者のべ数比較＞

A.前期semester

授業名	2015	2016	前年度比
数学物理学演習 I	379 人	166 人	43.8%
解析学 A	133 人	138 人	103.8%
物理学 A	134 人	108 人	80.6%
物理学 D	99 人	77 人	77.8%
化学 A	163 人	69 人	42.3%
線形代数学 A	75 人	54 人	72.0%
自然科学総合実験	73 人	36 人	49.3%

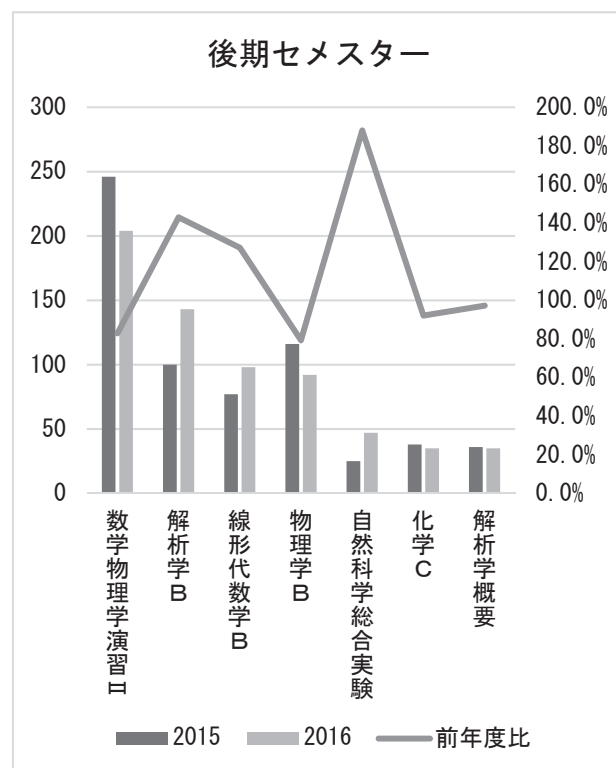
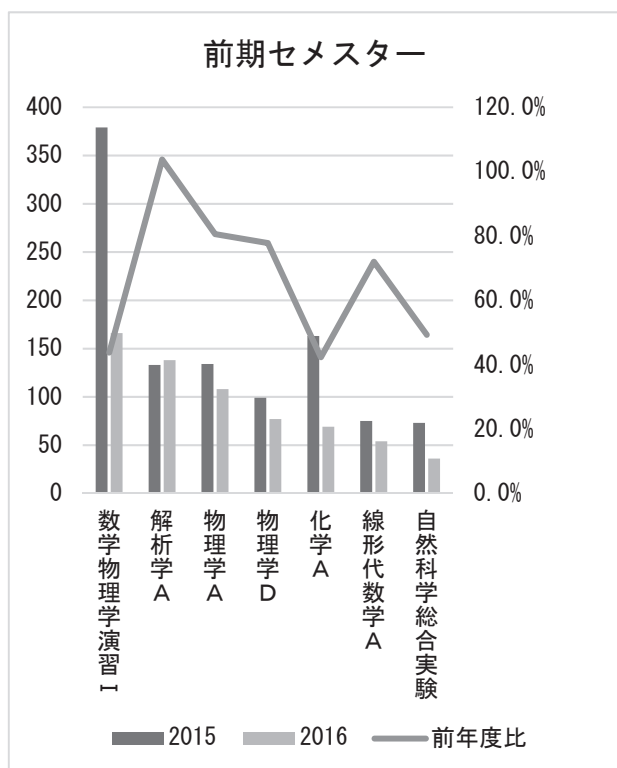
B.後期semester

授業名	2015	2016	前年度比
数学物理学演習 II	246 人	204 人	82.9%
解析学 B	100 人	143 人	143.0%
線形代数学 B	77 人	98 人	127.3%
物理学 B	116 人	92 人	79.3%
自然科学総合実験	25 人	47 人	188.0%
化学 C	38 人	35 人	92.1%
解析学概要	36 人	35 人	97.2%

利用者数合計	1,545 人	972 人	62.9%
--------	---------	-------	-------

利用者数合計	786 人	795 人	101.1%
--------	-------	-------	--------

(「利用者数合計」はその他の質問を含むsemester全体の合計数である。前年度比率の比較のために掲載した。)



2 英会話支援

英会話支援では、複数人で話すタイプの「英会話カフェ」（以下、「カフェ」とする。）とマンツーマンタイプの「1 on 1 英会話」（以下、「1on1」とする。）の2種の活動を展開している。英会話については、担当する SLA 学生の時間割を鑑みながら Semester ごとに活動時間を決定している。2016 年度の活動日は下表の通りである。

① 利用者数

利用者数は、昨年度比約 130 名減であった。この背景には、大学全体において留学を推進する体制が整備されていく中、学内他組織での英会話支援が充実してきた影響があると考えられる。これを受け、センターとしてはどの学生層に焦点を当てて活動していくかが課題となった。センター内部の課題としては、担当 SLA による支援内容・方法のバラつきが生じていると現状



を捉え、「SLA における英会話支援の専門性とは何か」という問いと共に、全体的に支援の質向上を図ることを課題とした。これを受け、後期 Semester からは、英会話担当 SLA の標準スキルの向上と英会話初級者向けの支援体制を充実させることを目標とした。

② 専門性・標準スキルの向上

部会活動を通じて、SLA 英会話支援の独自性やそれを担う SLA の専門性について検討を重ねるとともに、シニア SLA の活動とリンクさせる形で、英会話カフェの型（流れの基本形）の整備やピアレビューシートの作成を進め、これらの SLA 内での共通理解を図る動きを進めていった。また、活動の中で使用する activity tools の整備を進め、a) SLA が共通で実施できる activity の作成と b) 個々人の activity を全体でシェアするための資料・方法の改善に着手した。

③ 初級者向け支援体制の整備

英語が苦手な人にとってもより参加しやすい支援の場を構築するため、activity の整理を行い（上述②の活動と重複）、利用学生にメニューをわかりやすく提示したり、activity を選択しやすくなるようなマテリアル作成を行った。また、初級者向けに必要な支援について議論を行うとともに、「初級者向け」を明示したカフェを一部に設け、運営した。「初級者向け」カフェの工夫の一つは、会話だけでなく、簡単な書く作業を取り入れるなどであった。

<表 2-2-1. 2016 年度前期・後期 SLA 配置数（英会話）>

前期	月		火		水		木		金	
	カ71	1on1	カ71	1on1	カ71	1on1	カ71	1on1	カ71	1on1
2 講時										
昼休み							2		2	
3 講時		1					2		2	
4 講時	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
5 講時	1	1	1	1	1	1	1	1	1	

後期	月		火		水		木		金	
	カ71	1on1	カ71	1on1	カ71	1on1	カ71	1on1	カ71	1on1
2 講時										
昼休み										
3 講時		1	2		1					1
4 講時	1	1	3	1	1	1		1	2	1
5 講時	1	1	2	1	1	1		1	2	

■□ 詳細データ □■

① 利用者数

利用者数は518人であった。利用形態別にみると、「カフェ」利用が347人、「1on1」利用が171人である。

<表 2-2-2. 2010～2016 年度の英会話支援利用者のべ数変遷>

	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
前期	(7)	215	100	203	238	427	312
後期	(22)	183	61	133	460	224	206
合計	(29)	398	161	336	698	651	518

※2010年度は別形態だったため、参考値（単位：人）

<表 2-2-3. 2016 年度英会話支援利用者数>

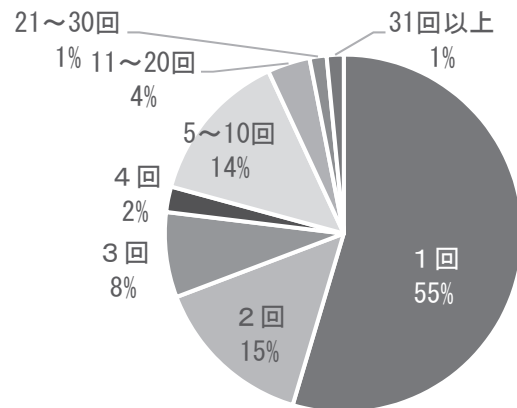
	4月	5月	6月	7月	8月	前期計	10月	11月	12月	1月	2月	後期計	合計
開催回数	16	44	49	42	9	160	17	27	21	20	10	95	255
利用者数	51	94	98	60	9	312	40	52	52	41	21	206	518
(カフェ)	38	76	82	28	4	228	17	23	34	32	13	119	347
(1on1)	22	24	31	7	0	84	23	29	18	9	8	87	171

② 利用回数別利用者数

例年通り3回までの利用者が7割以上を占めるが、今年度は1回のみ利用の学生が微増し、2・3回利用の学生が微減した。

<表 2-2-4. 利用回数別人数【英'16】>

利用回数	人数
1回	63
2回	30
3回	20
4回	11
5～10回	14
11～20回	5
21～30回	2
31回以上	5



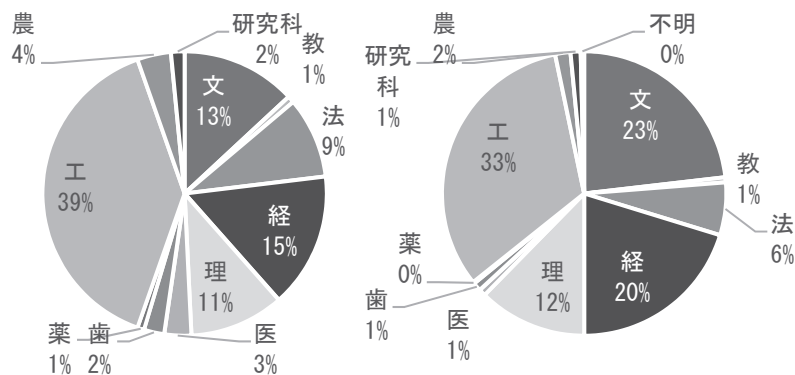
<図 2-2-1. 利用回数別割合【英'16】>

③ 学部別利用者数

前年度と同様、文・経・理・工学部の利用が多かった。実数では工学部が、延べ数では文学部が増加したが、経・理・農学部は実数・延べ数ともに減少した。

<表 2-2-5. 学部別利用者数【英'16】>

学部	実数(名)	延数(人)
文	17	120
教	1	3
法	12	31
経	20	105
理	14	64
医	4	4
歯	3	5
薬	1	1
工	51	168
農	5	9
研究科	2	6
不明	—	2
合計	130	518



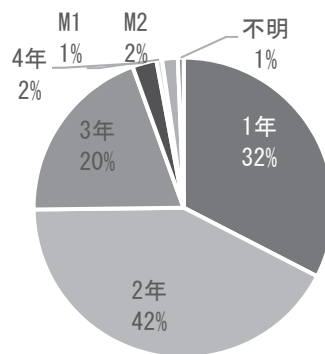
<図 2-2-2. 学部別利用割合 (左：実数、右：のべ数)【英'16】>

④ 学年別利用者数

1年生の利用は増加したが、2年生の利用が減少した。

<表 2-2-6. 学年別利用者数 (のべ数)【英'16】>

学年	人数
1年	277
2年	93
3年	117
4年	15
M1	5
M2	5
D生	4
不明	2
合計	518



<図 2-2-3. 学年別利用者数 (のべ数)【英'16】>

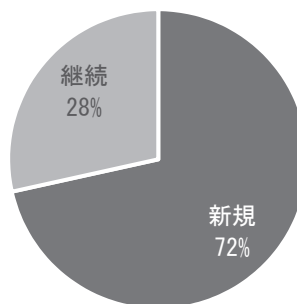
⑤ 新規・継続別利用者数

利用者数は新規でも継続でも同程度減少した。
新規・継続の割合は前年度とほぼ同じである。

<表 2-2-7. 新規・継続利用者数 (実数)【英'16】>

新規利用者	93
継続利用者	37

※「新規利用者」=2016年度初めて利用した学生、「継続利用者」=前年度以前も利用したことがある学生



<図 2-2-4. 新規・継続利用者割合 (実数)【英'16】>

3 ライティング支援

ライティング支援は、2015年度に引き続き、窓口対応（個別対応型支援）とイベント開催（企画発信型支援）の2形態で、ライティングスキルの啓発活動を含めた支援活動を行った。前期・後期各セメスターの窓口設置数は<表 2-3-1>、イベント開催数・内容は<表 2-3-6>の通りである。

① 窓口利用者数

窓口の利用者は、昨年度と比較すると若干減少したがほぼ同程度の利用者数であり、のべ61人、実数56名の利用であった（2015年度は75人、68名）。このうち、利用証明書発行活用授業（以下、「活用授業」）の利用者はのべ41人で全体の67%であった。昨年度同様、利用者の利用時期が学期末に集中する状況は変わらなかった。質問内容は「レポート全般」（例「そもそもレポートとは？」）に関する質問と「形式・ルール」（特に引用）、「構成・章立て」に関する質問が多かった（表 2-3-4）。

② アカデミックスキルセミナー（イベント）

昨年度「ライティングセミナー」として実施したイベントを「アカデミックスキルセミナー」に拡大し、ライティングスキルに加え、大学生のスタディスキルに関わるコンテンツも盛り込んで全9回のプログラムを構成した。また昨年度の課題を踏まえ、前期セメスター中の開催を実行した。

イベント参加者数は、平均4.5人の利用となった（表 2-3-6）。なお、イベント開催場所を、学生の出入りが多い厚生会館内の多目的室としてみたが、集客に変わりはなく、逆に普段のSLAの活動場所から離れていることからくるやりづらさが生じる結果となった。これを受け、追加開催した7月最終回のセミナーは場所を変更しSLAラウンジで開催した。レポート直前の時期ということもあり、最終回の参加者が最も多かった。

③ 留学生向け日本語ライティング支援への着手

ライティング支援の新たな領域として、留学生の日本語ライティング支援について検討を開始した。アカデミックライティング支援と非母語ライティング支援には、異なる対応が必要になると考えられる。そのため、SLAと共に事前勉強、対応方針の検討、利用ニーズ把握のための調査紙の作成等の作業を進めた。

以上、本年度のライティング支援の活動は、〔前期〕（前半）イベント開催型支援、（後半）窓口対応型支援、〔後期〕（前半）新たな支援に向けた開発作業、（後半）窓口対応型支援と時期に合わせて活動内容を変えていく形となった。これにより、昨年度の開発段階と比較するとSLAの支援活動は建設的に展開することができた。しかし、ライティングに関する学生のニーズを生むことの困難さは依然課題として残された。次年度は、大学教育全体としてライティングスキルの向上に取り組むことが予定されており（『東北大学レポート指南書』の全1年生への配布と、これの基礎ゼミ授業への取り入れ推奨の動き）、これと学習支援センターにおけるライティング支援をリンクさせることを検討している。これらの活動を通して、ライティング支援の充実をさらに拡充していくことが次年度の課題である。

<表 2-3-1. 2016年度前期・後期 SLA 配置数（ライティング）>

前期	月	火	水	木	金	後期	月	火	水	木	金
2 講時						2 講時					
昼休み	1	1			1	昼休み					
3 講時	1	1			1	3 講時			1		
4 講時	1	1			1	4 講時	1	1	2	1	
5 講時	1	1			1	5 講時	1	1	1	1	

※後期セメスターは1月2週目より窓口設置

■□ 詳細データ □■

① 窓口利用者数

今年度は活用授業が減り、利用者数は前年度より減少した。活用授業以外の利用は多くないのが現状である。

<表 2-3-2. ライティング支援窓口利用者数【ラ'16】>

	延数(人) a	対前年度差	受付日数(日) b	1日当たり 数 a/b	実数(名)
4月	3	-1	5	0.6	3
5月	2(1)	-15	16	0.1	2
6月	2(1)	-10	12	0.2	2
7月	22(16)	+3	12	0.9	21
8月	5(3)	+3	5	1.8	3
10月	-	-	2	-	-
11月	-	-	1	-	-
12月	-	-	0	-	-
1月	13(10)	-7	12	1.1	13
2月	14(10)	+14	3	4.7	14
合計	61(41) ※1	-7	93	(平均) 1.3	56 ※2

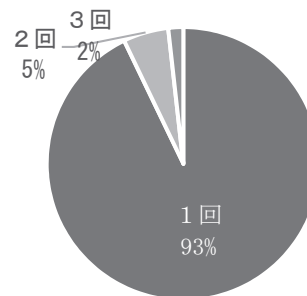
※1 表中()内の数字は、活用授業受講生の利用者数。 ※2 セメスターを通しての実数。月別の合計数ではない。

② 利用回数別利用者数（窓口）

前年度と同様、ほとんどが1回のみの利用であった。

<表 2-3-3. 利用回数別人数【ラ'16】>

利用回数	人数
1回	52
2回	3
3回	1



<図 2-3-1. 利用回数別割合【ラ'16】>

③ 利用目的

前年度と同じく、レポート全般に関する質問が最も多かった。形式・ルール及び構成・章立てに関する利用が増加した。

<表 2-3-4. 利用目的別延べ人数【ラ'16】>

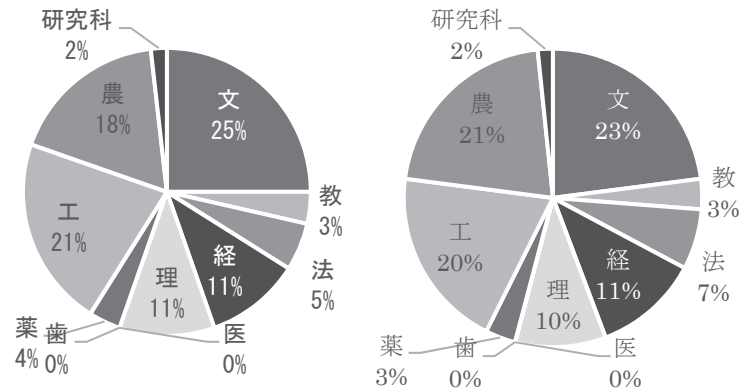
利用目的	レポート 全般	問い・ テーマ	文章表現	形式・ ルール	構成・ 章立て	文献・ 資料検索	PCの 使い方
人数	30	9	19	25	22	5	7

④ 学部別利用者数

利用者の所属は、文・工・農学部が多い（活用授業の受講生の関係による）。

<表 2-3-5. 学部別利用者数【ラ'16】>

学部	実数(名)	延数(人)
文	14	14
教	2	2
法	3	4
経	6	7
理	6	6
医	0	0
歯	0	0
薬	2	2
工	12	12
農	10	13
研究科	1	1
合計	56	61



<図 2-3-2. 学部別利用割合 (左: 実数、右: のべ数)【ラ'16】>

⑤ セミナー利用者数

セメスター前半は比較的参加者があったが、後半は落ち込んだ。学期末利用が最も多かった。

<表 2-3-6. アカデミックスキル入門セミナー利用者数【ラ'16】>

月日	時間	セミナー内容	参加者数(人)
4/25(月)	15:00~15:45	第1回: 本の読み方・探し方	3
4/26(火)	16:30~17:15	第2回: レポートって何?	8
5/23(月)	15:00~15:45	第3回: ノートの工夫で学び効率 UP!	8
5/30(月)	16:30~17:15	第4回: “はじめに” でレポートが変わる!	3
6/7(火)	16:30~17:15	第5回: 大学生の英語勉強法	7
6/14(火)	15:00~15:45	第6回: 誰でも書ける! わかりやすい文章の書き方	0
6/21(火)	15:00~15:45	第7回: レポートピアレビュー体験	2
6/28(火)	16:30~17:15	第8回: 大学生のプレゼン方法	0
7/7(火)	16:30~17:15	第9回: 短期集中レポートセミナー	9

⑥ 利用証明書発行サービス活用授業

SLA の窓口利用を証明するシートを学生に対し発行するという取り組みを 2015 年度前期より実施している。窓口の利用促進が主目的ではあるが、授業と課外学習をつなぐ装置として、センターが授業担当者に向けて行うサービスとして位置づけている。本年度は、本取り組みを、高度教養教育・学生支援機構の教員を対象に広報を行った。結果、本サービス応募授業は下記の通りとなった。

<表 2-3-7. 2016 年度ライティング窓口利用証明書発行サービス活用授業>

学期	教員	対象授業	形態
前	西尾剛 他	基礎ゼミ「大学生のレポート作成入門」	推奨
前	中川学	基礎ゼミ「フィールドワークの日本史」	必須
前	中川学	人間と文化「東北大学を学ぶ」	推奨
後	中川学	人間と文化「東北大学を学ぶ」	必須
後	大森不二雄	社会の構造・社会人になるための社会分析	推奨
後	藤室玲治	展開ゼミ「ボランティア活動と地域課題」「課外活動とキャリア形成」	推奨

教員向け 2016年度後期 Semester

SLAライティングサポート案内

窓口OPEN：1月10日～2月10日

受講生のレポートの質をあげたい

**“一発書き”ではないレポートの
取り組みせ方をしたい**

**SLA利用を推奨し課外学習を促進したい
(その学習状況がある程度把握したい)**

**質問内容やSLAの支援内容を知り
自身のライティング指導にも活かしたい**

ぜひSLAの利用をご案内ください！その際は、窓口情報を学生にお知らせいただくようご協力をお願いいたします。

学習支援センターでは、事前に申請をいただいた授業の受講生に対し「利用証明書」を発行するサービスを行っています（証明書にはごく簡単にですがどんな質問・対応を行ったかを記しています）。

「利用証明書発行サービス」をご希望の先生は、下記内容をセンターまでご連絡ください。

■連絡内容■
①教員名／②授業科目・授業題目名（複数ある場合は全て）／③レポートメ切り日（複数ある場合はそれぞれ）

！「利用証明書」発行サービスの注意点！

- ・ 証明書発行は申請があった授業に対してのみ行います。発行が必要か否かの判断は、学生が記入する「利用記録用紙」に記載された授業名によって判断します。そのため、学生自身の記載漏れがあった場合は、証明書の発行が行き届かない可能性があることを予めご了承ください。
- ・ 証明書の発行後の取り扱い（提出の有無等）については、先生方にご一任いたします。センターから学生に指示は致しません。

とちと学ぼう、とちと育とう、とちとだち Together we learn, Together we grow, TOMOSODACHI !


東北大学 高度教養教育・学生支援機構 学習支援センター(SLAサポート)
◎ 川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟1階 SLAラウンジ ☎: sla-support@grp.tohoku.ac.jp HP: http://www.sla.cis.ihe.tohoku.ac.jp

<図 2-3-3. 高度教養教育・学生支援機構教員向け 案内通知>

SLA ライティングサポート 利用証明シート

対応日時	2016年 月 日 () 時間 : ~ :
学生氏名	
担当SLA	
利用	個別質問窓口 ・ ライティングセミナー (第 回)
個別質問利用の場合	
執筆段階	<input type="checkbox"/> 執筆前 <input type="checkbox"/> 執筆途中 <input type="checkbox"/> 執筆後
対応内容	<input type="checkbox"/> 1. レポート全般 <input type="checkbox"/> 2. 問い・テーマ設定 <input type="checkbox"/> 3. 文章表現 <input type="checkbox"/> 4. 形式・ルール <input type="checkbox"/> 5. 構成・章立て <input type="checkbox"/> 6. 文献・資料検索 <input type="checkbox"/> 7. PCの使い方 <input type="checkbox"/> 8. その他 ()
対応概要	

本学生は、SLAサポート(ライティング)を活用し、レポートの改善・向上に取り組んだことを証明します。
東北大学 高度教養教育・学生支援機構 学習支援センター(SLAサポート)



<図 2-3-4. 利用証明書 2016 年度版>

4 学習イベント企画

2017年11月より、企画発信型学習支援を専門で担うSLAを雇用し、ニーズ創外型・学びの機会創造型の学習支援の充実・拡大を図る取り組みを開始した。初期メンバーは6名であり、従来のSLA学生の所属構成で割合が少なかった文系学生を中心に雇用した。

本年度の取組みは以下の通りである。

<表 2-4-1. 2016 年度実施学習イベント>

企画名	実施日・期間	開催場所	参加者数
AT+企画 「やさしい日本語：伝わりやすい日本語とは？」	2017年1月18日(水) 18:00-19:00	学習支援センター (M棟1階SLAラウンジ)	6
AT企画 「奏でる楽問」(1日目)	2017年2月6日(月) 17:30-19:30		17
AT+企画 「カタカナノチカラ：目指せ！日本語マスター!!」	2017年2月7日(火) 16:30-18:00		1
AT企画 「奏でる楽問」(2日目)	2017年2月13日(月) 13:00-15:00		4
AT連動企画(図書館との連携) 「音楽関連本」特別展示	2017年1月26日～ 3月末	附属図書館 (グローバル学習室)	—

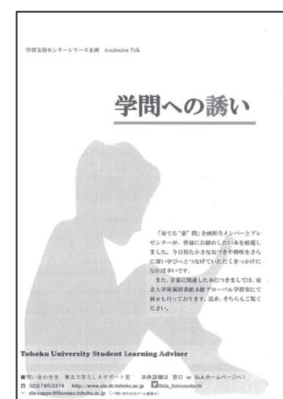
(1) AT企画：「奏でる楽問」およびAT連動企画

Academian Talk と題した本シリーズは、学際的なテーマや学部横断的な学生同士の交流を生むイベントとして企画された。第1回目に行ったイベントは「奏でる“楽”問～学びが楽しくなる音楽の話～」(全2回)である。本イベントでは、「音楽」を共通の切り口として、経営学・物理学・心理学・宗教学・物理学・手話の世界を垣間見た。各回3人のプレゼンターを立て実施し、プレゼンターは、企画SLAから2名、企画以外のSLAから2名、SLA以外の学生から2名の協力を得て実施した。学生プレゼンターが、学生の目線から学問の面白さ・大切さを紹介するところに本イベントの特徴がある。

1回分の構成は2部構成に分けて実施した。前半(1.5時間)はプレゼンターパートとして各プレゼンターによる講演を聴く場を設け、後半(1時間)はさらに話を聞いてみたい・質問したいプレゼンターとテーブルを囲み自由に意見交換できる場を設けた。

運営上の工夫としては、①アカデミアトーク「学びあい」のルールとして、[私語は慎むべからず][質問は童心に帰ってすべし]などのグランドルールを設定し話しやすい環境創りを行ったこと、②さらに学びを深める・広げるきっかけ作りとして「学問への誘い」と題するSLA&プレゼンターおススメ本を紹介したパンフレットを「お土産」に準備したこと、そして③附属図書館との連携企画による広報活動を行ったことである。

附属図書館との連携企画では、グローバル学習室の一面をお借りし展示コーナーを設置した。展示コーナーでは、本イベントが「音楽」をテーマとしていることに紐づき、音楽観連本の配架、音楽視聴コーナー、有名音楽家の顔ハメパネルの設置(SNSによる拡がりを期待)、アイドルグループの人気投票コーナーなどを設けた。





<写真> 附属図書館における AT 連動企画展示

(2) AT+企画 : 「やさしい日本語「カタカナノチカラ」

Academic Talk+ は、AT シリーズよりもより“多様性”を意識した企画シリーズである。イベントの対象者を大学生一般に広く想定するのではなく、「一般」と括った際に見逃されがちな層に対するイベントシリーズとして企画した。本年度は 2 回のイベントを実施したが、いずれも「留学生」を主なターゲットとしたイベントである。

「やさしい日本語」は、参加者に「やさしい日本語」という考えを紹介し、円滑なコミュニケーションをとるためにはどうすればよいか、留学生にとってどのような表現が難しいと感じるのかについて留学生と日本人両方の観点から考え、意見交換をしてもらうことを目的とした企画である。日本人が日常的に使う日本語と留学生が教科書で勉強する日本語には大きな違いがあり、それがコミュニケーションの障壁となる場合があることを課題と捉えたほか、企画を通して参加者の知り合いを増やし、「留学生にとって日本人の知り合いが少ない」（東北大学留学生生活調査 (2012) より）という問題の改善につなげる趣旨から企画されたイベントであった。

当日は、言語学を専門とする学生（博士 2 年）を講師に招き、レクチャーとワークを織り交ぜる形で会を運んだ。

「カタカナノチカラ」は、留学生・日本人双方の視点から「カタカナ語」を見つめ、なぜカタカナ語は難しいと感じるのか、カタカナ語を使わずに表現する方法はあるか、カタカナ語を使うメリットは何かを考える機会の提供を目的として企画された。日本語の中には様々なカタカナ語があり、グローバル化や情報化が進む中で語数、使用頻度ともに増加する傾向にある。カタカナ語には外国語由来のものが多いため、日本人の中にはカタカナ語は海外の人にも分かりやすいと思っている人がいるが、実際には日本語学習者にとってカタカナ語は非常に難しく、学習するのが困難だと感じている人が多い。このような捉え方の相違は留学生と日本人学生のコミュニケーションの妨げになる可能性があるとの課題意識が本企画の背景趣旨である。

当日は、言語学を専門とする学生 2 名（研究生、学部 4 年生）を講師に招き、クイズ等を交えながら各 20 分程度プレゼンをしたのち、グループに分かれてディスカッションを行った。



5 利用学生評価

センターでは、利用学生からの評価を得る方法に2つの形態がある。一つ目は、「利用者登録」の上で利用してもらう、理系科目、英会話、ライティング支援におけるアンケート配布である（以下、「利用者アンケート」）。もう一つは、学習イベントにおいて、各企画への参加者に対し行うアンケート配布である（以下、「イベント参加者アンケート」）。

① 利用者アンケート

利用者アンケートは、対応ごとにその都度アンケートを配布する形で行っている。質問項目は図2-5-1を参照。コメント欄は任意だが、上部2箇所の○付け回答欄と点数記載欄は必須回答をお願いする形で案内している。ただし最終的な投稿は任意であり未回収のものもある。

2016年度の利用学生による総合評価は平均96.0点であった。（配布漏れ・無回答もあるためサンプル数は1413件、うち有効回答数1367件。なお、100点以上は100点に修正換算）。また、「問題は解決しましたか？」と「対応に満足できましたか？」の質問には、表2-5-1の通り多くの対応で、「解決」「満足」の回答を得ることができている。自由記述欄の結果については付録Aを参照。

<表 2-5-1. 「利用者アンケート」における評価結果【2016】>

	Q 問題は解決しましたか？			Q 対応に満足できましたか？		
	した	どちらでもない	しなかった	できた	どちらでもない	できなかった
前期	630	68	22	1,083	16	2
後期	508	32	15	584	9	1
合計	1,138	100	37	1,667	25	3

利用日 ____月 ____日 () 利用窓口: 物理・数学・化学・英語
数物・実験・ライティング・他

■問題は解決しましたか？ した・しなかった・どちらでもない
※英会話の場合は↑は未記入でOKです！

■対応に満足できましたか？ できた・できなかった・どちらでもない

今日の対応総合点 _____ 点/100点

<コメント>
.....
.....
.....

(お好みで) ニックネーム _____

一部、SLAサポート室の壁に掲示します♪ 掲示不可の場合は丸を付けてください。⇒ 掲示不可

<図 2-5-1. 2016年度版「利用者アンケート」用紙

② イベント参加者アンケート

イベント参加者アンケートは、下記の活動で配布した。満足度は概ね 80 点台後半であった。感想は好印象のものが多かった。

<表 2-5-2. イベント参加者アンケートにおける評価結果【2016】>

	イベント名	満足度平均	感想（抜粋）
1	アカデミックスキル入門セミナー (全9回)	88.0 (n=40)	今まで知らないツールを学べたのが良かった。SLAの先輩と積極的に話したい。 事前にレポート作成に関する本を読んだことがあったのですが、それよりはるかに詳しく役立つ内容を学ぶことができました。
2	自主ゼミイベント	-	ぜひやってみたいです！ 具体例が聞けたのでよかった。
3	奏でる”楽”問 (全2回)	90.9 (n=25)	音楽という大まかなテーマでも、様々な学問の切り口から自分の思いもよらない新たな側面をみつけられた。 時間がちょうどよかった！！内容がつまっていた！！また、こういう企画を実施してほしい！！先輩方がかっこよかった。
4	やさしい日本語	80.0 (n=2)	もっと長くてよいと思う！すごく楽しかったです。学びがあった。
5	カタカナノチカラ	87.0 (n=5)	内容はめちゃくちゃおもしろかったです。「あたりまえの中の思わぬ発見」を体感できました！！もっと人が多ければ…。

6 自主ゼミ支援

2016年度の登録自主ゼミは、4ゼミ（名簿登録学生数106名）であった。前年度以前から継続して登録しているゼミの他に、新規登録したゼミが2つあった。登録ゼミの詳細は表2-6-1の通りであり、文系・理系両方の学生のゼミがある。

センターで行っている支援内容としては、放課後教室貸出とSLAラウンジ利用時の備品貸出を中心とする、環境バックアップ支援がメインである。自主的な学習活動を支える上で、活動場所の提供は重要なサポートの一つである。しかし、大学内のラーニング・コモنزの発展（附属図書館の改築）に伴い、相対的に環境支援のニーズは減少してくるものと思われ、実際に今年度は前年度より教室貸出回数が減少した。その中で、「自主ゼミ活動を生む」支援をより充実させていくことが、本センターの課題である。

今年度は、自主ゼミ体験談を聞ける企画を実施し、自主ゼミ経験者の学生に自主ゼミ活動の方法や意義などの話題提供をもらった。この会に参加した学生の一部がその後実際に自主ゼミを始めたという成果はあったが、集客数やその後の展開においては課題が残った。

■□ 詳細データ □■

① 登録自主ゼミ一覧

今年度は文系学生のゼミも登録となった。

<表 2-6-1. 2016 年度登録自主ゼミ>

ゼミ名	母体	内容	主要学年	人数 ※	継続/ 新規	支援時期
金属材料ゼミ	工学部（材料系）	勉強会	1～3年	17	継続	前期・後期
FTE	主に、工・理	ロケット製作	1～2年	75	継続	前期・後期
電子工学ゼミ	工学部（電子工学系）	勉強会	2～3年	4	継続	前期・後期
フランス文学 読書会	文学部	読書会	4年～M2	5	新規	前期・後期

※「人数」は名簿登録人数であり、実際の活動人数は異なる場合もある。

② 教室貸出回数

貸出回数は、前年度を下回った。

<表 2-6-2. 2016 年度教室貸出回数>

	4月	5月	6月	7月	8月	10月	11月	12月	1月
回数	1	5	7	2	2	1	1	1	0

③ 自主ゼミイベント

<表 2-6-3. 2016 年度自主ゼミイベント>

日時	タイトル	参加人数
6/15(水) 16:30～	大学的学び方ー自主ゼミって何？	5

7 授業連携型学習支援

授業連携型学習支援は、他の SLA の活動形態とは異なり、授業の枠内で受講生を対象とした支援活動を行う支援形態である。センターにおける本支援形態の目的は、質問を受け付ける形に馴染まない分野の支援や新たな支援領域の開発を行うことにある。また、先輩学生の力を活用して授業を活性化させたい教員向けに開かれている応募型の支援形態であり、近年は「基礎ゼミ」を中心に活動授業を募集している。

活動は授業単位となるが、TA と異なる点は、①学部生も雇用可能であること、②雇用・勤務管理を学習支援センターが行うこと、③雇用方法に柔軟性があること（短期の活動も可など）、④教員の事務補助（だけ）ではなく、“よき先輩”として受講生の学びを支援する役割を担うことである。

本年度の活動授業は、前期 2 授業・後期 1 授業であった。これらの授業は、本センターとグローバルラーニングセンターとの連携により実施した取り組みであり、留学生向けの支援の在り方を模索する目的で昨年度から実施している活動である。本授業での SLA の支援活動は、授業内の活動ではなく、対象授業の受講生（主に留学生）を対象に SLA が授業外で質問を受け付ける形態のものであった。利用率は当初の想定より芳しくなかった。原因としては、担当する SLA 側・受講生側どちらの留学生も空き時間が少ないことによる運営上の困難さがあったと思われる。

こうした状況やこれまでの経緯を踏まえ、授業連携型学習支援の募集を次年度は一度停止し、センター全体の事業再編の中で授業連携型学習支援の在り方を見直すこととなった。最大の課題は、センターにおける SLA 活動理念の趣旨を連携授業の各教員と共通理解を図る方策である。また、開発的位置づけにより個別授業で活動を行う上でも、その成果を一般に還元する体制について見直しが必要である。次年度はこれらの課題を整理し、今後の在り方を定めていきたい。

＜表 2-7-1. 2016 年度連携授業＞

	学期	科目	授業名	教員(所属)	継続/ 新規	活動範囲	SLA
A	前期	展開科目	・Biology B ・Biology C	Martin Robert (高)	継続	授業外	1 名 (B2)
B	前期	展開科目	・Linear Algebra B ・Calculus B	Igor Trushin (高)	新規 ※	授業外	1 名 (B3)
C	後期	展開科目	・ Foundations of Linear Algebra ・Foundations of Calculus ・Calculus C ・Probability and Statistics	Frank Hansen (高)	継続	授業外	2 名 (B3,B4)

※「活動範囲」における「内・外」は、受講生を対象とした授業内活動、授業外活動の有無を示す。

“準備活動”は含まない。

※担当教員としては新規であるが、授業群としては昨年度からの継続である。

学習支援センターは、学生の主体的・自律的な学習を実践的に促進・支援し、学生間の「学び合い」文化を醸成することを使命に掲げている。CLIS“学びの転換”セミナーは、この使命に取り組むための専門的知見や実践的経験を持つ講師を招聘し、東北大学における学習支援の現状と課題を明らかにした上で、具体的な方策について検討することを目的としている。このセミナーは、センタースタッフとSLAが協働してアイデアを深めるだけでなく、その他の本学教職員や学生、他大学からの参加者も交えて様々な視点から意見交換や議論をすることを旨とする、公開型のセミナーである。

テーマ	実施日・期間	開催場所	参加者数
大学生による自主的な「学び合い」はどのように実現できるか？ —学際研究コンテストXstudy（クロススタディ）の事例から学ぶ—	2016年 11月5日（土） 14:00-16:00	川北合同研究棟1階 CAHE ラウンジ	13
「自立した書き手」を育てる文章チュータリング —気づきを促す質問をしよう—	2017年 2月15日（水） 13:00-14:30	附属図書館2階 グローバル学習室	31

(1) 第1回：大学生による自主的な「学び合い」はどのように実現できるか？
—学際研究コンテストXstudy（クロススタディ）の事例から学ぶ—

概要：「大学に在ることの価値を最大化するべく、大学に学びを拓げる文化を創る」というミッションの下、大学生の、大学生による、大学生のための学際的な学習機会を企画・提供してきた学生団体が「Xmajor（クロスメジャー）」である。Xmajorが実施していた学際研究コンテスト「Xstudy（クロススタディ）」の内容や企画・実施に至る経緯を知ることによって、学生による自主的な「学び合い」の文化を東北大学に創出・拡充していくための方法や課題について検討する。

講師：大植 真氏・木下 浩之氏・星田 佳祐氏・中村 友洋氏・児玉 菜氏（Xmajor 0B・0Gの皆さん）

(2) 第2回：「自立した書き手」を育てる文章チュータリング—気づきを促す質問をしよう—

概要：教員やチューターの立場で学生の文章指導をしていると、気づいたら自分の話ばかりしているというようなことがある。しかし、「自立した書き手」を育成するためには、書き手自身が文章の問題点とその解決策に気づき、自律的に修正できるようになることが期待される。当該セミナーでの目的・概要は、文章チュータリングの実践事例をもとに、書き手の気づきを促すための質問のあり方について検討することであった。

講師：太田 裕子氏（早稲田大学グローバルエデュケーションセンター・准教授）

CLS “学びの転換” セミナー（第1回）

大学生による自主的な「学び合い」はどのように実現できるか？

—学際研究コンテスト Xstudy（クロススタディ）の事例から学ぶ—

学生団体「Xmajor」OB・OG

大植 択真・木下 浩之・星田 佳祐・中村 友洋・児玉 菜

はじめに

今回のセミナーでは、2011年に京都大学の学生を中心として設立された学生の自主団体 Xmajor（クロスメジャー）の沿革、活動の経緯やその内容、活動をする中でメンバーが考えてきたこと・感じたことを紹介し、東北大学の学生の主体的な学びを促進するヒントを提供する。

1. Xmajor の概要

（1）Xmajor とは

Xmajor とは、京都大学の学生を中心に2011年に発足した学生団体で、2011年4月から2015年にかけて活動をしていた（現在は、活動を休止している）。京都大学以外の学生も徐々に運営スタッフに加わるようになり、最盛期には9名の運営スタッフがいた。運営スタッフは、活動を構成する様々なイベント（討論会、少人数勉強会、学習プログラムなど）の企画・運営・広報を行っていた。運営スタッフの他に、イベントごとに募集して集まる参加者がおり、参加者は概ね10～30名程度であった。京都大学の学部生や大学院生だけでなく、京阪神地域にある他大学の大学生、高校生、社会人の参加もあった。

Xmajor の掲げるミッションは、「大学にいることの価値を最大化する」というものである。大学には蔵書、仲間、教職員などの「リソース」があり、そのリソースを利用できる学生という「身分」がある。大学にいるからこそ得られるものを最大限活用できる環境づくりを目指して活動していた。

（2）Xmajor の沿革

学生団体 Xmajor 設立の発端となったのは、2010年12月に、大植と木下がベンチャー企業のカンファレンスで出会ったことである。当時、大学4年生だった2人は、それまで大学の「外」で、アルバイト、サークル活動、インターンシップなど、様々な経験を積んできていた。しかし、2人で話をしている中で、「せっかく大学にいるのに、もっと大学の『中』を活用できないのか？」という疑問が湧く。大学4年生という時期は、大学卒業を目前に控え、社会に出ることが現実味を置いてくる頃である。社会に出た後では得られない、大学でしかできない経験、大学にいることの価値とは何だろうということを考えるようになり、そこで得た答えが、1つは「人」であり、もう1つは「知」であるというものだった。

京都大学は総合大学である。総合大学に在学しているながら、大学の「中」で学ぶ経験は、1,2年次の一般教養と、自分の専攻分野だけに終始しやすい。1,2年次に学ぶ一般教養に対しては、当時、どれほど実質的に「教養」が身についたのかを実感できなかった。大学4年生



<写真1>講師の皆さん

になって初めて、大学の「中」にある「知」が、質・量ともに高い価値を持つものだという事に気がついた。また、大学の「中」には、その分野においてトップレベルの研究をしている教員が多く存在している。それを利用できる学生という立場にあるにもかかわらず、それを活かさないまま卒業するのは「もったいない」と考えるようになる。もっと「大学に在ることの価値」を最大化するような何かできないか、もっと色々な分野を能動的に学び、その分野のプロフェッショナル（教授）から直接学ぶ機会を持ちたいと考えたが、当時の状況では、そのような環境や文化や機会が大学になかった。「ないなら自分たちでつくってみよう」と動き始め、そのような学生のアクティブラーニングの仕組みをつくらうとしたのが、Xmajor 設立のきっかけだった。たとえ「大学に不満があった」、「大学に学生が能動的に学ぶ文化や環境がない」としても、「大学が悪い」としてしまったり、そこで終わってしまうと感じていた。大学側の問題だけではなく、「自分たちがそれを活用しようとしてきたのか？」と自問した時に、「そうでもない」と考え、自分たちでその仕組みを作ることに意味を見出した。

その後、大植、木下の知人や、立ち上げ期の Xmajor の活動に参加して、その問題意識や理念に共感した学生（星田、中村ら）が、運営スタッフとして参加するようになっていき、活動自体も拡大していった。

2. Xmajor の活動内容

(1) 討論会

Xmajor の活動の第 1 弾として、討論会を実施した。大植、木下の他に 2 名が運営に加わり、計 4 名で企画した。この討論会に、星田、中村も参加していた。第 1 回の討論会を実施してみて、その終了後に開催された懇親会で「次回もやろう」という話になった。その懇親会の場で、学生団体「Xmajor (クロスメジャー)」という名称での団体の発足が決定し、星田、中村の 2 名も運営スタッフに加入することになる。Xmajor は、「major (専攻) をクロスする (掛け合わせる)」というコンセプトから命名された。また、Xmajor として活動していく際の主要コンセプトは、①大学・社会とつながる、②専攻の垣根を越えた学際的な視点を持つ、③濃密な議論から価値ある成果を得る、の 3 点とした。討論会などを開催することで、様々な学問分野を専攻する人々が集まる場をつくり、議論することで、学問の「タコツボ化」を防ぐとともに、一人一人が主体的に学び、充実感を得られる風土を大学に作ることを狙いとしていた。

討論会は、異なる専攻分野の学生、あるいは異なる大学の学生が集まり、討論をするというもので、月に 1 回程度、計 4 回実施した。参加者は、概ね 20~30 名程度だった。安宅和人の著書『イシューからはじめよ』(英治出版、2010 年)を参考にしながら、①問題を定義する、②イシューを特定する、③解決策を提示する、というフォーマットで討論を実施した。計 4 回実施した討論のテーマは、「日本の大学のイシューは何か？」(第 1 回)、「震災復興を考える」(第 2 回)、「組織の活性化」(第 3 回)、そして「イノベーションを起こすには？」(第 4 回:ベンチャー企業と共催)であった。

(2) 少人数勉強会

2011 年の後期から始めたのが、少人数勉強会である。討論会だけでは、情報のインプットが不十分であったために、議論に深みが出づらく、アウトプットの質にも限界が生じているという問題意識が芽生えていた。そこで、継続的に情報や知識のインプットを図る場を設け、その成果を発表することで、より深い学びへと繋げたいと考えるようになった。「異なる専攻の学生が複数人で集う」というコンセプトで、少人数での勉強会を実施した。勉強会のテーマとしては、「良いプレゼンテーションとは何か」、「教養とは」、「産官学連携について」などであった。

少人数勉強会では、議論 (=ディスカッション) をするだけだった「討論会」から発展し、3~4 名がチームとなり、1 つのテーマを決め、各自が関連文献等を読んで情報や知識をインプットする (=リーディング)。その上で、インプットしたものをベースに、チーム内で議論を行う (=ディスカッション)。各チームでまとめた情報や知識を発表したり、その情報・知識をベースに討論を行うため、

月に1回、発表会や討論会を開催する（＝プレゼンテーション）。

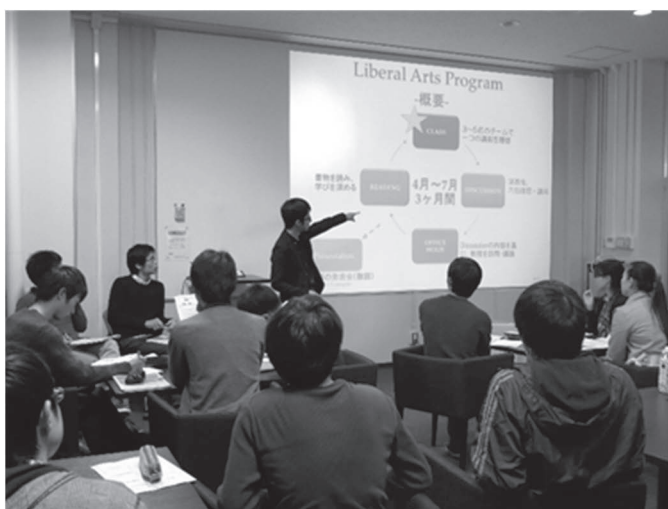
つまり、ディスカッションだけだった討論会に、チームによる事前の勉強会（リーディング）や事後の発表会（プレゼンテーション）を付け加えたのが、この少人数勉強会だった。

（3）Liberal Arts Program（LAP）

2012年～2014年度には、「1つの講義（授業）を徹底的に使い倒す」企画として、Liberal Arts Program（LAP）という名称の学習プログラムを実施する。いわゆるアクティブラーニングの試みであり、各年度の前期に実施した。

背景にあった問題意識としては、以下の3点であった。第1は、少人数勉強会によって「学生」と「蔵書（文献）」という大学のリソースは活用できたものの、「講義（授業）」と「教員」という、もっとも大学らしいと言えるリソースを活かせていなかった。第2には、討論会や少人数勉強会のテーマが、「学問」からはやや離れている実践的なものだったという点もあった。第3には、かねてより「教養科目の講義で教員がもっと楽しそうに生き生きと講義をすれば、学生も興味が持てるのに」と感じていた木下が、ある時、「学生にやる気がないから教員もやる気を出さないのでは」と、教員と学生の間に負のスパイラルがあると考えるようになった経緯もあった。これらの問題意識を基に、「教養科目の講義を徹底的に学ぶ」というこの学習プログラムが考案された。

プログラムの概要は、以下の通りである。4月から7月の3ヶ月間で実施され、まずは3～5名のチームで1つの講義を受講する。講義のあと、チームのメンバーで集まり、講義内容の確認や、それについての議論を行う。その後、教員のオフィス・アワーを利用し、チームで議論した内容を基に、担当教員のもとを訪れて議論を行う。この際には講義内容の理解を深めるための参考文献なども教員から紹介してもらい、さらに学びを深める。対象となった講義（授業）としては、「イスラーム学の基礎」、「現代文明総論」のほか、グループダイナミクス、現代アートに関する授業などもあった。



＜写真2＞セミナーの様子

（4）Xstudy（クロススタディ）

Xstudyとは、2012年～2014年の各年度後期に実施された「多分野共同研究コンテスト」である。数名がチームとなって学際研究（多分野横断的な研究）に取組み、最後に発表会を開催する。

LAPによって、「講義」を徹底的に活用して学び尽くすことには成功した。しかし、もう一段階レベルを上げ、講義を活用した活動だけに終わるのではなく、そこにProject-Based Learningの要素を導入し、「研究」に繋げるために考案されたのがXstudyであった。この段階に来て、講義は目的から1つの手段になった。また、メンバーの専攻分野の多様性だけでなく、研究のテーマも「学際的」にすることを狙いとした。このプログラムでは、「講義」を通して学びを深めながら、同時に、ディスカッションやプレゼンテーションなどの実践的なスキルを磨くこともできる。こうして、大学の「中」にしながら、これまでは大学の「外」での活動に期待していたような学生の成長を実現しようとした。

Xstudyの基本的な形としては、異なる専攻分野の学生が4～5名で1チームとなり、社会問題に関連した問題解決型のテーマを設定する。テーマ例としては、「持続可能な社会をいかに実現するか」、「日本のエネルギー政策はどうあるべきか」、「幸福な社会をいかに実現するか」、「戦争のない社会

をいかに実現するか」などであった。チームのメンバーそれぞれが、講義や文献などを通して、各担当部分についての情報・知識を得た後、チームで集まってディスカッションを行う。また、各チームの活動を支援するために、定期的に「ホームルーム」を開催し、各チームの進捗報告会や、運営スタッフからの助言、外部講師によるセミナーなどを行った。最後には、審査員として京都大学の教授等5名を招き、成果発表会を開催していた。

Xstudyは、Curiosity、Diversity、Skill、Society、Friendsの5つをキー・コンセプトに据えていた。損得勘定ではなく、ただ「やってみたい」という純粋な好奇心によって学ぶ(Curiosity)。学年も専攻も観点も多様なメンバーが集まり、チームで相乗効果を発揮する(Diversity)。研究を通して、プレゼンテーションやコミュニケーションなど、実践的なスキルを磨く(Skill)。学問とは社会をより良くするためにあるという考え方に基づいて、社会に目を向けて学ぶ(Society)。そして、共に学び、切磋琢磨し合う仲間の存在が重要である(Friends)。これらを通して、大学にいることの価値を最大化するというコンセプトである。

Xstudyに参加したといっても、単位が得られるわけではない。就職活動において何か直接的に有利になるわけでもない。それでも、30名弱の学生が意欲的に参加した。遠方から時間と交通費をかけて参加する人もいた。一方で、規模が大きくなるにつれて、運営スタッフにかかる負担が増加し、スタッフ自身がプログラムの参加者となることが難しくなっていた。

3. Xmajorからの示唆：可能性と課題

大植、木下の出会いから始まったXmajorは、彼らの知人が加入するなどにより、最多では9名の運営スタッフがいた。初期メンバーが大学を卒業した後も、新しいメンバーが加入していたが、スタッフの数は次第に減少し、活動も失速していく。2015年には運営スタッフが3名となり、活動の継続が困難になったことから、2016年度現在は活動を休止している。

Xmajorは、2012年から2カ年ほどは活発な活動ができていた。大学の環境の現状に「不満」を感じた学生たちが設立し、大学からの「トップダウン」ではなく、学生からの「ボトムアップ」により、自分たちにとってより価値を引き出せる大学をつくることに取り組んできた。つまり、意欲的な学生たちの主体的な参加があって初めて成立する仕組みであり、これが強みでもあり弱みにもなった。大学や学年、専攻等を問わずに参加者を募ったことで、多様なバックグラウンドを持った学生が集まり、それが刺激的な学習環境となった。しかしその多様性の裏返しで、遠方からの参加者がいたり、学部や学年が異なる学生と一緒に活動する上では、日程や時間を調整することがより困難にもなっていた。

初期メンバーが卒業した後、Xmajorの活動が継続できなかった理由としては、以下のような点が指摘できる。第1に、組織体制が未整備で、運営が属人的な状態となっていた。そのために、初期の主要メンバーが大学卒業に伴って抜けたことにより、組織として十分な運営ができなくなってしまった。この点と関わって、第2に、メンバーを継続的かつ安定的にリクルートできなかった。第3に、組織としてのミッションを明確に定義しきれておらず、メンバーの入れ替えに伴って、組織が何を目指してきたのかがうまく伝わらず、曖昧になっていった面があった。あるいは、その理念が伝わっていたとしても、メンバーの入れ替えによって、その解釈や定義に少しずつズレが生じてしまった。第4に、以上のような要因も重なって、既存の活動を改善・改良したり、新しい取組を生み出し続けたりすることができなかった。このことが要因となり、活動の停滞に繋がった。第5に、参加者を集める際に、運営スタッフの友人・知人の範囲に限られやすく、運営スタッフの数は減少したことで、参加者の数も少なくなり、規模が縮小していった。

Xmajorは学生による自主的な活動団体であったことから、活動資金が十分ではなく、投資による活動の拡大が見込めなかった点も失速の要因の1つになったと考えている。就職活動に関わるような自主団体であれば、企業からの資金提供を得やすいが、Xmajorのような大学での学びを目的に据えた活動に対しては、スポンサーを見つけにくい。また、参加者の大半が学生であるため、参加者から参加料を徴収することも難しい面がある。活動資金がほとんどなかったために、募集などの広報

や使用する会場など、多方面に制約が生じていた。

まとめ

大学の中で自主的・主体的に学びたい学生の活動を支援するためには、次のような環境や支援があると良いと思われる。まずは、大学側で、学生の自主的な学習グループが無料で利用できる会場や設備備品などを整備することである。さらには、物的な環境だけでなく、取り上げるテーマについての専門家である学内・学外研究者を紹介するなどのコーディネート機能があると大きな支援となる。他にも、取り上げたテーマに関する専門家だけでなく、定期的にメンタリングをしてくれる協力教員の存在も非常に効果的である。基本的には学生の自主的な活動であるとしても、必要に応じて、教職員に相談に乗ってもらえると有効だと思われる。最後に、何よりも、学生の「学びたい」という意欲を引き出し、その意欲を後押しできる環境が求められる。授業等では一定程度、学生を管理する側面も必要だが、それが、学生の学習意欲にとって「制約」をもたらすものにならないように願っている。

【追記】本稿は講演録抄録であるが、当日にお話を頂いた内容の録音データを基に、学習支援センターで編集を行い、講師の皆さんに内容の確認・了解を頂いたものである。なお、質疑応答の内容については割愛している。

CLS“学びの転換”セミナー（第2回）

「自立した書き手」を育てる文章チュータリング

—気づきを促す質問をしよう—

早稲田大学グローバルエデュケーションセンター
准教授 太田 裕子

はじめに

学生に対するライティング支援をしていて、気づいたら自分ばかり話していた、という経験はないだろうか。「自立した書き手」を育てるためには、書き手自身が文章の問題と解決策に気づけるような働きかけが大切である。本セミナーでは、文章チュータリングの実践事例をもとに、書き手の気づきを促す質問とはどのようなものなのかを検討する。

1. 「自立した書き手」の育成

（1）「自立した書き手」とは

「自立した書き手」とは、自分の文章の問題点に書き手自身が気づいて、修正方法を自分で決めることができる書き手を指す。そして「自立した書き手」を育てる文章チュータリングとは、チューター（支援者・指導者）との対話を通して、書き手が自分の文章の問題点や修正方法に気づけるようにするための支援である。「ペーパーを直すのではなく、書き手を育てる」こと、つまりチューターが文章を真っ赤に添削するのではなく、書き手が成長できるようにすることが大事なポイントなのである。



このような文章チュータリングの背景に、2つの考え方がある。1つ目は、アメリカにおけるライティングのムーブメントから出てきた「Writing as a process」という考え方である。これは、構想から第一稿・第二稿といったライティングの過程における他者との「対話」を通して、同じ文章を何度も検討してより良くしていくというものだ。もう1つは「Writing across the curriculum」という考え方である。この考え方は、ライティングは専門領域を横断するものであり、理工系の文章であっても人文社会系であっても、人に伝わりやすい文章には共通点がある、という考えに基づく。早稲田大学ライティング・センターでも、チューターの専門領域が書き手と異なる場合であっても、ライティングには精通した一読者として支援をすることができると考えている。

（2）「自立した書き手」育成のための実践

「自立した書き手」を育成するための重要なポイントは、書き手のオーナーシップを守ることにある。チューターが書き手の文章を添削して書き直してしまうと、オーナーシップを奪ってしまうことになるため、チューターは添削や代筆はしない。そして文章チュータリングのセッションにおいても、チューターではなく、書き手が主導権を握れるようにする。そのために、書き手自身が考え、修正案を見つけられるように、質問や作業を工夫することが必要だ。そして、今日は何をやりたいか、何を目標とするかということも、チューターと書き手が話し合って、書き手が決定できるようにすることが大事なのだ。さらに書き手が話しやすいように、環境づくりをすることも大切である。そのために、セッションの対話を多言語化するのも1つの工夫になる。

（3）書き手の気づき

本セミナーのテーマは「気づきを促す質問」であるが、この気づきというのは、どのように起こっていくのだろうか。ここで1つの先行研究を紹介する。佐渡島沙織は、チューターと書き手のセッションとその話題を分析して、書き手が何らかの気づきを得るまでの対話に4つの共通点を見出した（『自立した書き手』を育てる一対話による書き直し『国語科教育』66, 2009）。1つ目は、チューターが感情の共有を重ねている時である。ここで言う感情の共有というのは、相槌（「ああそうですか」「うんうん」等）、書き手が言った言葉をそのまま繰り返すオウム返し、同意（「ああ、いいですね」「なるほど」等）などを指す。2つ目は、書き手の意図を十分に話題にしている時で、3つ目は、書き手自身が問題提起をしている時だ。そして4つ目は、書き手の意図を話題にする中で、チューターが読み手の解釈を伝えている時である。

逆に話題がライティングの知識や文章に対する肯定的な評価だけを伝えている時には、あまり気づきに至っていないという結果も出ていた。ここからは、書き手が主体的に対話に参加し、自分の意図や問題を十分に話した時に、気づきが生まれやすいと言えるのである。つまり、「自立した書き手」を育てるためには、対話を活性化し、書き手が自分で考え、自分の意図や問題意識・改善策を、十分に話せる対話を作ることが重要なのである。そのためにチューターは良い聞き手になる必要がある。そして、対話に参加しやすい環境づくりというのもまた大事なのだ。

2. ライティング支援の環境づくり

（1）対話のための多言語環境

早稲田大学のライティング・センターでは、対話に参加しやすい環境づくりとして、多言語化を進めている。同センターでは、英語文章と日本語文章をサポートしているが、大きく以下の7つのカテゴリでセッションを実施している。JJ：日本語文章を日本語で対話しながら検討、JS：日本語文章を日本語教育を専門とする大学院生と日本語で対話しながら検討、JE：日本語文章を英語で対話しながら検討、EE：英語文章を英語で対話しながら検討、EJ：英語文章を日本語で対話しながら検討、EC：英語文章を中国語で対話しながら検討、ET：英語文章をタイ語で対話しながら検討、である。早稲田大学は留学生がとても多く、留学生によるライティング・センターの利用も多いこと、日本語と英語で文章を書く機会がとても多いことにより、このような対応をしている。

（2）文章チュータリングの流れ

早稲田大学のライティング・センターでは、以下のような文章チュータリングを実施している。まず、書き手の要望や不安、問題意識をよく聞く。次に、今回のセッションで取り組みたいことを話し合い、一緒に目標を設定する。そして、目標に向かって文章を具体的に検討する。終盤では、検討した内容を振り返り、書き手のこの後の行動を確認していくという流れである。以下、講演では具体例を示したが、ここでは紙幅の都合上省略する。ただ、ここで重要なのは、チューターが質問をしながら、書き手が答えたことをくみ取って、さらに次の対話につなげるための質問をして、対話を活性化している点である。つまり、よい質問をすることによって、対話を活性化させることができる、質問は対話を活性化する有効な手段といえるのである。

3. 書き手の気づきを促す質問

（1）よい質問とは

質問の目的・意図を聞き手が自覚していること、そして書き手にもそれが伝わるというのが、よい質問の前提と思われる。その質問は、質問の意味・内容・表現・意図等が十分に書き手に理解できるという点も必要である。例えば、日本語文法に関して、留学生が未知・未習である内容や、理解の不十分な知識について懸命に聞き出そうとしてもうまくいかないだろう。書き手のアカデミック・レベルや言語レベルに合った質問をするということも重要である。また、質問に答えることによ

て、書き手が考えを深められることもポイントである。セッションの中で次の対話、さらなる対話につながっていくような質問も有効であろう。



（２）質問の目的・意図の自覚

対話を活性化させるための質問には、いくつかの種類がある。①文章中で明示的には述べられていない事柄・情報を引き出すための質問、②書き手の意図を理解するための質問、③書き手がアイデアをまとめるのを助けるための質問、④書き手に文章の問題点に気づかせ、どのような解決策があるかを考えさせるような質問、⑤書き手に語らせて、アイデアをより自由に、自信を持って表現させるというような質問などである。ここで重要なのは、何のためにこの質問をしているかというのを、自覚して質問することだ。

（３）質問内容の自覚

質問の内容を自覚することも重要である。まず、文章そのものに関する質問があげられる。文章に書かれている事柄、例えば、文章で書き手が表現したいアイデア、文章の優れた点と問題点、これに関する質問がそれにあたる。次に、文章に書かれていない事柄がある。例えば、文章の話題や内容にまつわる背景情報を聞くこと、文章をどのような過程で書いてきたかを聞くことである。そしてレポートの場合には、課題の要件がとても大事で、先生からどんなコメントを受けたのか、どんな指示があったのかを確認することを忘れてはならない。一方で、文章には書かれていない書き手に関する質問も有効である。文章について書き手が気にしている、悩んでいる点、あるいは特定の内容や表現を書き手が選択した時に、どういう意図を持っていたのかなどを質問することも、時には必要である。

（４）質問形式の使い分け

質問の形式を意図的に使い分けていくことも有効である。まずは Yes-No-Question、これはイエスかノーで答えられるので、書き手は必ず答えられる。次に 5W1H、「いつ、どこで、誰が、何を、なぜ、どのように」という質問も有効である。例えば、留学生の書く文章で主語が抜けていたら、「これは誰がしたのですか?」といった質問をしていくと問題が明確になっていくことがある。そして、オープンエンドの質問は、書き手のアイデアや意見を引き出したい、よりたくさん書き手に話してもらいたい時に使うものである。「あなたがここで言いたいことは何ですか」とか「自分で書いたことについてどう考えますか」といったものだ。もう 1 つは、選択肢を与える質問である。例えば、「A と B と C が同じような意味で使えるけれども、どれが一番ピッタリきますか?」といった、選択肢を複数出した上で書き手に最終的に判断させるサポートも、書き手のオーナーシップを守ることができる質問である。ただ Yes-No-Question のみでは、チューターが主導しやすくなるため、いろいろな質問の形式を混ぜて、書き手が決定していけるように意図的に使い分けることが重要と思われる。

（５）質問から気づきへの過程

しかし、よい質問をしたとしても、書き手の気づきにつながる場合とつながらない場合がある。それは、質問それ自体が気づきを促す魔法のツールではないからだ。大切なのは、質問をした後の対話なのである。例えば、早稲田大学ライティング・センターのチューターらの研究成果によると、誰にでも必ず気づきをもたらす万能の質問はないこと、しかしチューターが自身の気づきを抑えて

書き手に寄り添い、後ろから支えた時に、書き手は気づくことができることが明らかになった（福本泰起・田部井滉平・太田裕子（「気づきにつながる質問は何か」早稲田大学ライティング・センター・チューター自由研究、2017年1月31日）。気づきを促すためには、チューターが延々とレクチャーするのではなく、気づきの方向性だけを示すこと、対話の内容をまとめて結論を導く「要するに・・・」は、チューターが言うのではなく書き手に言うてもらふこと、この2つが大きなポイントなのだ。質問に答えるのは書き手であって、チューターは、書き手の気づきを横取りしないことを肝に銘じる必要があるといえよう。



まとめ

以上のように、質問を文脈に合わせて適切に投げかけることを通して、書き手の気づきを促し、思考を深めることができる。ただし、質問するだけでは、必ずしも書き手の気づきにつながるとは限らない。質問は対話の過程における1つの手段に過ぎないのであって、対話全体の流れに配慮することが必要である。その中では特に、チューター側の意見や見解が場を支配しすぎないように配慮すること、書き手の思考を待ち、語りに耳を傾ける意識が重要である。

【追記】本稿はセミナー配付資料とテープ起こし原稿を使って、学習支援センタースタッフが要旨をまとめ、報告者による確認・修正等を経たものである。なお当日のセミナーでは、「よい質問とは何か」を出し合うグループワーク、「よい質問を活用して、対話を活性化させる」ペアワーク、最後に「文章作成支援における工夫と課題」として振り返りと共有をおこなったが、それらの内容は紙幅の都合によりすべて割愛した。

9 その他活動

(1) 学内連携等

<組織間ネットワーク>

- ・グローバルラーニングセンター 授業連携型学習支援関連でミーティングを数回実施
- ・課外ボランティアセンター 情報交換会実施
- ・附属図書館 授業における広報活動、学習イベントにおける共催

<正課還元>

- ・全学教育担当教員にむけた情報フィードバック体制を整備

<セミナー>

- ・IEHE 教育開発セミナー（第2回）「自然科学教育開発室・学習センター」

(2) 訪問受け入れ

- ・関西大学教育開発支援センター事務局・同志社大学 PBL 推進支援センター事務局 様
- ・同志社大学学習支援・教育開発センター 様

(3) 講演等

- ・国際基督教大学アカデミックプランニングセンター夏季特別研修講師（足立）

(4) 学内貢献活動

- ・萩友会プレミアム懇談会自由見学開催
- ・オープンキャンパス開催

(5) 広報活動

- ・『ともそだち本 2016』発行・配布
(学習支援センターの利用案内兼学習支援本として『ともそだち本 2016』を発行し、各学部の学部オリエンテーション時に配布をした。対象：新入生・新2年生 配布：4877部)
- ・HP ブログ更新、コラム『先輩×学問』の更新
- ・ツイッターによる情報発信
- ・各種ポスター 発行

(6) 研究活動

- ・〔口頭発表〕鈴木学、足立佳菜「学習支援に従事する学生の成長段階に関する考察」大学教育学会第38回大会口頭発表（2016年6月12日 於立命館大学）
- ・〔招待論文〕足立佳菜「学習支援と協働学習—東北大学 Student Learning Adviser の事例を踏まえて—」『高度教養教育・学生支援機構紀要』3、2017年3月、27-40頁。
- ・訪問調査 早稲田大学アカデミックライティングセンター（中川、佐藤、足立、SLA 玉田）

3. 部会活動報告

|| Summary ||

「部会」は、SLA 活動開始当初（2010 年度～）、シフトで顔を合わせる事が少ない同科目担当メンバーとの交流を図ることが主目的で始められた。しかし近年は、交流（チームビルディング）の目的よりも、相対的に、科目に紐づく対応スキルの向上に部会の役割を焦点化しつつある。

本年度の特徴として、昨年度末に整理した「次年度に向けた課題」を部会ごとに引き継ぎ、年度初めの部会定例ミーティングで各部会の目標と大まかな活動方針を SLA 自身に計画・設定してもらった。一方で、部会定例ミーティングへの参加率の低下や、構成員の意識のバラつきなどが課題として見受けられ、2016 年度の部会活動は「部会は必要かどうか」という課題提起も踏まえながら見直しを図っていく流れとなった。

部会活動全体を見渡すと、各部会による独自性・多様性と、すべての部会を通じた共通性・標準化をどのようなバランスで行うかが検討課題となった。前年度に、定例ミーティングを「情報共有」と「勉強会」の二部構成とするよう標準化を図ったが、活動を進めるにつれ、各部会の分野の特性、支援活動の特性、構成員の意欲・関心などの差異から、二部構成の大枠は共通していても、部会を超えた情報交換が容易なほどの共通性が担保された活動とはならなかった。これをどう捉えるかも含め、次年度以降の検討課題としたい。

▶各部会の活動概説

①物理部会

物理の対応の特徴である「図式化・イメージ解説」に焦点化することが本年度の基本軸であった。後期は、これに関わる対応事例について検討資料をシフト別に作成し、部会ミーティングで共有・検討する取り組みを行った。

▶2016 年度目標：good 事例 集めていこう 物理部会～新たな武器を手に入れる 2016～

②数学部会

前期の質問傾向分析結果を踏まえ、Drip 観点（92 ページ参照）の他に数学独自のラベルを設定し、ラベルの精緻化作業とラベル付けされた対応事例の共有・検討作業を行った。

▶2016 年度目標：できることを約束事に！決めたことを実行する！

③化学部会

後期の勉強会の運営において、事前にキー概念となる用語を選出し、担当を割り振って説明方法・対方法をプレゼンし検討し合うという新しい方法にチャレンジしたことが特徴である。

▶2016 年度目標：誤植リスト作成継続、メンバー増員、部会のまとまりの良さの継続

④英語部会

蓄積された activity ツールの整理を行い、activity ノウハウの共有を進めようとしている。

▶2016 年度目標：次世代につなげる伝統をつくる！～プラットホームの構築～

⑤ライティング部会

セミナー開催や新たな支援領域に関する議論と作業を中心にミーティングが開催された。しかし年度末に、学生対応スキルに関する勉強会のニーズが挙がった。これは次年度の課題とする。

⑥企画部会

企画発信型の学習支援の拡充を図るため、2016 年度の後期セメスターより新設し、11 月からの活動となった。今期は様々な試行錯誤を経て、一定の成果を得たと同時に、課題を明らかにできた。

1 物理部会

(1) 基本情報

<表 3-2-1. 2016 年度物理部会構成>

人数：前期 16 名、後期 16 名
前年度からの継続メンバー：13 名
部会長：学部 4 年、2015 年 10 月採用

<表 3-2-2. 物理部会 2016 年度開催ミーティング一覧>

	日付	曜日	時間	参加人数	全人数	出席率
定例1	2016/4/12	火	18:00~19:30	12	16	75.0%
定例2	2016/5/19	木	18:00~19:30	12	16	75.0%
定例3	2016/6/15	水	18:00~19:30	13	16	81.3%
定例4	2016/7/21	木	18:00~20:00	11	16	68.8%
定例5	2016/8/9	火	16:20~17:50	10	16	62.5%
定例6	2016/10/4	月	18:15~19:45	12	16	75.0%
定例7	2016/11/7	月	18:10~20:10	12	16	75.0%
定例8	2016/12/19	月	18:10~19:40	10	16	62.5%
定例9	2017/2/9	木	18:10~20:10	11	15	73.3%



(2) SLAによる活動報告

物理部会活動報告

理学部物理学科 学部4年
2016年度物理部会 部会長 大野敦

1. 概観

今年度は前期16人(博士3人、修士7人、学部6人)で活動。後期は入れ替わりがあったものの前期と同じく16人(博士2人、修士7人、学部7人)で活動。2015度末に掲げた「good事例集めていこう 物理部会 ～新たな武器を手に入れる2016～」のもと、実践(教材や、対応事例など)に近い部分でのスキルの向上を目標とした。今年度は若い新規メンバーが入り学部1,2年生に近い立場からの学習支援、また純粋な物理学を専門(物理学科、物理学専攻)としない人も新たに入ったため幅広い視点による学習支援へとつながった。

2. セメスターを通じた物理部会の活動

前期セメスターのシフト全体の傾向として物理の質問に繰り返し来る学生が比較的多かった。また高校で行列を習わない人への対応や数物演習のテキスト刷新などによる誤植等の対応など、多少負荷のかかることもあり物理部会としてもこれらの問題を多々取り上げることがあった。前期に行った物理部会の主な活動として「図・グラフ収集」や「grapes講習会」があった。

「図・グラフ収集」は普段の対応の中で用いられた図・グラフを集積し、部会全体で共有することで各自のスキル向上を目的に行われた。またこの活動は学生があまり図を描かないということにも端を発している。この活動を始めた当初は部会全体として必要性を感じており、重要性を認識していたが、具体的なやり方が確立しておらず活動は進まなかった。部会の活動として枠組みを決めて行い、各自にある程度の負担のかかる作業を割り振ることが必要であると思われ、このことは後期の部会活動に活かすことになった。

前期の部会定例会では毎回白熱した議論が行われ、より実践に近い視点での議論が行われた。ビデオリフレクションといった具体的な事例をベースに議論が進むため、新規SLAも積極的に参加できる環境が整っていた。一方でより俯瞰した全体を見るような内容にはなりにくいという問題点もあった。

後期セメスターはシフト中の新たな活動がいくつかあり、物理部会に限らずSLA全体としてピアレビューやDripカルテ、SHUシートなどの新たな動きが活発であった。特にピアレビューは他人の対応から学ぶいい機会になっていた。物理部会はシフトごとに「図・グラフ収集」として対応に即した事例ベースの資料を作成し、この動きはDripカルテにつながる動きであるので今後さらに発展していくのが期待される。

前期に引き続き行った「図・グラフ収集」は前期の反省をふまえ、シフトごとに一つキーワードをもとに図の説明資料作成を行った。この結果本来意図していた図に対するスキルの向上以外にも一つの問題を深く取り組むというのもできDripカルテに近い内容もできた。セメスターを通しての活動であり、手探りではあったが最終的にフォーマットを統一してまとめるところまで行われたので詳しくはサポート室の資料を参考にしてもらいたい。

後期の部会定例会では前期に引き続きビデオリフレクションが行われたほか、部会の流れであった図、グラフ収集に関連したシフトごとの作業で作成した資料の発表が行われた。これらの活動では一つの問題や対応を深く掘り下げる機会となった。

3. 部会定例会

■前期第1回 キックオフミーティング(4月)

- ・自己紹介、活動計画

新規メンバーが3人入ってきたため SLA 間の交流行った。また物理部会の前期セメスターの活動計画を行い、部会長副部会長の決定、部会定例会での勉強会の内容の話し合いを行った。

■前期第2回 定例会(5月)

- ・ビデオリフレクション、3D ラプラシアン

ビデオリフレクションでは一つの事例(3D ラプラシアン)を全員で検討するということが行われた。SLA 内でも各自がそれぞれの対応の方針を持っており、活発な議論がなされた。

■前期第3回 定例会(6月)

- ・心地よい対応、トルクと角運動量

心地よい対応とは何か、特に心地よい沈黙について議論がなされた。SLA 内でも沈黙をポジティブにとらえる人とネガティブにとらえる人に分かれた。またハッピーな対応の終わり方についても議論がなされた。勉強会では角運動量とトルクについて2つの異なる対応を比較しながら対応の検討を行った。

■前期第4回 定例会(7月)

- ・行列の対応、SLA の当たり前

高校数学で行列を学んでいない人に対する対応の方針を話し合った。またテスト前ということもあり、普段の対応とテスト前対応でどのように対応のやり方が異なるのかなどの確認を行った。勉強会では SLA の当たり前が学生の当たり前でないという点について話し合った。

■前期第5回 セメスター総括(8月)

- ・前期まとめと後期にむけて

前期の活動全体のまとめを行った。事例ベースの部会が多かったため SLA が主体的に活動できたが、その一方で勉強会の担当になる人への負担が多く事前準備に時間がかかることなどが挙げられた。

■後期第1回 後期方針決めミーティング(10月)

- ・前期利用状況、後期活動計画

前期の反省を踏まえ後期部会ミーティングで行うことや物理部会の全体の流れなどを決めた。

■後期第2回 定例会(11月)

- ・長時間利用学生と連日利用する学生への対応方針、ビデオリフレクション

長時間利用する学生への対応をどのようにするかや、複数の曜日にまたいで利用する学生の対応を検討した。またビデオリフレクションでは物理学科の演習の*問題の教え方について議論した。

■後期第3回 定例会(12月)

- ・図、グラフ収集

シフト中に行っている図グラフ収集の作成資料の報告を行った。またこの部会の後にそれぞれが作成した資料を統一のフォーマットにそろえるところまで行うこととなった。

■後期第4回 総括(2月)

今年度の総括を行った。大きくシフトごとの様子と物理部会の流れの2つについて議論し、その後活動報告会の担当などを決めた。

4. 全体総括

今年度は概観にも書いたようにより実践に近い内容を活動の軸に据えて様々な試みを行った。具体的にはビデオリフレクションや事例検討会、図グラフ収集といったことであり、どの活動においても普段のシフトで深く掘り下げることができない部分まで掘り下げることができた。

また SLA 全体の流れとしても大きく変わってきており、ピアレビューや Drip カルテ、SHU シートなど学習支援の効率化につながるようなことが様々行われていた。ピアレビューは物理部会にと

どまらない幅広い視点からの自己の振り返り、Drip カルテは事例の深い検討からの学び、SHU シートは円滑な対応へとつながった。これらの活動で SLA 全体がお互いに協力して高め合う仕組みが構築されつつあり、物理部会としてもその構築方法を模索しながら改善していった。

5. 最後に

まず、年報を作成するにあたって今年度の初めから振り返ってみたところ、様々な場面でたくさんの人に支えられてこうして年報執筆に至ったということに改めて気づかされました。物理部会をまとめることができたというのに安堵しているのと同時に、そのために様々なサポートをくださったスタッフの皆さん、SLA メンバーには言葉では表せないほどの感謝をここに記します。

また、私自身が常々言っていることとして「SLA の魅力は学部生がいること」というのがあります。今年度部会長として活動していく中で修士や博士の学生でなく、なぜ学部生の自分が選ばれたのかを考えるとときもありました。そして物理部会という組織をどのように導いていくのかというのを常時考えながら活動してまいりました。遠回りのようではあったものの、結果として自分の中にある核となるものはぶれずに1年間を走り抜けることができたと思っております。

SLA という組織は教師とも TA とも異なるため未だ確立した立ち位置はないと感じており、その真っ暗な中で模索していくことで一筋の光が見えるのだとすれば、今年度の活動がその一端を担ってくれたことを信じたいと思います。

2 数学部会

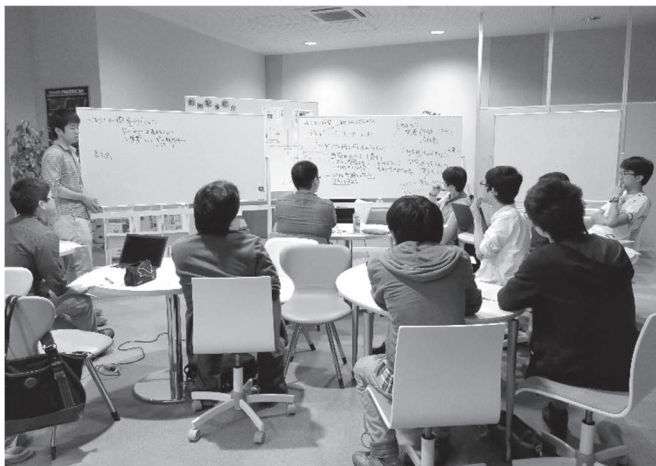
(1) 基本情報

<表 3-3-1. 2016 年度数学部会構成>

人数：前期 11 名、後期 11 名 前年度からの継続メンバー：9 名 部会長：博士課程前期 1 年、2015 年 4 月採用

<表 3-3-2. 数学部会 2016 年度開催ミーティング一覧>

	日付	曜日	時間	参加人数	全人数	出席率
定例1	2016/4/11	月	18:00~19:30	8	11	72.7%
定例2	2016/5/16	月	18:00~19:30	7	11	63.6%
定例3	2016/6/17	金	18:00~19:30	10	11	90.9%
定例4	2016/7/21	木	18:00~20:00	7	11	63.6%
定例5	2016/8/9	火	16:20~17:50	7	11	63.6%
定例6	2016/10/7	金	16:00~17:30	9	11	81.8%
定例7	2016/11/11	金	18:10~20:10	9	11	81.8%
定例8	2016/12/20	火	18:10~19:40	6	11	54.5%
定例9	2017/2/16	木	18:10~20:10	9	11	81.8%



(2) SLAによる活動報告

数学部会活動報告

理学研究科数学専攻 博士課程前期1年
SLA 数学担当 (2016年度数学部会 部会長) 珍田 一馬

1. 概要

今年度の数学部会は博士4名、修士5名、学部生2名(修士2名が前期に新加入)の計11名で活動を行った。専門の内訳は解析学2名、幾何学5名、代数学3名、基礎論1名と幾何学が比較的多い。学部4年から博士3年まで様々な学年のメンバーで構成されていた。今年度の数学部会は「Dripカルテを率先して収集する」することを目標として活動してきた(第2期定例会で決定)。さらに後期には新たに「CHラベル」を導入し、前期よりもDripカルテを活用することを目指した。

2. 本年度の特徴的な活動

概要でも触れた「CHラベル」の導入が、本年度の数学部会の特徴的な活動である。これは、

- (1) 数学の分からなさの種類【計算・図形・論理】
- (2) 難易度【基本・応用】

これらの観点で対応した問題の特徴付ける試みであり、もともと前期の利用状況分析で用いられた手段である。これらの観点は数学に特有なものであり、Dripカルテの観点に加えてこれらも踏まえて議論することで有用な知見が得られるのではないかと考えた。これら(1)(2)のカテゴリーを「CHラベル」と名付け、後期の定例会からDripカルテとCHラベルの観点で対応事例の共有・検討会を行うこととした。より詳細には、各ラベルには(1-1) 計算…計算の仕方が分からない、計算の結果が答えと合わない(1-2) 図形…数式の背後の問題のイメージ、感覚が掴めない、(1-3) 論理…教科書が理解できない、証明の細部が分からない、(2-1) 基本…教科書を見れば分かる、公式を適用すれば解ける、(2-2) 応用…方針を考える必要がある、公式を暗記するだけではなく使う場面を考える必要がある、という意味合いがある。

3. 各月の定例会活動詳細

今年度は前期5回(4~8月)、後期4回(10~12月、2月)の定例会を開催した。基本的には前半は各シフトの情報共有、後半は勉強会という内容だが例外もある。各回の詳細は以下の通りである。

●第1回定例会：4月11日(月)

各メンバーの自己紹介から始まり、部会運営の確認や前年度の振り返りを行った。また、今年度の数学部会の活動計画として「数理統計の勉強会」や「計算ソフト GRAPES の勉強会」などの提案があった。前年度活用していたシェアカルテや部会ノートは今年度は活用しないこととした。

●第2回定例会：5月16日(月)

前半は情報共有、後半は「テイラー展開に関する質問に来る学生への対応を考える会」と題してディスカッションを行った。学生がテイラー展開で躓くポイントとして、テイラー展開のモチベーションが分かっていないことやテイラーの定理の主張が理解できないことが考えられ、対策として工学、物理学におけるテイラー展開の応用を話すことや GRAPES を利用することが挙げられた。

●第3回定例会：6月17日(金)

前半の情報共有において、次回の数理統計の勉強会に向けた統計に関する意見交換が行われた。我々が公理的に数理統計を理解することで対応に活かせる点があると考えた。

後半ではあるメンバーの対応のビデオリフレクションを行った。客観的な意見が交わされることで対応している本人、対応を見ているメンバー双方にとって有益になったようだった。

●第4回定例会：7月21日（木）

前半の情報共有で「学生の疑問点が芋づる式に出てくることを防ぐコンサル」に関する意見交換が行われた。このために「周辺の理解を確認する」ことや「キーワードを列挙して反応を見る」ことが有効なのではないかという結論に至った。

後半は数理統計の勉強会を行った。確率変数・確率分布の定義、期待値・分散の計算例、諸定理などのトピックを数学的に解説し、参加者からは「数学的に統計を知ることができたおかげで普段の対応で怯えずに済みそう」などという感想があった。

●第5回定例会：8月9日（火）

前期活動（質問対応傾向、部会活動）の総括と合宿での報告の役割分担を行った。質問対応傾向に関しては質問が自発的でない、学生が手足を動かしていない（動かし方が分からない）という意見があった。部会活動に関しては Drip カルテ収集に関する振り返りや各月の定例会の成果と課題を議論した。Drip カルテの目的、目標の共有や作成時間の確保などの課題点が挙げられた。

●第6回定例会（後期第1回）：10月7日（金）

前期の利用状況分析の共有、後期の活動計画の話し合いを行った。利用状況分析の際に用いられた「CH ラベル」をセメスターを通して活用することで対応の知見が得られるのではないかという意見があり、後期は CH ラベルに紐づいた対応の共有・検討を行うことを目標にした。

●第7回定例会（後期第2回）：11月11日（金）

情報共有の後、各自が持ち寄った対応のカルテを CH ラベルの観点で踏まえて共有する勉強会を行った。実際に導入してみて「学生のわからなさ」を学生自身が認識しているものなのか、SLA 側が認識しているものなのかという違いが見られる点があった。

●第8回定例会（後期第3回）：12月20日（火）

前回同様持ち寄ったカルテの共有を行った。各自が共有したいポイントを明確にして議論を行うことで、他のメンバーが意見を出しやすい場となった。前回に比べてラベルの認識の違いは減ったようだった。

●第9回定例会（後期第4回）：2月16日（木）

今期の活動において気づいた点を共有したり、部会活動の評価と検討を行ったりした。部会活動については「CH ラベル」「Drip カルテ収集」「勉強会」の3点を軸として良かった点や改善点を議論した。CH ラベルは後期になってからの新しい試みだったため、まだ改善の余地がありそうだという意見が多かった。

3. 総括

前期後期ともに各個人の SLA としての知見を数学部会で共有するという意識を持って活動できていたと感じるが、後期は特にその意識が高かったと思う。実際に対応したカルテを持ち寄って意見を交換するという試みは有益なものであった。各個人の対応の良い点を全体に共有し、改善点に対するアドバイスを交換しあうことで数学部会全体の質の向上になると考える。来年度も部会全体がこの意識をもって活動していくことに期待したい。

3 化学部会

(1) 基本情報

<表 3-4-1. 2016 年度化学部会構成>

人数：前期 5 名、後期 4 名
前年度からの継続メンバー：4 名
部会長：博士課程前期 1 年、2015 年 4 月採用
副部会長：博士課程前期 1 年、2015 年 6 月採用 …後期部会長代理

<表 3-4-2. 化学部会 2016 年度開催ミーティング一覧>

	日付	曜日	時間	参加人数	全人数	出席率
定例1	2016/4/13	水	16:20~17:50	3	4	75.0%
定例2	2016/5/18	水	18:00~19:30	3	4	75.0%
定例3	2016/6/22	水	18:00~19:30	2	4	50.0%
定例4	2016/7/21	木	18:10~19:40	3	5	60.0%
定例5	2016/8/5	金	16:20~17:50	4	5	80.0%
定例6	2016/10/4	火	16:00~17:30	4	5	80.0%
定例7	2016/11/10	木	18:10~20:10	3	5	60.0%
定例8	2016/12/19	月	18:10~19:40	3	5	60.0%
定例9	2017/2/7	火	18:10~19:40	4	5	80.0%



(2) SLA による活動報告

化学部会活動報告

理学研究科化学専攻 博士課程前期 1 年
SLA 化学担当 (2016 年度化学部会 副部会長) 岩橋 万奈

1. 今年度の化学部会の概観

本年度は博士 2 名、修士 2 名の 4 名で活動を開始し、7 月から学部生 1 名を加えた 5 名で活動。新規メンバーは理学部生が多い SLA においては貴重な工学部在籍者であり、対応時に先輩としてアドバイス出来る範囲に広がり生まれた。SLA 全体の「継承」という流れを受け、様々な形で情報の継承に向けて活動する 1 年であった。

2. セメスターを通じた化学部会の活動

それぞれのセメスターのはじめに半期での大きな活動を決定した。具体的には、前期は「対応傾向分析と授業への申し送り」を、後期は前期の流れを受けて『ふわっと用語集』の作成』をメインの活動とした。これら 2 つの活動について、以下に詳細を述べる。

(1) 対応傾向分析と授業への申し送り

数年前、当時の化学部会が長年の経験を基にまとめた資料を、授業への申し送りとして全学科目化学 A および C の担当者に送っていた。この資料は熟練 SLA が総力をかけてまとめたものであり、質問内容やその原因のわからなさ等をよく網羅していたため、一度作成して以降は大きな改変は行われていなかった。この状況の問題点として「対応経験知に基づいた資料であるため熟練 SLA がいないと大幅な改定や新規作成ができない」ということが挙げられる。それに加えて、化学 A 授業担当者から「実際にどんな質問が来ているのか知りたい」という要望が上がったため、現在の申し送り資料の見直しと SLA 利用者の実状報告をすることを目的として、エクセルを用いた利用者データと質問内容の蓄積を開始した。

本格的な蓄積に先立って、「どのような情報が求められているのか」「どのような蓄積の仕方が良いか」を吟味し、「質問の内容 (学生自身が思うわからない部分、表層的課題)」「学生の躓いていると思われるポイント (SLA が見立てた学生のわからない部分、本質的課題)」に着目して残すこととした。蓄積後は、集計とデータから得た知見を対応傾向分析として部会内最年長の D3 のメンバーに依頼。従来の申し送りからさらに現状に沿った傾向分析をすることが出来た。

今後の課題としては、「最終的な傾向分析をする人の負担や依存がまだ存在する」「エクセルへの入力者と対応者が違う場合 (ex: 他部会による対応を代理で入力)、着目している情報を抽出できない場合がある」「繁忙期の入力の遅れ」などが挙げられ、これらについて改善への検討が必要である。

(2) 「ふわっと用語集」の作成

(1)で行った 2016 年度前期対応分析から、『そもそも〇〇って何ですか?』と言われるような、化学でよく耳にするがイメージが付きにくい用語(位相、電子密度など)について、化学部会内での共通知見を残し、対応に活かせるのでは?』と考え、いくつかの単語について「ふわっとしたイメージを学生持ってもらうための資料=『ふわっと用語集』」の作成に取り組むことにした。

まず各単語を部会メンバーに割り振って資料を作成し、部会の場でそれらについて議論をしたところ、各 SLA の用語集への認識の差によって「TypeA: どのような説明をすれば学生がわかるか (対応重視)」「TypeB: どんなイメージを持っていけばいいか (知識重視)」という 2 つの形式が生まれた。TypeA は「学生のわからなさ」を踏まえた実践的説明の仕方をまとめたものであり対応の参考にはなるが、そのベースとなる知識はあらかじめ SLA が持ち合わせていることが前提になっている。

TypeB は教科書的な説明をかみ砕いた「情報」であり、それを如何にして学生に伝えるかという目線は希薄になっている。「学生のわからなさを踏まえた対応の参考書」と「SLA 側の知識の補助や統一性の保持に向けた資料」というそれぞれの利点を両方活かした統一形式が必要であると考え、SLA 全体の活動で用いられる Drip カルテをベースとしたプロトタイプを作成する予定である。

3. 月定例部会における活動

■ 第1回（前期-1、4月） キックオフミーティング

部会長・副部会長を決定。また各回の勉強会担当者も確定した。今年度の目標は「①駆け込み需要対策」「②支援者層の拡大」とし、①の対策に「物理部会に対応の手伝いをお願いする」①②両者の対策に「利用学生を巻き込んだ物理化学お話会」を提案。これらについて議論を交わした。

■ 第2回（前期-2、5月）

化学 A の教員申し送りファイルについて確認。申し送りの発案者である小俣先生や、佐藤先生にも来ていただき、教員申し送りについて意見を伺った。それをもとに、対応内容よりも学生の躓きポイント・学生が分からないと思ったところについて注目し書けるようにフォーマットを一新した。

■ 第3回（前期-3、6月）

化学 A 申し送り蓄積における「カルテ内容が不十分」という問題について、始礼で物理・数学 SLA にカルテの①②を書いてほしいと伝えて頂くこととした。「HHeH 直線分子の軌道について」「『すべてわからない』と駆け込んでくる学生さんについての対応」の内容で勉強会を行った。

■ 第4回（前期-4、7月）

勉強会として D1 メンバーによる化学 SLA 新人研修開催。対応におけるコンサルの重要性や、どのような問いかけで学生の理解を助けることができるかについての講習を行った。レクチャーだけでなく活発な議論をすることで、より良い学習支援への行動指針を共有することが出来た。

■ 第5回（前期-5、8月） 前期活動総括

前期セメスターの総括および夏季休業中の部会の動きや合宿での部会報告の内容決め。

■ 第6回（後期-1、10月） 後期方針決め

担当者による前期利用傾向分析の結果報告、および後期の部会の活動の方針決め。

■ 第7回（後期-2、11月） ふわっと用語集

ふわっと用語集作成に向け、各単語の担当者が作成した資料持ち寄り発表し合った。本部会では、「対応に活かす」という立場から、用語集として文章化して共有するのではなく、用語説明動画集としてこの各堂を共有・継承していきたいという共通認識を持った。

■ 第8回（後期-3、1月） ビデオリフレクション

新規 SLA の対応を録画した動画を見て、SLA 経験の長いメンバーが改善点や良かった点を指摘した。学生の視線を上げさせるためにはどうしたらよいか、ゴール設定をどうするかなど、新規 SLA のみならず、全員が対応について考え直すきっかけとなった。

■ 第9回（後期-4、2月） 本年度総括

後期セメスターと本年度の活動振り返りを行った。後期のタスクである「ふわっと用語集」を実際に今後残していける形にするにはどうすれば良いかを議論し、そもそもの用語集のありかたや目的・形式がふわっとしていたことに対する反省と改善案、今後の展開の方針を決定した。

4. 全体総括

他部会に比べて少人数であり、窓口対応としては毎日窓口を開設することが出来ない状況であった。しかし部会活動としては、小規模であるが故の個人の裁量の大きさや自由度の高さを活かした新規活動や議論を行うことが出来た。来年度も少人数であることが予想されるため、引き続き小回りの利く活動を進めたい。特に今年度の活動は少人数の化学部会なら早い PDCA サイクルが見込めるといことで、全体に先駆けたプロトタイプの検討を行うことが多かった。よってこれらの活動を全体に波及できる完成度にまで高めるのも目標である。

4 英語部会

(1) 基本情報

<表 3-5-1. 2016 年度英語部会構成>

人数：前期 11 名（6 名）、後期 10 名（4 名）	※（）内留学生数、内数
前年度からの継続メンバー：7 名	
部会長：博士課程前期 2 年、2015 年 4 月採用	

<表 3-4-2. 英語部会 2016 年度開催ミーティング一覧>

	日付	曜日	時間	参加人数	全人数	出席率
定例1	2016/4/13	水	16:20~17:50	7	11	63.6%
定例2	2016/5/17	火	18:00~19:30	6	11	54.5%
定例3	2016/6/13	月	18:00~19:30	3	11	27.3%
定例4	2016/7/21	木	18:10~19:40	6	11	54.5%
定例5	2016/8/9	火	17:00~18:30	7	11	63.6%
定例6	2016/10/7	金	12:30~14:00	6	10	60.0%
定例7	2016/11/8	火	11:00~13:00	5	10	50.0%
定例8	2016/12/13	火	16:30~18:00	5	10	50.0%
定例9	2017/2/9	木	11:30~13:00	6	10	60.0%



(2) SLAによる活動報告

英語部会 2016 年度の取り組み

～～共通の土台づくりに向けて～～

文学研究科 英文学専攻 博士課程前期 2 年
SLA 英会話担当 (2016 年度 英語部会 部会長) 酒井 祐輔

1. 英語部会の概観

英語部会は、前期いっぱい 1 人が留学、1 人が卒業した。後期からは新たに 2 名が加わり、学部生の 2 人、修士課程 7 人、博士課程 1 人という構成となった。英語部会内においても世代交代が進行しつつあり、ベテラン層の技能をいかに次の世代へと継承するかが年間を通じた課題となった。また、川内キャンパスの英語学習を取り巻く環境が目まぐるしく変化するなかで、SLA 英会話が果たすべき役割を再考することとなり、英会話経験のほとんどない学生に向けた対応の重要性が再確認された。初心者向けの対応について模索した一年間でもあった。

2. セメスターを通じた英語部会の活動

専門分野もバックグラウンドも様々なメンバーからなる英語部会では、お互いが持っている学生対応のスキルをいかに共有・継承するかが、常に課題となってきた。とりわけ今年度は、これまで部会活動を担ってきた経験年数の長いメンバーが相次いで卒業することが分かっていたため、いかにして英会話 SLA としてのスキルを継承していくかが差し迫った課題となっていた。

(1) ヒアリングシート導入

英語部会独自で学生の個人別ヒアリングシートを開発し、運用を開始した。このシートは、利用学生のニーズや習熟度合いを把握・共有し、同時にリピーター学生に対して企画や話題が重複してしまうのを避ける目的で考案され、SLA と利用学生が学習の内容や成果を共にリフレクションするために使うことも視野に入れて開発された。4 月からは主に 1on1 において使用している。

(2) マテリアル共有

SLA 英会話では、これまで SLA が各自で学生対用のツールを開発してきた。これらのマテリアルをお互いに共有できるようにすること、その使い方をわかりやすく整理して保存し、現メンバーの卒業後も後輩の活動に役立てられるようにすることを目的としてツールの整理を進めた。初心者向けに対応に適したゲーム性の高いマテリアル (カルタ、Picture Game, Who am I?) を BASIC3 と位置づけ、SLA 間での周知を図った。未整理の過去マテリアルや新しく開発されたマテリアルの共有をいかに進めていくかが今後の課題となっている。

(3) 新人研修

英語部会 SLA のなかでも経験の豊富なメンバーが担当して新人研修用の資料を作成した。新規の英語部会 SLA に向けて学生対応の方針や、対応の基本的な流れなどを説明する資料を用意し、研修を実施した。また、この資料を前期第 4 回の定例部会で検討したことにより、英語部会メンバーのあいだでの意識共有も進んだ。

(4) ピアレビュー

こちらも年長の SLA が中心となり、英語部会独自のピアレビューシートを開発した。メンバーがお互いに対応の様子を観察し助言し合うことで、対応の質を向上させることが狙いであった。ピアレビューは後期に数回実施され、対応の進め方が適切であったかや、対応中に仕草や目線などの非

言語的なコミュニケーション手段をうまく使えていたかなどを確認した。普段の対応について改めて考えるきっかけとなった。

3. 定例会における活動

定例会での活動は、学生の利用状況に関する情報共有、セメスターを通じた活動の進捗確認、英会話担当としてのスキルアップの3種類に大別できる。SLA 英会話は繰り返し訪れるリピーターの比率が高いこともあって、学生情報の共有に力点が置かれる傾向があるのが特徴といえる。

■前期第1回(4月)

新規メンバーもいたため、自己紹介から始めた。部会の役職決めを行った。前年度末からの引継ぎ事項として、次世代へのスキルの継承が課題となっていることを確認した。

■前期第2回(5月)

お互いに対する理解を深め、利用学生のニーズに合いそうな曜日と時間を紹介できるようにと考え、各自の対応方針やバックグラウンドを共有した。またツール整理の計画を本格始動した。

■前期第3回(6月)

新規利用学生の定着率をいかに上げていくかを話し合った。新規 SLA へのスキル継承の必要性を指摘する意見が出たほか、定例会の望ましいあり方を考えていくことも課題として提起された。

■前期第4回(7月)

新しく開発した新人研修用資料について話し合った。コンサルティング、アイスブレイキング、企画、振り返り(リフレクション)、クールダウンの5段階に分けてカフェを組み立てるという「型」が提唱された。また対応中の英語と日本語の使い分け方についても意見交換が行われた。

■前期第5回(8月)

前期の振り返りを行い、合宿での発表準備のための役割分担を決めた。

■後期第1回(10月)

後期の活動方針説明などについて話し合った。また実際にサポート室にあった問い合わせ事例を取り上げ、SLA 英会話をどのように運営していったらよいかについて考えた。

■後期第2回(11月)

実際にあった英語でのライティングを見て欲しいという実際にあった相談の事例を取り上げて話し合った。書き手のオーナーシップを守りつつ、効果的な支援を行うにはどうしたらいいかで様々な意見が交わされた印象的な会であった。

■後期第3回(12月)

カフェの運営の仕方がテーマになった。カフェの途中から新たに人が加わった場合にどうしたらよいかや、カフェに一人だけ初心者が入って来た場合にどうするかについて話し合った。

■後期第4回(2017年2月)

1年の活動を振り返り、今後の改善点について考えた。対応記録のつけ方や、いまだ未整理な過去のマテリアルの存在が課題としてあがった。また、活動報告会に向けた打ち合わせを行った。

4. 全体総括

今年度はツール整理をはじめとして多くの新しい試みが実現し、英会話 SLA の活動の「型」が明確になってきた年であった。ベテラン層だけでなく中堅・新規のメンバーからも、活動の仕方についての積極的な提言が次々と出てきているのは心強い。一方で、英会話の SLA の間でも、英語学習について理想とするあり方が様々であることが浮き彫りになる機会も度々あった。お互いの違いを尊重しつつ、英語部会としての共通のカラーをどこに見出していくのかは、今後の課題と言えよう。

5 ライティング部会

(1) 基本情報

<表 3-5-1. 2016 年度ライティング部会構成>

人数：前期 5 名、後期 5 名
 前年度からの継続メンバー：5 名
 部会長：博士課程後期 3 年、2015 年 1 月採用

<表 3-5-2. ライティング部会 2016 年度開催ミーティング一覧>

	日付	曜日	時間	参加人数	全人数	出席率
定例1	2016/4/11	月	11:00~13:00	4	5	80.0%
研修	2016/4/21	木	18:00~19:00	4	5	80.0%
定例2	2016/5/12	木	18:00~19:30	4	5	80.0%
研修	2016/5/23	月	12:00~13:00	4	5	80.0%
研修	2016/5/26	木	18:00~19:00	4	5	80.0%
定例3	2016/6/2	木	18:00~19:30	5	5	100.0%
研修	2016/6/9	木	18:00~19:00	5	5	100.0%
研修	2016/6/16	木	18:10~19:40	4	5	80.0%
定例4	2016/7/14	木	18:00~19:30	5	5	100.0%
定例5	2016/8/9	火	18:30~19:30	5	5	100.0%
定例6	2016/10/5	水	18:10~19:40	4	5	80.0%
定例7	2016/11/7	月	18:10~20:10	5	5	100.0%
定例8	2016/12/5	月	18:10~19:40	4	5	80.0%
定例9	2017/1/23	月	18:15~19:45	5	5	100.0%
定例10	2017/2/8	水	18:10~20:10	4	5	80.0%



(2) SLAによる活動報告

ライティング部会活動報告

教育学研究科 博士課程後期3年
SLAライティング担当(2017年度ライティング部会 部会長) 寺川 直樹

1. 2016年度ライティング部会の概要

今年度前期は、博士後期課程3名および博士前期課程2名、後期は博士後期課程2名および博士前期課程3名の体制(うち前期・後期ともに新規メンバーは博士前期課程1名ずつ)で活動を行ってきた。今年度は、昨年度から徐々に軌道に乗せることができてきた部会活動をさらに多面的に展開し、新たな試みに取り組んできた。以下、その詳細について報告する。

2. 今年度前期の主な活動: アカデミックスキルセミナーの実施

昨年度からセミナーを実施しているが、今年度は「ライティングスキル」に留まらず、「アカデミックスキル」(ex. 文献検索、ノート・テイキング、プレゼンテーションなど)にまで射程を広げたセミナーを実施した。今年度前期は全9回実施し、準備の流れとしては、実施2週間前に定例ミーティング、あるいはセミナー準備用のミーティング(通称「夜会」)内で構想発表を行い、実施1週間前にもプレ発表を行うことで、他のSLAの意見も取り入れながら準備を進め、本番に臨んだ。

実施回数の増加や内容の多様化に伴い、参加者は微増したが、中間試験および大学生活に「慣れ」始める6月頃は参加者が減少するなど、開催時期については検討を要する。また、今年度はセミナー実施の準備に多くの時間を割いてしまい、SLAのスキルアップを目的とした内部研修等はあまり実施できなかったことも反省事項として挙げられる。

3. 今年度後期の主な活動: 留学生支援&「対応の型」づくり

直近1年間の経験をふまえ、今年度後期はセミナーの実施を見送り、留学生向けライティング支援に関する準備作業と、「対応の型」づくりに着手した。

まず、留学生向けライティング支援に取り組み始めた理由としては、留学生の場合、ライティング(日本語)に関する課題意識が明白であるため、学習支援の対象を留学生にまで拡大することで、さらなる利用者獲得を目指すことが挙げられる。その具体的な活動としては、10月は過去の留学生対応の事例分析、および佐渡島紗織・太田裕子編『文章チュータリングの理念と実践 早稲田大学ライティングセンターでの取り組み』(ひつじ書房、2013年)の読み合わせなどを通じて、留学生向けライティング支援において注意すべき点や今後どのような準備が必要かということについて各自検討し、11月の部会で理解をさらに深めていった。こうした土台づくりを経て、11月は留学生が抱える悩みを実際に調査するべく、アンケートの作成に取り組み、12月に完成後、各自アンケートを配布・回収するとともに、ヒアリングも併せて実施した。それと並行して、11月からは留学生対応時に使用する文法教材についても作成し、現在のところ、自動詞・他動詞の区別や、「は」と「が」および「に」と「で」の使い分けといった助詞の使い分けに関する資料を作成した。今後もさらに資料作成を継続していく予定である。

また、11月からは本格的に「対応の型」づくりにも取り組んだ。答えが「一つ」ではなく、様々な観点からアドバイスを与えることができるライティング対応においては、学生へのはたらきかけ方がSLA毎に異なることから、新規SLAに対しては「対応の型」を学んでもらうとともに、継続SLAに対してはアプローチの「引き出し」を増やしてもらうことを目的として、この活動を開始した。まず11月は、理系部会や英語部会で実施されているピアレビューシートのライティング版を作成する作業を通じて、「ライティング対応における型」について検討していった。これをふまえて、12月以降は2つの方向から、さらに「対応の型」を検討していった。一つ目の方向は、過去の対応

記録の分析を通じて、各 SLA の対応方法を集約し、それを「対応の型」へと収斂していくものである。この一つ目の方向では、過去の対応記録をもとに分析を行ったのだが、その対応記録においては対応のダイジェストのみが記載されているため、実際の対応方法が不明瞭な箇所、あるいは対応記録に全く反映されていない対応方法があると予想される。そこで、もう一つの方向として、卒業 SLA を中心に、新人研修用の資料を作成する一環として、個々人の経験をもとに、特に対応記録に反映されていない点に着目しながら、「対応の型」について検討していった。こうした「対応の型」の作成についても今後作業を継続し、それと併せて、その後の「対応の型」の更新を見据えて、対応記録のダイジェストを記入する場合には、対応のポイントなど一部だけでも「対話形式」で記載していくことを検討している。

4. 定例ミーティングでの活動

定例ミーティングでは、主に前掲の活動に関してミーティングを重ねてきた。以下、その他の活動にもふれながら、その詳細について言及する。

①前期第1回（4月）

主に前期の活動計画について確認した。具体的には、セミナー実施計画を中心に、その他にも「対応の型」づくりや広報誌作成についても話し合いが行われた。

②前期第2回（5月）

第1・第2回セミナーを振り返るとともに、第3回セミナーのプレ発表を行なった。

③前期第3回（6月）

第3・第4回セミナーの振り返りを行なった。また、セミナーの内容を SLA のブログに掲載することを決めた。なお、6月はセミナーが多いことから、定例ミーティングに加えて毎週「夜会」を実施し、構想発表とプレ発表をその都度行なった。

④前期第4回（7月）

第6～第9回のセミナーについて振り返りを行い、事例検討も行った。

⑤前期第5回（8月）

前期の活動を総括し、合宿の発表内容および後期の方針について検討した。

⑥後期第1回（10月）

前期利用状況の分析結果を共有するとともに、後期の活動計画として留学生向けライティング支援と「対応の型」づくり（事例分析）という二本柱を立てることを確認した。

⑦後期第2回（11月）

各シフトで先月取り組んだ事例・文献の分析について報告し、今後の活動方針について話し合った。

⑧後期第3回（12月）

各シフトで先月取り組んだ作業について報告し、各作業の今後の方向性について検討した。

⑨後期第4回（1月）

各シフトで先月取り組んだ作業について報告し、各作業の今後の方向性について検討した。また、アンケートおよびヒアリングの結果についても情報共有を行なった。

⑩後期第5回（2月）

今年度の部会活動を総括し、次年度に向けて、効率的な分業体制の構築、対話形式を組み込んだ対応記録の作成、そして企画 SLA と連携したセミナー運営などの方針を定めた。

5. 総括

今年度の活動を総括すると、昨年以上に「部会」として、つまり部会メンバーが互いに協力して「一つのもの」を作り上げていく地盤が固まってきたと言える。それゆえに、分業や情報共有の難しさを一人ひとりが自覚してきているのだが、次年度以降、その時々状況に応じて、ライティング部会の新たな地平を積極的に切り拓いてくれることを後輩諸氏に期待し、結びに代えたい。

6 企画部会

(1) 基本情報

①企画部会メンバー構成 後期セメスター全6名

②企画部会ミーティング開催日時

<表 3-7-1. 企画部会 2016 年度「企画担当 SLA 全体ミーティング」開催日>

	日付	曜日	時間	参加人数	全人数	出席率
定例1	11月8日	火	10:30-12:00	6	6	100%
定例2	11月10日	木	18:00-19:30	6	6	100%
定例3	11月16日	水	18:00-19:30	6	6	100%
定例4	11月29日	火	19:30-20:30	6	6	100%
定例5	12月6日	火	18:15-19:45	6	6	100%
定例6	1月11日	水	17:00-18:30	6	6	100%
定例7	2月2日	木	18:30-19:30	6	6	100%
定例8	2月14日	火	16:30-18:30	6	6	100%

(2) SLAによる企画実施報告

企画1：奏でる“楽”問—学びが楽しくなる音楽の話—

1) 企画の目的：学部1，2年生の多くが専門の科目を学びたいと思い入学する。だが東北大学では初学者のうち一般教養科目を中心に勉強し、広く教養を高める時間として定められている。当時は教養科目の必要性がわからず熱量を持って取り組んでいなかったものの、上級学年になって専門性が高まるにつれ、その大切さに多くの学生がふと気付くのである。その気づきは感覚的なものであり、まだ研究をしたことがない1，2年生に教養科目の重要性を伝えるのは至難の技である。それならば、日常生活と教養科目の結びつきを伝えることで、教養としての学問に興味を持って取り組んでもらおうと考えたのが、本イベントの企画の経緯である。学習支援センターのSLAとして、学びの中の「興味を持つ部分」の学習支援を行う。

この企画の目的は以下の3つである。

- ① 学習初学者の学部1，2年生に対し、学問の面白さを伝える
- ② 参加学生の興味の幅を広げ、学問を主体的に学ぶ姿勢を生み出す
- ③ 学生プレゼンターの伝える力を向上させ、専門領域への理解をより深める

2) 開催日時：1日目 2017年2月6日(月) 17:30-19:30

2日目 2017年2月13日(月) 13:00-15:00

3) チームメンバー：笹川一平、渡辺大貴、見上達哉、榎田惇也

4) 企画の内容：「経営学」「宗教学」「数学」「物理」「心理学」「手話」の6つの学問に関する学生プレゼンターが、『音楽』という切り口から学問を紹介する。東北大学での学びをもっと楽しくする、学びが楽しくなる音楽の話。

5) プレゼンター：1日目 笹川一平(経済 B4)、渡辺大貴(文 M1)、中島啓貴(理 M2)、
2日目 澁川友菜(理 M1)、手島啓文(教 M2)、林明澄(医 B2)

6) 成果と課題：1日目は17名(傍聴していたSLAを除く)の学生が参加した。参加者の満足度は高

かった。前半プログラムにおいて授業のような雰囲気とは異なる、もっとカジュアルな雰囲気を作ること、また目標人数の達成に向けた集客などが課題として浮かびあがった。なお、イベントの来場者数 17 名という数字は、これまで SLA が行っていた学習支援イベントの中では最多の集客数であった。

- 7) SLA による感想と自己評価: 企画 SLA というコンセプト自体が初の試みであったにもかかわらず、試行錯誤しながらイベントを完成させることができたことは大きな達成感を感じる。/ SLA 企画担当として初めての大きなイベントであったが、計画通りイベントを進行させることができたことに安堵している。/ 実際に企画を進行してみて大変だったのは、ゼロから物事を進めるといことと、やはり計画通りにはいかず、細かな変更や修正の必要に迫られるという点だった。/ 予想に反して後半のコンテンツ (※プレゼンターへの質問&ディスカッション) の満足度が高く、議論好きな東北大生の心に刺さったのだなと思った。ただし、集客目標としていた数値を達成できなかったことやイベント序盤の雰囲気の硬さなど課題も多く見つかった。

企画 2 : 学びを深める音楽本特集 (SLA×図書館コラボ企画)

- 1) 企画の目的・趣旨: 前述の「奏でる“楽”問」との連動企画として実施。イベント型の学習支援は単発で終わってしまい、その場に参加しない学生にとっての波及効果は限定的である点が課題であるが、連動した企画として展示型の学習支援を実施することで、相乗効果を狙う。
- 2) 開催日時: 2017年1月27日(金)～2月28日(火)※2月6日(月)コンテンツ追加
- 3) チームメンバー: 笹川、渡辺、見上、槇田
- 4) 企画の内容: 「アカデミアトーク: 奏でる楽問」の PR 及びイベントに連動させた学習促進を目的に、東北大学附属図書館のグローバル学習室にて特別展示を行った。はじめに「音楽」に関する様々な本を企画 SLA がピックアップし、ポップと共に紹介する「書籍ブース」を開設した。ブースではポスターやデジタルサイネージなどを用いてイベントの宣伝も行った。その後、展示本への理解を深めることを目的とした CD を聞ける「視聴ブース」、特別展示に立ち寄るきっかけを作ることを目的に学生がシールで投票に参加する「イケメン音楽家総選挙」「戦うアイドル頂上決戦」、SNS 等での話題作りを目的とした「音楽家顔はめパネル」をコンテンツとして追加した。
- 5) 共催: 東北大学附属図書館
- 6) 成果と課題: 図書館とのコラボレーションによる展示型の企画だったことにより、新しいタイプの学習支援のあり方を開発することができた。
- 7) SLA による感想と自己評価: 図書館とのコラボについては、佐藤先生の提案で途中から決まったことであったが、実施して本当に良かったと思う。その理由は第一に PR 効果が絶大であること。SLA が発信するだけではどうしてもリーチできる人数に限りがある。しかし外部の組織と提携することで、SLA の守備範囲に加えて、提携先の組織の利用学生に対してもリーチすることができる。特にコラボイベントをすることにより外部組織が Twitter など情報発信してくれることが大きいだろう。また、今回はコラボ先が図書館、展示期間がテスト期間と重なっており、特に利用者が多い時期に展示ができたので、広告効果は大変大きかっただろう。第二に相乗効果によりイベントがより魅力的になったことだ。「奏でる楽問」はプレゼンターが学問について参加学生の興味の幅を広げるといものだ。興味の幅を広げて終わり、ではなくそのあとのフォローアップとして推奨図書や展示コーナーの紹介をして図書館へと誘導するという導線を作ることでイベント自体の効果が増したと思う。企画 SLA のようなまだまだ規模が小さく生まれたばかりの組織は、今回のように、外部の組織や外部のリソースを活用することで、自分たちだけではできないより大きな企画を作ることができるのではないかと思う。

企画3：やさしい日本語—伝わりやすい日本語とは？—

1) 企画の目的・趣旨：日本人が日常的に使う日本語と留学生が教科書で勉強する日本語には大きな違いがあり、それがコミュニケーションの障壁となる場合がある。本企画は参加者に「やさしい日本語」という考えを紹介し、円滑なコミュニケーションをとるためにはどうすればよいか、留学生にとってどのような表現が難しいと感じるのかについて留学生と日本人両方の観点から考え、意見交換をしてもらうことを目的とする。また、企画を通して参加者の知り合いを増やし、「留学生にとって日本人の知り合いが少ない」（東北大学留学生生活調査（2012）より）という問題の改善につなげる。

2) 開催日時：2017年1月18日（水）18:00-19:00

3) チームメンバー：鈴木あすみ、張紫薇

4) 企画の内容：留学生やチューター、学部1・2年生を主な対象として、伝わりやすい日本語とはどのようなものか考えてもらった。企画の趣旨説明→ゲーム形式のアイスブレイク→プレゼンターから「やさしい日本語」について説明→グループワーク・ディスカッション→閉会という流れで進行した。

5) プレゼンター：田村彩香さん（文学研究科 言語学研究室 博士2年）

6) 成果と課題：留学生・教員の呼び込みに成功したが、日本人学生の集客が不十分だった。アンケートが十分に回収できなかった。

7) SLAによる感想と自己評価：初めての企画運営だったが、なんとか最後までやり遂げることができてほっとした。改善しなければならない点も多く見つかったが、これからの企画にしっかり活かしたいと思う。今回はプレゼンターの田村さんが綿密な教案を作ってくださったため進行がとてもスムーズだった。今後の企画でもタイムテーブル作りはしっかり行いたい。

企画4：カタカナノチカラ—目指せ！カタカナ語マスター！！

1) 企画の目的・趣旨：日本語の中には様々なカタカナ語があり、グローバル化や情報化が進む中で語数、使用頻度ともに増加する傾向にある。カタカナ語には外国語由来のものが多いため、日本人の中にはカタカナ語は海外の人にも分かりやすいと思っている人がいる。しかし、実際には日本語学習者にとってカタカナ語は非常に難しく、学習するのが困難だと感じている人が多い。このような捉え方の相違は留学生と日本人学生のコミュニケーションの妨げになる可能性がある。本企画は留学生・日本人双方の視点から「カタカナ語」を見つめ、なぜカタカナ語は難しいと感じるのか、カタカナ語を使わずに表現する方法はあるか、カタカナ語を使うメリットは何かを考えることを目的としている。

2) 開催日時：2017年2月7日（火）16:30-18:00

3) チームメンバー：鈴木あすみ、張紫薇

4) 企画の内容：「やさしい日本語」と同様に留学生やチューター、学部1・2年生を対象とし、留学生が難しく感じることの多い「カタカナ語」をテーマとした。プレゼンターを2人招き、企画の趣旨説明→謝さん（やさしくないカタカナ）→桑原さん（カタカナから生まれる意味）→閉会という流れで進行した。プレゼンター1人当たりの持ち時間は40分程度で、クイズ等を交えながら20分程度のプレゼンをしたのち、グループに分かれてディスカッションを行った。

5) プレゼンター：謝韜さん（文学研究科 言語学研究室 研究生）

桑原佑司さん（文学研究科 言語学研究室 4年）

6) 成果と課題：タイムテーブル通りの運営に成功、SLA以外の参加者0人

7) SLAによる感想と自己評価：SLA以外の参加者が0人だったのはショックが大きかった。せっかく来ていただいたプレゼンターに申し訳ないということもあるが、なにより「あんなに楽しかったのにその魅力を外部の人に分かってもらえなかった」ということに悔しさを感じる。

4. SLA の採用と育成・研修実績報告

|| Summary ||

2016年度の新規採用は、前期11名、後期12名であった。正式応募者における採用率は68%である。2016年度後期には企画担当SLAを新たに募集した。企画担当SLAに対する面接・試験の在り方を新たに構築した。

SLAの育成・研修活動については、2016年度全体を通して、「学習支援者としての専門性向上」と「実践知・経験知の継承と共有」が2大テーマとなった。以下の各活動においてもこのテーマが通底している。

■活動説明会・活動報告会

説明会（前期・後期）では、上述の2大テーマの理解・共通認識を図ることを主目的とする会の構成となった。活動報告会では、例年の部会からの報告に加え、今年度の新たな取り組みである「ピアレビュー」に積極的に取り組んだシフトからの報告を取り入れたほか、卒業生による「卒業プレゼン」を取り入れたことが新たな取り組みである。

■研修合宿

本年度は16名の参加を得て実施された（参加率33%）。上述の2大テーマと同様、研修合宿の総合テーマも「継承+専門性→SLA自己成長力の向上」とした。専門性向上の取り組みとして、大学における学習支援について知識的理解を図る講義を取り入れたこと、継承促進の具体策として、ワークショップで「継承キーワード」の作成を行ったことが本年度合宿の特徴である。

■「シニアSLA」の開発と活動

昨年度の試行を経て、「SLA育成」を第一義的役割とする方向性が定まった。具体的な活動としては「ピアレビューシート」の開発と運用および「研修教材」の作成が特徴的であった。本年度は、シニアSLAの対象枠の拡大を図り、より実態に即した運営となるよう改善を行った。

■SLA育成・研修体制の整備

「専門性向上」「継承促進」を進める前提として、SLA成長・役割モデルを提示し、共有の観点(Dripラベル)を設定した。そして、2大テーマの具体策を各種活動で講じていった。その他、昨年度より取り組んでいる「リフレクション」促進ツールの開発についても引き続き改善を図った。

■共通研修

SLAの担当科目を超えた学習支援者スキルの向上のため、6つのプログラムを開催した。共通研修の位置づけや参加形態の整理も行った。

■他大学合同研修の実施

同志社大学 学習支援・教育開発センター良心館ラーニングコモンズとの合同研修を実施した。SLAからは5名の学生（担当：物理、英会話、企画）が参加した。

■振り返りシートおよび個別ヒアリング

従来通り、自身のSLAとしての活動を振り返る「活動振り返りシート」作成を学期末に実施した。併せて、当該学期の新規メンバーには「個別ヒアリング」を実施した。

1 SLA 募集・採用活動

センターでは、一般公募の形で SLA の募集を行っている。SLA からの推薦・紹介での応募もあるが、採用活動の流れは一律である。これまでは、随時募集も比較的発生していたが、近年はセメスター末（前期 7~8 月、後期 1~2 月）を基本の募集・採用期間としてしている。

本年度は、前期末の募集は一斉公募ではなく、補充が必要な担当について随時募集を行った。後期末は一斉募集を実施した。応募者数・採用者数等の数値は表 4-1-1 の通りである。この他、10 月末に臨時で新規創設した「企画担当 SLA」の募集を行った。ここでは 6 名の学生を新規雇用した。企画担当 SLA の採用面接においては、事前課題を課してプレゼンテーションを行ってもらった形態とした。

採用活動に関しては、英語の応募過多、ライティング・化学の応募過小が現状の課題である。英会話の応募過多の状況については、主に留学生からの応募が多い実態による。留学生からの応募自体は歓迎されるものであるが、SLA 活動理念と学生の志望動機のズレが発生しやすいこと、業務に支障がない程度の日本語力を現状では求められることなどから、採用には至らないケースも増加している。こうした状況やその他の課題を踏まえ、従来、1 人 1 人に対し事前活動説明会を実施し、別日に面接・試験を実施していた流れを見直す必要性が生じた。そこで、事前説明会や試験の一部を一斉ないし複数人同時実施をするなどの改善を行ったが、一方で、日程調整の困難さが生じる結果ともなった。より円滑かつ適切な採用活動の流れについて、引き続き見直す必要がある。

<表 4-1-1. 2016 年度 SLA 応募者数・採用者数等>

	応募	説明会参加	正式応募	合格	採用
前期末 (8 月頃)	3 名	(個別実施)	3 名	3 名	3 名
後期末 (2 月頃)	24 名	23 名	19 名	15 名※	15 名

※条件付き合格含む

<表 4-1-2. 2016 年度 SLA 応募者・採用者における担当科目割合>

	物理		数学		化学		英語		ライティング		企画	
	正式 応募	採用	正式 応募	採用	正式 応募	採用	正式 応募	採用	正式 応募	採用	正式 応募	採用
前期末 (8 月頃)	1 名	1 名	0 名	0 名	0 名	0 名	2 名	2 名	0 名	0 名		
後期末 (2 月頃)	5 名	3 名	4 名	2 名	1 名	1 名	8 名	4 名	2 名	1 名	3 名	4 名

2 活動説明会・活動報告会

センターでは、セメスターの開始時と終了時に、全メンバー（授業 SLA を除く）を対象として、「活動説明会・活動報告会」を開催している。「活動説明会」は今期の目標を共有することを主目的に、「活動報告会」は今期の活動を振り返り次期活動に繋げることを主目的に行うものである。ここでは、2016 年度の「前期活動説明会」「後期活動説明会」「後期活動報告会」についての概要を報告する。なお、「前期活動報告会」は「研修合宿」1 日目に設けているため、次節にて報告を行う。

(1) 前期活動説明会

2016 年度の前期活動説明会は、4 月 5 日 (木) 16:30～18:00 に開催された。これとあわせて、本年度の新規メンバーに対し「新規 SLA 向け活動説明会」も別途開催 (15:30～16:20) した。「前期活動説明会」は、対象学生 47 名のうち 42 名が出席。「新規 SLA 向け活動説明会」には、対象学生 9 名全員が出席し、『SLA ハンドブック』をもとに SLA 活動の基本事項の説明をした。

前期活動説明会では、図 4-2-1 の次第の通り、1) センター体制紹介で佐藤智子准教授の着任、シニア SLA4 名の紹介、新規メンバー10 名の紹介をし、2) ハンドブック改訂事項確認で『SLA ハンドブック 2016』の前年度からの変更事項を確認した。5) グループワークでは、今期の目標を各自立て、それをグループ内でシェアする時間を設けた。

説明会のメインは、4) 今期の活動構想・目標の伝達と共有である。今期は、大目標として 3 点を提示した。目標 1 は、2015 年度後期セメスター中に開発・試行した研修ツールを引き続きブラッシュアップさせていくこと、目標 2 は、SLA の経験知の継承を具体的な形 (モノ) にしていくこと、目標 3 は、学習支援活動の拡大を図ること、である。

目標 1 は、SLA 組織内における個・集団の「リフレクション」作業をどのように建設的に行っていくかという課題を意味している。特に、前年度課題となったビデオリフレクションの定着を具体的な事項として掲げた。

目標 2 は、記録用紙や部会ミーティングの在り方の改善等を広く含みつつ、この時点では特に、学生対応時の「コンサルティング」技術のノウハウの共有を目標とした。

目標 3 は、企画発信型学習支援の再充実の事を意味しており、この段階では、a)ライティングセミナーの拡大、b)先輩と出会う機会をつくるイベント、c)自主ゼミ支援活性化のためのイベントの 3 つを提示した。a と c は実現に至った。

1. センター体制紹介
2. ハンドブック改訂事項確認
3. 事務連絡
4. 今期の活動構想・目標
5. プチグループワーク
6. 写真撮影
7. 部会別ミーティング日程調整

<図 4-2-1. 2016 年度前期活動説明会次第>

大きな目標

1. 2015年度後期のチャレンジ事項をブラッシュアップし定着させること
 - ・ブリーフミーティング ・スタッフブログ
 - ・サッカーノート ・ビデオリフレクション
 - ・コンサル事項の共有 ・模擬対応 ・共通研修
 ⇒個および集団でのリフレクションの充実
2. S L A 経験知のより具体的な形での共有
 - ・先輩 S L A の経験知を後輩 S L A へ
 - ・ S L A 個々の経験知を全体へ
3. 学習支援の対象・幅の見直し、拡大を図る

<図 4-2-2. 2016 年度目標・活動スライド>

<図 4-2-3. 「コンサルティング」説明>

(2) 後期活動説明会

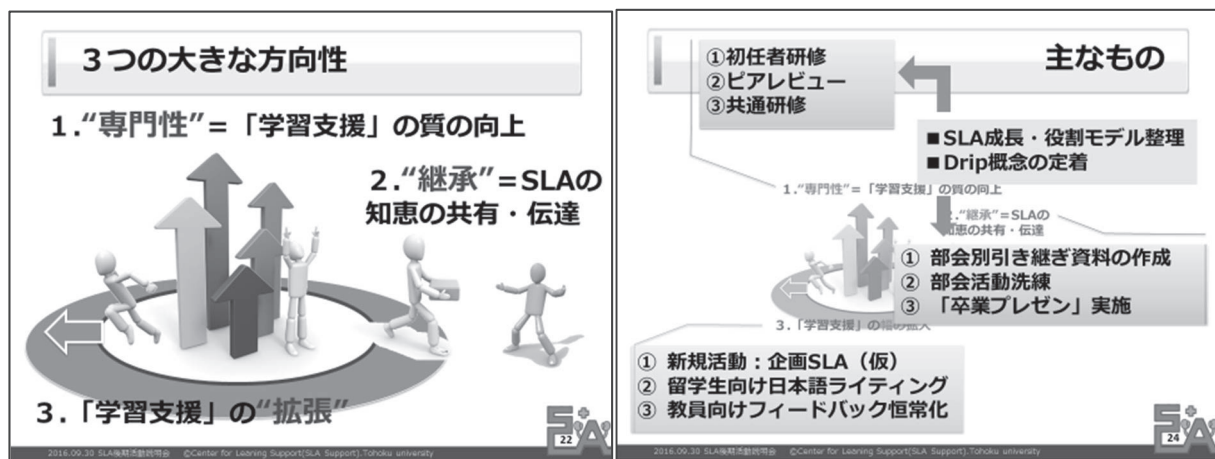
後期活動説明会は、9月30日(金)16:00~18:00に開催された。対象学生47名のうち34名が出席した。

後期の説明会は、研修合宿での議論を経て、今期以降の方向性・目標を再度共有することに重点が置かれた。またこれを具現化するための具体的な活動についても説明を行った。

目標については、【「専門性」×「継承」=SLA内自己成長力の強化】と掲げ、方向性としては(前期と同様)①専門性向上、②継承強化、③学習支援の拡張とし、これを図式化して再提示した。具体的な活動については、図4-2-5のスライド2枚目に掲げた各項目について説明を行った。

1. 新メンバー紹介
2. 研修合宿報告
3. 今期以降の方向性・目標
4. 写真撮影
5. 部会別ミーティング日程調整

<図4-2-4. 2016年度後期活動説明会次第>



<図4-2-5. 後期の方向性と活動スライド>



<前期活動説明会 集合写真>



<後期活動説明会 集合写真>

(3) 後期（年度末）活動報告会

後期（年度末）活動報告会は2017年2月27日（月）に開催された。第一部 活動報告会（16:00～18:00）ののち、第二部として卒業生送別会（18:30～21:30）を実施した。対象SLA51名のうち第一部に27名、第二部に25名が参加した。

第一部活動報告会の次第は図4-2-6の通りである。1) SLAからの活動報告は、物理部会、数学部会、化学部会、英語部会、ライティング部会、企画部会の報告と、特徴的な活動を行った後期水曜日午後シフトメンバーから報告をもらった。水曜シフトメンバーからの報告では、a)ピアレビューの実施方法と利点の提案、b)複数人対応の際のノウハウの共有、c) Super Heavy User への対応についての検討課題の提示がなされた。本報告は、シフト内の交流と議論が活発に交わされた事例を全体に還元する機会になると共に、シフト内に閉じがちな細かなノウハウを顕在化させる有意義な報告となった。

3) 卒業プレゼンは、今年度新たに取り入れたプログラムである。今期で卒業するメンバーに対し3～5分程度のプレゼンテーショ

ンを依頼した（任意ではあったが結果として参加者全員が行った）。依頼内容は、「後輩に引き継ぎたいワード」を3つ以内で提示することである。従来、卒業生には『年次活動報告書』への論考執筆を依頼してきたが、こうした形で、彼らの言葉で直接思いを伝える場は貴重であった。また、これまでも卒業生には送別会の場でスピーチをもらってきたが、こちらはどちらかというと、個人的なSLA歴や感謝の気持ちを伝えてくれる場となっていた。しかし、「卒業プレゼン」は、個々のSLAが蓄積してきた「学習支援者としての知」を改めて言語化し共有するための機会となり、「継承」の一つの具現化策として有効であった。

1. SLAからの活動報告
2. センターからの活動総括=速報版=
3. 卒業プレゼン
4. 活動証明書授与
5. 副センター長挨拶
6. 写真撮影

<図4-2-6. 2016年度後期活動報告会次第>

複数人対応

★理解度に差がある複数人を対応する場合

- ・無意識に対応すると、1番よくしゃべる学生（≠一番理解している学生）に合わせがち
- ・2人組で対応し、サブのSLAが学生を見回ると全体に目が行き届きやすい。（ついでにピアレビューができる）

★あり得る対応パターンは3パターン

- ・**理解度の高い学生にフォーカス**
1番できる学生に合わせて対応し、終了後にグループ内での教え合いを促す。
- ・**理解度の低い学生にフォーカス**
理解度の低い学生に合わせて対応する。できる学生には簡単なヒントだけを与えて自分でやってもらう
- ・**全体にフォーカス**
全体に質問を振ることで、全員の足並みを揃える

<図4-2-7. 水曜午後シフトスライドの一部>



<後期活動報告会 集合写真>

3 研修合宿

研修合宿は、2011年度より開催している行事であり、本年度で6回目の開催となる。SLAには自身の成長の契機としてこの合宿を挙げるメンバーも多く、合宿はSLAの研修の場として重要な役割を担っている。研修合宿の目的は、SLAとしての資質・能力を向上させることである。具体的には、①前期セメスターの活動の振り返りを通して今後の活動の改善向上に資すること、②組織的な連携が必要なSLA業務において、SLAのチーム力を高めること、③大学や教育、学生への支援活動に関する知識やそれらの今日的課題についての知見・知識を高めることを目的に掲げている。

(1) 2016年度研修合宿概要

2016年度合宿の総合テーマは、「継承+専門性→SLA自己成長力の向上」とした。SLAは活動から6年目を迎え様々な知見が蓄積されているものの、人の入れ替わりが毎年度ある中で、いかにその知見を継承していくかが運営上逃れられない課題としてある。一方、組織としても開発段階を終えて一定の水準を求められる段階になっており、個人個人の成長と組織としての成長の両方を図っていくことがより一層必要となってきた。センターがこうした状況にあること自体の課題意識をSLAと共有する意図も込めて、今回の総合テーマを設定した。

合宿全体の構成は、①前期活動総括会(+座談会)、②講義、③ワークショップ、④合宿全体の振り返りという枠組みに変化はなかったが、本年度着任した佐藤副センター長の力を借り、「学習支援者としての専門性」を知識的側面でも高める事を盛り込んだのが本年度の特徴である。これを軸に、前期総括会やワークショップにおいても、知的作業(“情報”を“知見”化する作業)を従来よりも強く意識して企画を立てていった。

2016年度研修合宿の開催要項は下表のとおりである。

<表 4-3-1. 2016年度研修合宿基本情報>

開催日	2016年9月6日(火)～9月8日(木)
場所	蔵王温泉 タカミヤビレッジ ホテル樹林
内容	<p>■ 1日目</p> <p>10:30～11:30 オリエンテーション (於大学)</p> <p>13:30～17:00 前期活動総括会</p> <p>17:00～18:30 座談会</p> <p>■ 2日目</p> <p>09:30～12:30 講義</p> <p>14:00～18:00 グループワーク作業時間</p> <p>■ 3日目</p> <p>09:00～12:15 グループワーク成果発表+合宿リフレクション</p>
参加者	<p>■ センター員</p> <p>教員2名、事務員1名</p> <p>■ SLA学生</p> <p>16名(うち4名は途中参加 or 帰宅) ※研修対象学生48名中(33.3%)</p> <p><参加SL16名の構成></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学年: D2…1名、D1…3名、M2…6名、M1…4名、4年…1名、3年…1名 ・ 活動歴: 半年未満…4名、半年～1年…0名、1～2年…7名、2～5年…5名 ・ 担当: 物理…5名、数学…5名、化学…1名、英語…3名、ライティング…2名 ・ 過去の合宿経験: 2回…3名、1回…6名、初参加…7名

(2) 各プログラム詳細

①オリエンテーション

オリエンテーションでは、アイスブレイクとして参加メンバーの自己紹介を行った。始めに、「自分の“意外なところ”」をお題に含む自己紹介を全体で行った後、あまり話をしたことがない人同士でグループになり、自身の専門・研究内容を「わかりやすく説明する」時間を設けた。

②前期活動総括会

前期活動総括会は、センター員による報告とSLA各部会による報告から構成されている。センター員からは、センターの活動全体の総覧と、今学期中特徴的だった活動として、①アカデミックスキルセミナーと自主ゼミイベントの実施、②GRAPES講習会(共通研修)の実施、③共同ビデオリフレクションの原型、④暫定版ピアレビューシートの完成の4点について報告した。これは同時に、本合宿が目標に掲げている「継承+専門性」の文脈理解を促す意味合いもあった。



各部会からの報告は、a)部会メンバー紹介、b)質問・利用傾向分析、c)部会活動紹介の3要素で構成された。特に「b」を全部会共通で盛り込んだことが、本年度の特徴である。昨年度はやや「メンバー紹介」に重点を置くプレゼンテーションが多かったことが課題であったため、事前準備段階で「他部会に向けて発信できる各部会の知見」を強調し、「SLA自身が各担当の“専門家”として、研修合宿に臨む」という姿勢を重視した。なお、bの質問・利用傾向分析・総括作業は、毎semester恒常化させる活動として、研修合宿とは別の動きとして取り入れた。その作業で得られた情報の一部を速報的に報告してもらったのが研修合宿でのプレゼンである。

各部会報告の中では、数学部会の質問傾向分析の中で、数学の「分からなさ」の尺度として示された分析結果が印象深いものとなり、その後の合宿の中でも時折この話題に触れることがあった。

②座談会

座談会は、センター員がSLAにも意見を聞きたい運営課題をテーマとして、問題提起を行った。実際は時間があまり取れずに終わったが、SLAにとって非常に身近な話題であったため論点として強く印象に残った様子だった。

テーマは、「部会をどうするか？」である。具体的には、部会は本当に必要なのか？現状の在り方でよいのか？という部会の根本的な在り方を問うものであった。これは、前期semesterまでシニアSLAとして活動し、合宿を前に卒業したSLAメンバーが投げかけてくれた問いでもある。そのため、当日は、そのSLAに対し行ったインタビューの様子の動画を視聴する形で課題点の共有を図った。主要論点は、担当分野の専門性の向上と担当分野を超えた共通性の育成という2つの考え方を、限られた時間と労力の中で、どのように優先順位をつけ運営していくかというものであった。

数学の「分からなさ」の尺度

計算

- ・計算の方法が分からない。
- ・計算結果が答えと合わない。

図形

- ・(数式の背後にある)イメージ、感覚が掴めない。

論理

- ・教科書が理解できない。
- ・証明(の細部)が分からない。

この3つを組み合わせると、「**統合的理解**」を得る！！

学部状況や相手のニーズによって、どの程度の理解を求めればよいかが変わってくる。

<図 4-3-1. 数学部会報告スライドの一部>

③講義

講義題目を「大学における学習支援とは」とし、ワークを織り交ぜる形で行われた（担当：佐藤副センター長）。講義の中では、学習機会の類型、ペタゴジーとアンドラゴジーの違い、成人教育、学習の構成主義的理解、変容的学習、最近接発達領域、正統的周辺参加、状況に埋め込まれた学修、CSSC 学習といった諸概念が紹介された。改めて、大学における学習とは何か、大学生に対して学習支援はなぜ必要なのか、大学生に対して必要な学習支援とはどのようなものか、そしてそれを SLA としてはどのように提供できるのか、という問いを検討していく講義となった。

④ワークショップ

ワークショップテーマは、「これから学習支援を行う人（後輩 SLA）に引き継ぎたいキーワード集を 2016 年度合宿版として創る」というものであった。趣旨説明の中では、『学習支援事典』を創るイメージとして伝え、何気なく使っている「言葉」の定義を考えることで、SLA の共通基盤を創る作業であると説明した。

ワークショップのグループメンバーは SLA 経験歴の長さで指定し、新規・若手グループ、若手・中堅グループ、中堅・ベテラングループ、ベテラングループの 4 グループ（各 3~4 名）となった。それぞれグループ名を設定してもらい、順に、「フレッシュャーズ」「チームのぶりん」「冷やラー」「SMAP」となった。具体的な工程は 2 つのセクションに分けて実施した。第 1 セクションは、「学習支援＝」に続く“式”を考案するという活動。第 2 セクションは、後輩に引き継ぎたいキーワードを 5 つ選び、その定義（説明文）を作成するという活動である。

グループワークの成果報告は次の日の午前中に設定しており、報告はパワーポイントで報告する形態を採用した。報告内容の構成は、1)「学習支援」式の紹介と解説、2)グループで挙げたすべてのキーワード一覧、3)セレクトした 5 つのキーワード一覧、4)5 つのキーワードの解説という構成を指定して作成してもらった。ワークショップの成果は、付録 B に掲載している。なお、「学習支援」の式の成果は、次年度配布する『ともそだち本 2017』のコンテンツとしても使用した。

<表 4-3-2. 2016 年度研修合宿—ワークショップにおける各班の継承キーワード一覧>

■フレッシュャーズ：①「なぜ？」を積み重ねる、②英語力の低い学生、③学習方針の提案、④良い沈黙・悪い沈黙、⑤知らないふり
■のぶりん：①SLA は TA じゃない、②学生のニーズ、③図示(可視化)、④ハッピーな終わり方、⑤「 切、明日です」、⑥「とりあえず見て欲しい」
■冷やラー：①クロージング、②複数人対応、③鬼問、④「今は理解しなくても大丈夫」、⑤共感
■SMAP：①SLA が分からない問題、②ニーズ、③目標設定、④分からないフリ、⑤複数対応

⑤成果報告と合宿振り返り

3 日目午前中には、前日のワークショップの成果報告会と全体を通しての振り返りが行われた。SLA からの成果報告を踏まえ、佐藤副センター長が合宿での議論を総括したものが図 4-3-2 である。そして、SLA と 1~2 年生の間には何かしらのギャップがあるが、これを自覚し、コミュニケーションと協働の過程を通して、学習への主体性・自律性をどう引き出すかということが、SLA として考える（考えたい）ことであると締めくくった。

<p>「学習支援」をするSLAに求められるもの</p> <ol style="list-style-type: none">1. 専門性: 教科の専門的知識&高度な学習支援スキル2. マインド: 学問を楽しむ態度、学習への主体性、行動力3. 社会性: コミュニケーション、協働・共感する力4. 学生に向けた態度: 学生への期待・効力感、学生の将来イメージを描く

<図 4-3-2. 合宿振り返り総括スライド>

最後に、①合宿全体の感想と②合宿に出ていない人にも継承したい事は？という2点の問いかけのもと、SLA1人1人に感想をもらった。コメントの概要は下表のとおりである。感想の主要トピックの一つは、例年の合宿に比べ、理系部会以外のSLAの参加が多く、そのおかげもあって理系に偏らない議論ができたことに対する評価の声であった。

<表 4-3-3. 2016 年度研修合宿—参加 SLA による感想コメント概要>

■玉田（ライティング部会、2016 前期～）

- ・ 新規 SLA かつライティング担当という少し特殊な立場で、理系の方々と交流できたのが単純にすごく楽しかった。学習支援センターの組織の全体像がなんとなく分かった感じがした。
- ・ 「今後につながる長期的な学習方針を提案する」ということが合宿を通して知れた大事な概念だった。ライティング対応はレポートを直近で出すことが目標になってしまいがちなので、継続的なアドバイス何ができるか部会の人と共有したいと思った。

■川村（数学部会、2016 前期～）

- ・ TA との違いが話題に挙がっていたが、SLA との共通点もある。TA の人と交流したり情報を仕入れる機会があってもいいのかなと思った。

■早坂（物理部会、2016 前期～）

- ・ SLA に入る前は、質問に対して答えていくイメージを持っていた。前期の活動を通して、質問には答えるけど答えをそのまま教えるわけじゃないということは分かったが、どこか曖昧で具体的なイメージが掴めないでいた。しかし、今回の合宿で重要なキーワードを洗い出すことで、SLA としてなにができるのかということが、少し見えてきたと思う。中でも「知らないフリ」というのを次期意識したい。

■ドナ（英語部会、2016 前期～）

- ・ 外国人としては、SLA に関わることだけでなく、日本の学生さんと一緒に合宿に参加するのは色々な事が勉強になった。今回のきっかけで、SLA メンバーとして所属感が深くなった。

■澁川（物理部会、2015 前期～）

- ・ 今回は英語やライティング部会など文系の方々の参加率が高いというのが最初の印象。そのおかげで出てきたと思われるキーワード（例えば鬼門、なぜを積み重ねる、分からないふり・知らないふり等々）を見ると、「問いかけ」に関するような学生主体を思わせるキーワードが出てきたのが印象的だった。ライティングの対応で「学生から引き出す」ことを大事にしていることなどが影響していると思う。SLA のイメージが去年とはだいぶ変わってきている。いい面も変えたくない面もあるが、自分がどういう SLA になっていくかということ、皆と話すことでまとまってきて、言葉になってきたのでよかった。

■浅野（数学部会、2015 前期～）

- ・ 色々な先輩方や他部会も含め色々な人と話しができていい刺激になったし、楽しかった。
- ・ SLA とは何かみたいなことを、普段考えていても、そういうのを議論する場はあまりなかったので、問いを深める場になった。そのことを合宿に来たことない人には伝えたい。継承ワードの中では、「ニーズ」と「知らないふり」が、まだ考える余地があるという意味でも、継承したい。

■林田（ライティング部会、2015 前期～）

- ・ 部会をなくすかという課題提起から各部会間で共通することは何かというような話題になった。今までの SLA は、部会ごとに専門性を高めてきた歴史があり、その部会で専門性を高めたことを部会間で共通することはないかと今確認している時期だと認識している。その共通性を確認すると同時に、各部会での譲れないものもあり、そこを見つめ探していくのもおもしろいのではないかと思った。

■酒井（英語部会、2015 前期～）

- ・ 僕が思う TA と皆さんが話している TA はイメージが違っていた。そのまま SLA・TA と一般化して話してしまうと、ジェネラルなところに話を持っていこうとしたときに少しずれてくるのかなとモヤモヤと感じた。同様に、普段、理系文系の違いについて話すことが多いが、合宿での話を通して、むしろ、理系とライティングは活動のスタンスが近く、英語が少し異質である気がした。理系文系というより、もう少し他の基準で考えるべきかもしれない。
- ・ メンバー同士の繋がりが大事だと感じた。僕としては具体的な概念を伝えるというよりは、そういう場づくりみたいなことを後期は意識していきたいと思った。

■珍田（数学部会、2015 前期～）

- ・ 去年の合宿と比べ参加者は減ったが、情報共有するには適正な規模だと思った。また、昨年度のグループワークよりも、具体的に割と考えやすいテーマだったのでスムーズに議論できた。座談会の時間が短かったのが残念。90 分フルに使って議論したかった。
- ・ 目標設定とニーズというのが大事なと感じた。何かを複数人でやる時は、今何をすべきかという目標を共有することが大事。直近の継承の課題にしたい。
- ・ 合宿に多くの SLA に出てほしい。部会の垣根を忘れて色々な議論できる場だと思う。

■相澤（物理部会、2015 前期～）

- ・ 人数が少なくかつ文系の人の比率も高かったのも影響していると思うが、普段何となく意識しているものを

具体的にしっかりとした言葉で表す、辞典を作るという作業が枠組みをはっきりさせられてよかった。

- ・ 英会話やライティングが長期的な視野で学生を獲得して成長を促していきたいという視点があるが、理系は基本的には単発な対応がメインになっていると思う。その一方で、よく来てくれる学生もいる。その時に、その学生の将来を考えた対応というのを理系はもう少し真剣に考えてもいいんじゃないかなって感じた。
- ・ 継承という、いなくなる人が残る人、新しい人に何かを残すというイメージが強いが、組織として継続性を持っていく為には、(新規メンバーでも)全員が自分のすぐ後輩に引き継ぐということをまず意識する、そういう心づもりで普段動くというのが大切だということを伝えたい。その日のシフトに来て対応をこなして終わるみたいなのが基本的には多くなるが、普段のシフトの中で、議論をしたり話ができるといいと思った。

■久守 (数学部会、2014 後期～)

- ・ 印象に残っていることは、フレッシューズの方々のキーワードに、学生に対して長期的な学習を促すとか、対応の流れ自体を俯瞰して見るとかいう考え方が出てきていて、私が最初に入ったときはちょっと違うと感じた(新規メンバーにもそうした理解が認知されるまでになっている)。もう一つ上の段階で、発信型や長期的な学生に対しての付き合い方というのも考えたい。

■寺岡 (英語部会、2014 前期～)

- ・ グループワークでは、色んなキーワードの中でどれが自分が一番推すかというところに、その人のこだわりや個性が出て面白いと感じた。
- ・ 色んな部会が似たようなことを考えていることが多いと改めて再確認しました。似たようなことを考えているが、セメスター中だと部会の中で完結してしまうから、やはり普段のシフト中に他の人たちと話せるといいなと思った。同時に、それを英語部会の人たちと共有したいと思った。今までは英語部会の後輩に対し、「理系部会の人と話してごらん」と提案して、「何で?」と聞かれても「楽しいから」しか言えなかったが、その理由が私の中ではっきりしたのがよかった。

■五十嵐 (物理部会、2013 後期～)

- ・ 全体的な感想は、文系(ライティングと英会話)の比率が増えたのが印象的。いつもだと割と理系の中で、物理・化学・数学が対立項になっている印象だった。しかし今年は、理系・英会話・ライティングという対立項ができて、その共通点や違いを考えさせられるよう合宿だった。
- ・ 座談会のテーマについて、他のメンバーとも共有すべき、共有して議論してもいいんじゃないかなって感じているので、帰ったらシフト内で議論してみてもいいかなと思っている。

■紅林 (物理部会、2013 前期～)

- ・ 個人的に収穫だったのは、講義で学問としての教育を聴けたこと。普段自分がやっている活動のある意味体系立った言葉で理解することができたことが面白く、嬉しかった。
- ・ 文系の比率が過去最大だと思うが、例年の合宿だと、つい SLA=理系窓口みたいなマインドで入ってしまっていたが、今回はその枠を外して「SLA とは」ということを考えられて、新鮮だった。それでもまだ理系ばかりのことを言っていると思うところもあり反省。
- ・ 自分の伝えたいことはグループワークで提案したものがそのまま。僕の思う SLA らしさってこれだけどみんなはどう?というような話をシフトでしたい。あと、部会なくなるかもという話題に触れて、みんなで話をするのも面白いかなと思っている。

(3) 合宿振り返りシート (参加者アンケート)

合宿では、「合宿振り返りシート (兼アンケート)」を各々に記入してもらっている。質問項目は下表の通り。合宿総合満足度は平均 86.43 点であった。概ね満足度の高い研修合宿となったが、座談会の未消化分がマイナス点となった様子であった。

<表 4-3-4. 研修合宿参加者アンケート項目>

1. 各企画について

以下の各企画について、満足度とコメントをお願いします。

- ① 前期総括会 点 (100 点満点中) / ② 座談会 点 (100 点満点中)
③ 講義 点 (100 点満点中) / ④ グループワーク 点 (100 点満点中)

2. 自分自身について

- ① 合宿を通して、あなた自身にどんな変化がありましたか? 小さなことでも構いません。
② 合宿を通して、自分にとって、印象深かったことは何ですか? 企画についてでも、知ったことについてでも、人についてでも、何でもかまいません。
③ 合宿を通して、自分にとって、難しかったことは何ですか?

3. 総合

- ① 今回の合宿の総合満足度は何点ですか? 点 (100 点満点中) 理由 ()
② 研修合宿に関して、要望や提案があれば、お書きください。
③ その他、何かあればどうぞ!

(1) 前年度までの経緯

シニア SLA は、アクターとしての SLA の役割から若干離れ、これまでセンター員が担ってきた SLA 育成・研修業務に携わったり、各担当分野の専門知識が必要となるような各種運営業務（例えば、記録の整理、対応教材作成、知見の総括作業等）を SLA のベテラン層に担ってもらい、SLA の自己成長力強化、支援活動の質の向上を図ろうとする試みとしてスタートした。

シニア SLA に限らず、SLA 同士が学び合うこと＝SLA の自己成長力の強化は SLA の知の継承と組織の継続のために重要な課題であるが、これをより積極的に推進する役割を期待されているのがシニア SLA である。より具体的には、①担当する分野の専門知識を踏まえたアドバイスができること、②SLA の文脈を共有する人材が SLA 同士を繋ぐ媒介役となること、③活動時間・場所を共有する人材が育成役となることでより即時的な OJT を可能にすることなどを通して、センター員を媒介した知見の継承ではなく、SLA 同士の直接的な知見の創造・共有・継承を成立させる起爆剤としての役割が期待された。

(2) シニア SLA の基本方針

開発初年度である 2015 年度は、シニアの要件・給与体制・シフト体制・活動内容等各方面で模索を重ねてきたが、前年度の成果と課題を踏まえ、本年度は次の通り方向性を修正した。

①シニア SLA の要件

シニア SLA は、活動への関心・意欲を前提とし、形式的要件としては「継続活動年数 2 年以上の主として博士課程後期学生の SLA」を対象としてきた。本年度も当初はこの要件を継続したが、後期には「博士課程後期学生」の要件を「博士課程前期学生」に修正し、幅を拡大した。これは、後述の通り、シニア SLA の役割を「後輩 SLA の育成」に重点化したことに伴い、よりアクターとしての SLA に近く、固定的・継続的な活動時間が確保できることが重要になったこと等が要因にある。また、対象幅の拡大と併せて、SLA 理念の理解や学生対応ポリシー等について問う簡易的な「シニア認証試験」を設けた。ただしこの認証試験は、選抜のためというよりも、シニア SLA としての自覚と自信を持ってもらうものとしての意味合いが強い。

②給与体制

シニア SLA 開発初期は、給与的インセンティブを持たせることを検討していたが、これについてはシニア SLA の意見も踏まえ、取りやめることとした。

③シフト体制

当初は、各曜日のシフトリーダーのようなイメージで、一日勤務（SLA シフト時間中）を理想としていたが、実態にそぐわないことが明らかとなった。また、より多くの後輩 SLA の育成にあたり、情報共有の潤滑油となることを意図し、シフトを固定せずいくつかの曜日・シフトを回る形も可能性としては残していたが、実態としてはこれも難しく、他の SLA と同様のシフトの組み方をすることが基本となった。

④活動内容

(1) に述べた通り、シニア SLA の活動は、大きく「SLA 育成業務」と「運営業務」を想定しており、2015 年度は a)シフトマネジメント、b)SLA 育成支援、c)高度プロジェクトの 3 点をシニア SLA の活動と提示していた。これについて 1 年目の実態を踏まえ、「後輩 SLA の育成」をシニア SLA の共通項かつ最大の役割として位置づけ直し、教材開発等の「高度プロジェクト」は個々の SLA の特性や配置されたシフトの状況に応じて行う業務とすることとした。また、「シフトマネジメント」については、当初は、シフトメンバーのチームビルディングと利用学生に対する受付対応や各種調整（利用登録カード発行、待ち札の発行、SLA と利用学生のマッチングと調整等）を含めた意味あいであった。これについて本年度は、前者に関しては広い意味での SLA 育成業務の一環として捉え、

引き続きシニア SLA に期待するものとしたが、後者に関しては、全シニア SLA 必須の業務ではなく、可能な範囲で行うものとした（結果的にそうした優先順位となった側面もある）。

総じてシニア SLA は、アクターとしての SLA とセンタースタッフの中間的存在として位置づけていたものの、当初の想定に比べるとアクターSLA 寄りの「SLA の先輩」としての立ち位置が強いものとなった。こうした状況や昨年度末のシニア SLA との話し合い等を踏まえ、シニア SLA の役割を「センターの諮問機関（相談役）であり、SLA のサポート役であり、センター運営改善の先導役」と表現し、活動を行っていった。

（3）2016 年年度シニア SLA

2016 年度前期のシニア SLA は 4 名、後期は 6 名の体制となった。

＜表 4-4-1. 2016 年度シニア SLA＞

	姓	学年	SLA 活動開始年度	担当	シニア
1	北原	博士後期 3 年	2010 年（※活動年数は 3 年）	物理	前
2	中村	博士後期 2 年	2011 年	数学	前・後
3	紅林	博士後期 2 年	2013 年	物理	前・後
4	山下	博士後期 1 年	2013 年	化学	前・後
5	五十嵐	博士前期 2 年	2013 年	物理	後
6	寺岡	博士前期 2 年	2014 年	英語	後
7	島森	博士後期 3 年	2015 年	化学	後

（4）2016 年度シニア SLA 活動内容

2016 年度シニア SLA の主な活動は、①ミーティングの実施、②シフト内における SLA 育成活動、③ピアレビューシートの開発・運用、④（部会別）新規 SLA 向け研修教材作成の 4 点である。シフト内での OJT 実践を基盤として担うと共に、これを活性化させるためのツールの開発を行った。前期セメスター中は①・②・③、後期セメスターは②・④を中心とした活動を展開した。

①ミーティングの実施

正式ミーティングを 4 回開催した。各セメスター 2~3 回の実施が理想ではあるが、就職活動、修士論文・博士論文の執筆、長期海外出張など、それぞれ多忙な中で全員が集まる機会を設けることが困難な実態がある。また、月に一度開催される部会ミーティングとの競合も課題となった。こうした中で、特に後期セメスターについては、活動可能時間等に応じてセンター員がハブとなり情報共有を行う体制となった。

＜表 4-4-2. 2016 年度シニア SLA ミーティング＞

回	開催日	出席人数	内容
第 1 回	3 月 31 日	4 名	・次年度のセンターの動き、SLA サポートの動きについて共有 ・シニア SLA の方針確認
第 2 回	5 月 20 日	4 名	・現状の情報共有、SLA の OJT について方針共有 ・シニア共通 TO DO の提案と検討（ピアレビューシート）
臨時	7 月 21 日	2 名	・ピアレビューシートの検討
臨時	8 月 4 日	2 名	・ピアレビューシートの検討
第 3 回	8 月 23 日	4 名	・SLA 全体とシニア活動について情報共有、課題点の検討
第 4 回	12 月 26 日	5 名	・個々のシニア活動情報共有 ・SLA 育成に関して感じた課題や気づき等の共有 ・今後の活動方針の検討と共有

②シフト内における SLA 育成活動

シフトメンバーで行うブリーフミーティングのファシリテーター、後輩 SLA へのアドバイスやメンタリング、ピアレビューの実施等を行った。シフトの様子や気づきについて記録する『シニア申し送り書』の作成を行った。

③ピアレビューシートの開発・運用

→関連詳細、論考 2

前期セメスターを中心に、シニア SLA 全員で「ピアレビューシート」を作成した。昨年度調査に行った公立はこだて未来大学メタ学習ラボの事例に着想を得ながら、内容項目の設定、評価方法の検討（チェックリスト型か5段階評価型か等）、書式の検討などを行った。

後期セメスターは、実際にシートを使用してピアレビューを行ってみるフェーズに移行した。併せて、前期中に作成した「ピアレビューシート」は理系担当メンバーで作成したものであったため、英会話支援、ライティング支援で同じシートが使用できるかどうかを他の SLA メンバーに協力をもらい検討を行った。結果、ライティング支援では同じシートを準用することが可能そうであるという判断となったが、英会話支援については異なるシートが必要であるという判断となった。そのため、後期からシニア SLA となった英会話担当メンバーと英会話担当のベテランメンバーの2名に英会話版ピアレビューシートの作成を依頼し、初版を作成した（図 4-4-1 参照）。

④（部会別）新規 SLA 向け研修教材作成

→関連詳細、論考 2

センター員が研修をするだけでなく、また OJT で個別にアドバイスをするだけでなく、SLA が SLA の研修をある程度体系的に行う体制の強化を図りたい意図から、シニア SLA に各担当分野の新規メンバーに向けた約 30 分程度の研修教材（PPT 資料）の作成を依頼した。シニア SLA がいないライティング部会については部会全体に本件について提案し、担当を決めて資料作成を行った。

本年度は、化学・英会話・物理の担当者作成の資料が完成し、ライティングについては次年度に引き継がれる形となった。物理については、15 分の研修動画の作成も行った。英会話については、実際に新規メンバーに資料を使用してレクチャーを実践したため、これを録画し、研修動画とした。なお、物理や化学のものとして作成した資料は、具体例にそれらの分野の事例を使用しているものの、チュータリング型学習支援を行う担当者に共通の事項が多く含まれるものとなった。特に物理版として作成した資料は資料・動画ともに活用しやすい形態に整備できたため、次年度は特に理系担当 SLA に対し、共通の研修教材として使用する予定である。

その他、上記のようなレクチャー型教材ではなく、演習型教材の開発を試みたが、本年度は着想までで実現には至らなかった。

（5）2016 年度の成果と課題

本年度のシニア SLA の成果は、第一に、シニア SLA の役割について一定の方向性を定めることができたことである。具体的には、「SLA 育成」がシニア SLA の第一義的役割となり、運営上もこれに焦点化した活動内容の取捨選択を行うことができた。第二に、「SLA 育成」を活性化するための具体的なツールを作成できたことである。第三に、シニア SLA の対象枠を拡大したこと等から、「シニア SLA」を指導者的位置づけからピア的位置づけに移行することができたことである。これにより、シニア SLA 自身の過度なプレッシャーを緩和することができたとともに、シニア SLA は SLA 同士が学び合うための活性剤であるという前提の共有が進んだのではないかと考えている。

一方、課題は、シニア SLA 同士の連携・情報共有が困難な実態の改善である。物理的・時間的制約の中で、共通性をどの程度担保し、多様性をどこまで許容するかのバランスを検討しなくてはならない。また、本年度作成したツールの改善（アップデート）と運用についても、継続課題である。



記入日	年 月 日	カルテ T-No.	
対応 SLA	[-]	レビュー SLA	[-]
対応科目		対応学生(学部学年)	

A. 導入時

1.	これから対応に入るための良い雰囲気作りができた。	1	2	3	4	5
2.	ユーザーズカード、カルテの書き方等の案内や、SLAの利用の仕方の共通理解を図るなどし、SLAを利用してもらうにあたっての適切な誘導をすることができた。	1	2	3	4	5
3.	学生に聞き取りを行いながら、今回の質問内容の全体像を整理・把握することができた。	1	2	3	4	5
4.	対応にあたっての必要情報(時間制限等)や、質問事項に関わる周辺情報(学習状況、授業情報、課題かどうか等)を把握することができた。	1	2	3	4	5
5.	今回の対応方針・対応計画について、学生と共有することができた。	1	2	3	4	5

memo

B. 本対応

6.	SLA 側の発話量を調整し、学生が自身の疑問や思ったことを話せるように促せた。	1	2	3	4	5
7.	情報の視覚化。(SLAの)思考の言語化などし、コミュニケーションを工夫できた。	1	2	3	4	5
8.	発問を工夫するなどし、学生に自ら問題を解決する姿勢を持たせることができた。	1	2	3	4	5
9.	図を描いたり、身近な例に関連付けるなど、学生の理解を深めるような工夫ができた。	1	2	3	4	5
10.	先輩としての良さを活かし、少し先の見通しを与えるなど、アドバイスができた。	1	2	3	4	5
11.	自身が1・2年次の時の経験を活かすなどして、学生に寄り添った対応をすることができた。	1	2	3	4	5
12.	解説に要する時間を意識しながら、必要な情報を適切に取捨選択して解説できた。	1	2	3	4	5

memo

C. 終了時

13.	対応の要点を整理したり、今日できるようになったことを示すなどして、対応の振り返りをすることができた。	1	2	3	4	5
14.	質問以外の話題に触れるなどして「また来たいな」と思える雰囲気をつくることができた。	1	2	3	4	5
15.	適切な言葉を添えて、アンケートを配布したり、SLAに関する必要情報を提供することができた。	1	2	3	4	5

memo

レビュー 後コメント	
本人振り返り コメント	

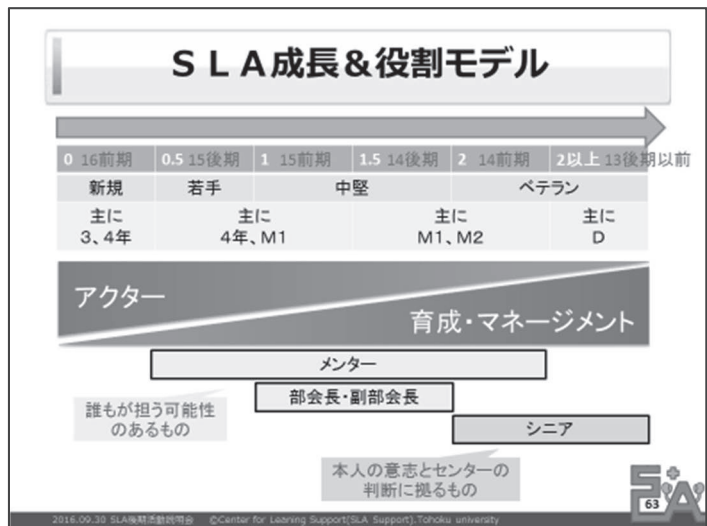
〈図 4-4-1. ピアレビューシート 2017 年 10 月版〉

5 SLA 育成・研修体制の整備

SLA 育成・研修体制について、本年度は「SLA 自己成長力の強化」を念頭に、「学習支援者としての専門性の向上」と「実践知・経験知の継承・共有」の2つの方向性の充実を図ることを目指し、各種活動を行ってきた。なお、他章で触れたものについても多くあるので、それらについては概略に留める。

(1) SLA 成長・役割モデルの提示

「SLA 自己成長力」強化を図るための基盤として、SLA に対し、SLA 成長・役割モデルの大枠を提示した。「新規」「若手」「中堅」「ベテラン」という経験年数に応じた「層」概念・用語を提示したのは活動開始以来初である。当然ながら、一概に経験年数に応じて支援者スキルが向上するわけではない側面もある。しかし本モデルの提示は、アクターとしての SLA の活動だけではなく、学習支援活動全体の改善や他の SLA の成長と学びに対して役割を担う意識の醸成を意図して行ったものである。共通用語を持つことで、センターと SLA の意識共有を図るきっかけにもなった。



<図 4-5-1. SLA 役割モデル（後期説明会時）>

(2) Drip ラベル（共有の観点）の設定

SLA 同士で事例を共有する・検討するという際に、どのような事例を扱うとよいのかという基準・観点が定まらず、膨大に蓄積されていく事例の中から必要な情報を選択することがなかなか容易ではない様子が見受けられた。そこで、共有の必要性を判断する際の観点として、4つの観点を示した。具体的には、観点 A=自身が迷った対応事例、観点 B=SLA が見逃しがちな学生のわからなさ・ニーズが現れた事例、観点 C=典型的なつまづき事例、観点 D=上手く行った対応事例の4つである。この観点は対応記録用紙にラベル付けできるようにしている（該当する場合のみ）。

本来は、ラベル付けに止まらず、これらの事例をより優先的に部会ミーティングに持ち寄り検討したり、議論・検討を踏まえて、知見化・資料化することが目的であるが、これの実現は次年度以降も引き続き課題である。



<図 4-5-2. Drip ラベル（後期説明会時）>

(3) 学習支援者スキル（専門性）の向上

SLA の学習支援者スキル（専門性）の向上策の一環として次のような取り組みを行った。

- ①質問傾向分析の恒常化：SLA 自身にセメスターごとに担当分野の学生の質問・利用状況の傾向を分析してもらう作業を恒常化させる取り組み。
- ②初任者研修：本年度は、研修合宿での講義がこれにあたる。次年度はセンターとして正式に「初任者講習」を取り入れる予定であり、その準備を進めた。
- ③ピアレビュー：シート作成を通し、SLA の対応に求められる物の共通認識を図るとともに、レビューの実践を通して、対応について検討し合う文化創りを醸成した。
- ④共通研修：担当の枠を越えた学習支援者としての資質向上を目指す取り組みを強化した。次節にて詳述。

(4) 実践知・経験知の継承と共有

SLA が日々の実践の中で蓄積している実践知・経験知を継承・共有するための活動を強化した。具体的には、文字情報として物に残す「資料化」と「人」を通じた継承機会の創出の2側面から充実を図った。2016年度の主な取り組みは次の5点である。なお、「資料化」作業を円滑に行うには、通常活動の時間配分や他の雑務のスリム化など、全体的な活動の調整が必要となる。これらの調整と整備は次年度も引き続き課題としたい。

- ①ピアレビュー：ピアレビューはSLA間の経験知の共有の場としても機能している。
- ②部会別研修資料作成：シニアSLAの活動を通して、SLA同士の研修活動を取り入れた。
- ③研修合宿：ワークショップにおいて、継承したいキーワードの創出などを行った。
- ④部会活動の洗練：Dripラベル概念などを活用しながら、部会ごとに勉強会の在り方を検討し、実践した。かつ、これらの検討内容が資料として蓄積されることを意識した。
- ⑤卒業プレゼン実施：後期活動報告会にて、卒業SLAからプレゼンをもらった。

(5) その他、各種OJTツールの現状評価

①サッカーノート（リフレクションノート）

SLA 個々人の活動や気づきを記録していくためのノート。ノートには、学研の「コーネルメソッドシリーズ」ノートを採用。現在、使用方法について個々の裁量に任せており、活用度合いはSLAによる状況である。

②ビデオリフレクション

物理部会、数学部会の勉強会で共同ビデオリフレクションを実施した。これ以外は、個々のSLAが自発的に取り組むまでには至っていない。ビデオリフレクションの位置づけ、撮影作業の利便性向上、データ蓄積方法や共有方法の工夫などが引き続き課題である。

成果としては、部会での作業を通じて、共同ビデオリフレクションを実施する際の準備方法に一定の型ができたことである。ビデオリフレクションを実施する際、時間軸に沿って、a)状況概要、b)良い点、c)改善点、d)検討・課題点の4観点を記録する方法が簡便で効果的であった。

③ブリーフミーティング（シフト終礼）

ブリーフミーティング（以下、BMTG）は、活動終了時にシフトメンバー全員で今日の活動を振り返る時間のことである。昨年度のBMTG導入以降、シフト単位のチームビルディングに一定の効果は得ているが、BMTGを簡潔かつ有意義な場とするための模索は引き続いている。意義のある場とするためには、部会の別を超えて共有する意味のある情報とは何かという情報選択スキル、報告を述べる際の要約力、BMTGを回す役となった者のファシリテーション力など、意外に高度なスキルが求められる。SLAも巻き込みながら、次年度以降も引き続き検討していきたい。

④HP「スタッフオンリーページ」の活用

本年度は、本ページの活用は停滞した。今後の方向性について検討が必要である。

6 共通研修

「共通研修」とは、2015年度より開始した、担当科目の別を超えた SLA 全員が共通に必要なスキルを獲得する研修の場の事を指す。これまで、担当科目ごとの部会活動を充実させてきたが、「学習支援者」としてより汎用的なスキルアップの機会の構築を企図し、他大学の調査結果や研修合宿での SLA からの提案等を土台にして、「共通研修」の運営方法自体の在り方の模索も併行しつつ実施した。

昨年度は開発段階として、講師（センタースタッフ・SLA・外部講師）、参加形態（必須・推奨）、活動位置づけ（給与あり・なし）等の各ファクターについて多様な在り方を試行してきたが、本年度は、主に学部講師招聘型のコンテンツを中心として実施した。また、参加形態については、基本を任意参加とし、【自由参加・レポートなし・給与なし】【研修参加・レポート提出・給与指定時間分】を参加する SLA が選択する形で運営した。

<表 4-6-1. 2016 年度共通研修>

	日時	講師	内容	参加者	
				自由	研修
1	5月27日 18:00～ 19:00	北原理弘 (SLA)	対応補助教材 GRAPES の活用方法	8名	—
2	10月28日 18:00～ 19:00	鈴木学 (福島大学総合教育研究 センター特任准教授)	福島大学における「学びのナビ」 実践開発紹介	10名	—
3	11月5日 14:00～ 16:00	Xmajor OB (京都大学他自主グルー プ「Xmajor」OB)	大学生による自主的な「学び合い」 はどうすれば実現できるか？	5名	6名
4	11月29日 18:15～ 19:15	佐々木真理 (学生相談・特別支援セ ンター助手)	大学における障害学生支援の実際 ～東北大学における取組み	14名	7名
5	12月1日 18:15～ 19:15	岩淵将士 (理学部キャンパスライ フ支援室インターカー)	カウンセリングマインドの理解～ 「共感的理解」とは？	14名	3名
6	2月15日 13:00～ 14:30	太田裕子 (早稲田大学グローバル エデュケーションセンタ ー准教授)	「自立した書き手」を育てる文章 チュータリングー気づきを促す質 問をしようー	6名	5名

(敬称略)

福島大学における「学びのナビ」実践開発

—SLAによる学習支援との相違点を探る—

福島大学 総合教育研究センター
鈴木 学

1. はじめに

(1) 目的

本研修では、福島大学において開発に着手している学習支援実践の紹介を通じて、東北大学におけるSLA実践の特徴を相対的に位置付けることと、学生による学習支援の可能性を検討することを目的としている。研修講師は東北大学において2010年度よりSLA実践の開発に携わり、2015年度後期からは福島大学にて学生による学習支援実践の開発に着手している。それ故、両者の比較から各大学・学生の文脈に応じた学習支援のあり方を模索したいという問題意識を有している。このような前提のもとづいて本研修が計画されていることをあらかじめ断っておきたい。

(2) 福島大学と東北大学の大学の特徴の違い

両大学は同じ国立大学ではあるものの、大学としての性質は異なっている。国立大学のミッションの再定義による類型では、福島大学は「地域貢献型：地域のニーズに応える教育研究を推進する大学」に位置し、東北大学は「世界水準型：世界のトップ大学と伍して卓越した教育研究を推進する大学」に位置している。これらの大学の機能の違いは、多かれ少なかれ人材育成（大学教育）の方針にも影響を及ぼすものである。具体的には各種数値で比較するとわかりやすいだろう。おおよその割合で示すと【福島大学：東北大学】、①予算規模【1：15】、②学部生数【1：3】、③大学院生数【1：20】、④教員数【1：15】、⑤職員数【1：30】となっている。

これらの違いが学生による学習支援実践にどのような影響を与え得るのかを考えてみたい。まず①予算規模や④⑤教職員数の違いからは、「分業体制の有無」を読み取ることができる。大学の規模が大きくなればなるほど、大学が有する諸機能は細分化されやすくなる。その結果、組織化も進みやすくなり、学習支援機能に対して専任スタッフ（教職員）を配置することも可能となる。そして②③学生数の違いからは、「提供する学習支援の質的違い」を理解することができるだろう。学部生と大学院生のどちらを中核に学習支援を展開するかで、その役割も変わってくる。東北大学学習支援センターの活動が学部生から博士課程後期学生を含む大学院生までを学習支援アクターとし、組織化された全国的に見ても大規模な活動であるのに対し、福島大学の学習支援活動は総合教育研究センターと附属図書館の相互協力によって展開される学部生を中心とした比較的小規模な活動である。次節では、似て非なる条件の下で展開される福島大学の学習支援実践について詳しく見ていこう。

2. 福島大学「学びのナビ」実践紹介

(1) コンセプト

福島大学の学習支援活動「学びのナビ」は、ラーニングコモンズを筆頭に学習環境が充実している附属図書館を拠点として、学生アドバイザー（名称「学びのナビゲーター」）が全学的な学習支援活動を企画・実施する取組みである。「福島大学の教育」と「福島大学生の学習」を学生の視点で活性化させる役割を担い、教職員と協働しながら教育と学習の両方にアプローチ可能な学習支援の可能性を追求している。「日常を、学びにかえる！」をスローガンに、学生からの学習に関する質問に応じる「学習相談対応」や、授業外で新しい学習機会を創出する「学習イベント企画」、授業との連携で実施する「出前授業」、さらには福島大学生に新しい学習方法を提案する「自主ゼミ開発」など、その活動は多岐にわたっている。

(2) 運営体制

「学びのナビ」の組織体制は図1の通りである。4学類（人間発達文化学類、経済経営学類、行政政策学類、共生システム理工学類）に所属する2年生以上の学部生（10名弱、若干名の大学院生を含む）を主たるアクターとして、総合教育研究センター・高等教育開発部門の教員（1名）が活動全体をプロデュースし、附属図書館職員（1名）と教務課職員（1名）が活動のサポートを行う体制になっている。本活動には専任スタッフはおらず、いずれの教職員も他業務と並行して活動している。

学びのナビゲーターは学習支援の機能別に、①学習相談対応ユニット、②学習イベント企画ユニット、③学習連携促進ユニットを形成して活動を展開している。各ユニットの具体的な取組み次項で紹介するが、全体の運営に関わることとしては、3週間に1度開催される全体会（全員が集まって情報共有や活動の検討、学習支援研修を実施する）にあわせて、事前に各ユニットでミーティングを行うようにしている。「学びのナビ」の意思決定は全体会で行うが、活動の叩き台やアイデアは各ユニットがそれぞれ持ち寄る構図である。活動拠点は附属図書館2階の「学びのナビ」で（図2）、学びのナビゲーターはシフト制で活動に従事している。シフト中は学習相談を受付けているが、SLAほど質問が殺到するわけではないことから、上記ユニットの取組みをメインに活動が行われている。

(3) 各ユニットの活動

まず、学習相談対応ユニットの主な活動は、①情報発信体制の整備、②学習通信の発行、③学びのナビゲーター向けの研修の企画である。①に関しては、twitterやFacebookといった情報発信インフラを整えたり、学びのナビゲーター同士の情報共有ツールとしてgoogleの諸機能を活用したりしている。②では提供する学習支援サービスの質向上（共通化）や学生への広報活動を意図している。③は、対人業務である学習支援に必要な支援スキルや心構えに関して、学内の教員に協力を依頼して研修を計画する活動である。

次に、学習イベント企画ユニットでは、①ワークショップ等の企画・実施、②図書館のリソースの活用を行っている。①では、正課外において不定期でディスカッションのイベントやフィールドワークを実施している。②ではテーマを設定して図書の展示を定期的で開催したり、イベントと連動した展示企画を行っている。

そして、学習連携促進ユニットでは、①出前授業の実施、②自己学習プログラムの開発・利用促進を主たる活動として展開している。①は教員の依頼に応じて、レポートの書き方等に関する授業1回分を学びのナビゲーターが担う活動である。②に関しては、福島大学には学生自身が学習課題を設定し、学習集団を組織して主体的に学習活動を行うことを「自主学習プログラム」として単位認定する仕組みがあり、その活用を促す取組みである。実際に学びのナビゲーターがこのプログラムを開発し提供したり、企画の仕方自体を学生に広める活動を行っている。

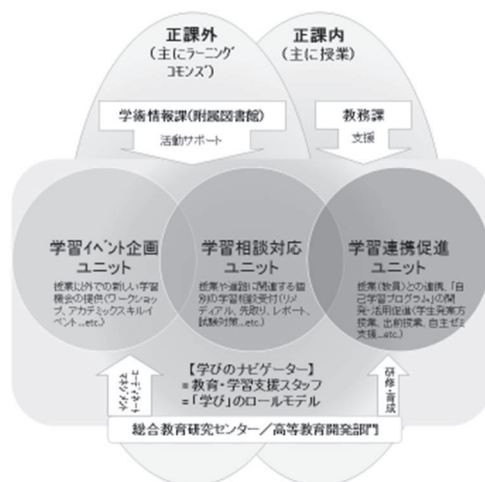


図1 「学びのナビ」組織体制

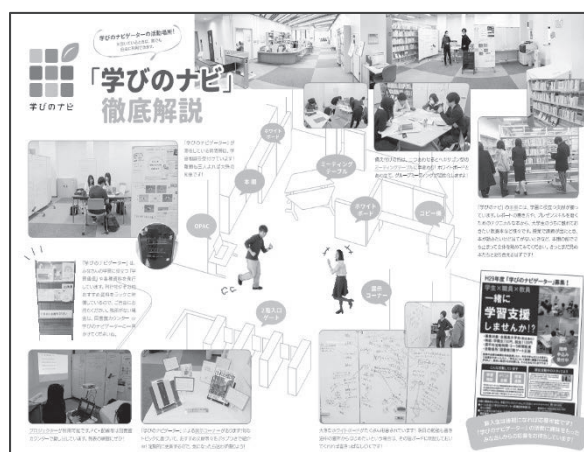


図2 「学びのナビ」活動拠点イメージ
抜粋：福島大学附属図書館『学びのガイド 2017』
13-14 頁

3. SLA 実践との比較による「学生による学習支援」の論点

上記「学びのナビ」実践の内容を概観して、あなたは SLA 実践との違いをどこに感じただろうか。ここでは、「学生による学習支援の“深さ”と“広さ”」というポイントに着目して私見を述べていきたい。

結論を先取りすると、SLA は“深い”学習支援が特徴的で、学びのナビゲーターは“広い”学習支援に活動の価値を見出しているといえるだろう。SLA の強みは一人ひとりの学問の専門性にあるといってよい。学部生から大学院生までの組織構成や部会・振り返りの体制は、「内容面」で学習支援の質を保証するための条件として働いている。提供する学習支援内容が質的に誤りないかを常時検証するシステム（カルテ報告、ブリーフミーティング、部会等）は、学習支援の“深さ”を突き詰めていくための仕掛けといえよう。一方で、学びのナビゲーターは「方法面」での学習支援を行っているように感じられる。学問の専門性を学習支援の前面には打ち出さずに、主体的に学習に取り組むための方法の提案や新しい学習機会の創出といった大学教育全体の活性化に寄与する方向の学習支援といえる。SLA 実践は全学教育の質保証（単位の実質化）という点で、東北大学の教育の基盤を正課外から支える役割を担っているが、「学びのナビ」実践は大学全体で着手できていない教育・学習課題を探り、「学生の力」でできることを実現していくという位置付けである。前者が“屋台骨”としての学習支援ならば、後者は“隙間を埋める”学習支援とでも形容できるかもしれない。

SLA も学びのナビゲーターも同じ「学習支援者」と称されるが、その活動に鑑みれば、SLA を Learning Adviser（学習支援者）、学びのナビゲーターを Learning Activator（学習活性者）として捉えた方が本質的であろうと個人的に感じている。日本の大学全体を見ても、学習支援の“深さ”で存在価値を示せる「学生による学習支援」実践は決して多くはない。どちらかといえば、“広さ”の中で「学生の力」の価値を見出していく実践の方が拡がりを見せているように思う。冒頭でも述べたように、大学の文脈によって展開される学習支援のあり方は様々であるが、大事なことは学習支援に従事する一人ひとりが、自身の担当する学習支援活動を相対的に意味付けて、価値を見出せるようになることではないだろうか。

4. おわりに

福島大学の学習支援実践を鏡に、SLA のみんなにとっての活動の「あたりまえ」が案外そうでもないことを実感してもらえただろうか。博士課程後期の大学院生がいること、学習相談窓口を利用する学生が多いこと、専任スタッフが常駐していること、部会の体制が整備されていること等々、いつもの活動に従事していると当然のように思われる事柄にどのような意味があるのかを問い直してみしてほしい。「〇〇を変えたら△△ができるかもしれない」とか、「活動しやすさ（しにくさ）の要因（原因）は□□にあるのかも」といったことに自覚的になってみると、SLA 実践はより良い方向に改善されていくのではないだろうか。今後も研修等で自分たちの実践と他大学の実践を比較する機会があるかと思うが、比較対象によって見えてくる良さも課題も様々であるはずだ。今回の研修が SLA ならではの学習支援の可能性を探究するひとつのきっかけになれば幸いである。

障害のある学生への支援について

東北大学 学生相談・特別支援センター
佐々木 真理

1. 障害学生支援をめぐる動き

(1) 法整備の流れ

平成 27 年度の日本学生支援機構の実態調査によると、高等教育機関における障害学生数は 21,721 名にのぼり、これは全学生数のおよそ 0.68%にあたる。調査が開始された平成 18 年度の障害学生数は 4,937 名で、以後増加傾向が見られることから、今後さらに増加することが予想される。そのような背景の一つには、障害者権利条約が批准されたことによって国内法の整備が進んだことがあげられる。障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（以下、障害者差別解消法）は、日本で初めてとなる障害者差別解消に関するものであり、これにより障害を理由とする差別の禁止が明文化され、国立大学法人を含む行政機関等における合理的配慮の提供が義務化された。このことに伴い、本学をはじめとする全国の国公立大学における体制整備が急ぎ求められることとなった。

(2) 障害観の変化

障害者権利条約や国内法をみると、従来の医学モデルから社会モデルへと障害観が大きく変化したことが分かる。「障害者の権利条約と日本」（2013；長瀬修・東俊裕・川島聡編）によると、医学モデルとは「障害という現象を個人の問題としてとらえ、病気・外傷やその他の健康状態から直接的に生じるものであり、専門職による個別的な治療という形での医療を必要とするものとみる」ものであり、社会モデルとは「障害を主として社会によって作られた問題とみなし、基本的に障害のある人の社会への完全な統合の問題としてみる。障害は個人に帰属するものではなく、諸状態の集合体であり、その多くが社会環境によって作り出されたもの」であるとしている。

(3) 合理的配慮

障害者差別解消法では、国立大学法人を含む行政機関等における合理的配慮の提供を義務化したと述べた。障害者権利条約第 2 条において、合理的配慮とは「障害者が他の者との平等を基礎として全ての人権及び基本的自由を享有し、又は行使することを確保するための必要かつ適当な変更及び調整であって、特定の場合において必要とされるものであり、かつ、均衡を失した又は過度の負担を課さないもの」と定義されている。これを具現化した取組みの例としては、講義中に聴覚障害学生が他学生と同等に情報を得られるよう、授業担当者の音声を視覚化して伝えたり（ノートテイクや手話通訳等）、肢体不自由学生に対して必修体育を座学授業へ代替したりするものがある。

2. 本学における障害学生支援体制

(1) 体制

本学では、障害を理由とする学生の相談窓口として学生相談・特別支援センター特別支援室を平成 26 年 4 月に設置した。相談員は 2 名、受付 1 名で対応している（H29 年度現在は相談員 3 名）。本学として学内規程等を整備した（対応要領・留意事項の策定、障害のある学生への配慮に関するガイドラインや合理的配慮の提供に関する流れ図の作成）。

(2) 特別支援室の活動紹介

学生の個別相談、家族/教職員のコンサルテーション、合理的配慮の提供に関する支援、啓発活動、学生サポーター募集・養成等を行っている。

3. 障害のある学生への支援～発達障害を中心に～

(1) **発達障害とは** 独立行政法人 日本学生支援機構教職員のための障害学生修学支援ガイド(平成23年度改訂版)より
発達障害とは、何らかの要因による中枢神経系の障害のため、生まれつき認知やコミュニケーション、社会性、学習、注意力等の能力に偏りや問題を生じ、現実生活に困難をきたす障害。

生まれつき、あるいはごく早期からの特徴であり、その根本的な病理はあまり変化なく終生続く。家庭での養育、あるいは学校など社会環境の問題のために起きるものではない。薬物療法などで医学的にその根本障害を変える治療法はない。

① アスペルガー症候群と自閉症など 自閉症スペクトラム (ASD)

コミュニケーションの障害、社会性の障害、想像性の障害という特性がある。自閉症スペクトラムという連続する障害であるととらえられている。

例えば、以下のような特性がある。

- ・自分の興味ある話を延々と続けてしまう
- ・ルール違反への過剰反応（公共交通機関におけるマナーの悪い客）
- ・周囲の音が気になって授業に集中できない

② 注意欠如多動性障害 (AD/HD)

注意力に障害があるため困難が生じ、多動や衝動的な行動をコントロールできない障害であるととらえられている。

例えば、以下のような特性がある。

- ・整理整頓やスケジュールの管理が苦手、約束を忘れてしまう
- ・待つことが極端に苦手

③ 限局性学習障害 (SLD)

教育分野では、「読む」、「書く」、「計算する」、「聞く」、「話す」、「推論する」のどれか、あるいは複数が障害されている。

例えば、以下のような特性がある。

- ・読み書きに非常に時間がかかる

発達障害全般に見られる特性として、以下のものがある。

- ・学習の問題にとどまらず、周囲の人との対人関係や普段の行動など、生活上に様々な困難が生じるが、身体障害に比べて障害による問題であるとはわかりにくい。
- ・どこまでが障害でどこからが本人の個性や能力の問題であるのか区別がつきにくい。
- ・問題の現れ方は一人一人違い、障害をもっているかどうか周囲あるいは学生本人にさえ自覚しづらく、誰を対象にどこまでどのような支援を行えばよいかを考えていくことが困難である。

(2) 修学上のつまずき

①人に相談することが難しい

→こんな簡単なことを聞いたら恥ずかしいのではないかな？

②何に困っているのか要領よく説明することが難しい

→関連することをすべて説明しようとする（回りくどい）

→ポイントをしばれない

→気になることが解消するまで、時間を気にせず質問をする

③字義通り受けとめることがある

→「これくらい分からないと大学生として失格です」自分は大学にいてはいけない人間かも

→「自分で考えて！」もう相談してはいけないのかも

④抽象的な言葉に戸惑う

- 「このへんは適当に書いていいよ」何をどの程度書けばいいか分からない
- 「A4用紙にレポートを書いてきて」1枚あたりの字数と枚数を指定してほしい
- ⑤自分の学習法にこだわりがあり、助言を受け入れられない。
 - 細部にこだわり、俯瞰してみることが苦手
 - ひとつのことが気になると、なかなか先に進めない
- ⑥思い込みの強さがある
 - 大学生とはかくあるべし・学びとはかくあるべし
 - すべてを完璧に理解しないといけない

(3) 関わるときに大事にしてほしいこと

- ①障害の有無にとらわれないこと
- ②思い込みで判断しないこと
 - 自分の枠組みの中でしか相手を見なくなる
- ③相手が何に困っているのか、まずは話を聞くこと
- ④一人で抱えないこと
 - 学習支援センタースタッフや特別支援室スタッフに相談しましょう

カウンセリング・マインドの理解

—「共感的理解」とは?—

東北大学 大学院理学研究科 キャンパスライフ支援室
岩淵 将士

1. はじめに

「カウンセリング」は社会に広く浸透した用語であり、人と接する業種において主に用いられている。しかし、多様な場面で用いられるようになるにつれ、その定義や理念は曖昧さを増している。本稿では、1)「カウンセリング」を行う者に求められる「カウンセリング・マインド」の基本的な理念について確認した上で、2) その中でも「共感的理解」の実践方法を紹介し、学習支援者である SLA の基本的技能の向上に資することを目的とする。なお、本稿は SLA 対象の研修内容であるため、分かりやすさを重視し、専門的な部分の説明が厳密ではない部分がある。

2. 「カウンセリング・マインド」とは

(1) 「カウンセリング・マインド」という概念

心理学を基礎に置いた専門家による「カウンセリング」に限らず、「カウンセリング」という用語は教育、就職、法律、結婚など、多様な場面で用いられている。この広義の「カウンセリング」は領域によって意味合いが異なるが、「相談する側」と「相談される側」による対人コミュニケーションである点で共通していると言えよう。したがって、本稿では「カウンセリング・マインド」を「相談という対人コミュニケーション場面において、コミュニケーションを円滑にするために『相談される側』に求められる基本的態度・技能」と捉える。

(2) 「カウンセリング・マインド」の基本的理念

専門家が行う「カウンセリング」の基本的理念として、Rogers, C.R. が提唱した「セラピーによるパーソナリティ変化の必要にして十分な条件」(Rogers, 1957, 伊藤・村山訳, 2001) が参考となる。したがって、SLA による学習支援実践の参考として「カウンセリング・マインド」を検討する時、この必要十分条件を土台に据えることは有意義であろう。以下に Rogers の示した必要十分条件を示すが、意味が大きく変わらない程度に原文とは異なる表現を用いた。

- 1) 「相談する側」と「相談される側」が心理的な接触を持っていること。
- 2) 「相談する側」は、不一致の状態にあり、傷つきやすく、不安な状態にあること。
- 3) 「相談される側」は、その関係の中で一致しており、統合していること。
- 4) 「相談される側」は、「相談する側」に対して無条件の積極的関心を経験していること。
- 5) 「相談される側」は、「相談する側」の内的照合枠を共感的に理解しており、この経験を「相談する側」に伝えようと努めていること。
- 6) 「相談される側」の共感的理解と無条件の積極的関心が、最低限「相談する側」に伝わっていること。

以下では各条件について解説を加える。

第1条件から第3条件は場の構造を規定する基本的条件である。第2条件と第3条件における「一致」「不一致」とは、理想的な自己像と現実の自己像の一致、不一致を表し、不一致が大きいほど不安定な状態にあると捉える。また、第3条件では「その関係の中で」と限定的な表現が用いられている。これは、「相談される側」が日常の全ての場面において一致していることを求めるのではなく、少なくとも相談場面においては理想と現実の自己像が一致し、安定していることが要請されるという意味である。

第4条件と第5条件は主に「相談される側」に求められる条件である。「相談する側」は多様であるため、時に「相談される側」は対応したくないと感じることもあるかもしれない。しかし、そのような態度で接する限り、「相談する側」の抱える困難さは解消されないだろう。もし「相談する側」が第2条件を満たすのであれば、「相談される側」はその困難さに無条件に関心を持ち、共感的理解に努める必要がある。また、第5条件の「内的照合枠」とは、ある個人が物事を捉える際に参照する、その個人特有の思考の枠組みを意味する。これらについては次節3.で詳述する。さらに、第6条件では、共感的理解と積極的関心とが最低限「相談する側」に伝わっていることが要請される。相談場面对人コミュニケーション場面である以上、メッセージは双方向に受け渡され、言語・非言語の両面を駆使して伝えられる。もしメッセージが一方通行になってしまったなら、コミュニケーションが成立せず、その場において困難さは解消されないだろう。

このRogersの6条件を、本稿では「カウンセリング・マインド」の基本的理念として位置づける。

3. 「共感的理解」とは

(1) 「共感」と「共感的理解」

「共感」を辞書的に捉えると、他人の意見や感情などにその通りだと感じることでされる。しかし、「共感」だけであれば相手との関係を壊すことさえあり得る行為であり、そこに「理解」という要素を加えることが重要である(Shlien,1997)。つまり、相手の感情を単に鏡写しにするだけでなく(この時点ではトゲトゲとした感情＝感情的な理解)、「理解」することで感情の過剰な部分(トゲ)を取り除き(＝認知的な理解)、そうして自らの内に残った情報を「共感的理解」(＝感情的な理解×認知的な理解)として受け取るのである。

(2) 「共感的理解」を実践するために

「共感的理解」を実践するためにはフェルトセンスを用いることが有用である(中田、2013)。フェルトセンスとは身体感覚を伴う感情の知覚であり、例えばイライラした時の顔が熱くなる感覚などが挙げられる。苛立ちという感情と顔が熱くなる感覚が関連していることは認知的に理解されているため、フェルトセンスを用いて感情を理解すればより深い理解が可能となる。「共感的理解」のためにフェルトセンスを用いる例を挙げると、ある問題がなかなか解けない時に「相談する側」の顔が赤くなったとして、その顔が赤くなる感覚を「相談される側」があたかも自らの内に起こったことのように感じ、もしくは実際に「相談される側」も顔が赤くなるかもしれないが、それによって「相談する側」の抱く焦りや不安、恥ずかしさといった複雑な感情を自分のことのように感じ取ることができ、「理解」を深めるような場面が挙げられる。

ただし、こうした知識を持っていたとしても、実際の対応場面でフェルトセンスを用いて「共感的理解」を実践することはやはり難しい。なぜなら、「共感的理解」をしようと意気込み、頭で考えれば考えるほど、認知的な理解に偏重して感情的な理解が覆い隠されてしまうからである。それでも「共感的理解」を実践したいと思う時、1つの努力の方向性として、「相談する側」が感じていることが「相談される側」の内に生起するように「願う」という方法が挙げられる(中田、2013)。「共感的理解」が妨げられる要因の1つに「相談される側」が持つ思考の枠組み(＝内的照合枠)や過度な意欲が挙げられる。「相談される側」に先入観があったり、理解したい思いが強すぎると、感情的な理解が捨象されやすいのである。この時、「願う」という方向に努力を向け直すことで余分な心の構えが抑制され、受け身の姿勢を作り出すことができる。ただし、この時の前提条件として、中田(2013)は以下の2条件を挙げている。

- 1) 自分は分かっていない、本当は分かっていないという自覚。
- 2) 理解は容易ではない、という自覚。

つまり、「相談される側」が理解したつもりになっていることは、あくまでも「相談される側」の内に生じた仮説にすぎず、だからこそ、仮説を検証しようという意欲が生じてくるのである。こ

の仮説検証の試みが Rogers (1957) の第 5 条件につながっていく。

4. SLA が実践するために

本稿では、「カウンセリング・マインド」の基本的な理念として Rogers (1957) の 6 条件を確認し、その上で「共感的理解」の実践方法について述べた。これらを踏まえて、SLA が「共感的理解」をどのように活かし得るかについて考察する。

SLA の実践活動の 1 つに窓口対応がある。窓口対応は学生の個別のニーズに合わせた支援であり、SLA には学生のニーズを拾い上げ、そのニーズにチューニングした支援を提供することが求められる。このチューニングという作業の中で「共感的理解」を活かすことができよう。数年前には自分が質問をする側であったであろう SLA には、多かれ少なかれ困難さを乗り越えてきた経験がある。その経験を強みとして活かせることも事実だが、そこでの困難さは SLA 自身のものであって、目の前の学生のものではない。この前提に立つとき、「共感」ではなく「共感的理解」を行うことの重要性が顕在化してくるだろう。

ただし、試験期間等で対応が忙しくなると SLA 側の余裕がなくなり、Rogers (1957) の第 3 条件を満たすことが難しくなるだろう。そのような時にこそ、中田 (2013) の 2 つの前提条件を意識し、「願う」という方向へ努力を向け直すことが重要と考える。余裕のない時に相手に対して懸命に関心を向けようとする焦りが生じる。焦りは更に余裕を奪い、「共感的理解」を困難にする。しかし、「願う」ことで関心を相手だけでなく自分の内側にも向けると、余裕のない自分と向き合いやすくなる。その結果、できる範囲で相手のことを理解したいと思い直すことができ、「共感的理解」の萌芽を損なわずに済むのではないだろうか。

5. まとめ

本稿で述べた事柄はあくまでも基礎的な知識であり、実践にあたってはそれぞれの SLA の特性に応じてアレンジすることが求められる。本稿の内容を知識のレベルに留めるのではなく、実践の知とする努力を今後の SLA に期待したい。

【参考資料】

- ・ 中田行重 (2013) Rogers の中核条件に向けてのセラピストの内的努力 — 共感的理解を中心に — 心理臨床学研究, **30**, 865-876.
- ・ Rogers, C.R. (1957) The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Counseling Psychology*, **21**, 95-103. (伊藤博・村山正治 (監訳) 16 セラピーによるパーソナリティ変化の必要にして十分な条件. ロジャーズ選集 (上), pp.265-285, 誠信書房)
- ・ Shlien, J.M. (1997) Empathy in psychotherapy: Vital mechanism? Yes. Therapist's conceit? All too often. By itself enough? No. Bohart, A., Greenberg, L. (Eds.) *Empathy reconsidered: New directions in psychotherapy*. Washington, DC. American Psychological Association, pp:63-80.

7 他大学調査・合同研修の実施

(1) 他大学合同研修

他大学との合同研修は 2013 年度から実施を重ねてきた取り組みである、本年度は、同志社大学 学習支援・教育開発センター良心館ラーニングコモンズと連携の下で実施した。本研修への参加者は応募制とし、最終的に担当のバランスをみて調整を行った。

他大学合同研修の活動概要は次表の通りである。大まかには、①両組織の活動紹介、②ワークショップ、③同志社大学ラーニング・コモンズにおける研修体験、④施設見学の 4 コンテンツで構成された。なお、参加 SLA には研修レポートを課し、本研修に不参加の SLA への知見還元を図った。

<表 4-7-1. 2016 年度他大学合同研修開催要項>

実施主体	1) 同志社大学 学習支援・教育開発センター 良心館ラーニングコモンズ 2) 東北大学 高度教養教育・学生支援機構 学習支援センター
趣旨	大学生に対する学習支援を担う両センターの交流と情報交換、そして研修の合同実施等を通して、相互の組織運営体制や学習支援事業改善につなげる。特に、学習支援スタッフとして勤務している学生・院生同士を交流させることにより、自らを客観的に見つめ、これまでの活動をふり返る機会や場としつつ、学習支援者としてのさらなる能力向上やスキルアップを図る。
場所	同志社大学 今出川キャンパス 良心館 3階 ワークショップルーム 2
事前準備	・事前打ち合わせ実施 ・SLA-LA 間の質問事項の共有 (メール)
日程	2016 年 3 月 7 日 (月) ~ 3 月 8 日 (火)
参加者	◎同志社大学 ・教職員：浜島幸司、岡部晋典、鈴木夕佳 [部分参加] 井上真琴事務長、野田宣彦係長、山口夏奈係員、三宅重彰係員 ・LA (ラーニング・アシスタント)：5 名程度 (3 月 2 日のみ) ※全 LA：14 名 ◎東北大学 ・教職員：佐藤智子、足立佳菜、頼羽延 / 鈴木学 (福島大学) ・SLA (スチューデント・ラーニング・アドバイザー)：5 名 ※全 SLA：50 名超 高根大地 理学研究科 修士 1 年 物理担当 (SLA 歴：3 年) 酒井祐輔 文学研究科 修士 2 年 英会話担当 (SLA 歴：2 年) 石川遼太郎 理学部 4 年 物理担当 (SLA 歴：1 年) 米田佑 教育学部 3 年 英会話担当 (SLA 歴：半年) 楨田惇也 法学部 3 年 企画担当 (SLA 歴：半年)
内容 (1 日目)	■LA&SLA 交流・合同研修 13：00~13：25 ラーニングコモンズ内の見学 13：30~13：45 開会挨拶、趣旨確認など (東北大学) 13：45~14：30 東北大学 SLA プレゼンテーション (①自己紹介、②活動紹介) 14：30~14：40 質疑応答 14：50~15：20 同志社大学 LA プレゼンテーション (①自己紹介、②活動紹介) 15：20~15：30 質疑応答 15：30~16：15 LA & SLA 相互インタビュー& ディスカッション 16：30~17：25 東北大学 CLS 企画：交流と研修を目的としたワークショップ 17：25~17：30 閉会 (東北大学)
内容 (2 日目)	■同志社大学施設見学・研修体験 10：00~11：30 学内の関連施設見学 (3 施設) 12：30~14：00 同志社大学 LA 研修を SLA が体験
レポート 課題	1. 今回の訪問を通して学んだこと、気づいたことについてまとめてください。その際、「学習支援者」の“多様性”と“普遍性”というテーマを意識して書いてください。 2. 今回の訪問を通して考えた今後の SLA 活動に対する考えや提案を述べてください。

(2) 他大学調査訪問

本年度のセンターとしての主な調査訪問は、①早稲田大学ライティング・センターへの聞き取り調査、②早稲田大学ライティング・センター主催公開研修への参加、③関西大学主催シンポジウム参加および同志社大学ラーニング・コモンズ調査訪問を行った。

以下は、③の調査訪問報告書(頼昇廷 当時、東北大学教育学研究科博士課程後期3年)である。

大学における学習支援の在り方に関する調査研究報告書

—関西大学のライティング支援と同志社大学のLA制度の実践事例を通して—

頼 昇廷

1. はじめに

本調査研究報告書では、「新しい学力観に立つ教育」が求められている中、大学における学習支援のあり方に関して、関西大学の「ライティングラボ」と同志社大学の「ランニング・コモンズ」の事例を通して、その特徴と運営手法を整理することを目的にする。

2008年に一部改正された学校教育法の第30条第2項によると、生徒・学生の「生涯にわたる学習基盤」として見なした学力の育成に関して、「基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない」という規定が示された。つまり、生徒・学生が持つべく知能には、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「主体的な学習態度」といった側面が重要であるという国レベルの見解が確認できる。その「学力の3要素」とも呼ばれる能力を培うために、初等中等教育と高等教育を「知識の獲得・再生を重視する教育から、思考力・判断力・表現力や主体性・多様性・協働性の涵養を重視する教育へ」と抜本的な教育改革が要請された¹⁾。

高等教育の場合、各大学には「自主的な改革を通じ、学士課程教育における教育内容と教育目標を重視した取り組み」²⁾が求められるうえで、「教育の一環としての学生支援・学生相談」、「学生の個別ニーズに応じた学生支援」といった「学生の立場に立った大学づくり」、そして「学生の能動的な学修の充実を図る」なども大学教育の質的転換として重視されてきた。その中、能動的な学修の充実に関する具体的な取組には、「事前事後の学修課題の充実」、「学生の主体的な学習を促すための教材の開発、学習支援の充実」、「ラーニング・コモンズや図書館など、学生の能動的学修を可能とする環境の整備」などの重点ポイントが取り上げられている³⁾。

このような大学教育の質的転換が、大学の自主性を尊重する前提で強く求められている状況にあり、この種の改革を進めている注目すべき大学の事例として、まず、関西大学における学生の「考え、表現し、発信する力」を培うことを目的にしたライティング支援、次いで、学生の能動的学修を可能する環境整備に応える同志社大学「ラーニング・コモンズ」とその学習支援体制を取り上げる。それらの事例を通して両大学で行われている学習支援のあり方とその可能性について考察する。

2. 関西大学におけるライティング支援

(1) ライティング支援センターの発足とねらい

現在関西大学におけるライティング支援は、2010年から文学部学生の卒業論文作成へのライティング支援を皮切りに、2012年には大学間連携GPとして採択された「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング／キャリア支援」プログラムの実践を展開し、現在全学学生を対象にレポートなどを含めたアカデミックライティング支援まで発展させてきた。関西大学は当校の学是である「学の実化」を現代的に捉え直して、「考動力のあふれる人材育成」という教育理念のもと、「主体的に考

えると同時に「コミュニケーションを形成・進化しうる人材の育成」をライティング支援の目標として設定した。

具体的には、ライティングセンター（ライティングラボ）が支援体制の中心的な役割を担って、大学内の開講授業と連携したうえで、学生の個別ニーズに応じたライティング支援を提供し、さらにライティングの評価指標や双方向のコミュニケーションと評価を促進する web システムの運用などによるライティング支援の充実を図っている。それらを通して、〈考え・表現し・発信する力〉の形成を深化する人材育成に繋がるライティング支援を行っている。このようにして、学生の主体的に学ぶ態度を促進し、学習時間の増加を促すこともねらいとしている。

（２）「ライティングラボ」の取組と支援方針について

関西大学のライティングセンターは「ライティングラボ」と称している。この「ライティングラボ」には、特命教員 3 名、事務補佐員 1 名と 20 名程度の大学院後期課程の学生スタッフが配置されている。「ライティングラボ」は授業期間中の月曜日から金曜日まで開室し、11 時 30 分から 17 時までの間に、一回 40 分間で計 7 コマの相談に対応する。支援の形式は研修や訓練の受けた大学院生チューターによる利用学生との個別相談であり、利用学生は当日にライティングラボへの飛び込み利用ができるし、またはウェブでの事前予約による利用も可能である。

支援内容に関しては、レポート・卒業論文・発表資料（レジュメ、スライド）をはじめ、文章の構成、文献の探し方、引用の仕方、文章表現などアカデミックライティングのスキルの指導を基本にしている。その他、奨学金や留学申請書類の作成にもサポートしている。ライティングの支援方針に関しては、「一方的な添削をしない『気づき』を促す」という学生の主体的思考の育成を志向しており、単に学生に答えを教えるのではなく、学生に問いかけをして自分自身の課題について考えてもらうという手法を採っている。

他方、ライティングラボは大学院生チューターに対して体系的な研修制度を提供し、利用学生に対してはライティングスキルと手法に関するガイドブックの配付やワンポイント講座の開催なども行っている。また、学生のモチベーションを高めるために「ライティングラボの利用証明書」も発行されている。その利用証明書には、「学生の持参物」、「提出期限までの残り時間」、「学生が課題の意図を把握していたか」、「ラボで支援した点」などの学生の利用状況、相談結果が記録される。このような取組みを導入した結果、年間利用者数は前年度より約 500 件（815 件→1342 件）ほど増加したという成果報告があり、これら様々な運営上の工夫がライティングラボの利用者拡大につながる事が確認できる。

（３）授業連携におけるライティング支援の課題と改善

ライティングラボが様々なライティング支援を行っている中、授業連携の形で担当教員と受講学生に対するレポート課題へのサポート実践では、以下の課題があると認識されている。

①教員がライティングラボに対して、「『ラボ』が添削してくれるところ」、「学生が『ラボ』を使用すればすぐに良い文章を書けるようになる」といった過剰の期待が見られる。

②実際に学生対応を行う大学院生チューターが利用学生からの情報だけでは、そのライティング課題の意図が掴めない場面があり、大学院生チューター自身がライティング支援を行う前に利用学生に対する把握すべきライティング課題の情報を得なければならない。

③授業連携の効果として学生が教員の指示によってライティングラボを利用することになるが、『ラボ』の来室自体が目的になってしまい、利用学生本人が文章を改善しようとする意思が乏しいというケースが見られる。

上記 3 点の課題に対して、まず、ライティングラボが教員に対する広報を工夫し、教授会や出張講義・書面配布などを通してライティングラボの利用ガイダンスを行う。また、教員が学生に「ラボ」利用の指示が出している場合、教員との打ち合わせを行うことによって、授業内容と授業で出す課題を事前に把握するように改善する。そして、大学院生チューターに対して予め教員から収集

した情報を共有し、利用学生の課題状況を周知するようにする。また、学生がライティングラボに来室・相談した課題を「利用証明書」に要約し、教員へ利用証明書の発行によってフィードバックを図るといった取組みが改善策として行われている。

3. 同志社大学におけるラーニングコモنزの整備とその学習支援の取組

(1) 学生に「教えるから学ぶへ」

ラーニング・コモنزに関しては、文部科学省の用語解説によると「複数の学生が集まって、電子情報も印刷物も含めた様々な情報資源から得られる情報を用いて議論を進めていく学習スタイルを可能にする『場』を提供するもの。その際、コンピュータ設備や印刷物を提供するだけでなく、それらを使った学生の自学自習を支援する図書館職員によるサービスも提供する」⁴と定義されている。一般的には、ラーニングコモنزが大学の図書館に併設されているケースが良くみられる。

同志社大学のラーニング・コモنزは、図書館の一角ではなく、同大学の今出川キャンパスの「良心館」というビルディングの中央部2階、3階（総面積 2550 m²）にある。日本最大の学習支援施設とも誇れる良心館ラーニング・コモنزは「情報を知識に、知識を創造に変えていく“新しい学びの広場”」というコンセプトで、学生のアイデアを大事にしたうえで、そのアイデアを形に変えていく場として2013年4月に正式に運営し始めた。

良心館ラーニング・コモنزの2階は、「クリエイティブ・コモنز」として、学生たちが自主的・主体的に利用できる勉学空間であり、まず「①アイデアと出会う（共同化）→②誰かに話す（表出化）」という学生同士の交流と会話を促進する意図で作られた環境設計である。ほとんどが間仕切りのないオープン空間によって、学生同士の学び合いと学習のコミュニティの創出を促し、デジタルビデオカメラやノートパソコンなど学生証一枚で借用できるPCロッカーの整備によって学生たちの学びをサポートできるような協同的・創造的なラーニング・コモنز空間が工夫されている。3階は、「リサーチ・コモنز」として、学生のアイデアを「形」に変えていく実践空間でありながら、他者にそのアイデアを共有・議論できるようなアカデミックスキルの育成空間に設計されている。この学習空間では、学生たちのアイデアをさらに「③まとめる（連結化）→④やってみる（内面化）」ことを加速させるために、ワークショップルーム、グループスタディールームなど自分と他者と議論・討議・プレゼンテーションが行えるスペースの確保、そしてICサポートスタッフも駐在する映像編集やレポートを電子書籍に加工できるスタジオ（マルチメディアラウンジ）、専門分野の学習相談を含めた「アカデミックサポートエリア」が設置されている。学生はこのフロアで学習企画を自主的に開催したり、ワークショップやセミナーに参加したり、学習の成果物を仕上げたりすることができ、アカデミックスキルを身に付けられるような主体的の学びと実践が展開されている。

また、外国文化に触れ、多文化交流を果たすため、特別に日本語の使用を禁止する「グローバルビレッジ」というエリアも設けられている。特筆したいのは、ここで大きな液晶テレビが置かれ、海外放送（世界170局）が施設開放時間内で常に放映されていることである。テレビの周辺はトークスペースとなっており、学生たちがその海外放送を見ながら旅行先や留学先である国の現状を知り、友達同士と海外に関する意見や情報を交流することができる。この「グローバルビレッジ」を通して、普段あまり視聴できない国際情勢に関する海外報道番組、そして自分以外の学生、留学生と交流できる機会がこのエリアでより身近に手に入れることは魅力的なメリットと言える。

良心館ラーニング・コモنزの開放時間は講義・試験期間の月曜日から土曜日が、9:00から22:00までであり、スタッフによるサポートは10:00から19:00までとなる。

学生が学習サポートを放課後の19時まで受けることができ、施設も22時まで使用可能という広い時間幅は大学生にとって利用自由度が高く、利用やすさに応えている学習支援体制とみられる。

(2) ラーニングコモنزにおける学習支援体制とLA制度

良心館ラーニングコモنزにおいては、3名の専属教員によるアカデミックインストラクター、学部の教員が兼務する情報検索アシスタントと、大学院生によるラーニング・アシスタント(LA)によっ

て、チームティーチングのような学習支援体制が整えられている。支援内容に関して、学部学生を中心対象にした一般的なアカデミックスキルのチューターリングやセミナー・ワークショップの開催、PC・情報探索に関連するサポートなどが行われている。具体的には、学問の基盤スキルとなるレポートの書き方、プレゼンの方法や研究調査の進め方など学習スキルのバックアップから、学生の専門分野に関する学習相談、ICT 機器を学びに取り入れる活用法のアドバイスまで幅広く学生の学びのサポートに対応している。その中、東北大学学習支援センターのSLAと類似するスタッフは、大学院生による「ラーニング・アシスタント (LA)」と呼ばれる者である。

そのLAの学習支援活動に関して、基本としては、アカデミックサポートエリアを訪ねてきた利用学生の学習相談を受けたり、学習チューターリングを行ったりすることがメイン活動となる。このメイン活動を行うために、毎回LAの勤務開始時にまず業務の引き継ぎや共有資料の確認などの準備作業と、学生対応後にその相談内容について学習相談シートに記録したり、業務の引き継ぎ作業が求められている。それ以外、Learning Tips (論文作成、研究・発表方法、語学学習などに関するコツをまとめた冊子) の作成やコモンズプレスというLAによる発信物の編集作業もLAの学習支援活動の一部となっている。1人のLAシフト時間は毎回2時間と設定されている。

LAによる学習支援活動の質を保障する意味では、LAの募集には面接と採用後の研修が設けられている。研修の内容に関しては、学習支援のポリシー(「学生の主体的な学びを支援・後押しすること」)、学習支援者としての正しい言動(「答えを教えること」や「学びに関連しない質問(就職活動など)への返答」、「知識をひけらかして圧倒すること」、「業務で知りえた個人情報の漏えいすること」などを絶対しない)について教育訓練が行われている。

4. 考察

以上、関西大学のライティングラボと同志社大学の良心館ラーニング・コモンズという2大学の学習支援の取り組みを検討してきた。両大学に共通することであるが、第1のポイントは、学生たちにいかに主体的な学びを獲得させるかということである。関西大学では、ライティングという学生にとって不可欠な基礎的スキルを指導助言することを通して、主体的な学びを進めようとし、同志社大学では、主体的な情報収集の場を提供することで、次への主体的な学びへのステップをつかませようとしている。その際、学生同士のコミュニケーションによる協働の学びの創出を重要な媒介と捉えていることがわかる。大学における学習支援は単に利用学生個人的な基礎的スキルの修得に終わらないで、その修得の過程で、学生同士あるいは先輩・院生から示唆と助言等によって、新たな学びから探究へと至ることが期待されている。

[注]

1) 中央教育審議会「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について(答申)」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf (2017-03-22 閲覧)

2) 中央教育審議会、2008年12月24日「学士課程教育の構築に向けて」(答申)

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf (2017-03-22 閲覧)

3) 中央教育審議会大学分科会大学教育部会、『卒業認定・学位授与の方針』(ディプロマ・ポリシー)、『教育課程編成・実施の方針』(カリキュラム・ポリシー)及び『入学者受入れの方針』(アドミッション・ポリシー)の策定及び運用に関するガイドライン、平成28年3月31日、p.7(2017-03-17 閲覧)

4) 文部科学省HP、「用語解説」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1301655.htm(2017-03-25 閲覧)

SLA には、自身の活動を振り返り、次の改善につなげてもらうために、毎 Semester 末に振り返りシートを作成してもらっている。この振り返りシートをもとに、年度末には当該 Semester の新規メンバーを中心とした 1 人 30 分の個別ヒアリングの時間を設けている。ヒアリングの主目的は次期 Semester の目標を立て、これをセンター・SLA 双方で共有することである。

以下、本年度実施した振り返りシートの項目を参考資料として掲載する。

<表 4-8-1. 振り返りシートの質問項目（理系、英会話、ライティング向け）>

【1】基本事項チェック（5段階評価）

- (1) 対応に入る前にコンサル時間を適度に確保し、学生のニーズ・状況を把握したり、今回の対応の目標を共有したりすることができた
- (2) 質問しやすい・居やすい・また来たいと思えるような場づくりができた
- (3) 対応学生自身の成長を促す工夫ができた
- (4) 時間を意識して対応することができた（学生さんの予定、待ち札等）
- (5) ”先輩の良さ“を活かした対応を心がけることができた
- (6) 5分前出勤を厳守できた
- (7) 勤務時間が延びそうな場合はセンター員に相談した
- (8) 勤務中、身の回りの整理整頓を意識することができた
- (9) エチケット（身だしなみ、マナー等）を意識できた
- (10) 勤務がなかった日のカルテ（活動記録）や業務日誌等をチェックし状況把握に努めた
- (11) 未対応時も積極的にやることを探して活動できた
- (12) センターの発行物（掲示物等）を把握するようにした
- (13) SLA の他の窓口・利用方法やイベント等の案内を学生に積極的に案内し、さらなる学び・さらなる SLA 活用へのチャンネルを広げてあげることができた
- (14) センターへの「ハウレンソウ」をしっかりと実行できた
- (15) 自分以外の SLA の対応も意識しながら勤務することができた（ピアレビュー含む）
- (16) 他の SLA にもわかりやすい活動記録（カルテ）を書くことができた
※対応時間いっぱいカルテが記入できなかったときは除外して考えてください
- (17) ブリーフミーティング等、シフト内の学び合いに貢献することができた
- (18) 部会活動等を通して、同科目メンバー間の学び合いに貢献することができた
- (19) 他の SLA と積極的にコミュニケーションをとることができた
- (20) 新規 SLA : 積極的にわからないことを他の SLA に質問した／新規以外の SLA : 積極的に新規 SLA のフォローや指導を行った

【2】記述式

- (1) あなたの SLA の活動に対する現在のモチベーション（ニーズ）は何ですか？上位 3 つを回答し、可能な人は、その割合を示してください。【ニーズ・モチベーション】
- (2) 【1】の(2)・(3)に関わる、あなたの対応上の工夫や意識していることを教えてください。【工夫・意識】
- (3) あなたが今期の活動全体を通じて、身についた・成長したと思う点を挙げて下さい。【成長】
- (4) あなたの SLA の活動における現在の課題点・反省点を挙げて下さい。【課題】
- (5) あなたの来期の活動目標を教えてください。【目標】
- (6) 今期の活動の中で、「いいな」と思った他の SLA の対応や言動等ありましたか？あれば、誰のどんなふるいか、教えてください。【他己評価】

- (7) センターへの要望や提案がある人は自由に書いてください。【要望】
- (8) 総合して、あなたの今期の活動の満足度(100点満点)とその理由を教えてください。【満足度】

【3】ミニレポート

今期の自身の活動を振り返り、印象に残ったことなどを中心に、思ったこと・感じたこと・考えたことを自由に記述してください。(箇条書きではなく文章で)

<表 4-8-2. 振り返りシートの質問項目（企画向け）>

1. 今期の活動で、自分が成長した、学んだと思う点を教えてください。
2. 今期の活動で、自分がもっとこういうことを学びたい、こういうスキルを習得したいと思った点を教えてください。
3. 企画 SLA 全体の課題についてあなたが感じたこと、考えたことを自由に書いてください。
4. あなたにとって、企画 SLA の活動をしたいと思えるモチベーションは何でしたか？（=あなたにとっての SLA 活動とは何か？活動する中で、何を得たいのか？等） 上位3つを教えてください。可能であれば、それぞれがモチベーション全体に占める割合を示してください。

- | | | |
|---|--|-------------|
| ① | | (%) |
| ② | | (%) |
| ③ | | (%) |

5. 学習支援センターに対する要望や、運営や活動に関する新たな提案があれば、なるべく具体的に書いてください。

6. あなたの今期の活動の総合評価は、何点ですか？ 点数とその理由を教えてください。

総合評価 00 点 /100点満点
理由

メッセージ：今期の自分の活動をふり振り返り、来期の自分に対して、あるいはこれから企画 SLA として活動する仲間や後輩に対して、伝えておきたいことを自由に書いてください。特に、今後の活動において参考になる情報や意識しておくべき注意点などについても触れてもらえるとありがたいです。

5. SLA 活動振り返りレポート

SLA の活動を通して学んだこと

理学研究科 数学専攻 博士課程後期 3 年
SLA 数学担当 廣津 孝

はじめに

わたしは 2 年間、学習支援センターで SLA として数学を担当させていただきました。わたしが SLA の活動を通して学んだいくつかの教訓を紹介します。これから SLA になられる方、また SLA を続けられる方、さらには学習支援の在り方について検討されている先生方の参考になれば幸いです。

1. 学生のありのままを受け入れる

SLA に入ってまず驚いたことは、学生によって理解度が結構違い、考え方には個性があるということです。そこで、学生自身が十分に認識できていないような強みや弱みを含めて、学生のありのままを受け入れ、個々の考え方に寄り添った対応をすることが重要だと学びました。

わたしが SLA に入って間もない頃は、有名な解法や考え方に基づいて対応のプランを考える傾向があり、いわば「問題ベース」の対応をすることも少なからずありました。しかし、同じ問題でもさまざまな考え方があることを目の当たりにして、学生がどのように考えているのかを逆に知りたくなり、徐々に「学生ベース」の対応ができるようになっていきました。問題を解くまでのレベルに達していないような場合には、前の単元まで戻って定義を丁寧に復習するところから始めなければならぬこともしばしばありました。また、学生によっては、教科書や参考書に載っていないような解法について意見を求められることもありました。学生の理解度に応じて暗中模索の道を進まなければならないのは勇気がいることではありますが、学生のさまざまな考え方に触れて、わたしの考えを分かち合う中でたくさんの発見があったので、今振り返ると「とも育ち」の意味がそこにあったのではないかと感じます。

2. 「分からなさ」を突き詰める

SLA における学生支援で学んだ大切な教訓は、「分からなさ」を突き詰めることの重要性です。わたしが対応した学生の多くは、どこが分からないのか分からずに質問に来ていました。どこが分からないのかを何となく分かっている、それを言葉にできないと言った方が正しいかもしれません。そこで、学生の「分からなさ」を明確にしていく作業が必要になるのですが、それが想像以上に難しく、根気のいる作業でした。学生への聞き取りが不十分であったために、後で学生の意図する方向に軌道修正が求められることもしばしばありました。「模範解答」とは別に学生の「分からなさ」をよく分析し、それに基づいた対応を行うことが、学生の深い理解につながるということを学びました。

学生によってさまざまな「分からなさ」があるので、答えを教えるというよりは、対話によってその「分からなさ」の核心に迫っていくことで、学生のニーズに寄り添った対応ができると思います。また、分からない部分が自分の力で分かるようになったときの喜びは勉強の醍醐味だと思うので、それを奪わってしまわないように、自分で気づきが得られるようによく配慮することも大切だと思います。

3. 学生の興味を引き出す

数学の「分からなさ」は、突き詰めてみると、意外にも些細なものであることが多いと思います。その「分からなさ」が積もり、苦手意識となって挫折してしまい、数学の面白い部分までたどり着けないのはもったいないことだと思います。そのために、数学を学ぶ上で、理論の全体像や、その背景と応用を知ることが非常に重要だと感じています。それが勉強のモチベーションとなって、立ちほだかる壁を乗り越えていく原動力になるからです。わたしも特に学部1年生のとき、いわば「木を見て森を見ず」状態だったので、勉強の目標がなかなか定まらずに苦労した経験があります。今振り返れば、大学に入って間もない頃に将来の勉強に向けてのナビゲーション役がいると何と頼もしかったらうと思いますが、それをできるのがSLAの仕事の醍醐味ではないかと思います。

また、昨今は、学生の理解度を図り、思考力を試すために、解く過程を重要視する数学の問題がブッシュされがちですが、それだけでは数学を学ぶ意義を十分に見いだせないのではないかと思います。この風潮が高まった結果、「この問題を解いてどういう意味があるのか」というような数値設定の問題が多数派を占めているのではないかという現状があります。実在の現象や応用を主体に考えることの多い物理や化学とは違って、これは数学特有の問題なのかもしれません。問題を解く過程からだけでなく、解いた結果からも学べるような重要な背景や応用に基づいた数学の問題を提供することが大切だと思います。これは、SLAの活動の中で知り得た貴重な見解です。

おわりに

今後、SLAが中心となって学習支援の輪が広がり、東北大生の学習意欲がさらに高まることを期待しています。また、学生の興味を引き出すような重要な背景や応用に基づいた数学の問題がたくさん出題されるようになって、数学に興味を持つ学生にあふれた世の中になってほしいと願っています。

私の SLA 観

より良い学生対応を目指して

理学研究科 化学専攻 博士課程後期 3 年
SLA 化学担当 島森 拓土

1. はじめに

私が SLA の門を叩いたのは、2015 年の 3 月のことでした。在籍期間としてはわずか 2 年間でしたが、私の人格や人生観は SLA で確立されたと言っても過言ではないと言えるでしょう。今回、ありがたいことにこのような個人執筆の場を設けていただきましたので、この場をお借り致しまして、私の SLA 観を述べさせていただきますと思います。

2. 質の高い対応を目指して

(1) 前提—学生の「分からなさ」はどこにあるのか

私が思うに、SLA としての存在意義は、「学生の分からなさを学生自身に認識させたい」という部分にあると思います。理系科目の質問に訪れる学生の分からなさは、一見すると「知識不足」という部分にあると思われがちです。しかし、知識不足だけが本当の原因なのだろうか、と少し思索してみると SLA らしさが現れると私は感じるのです。

少なからず学生は授業に出席し、眠い目をこすりながらも講義を聴講しています。講義の内容が理解できなかったとしてもとりあえずノートを取り、毎週配布されるレジュメ等を収集しています。その意味においては、学生は少なくとも一度は講義から知識や情報に触れているということになります。しかしやはり、ノートやレジュメを見返したところで問題が解けるようになるわけでもなく、学生のなかの優先度が低い授業から次々と“筆筒の肥やし”化されてしまいます。そして学期末を迎える頃には、とうに収納限界を越えた筆筒のなかから必死になって必要な情報を探さなくてはならない羽目になるのです。

つまり、同じ「分からなさ」という単語のなかにも、単に知識や情報の有無からくる「分からなさ」にくわえて、それらを持っていながらも活用する術を知らないという「分からなさ」も含まれていることに注意しなくてはなりません。したがって、我々が支援を行うにあたっては、質問に訪れる学生を「知識不足」という括りだけで認識して対応することは不十分であり、いかに与えられた知識や情報を学生自身に整理し咀嚼させるかという視点に立つことが求められます。すなわち、我々理系 SLA が行うべき支援は、知識や情報を「与えること (=教育)」ではなく、学生の無意識下にある知識や情報を「引き出す (=支援) こと」に力点を置かなければならないのです。

(2) 方法—「引き出す」対応とは

そもそも「引き出す」ことを念頭に置いた対応とはどのようなものなのでしょうか。私の考えとしては、「引き出す」対応とは、「SLA と学生が設定した対応の方針軸に対して、学生が持つ知識や情報のうち何が使えるのかについて検討しそれを誘導する」対応、とも言い換えられると思います。そのなかで SLA は、解答に至るまでの説明の過程やストーリーをある程度明確に持つ必要があります。さらには、対応中の対話のなかで登場する (必要となる) 知識や情報も把握しておかなければなりません。幸い、理系科目の多くは解答に至るまでの過程が定型化されており、レポートなどのライティング科目と比較して解答の自由度が比較的少なく、なおかつ SLA 自身も学部生時代に経験したものがほとんどであるため、このような意識を持つことは比較的たやすいと言えるでしょう。

「引き出す」対応を効率よく進めるためのツールとして「よい質問」をすることも忘れてはなり

ません。「よい質問」とは、SLA 側が様々な質問の形式（Open/Close Question、5W1H など）や内容（答案の情報、答案に現れない情報、学生自身の情報など）を適宜組み合わせながら発問することによって、学生が SLA の意図を受容できるような質問のことです。SLA は、対応の時々で「よい質問」を繰り返し投げかけながら学生の理解度を把握、共有し、さらには、現在考えていることは対応全体のどの部分に相当するのか（現在考えていることの意味づけと位置づけ）、それが分かればどんなことに繋がるのか（次のステップへの足掛かり）、対応開始時に解決すべき問題との相関はあるか（対応軸の再認識）、について言及することが求められると思います。

対応のなかには、「よい質問」を繰り返していくにつれ SLA が思い描く方向とは異なる方向に対応が進みそうになる場合があります。これは、SLA が当たり前だと思い込んでいた論理や発問が実は学生にとって親しみのないものだったという、SLA と学生間の理解の不一致が引き起こすものだと考えられます。この不一致による隔たりは対応の終着点へ向かう過程で取るに足らない障害のようにも思えるのですが、私はこの部分にこそ学生の本質的課題が凝縮されていると強く感じています。この学生がなぜこの部分で詰まっているのか、それは SLA の説明の論理が破綻しているからなのか、あるいは、前提となる知識がそもそも理解できていないのか、だとすれば対応のどの部分に戻る必要があるのか、などについて思案する必要があります。このような学生の本質的課題を見抜けるかどうかという部分は、「問題ではなく、人を見る」という SLA の基本指針に集約されると思いますが、さらに踏み込んで言うならば、「SLA 自身が自身のすべての発言の意図を認識しているかどうか」という部分に帰着できるのではないのでしょうか。

3. さいごに

私は SLA が TA などの他の指導形態と異なる所以は、なによりも“主導権が学生にある”という部分につきると認識しています。その観点から改めて SLA の立ち位置を見つめ直すならば、理想的な SLA とは、言うなれば“ピンボール台のフリッパー”のような立場に立つことではないでしょうか。すなわちそれは、学問という広いピンボール台の上をふらふらと転がり落ちてくる学生という球に、向かうべき方向と初速を与える役目に他なりません。実際のピンボールとは違い、学生自身には意思があるため、えてして球が思わぬ方向へ飛ぶことや穴に落ちてしまうことがあります。SLA に求められている姿勢は、学生という球が穴に落ちないように球を制御することではなく、球の軌跡が思うように定まらなくとも、フリッパーとしての自らの立ち位置をわきまえたうえで（フリッパーは台下部に固定されている）、その過程をしっかりと見つめ、振り返り、導いていくことにあるように感じます。

振り返ってみますと私はこの 2 年間、サポート室の皆さまをはじめ、他部会の SLA の皆さまという強力な“フリッパー”に刺激をいただきながら、学生支援という台を自分なりに飛び回ってみました。具体的な実績など、目に見える形に遺せなかったという未練こそ残りますが、未来の SLA 活動のなかで何か継承できる部分が残せられたのであれば、これ以上ない幸せです。

SLA における研修とその振り返りの重要性について

理学研究科 地球物理学専攻 博士課程後期 1 年
SLA 物理担当 相澤 紗絵

私は修士課程 2 年次に SLA に加入したため、勤務を始めてから 2 年程度しか経っていない。しかし、SLA 内で多くのことを学び、考える機会を得た。そしてそれは現在の私の対応ポリシーの形成に大きく寄与している。本稿では、2 年間の間に一番私が考えた「振り返りとそこから得る学び」という点について述べたい。

1. 加入経緯と現在

私は大学院修士課程から東北大学に入学した、いわば外部生であった。東北大学の全学教育というシステムも、それを支える学習支援センターについても何も知らない状態であったが、SLA 物理担当 OB の方から誘われ、修士課程 2 年次の 4 月から SLA 物理担当として活動を開始した。当初私は前述の通り全学教育システムも知らず、先生のことほとんど知らず、他 SLA との学問的知識の差を実感することもあり「他 SLA と同様に対応できるのか」という非常にネガティブな気持ちが強かったように思う。勤務の回数を重ねることで少しずつ慣れていき、多くの SLA と話すことで自分の対応ポリシーを形成しつつ現在に至るが、ここで私が特筆して述べたいのは、何がポリシーの形成に大きく影響を与えたのか、という点である。もちろん自分が気持ちのよいと思う対応を目指す、楽しい対応を目指す、など色々な目標はあるが、私がもっとも気にして対応しているのは、「極力否定語を使わない」ことと、言葉遣いに気を配ることである。

2. 学生対応における言葉遣いの重要性

自身の「極力否定語を使わない」という考えがどのように形成されたかを振り返ってみると、それは私が実感した「違い」にたどり着く。通常の窓口対応中や研修合宿、ブリーフミーティングなどで SLA は他 SLA やサポート室スタッフと対話する機会が多く設けられているが、そのような中で自身の感覚と他者の感覚がとても違ふと実感した出来事がいくつかあった。

例えば研修合宿ではグループワークの時間が設定されており、テーマに対し議論し発表する場がある。毎年活発な議論がなされるが、発表するという事はチームとして一つのまとまった答えを出さねばならないことが多い。そのような中で私は強く意見を言われると怯んでしまい、遠慮してしまうことがあった。相手の考えも私の考えも両方一理ありどちらが悪いのでもないが、その時私は「意見の言い方」がとても重要だと感じたし、一方で自分の主張の弱さを自覚した。しかしその夜の懇親会で別のメンバーに「こう言われてこう感じたのだけど、どうかな？」と話してみると、そのメンバーの答えは「そこまで気になる言い方ではない」というもの。通常の窓口対応でも、他 SLA の対応を観察していて「なぜそのような言い方をするのだろうか」と思っても、それは全く問題にならないということが多々あった。つまり、私自身が感じる他者の言葉の強さは、他の人にとっては過度に敏感であったということである。結論として私は他者よりも自分が「過敏に考え、邪推し、反応しすぎる」ことを自覚したのだ。一方で、対話の中で別の SLA は私がそのような感じ方をすることを知って驚いていた。

しかし対利用学生のシーンを考えたらどうか。利用学生の中にも私と同様に感じる人がいるかもしれない。例えば、利用学生が「ここをこの式を使ってこう式変形をして…」と説明する場面を考える。どこかで明らかな間違いがある場合、「いや、そこは違うのでは？」という場合と「なるほど、じゃあ順番に確認してみると…ここはこれであっているかな？」というのでは同じ指摘でも感じ方が異なるのは理解に容易いだろう。特に私のような過敏な人間は「いや」というとっさの一言にグサッと感じてしまう。杞憂に終わることも多いと思うが、相手がどれだけ気にするかわからないか

からこそ、そのような言葉は極力避けるべきだという考えに至ったというわけである。

3. 研修を通じた気づきと SLA 同士の学び合い

紙面の都合上一例しか挙げることができないが、他にも多くの点で他者との違いを目の当たりにした。一言の感じ方、学問的知識や教養、SLA に対する考え、対応の方針など、様々である。このような違いはこれまで育ってきた環境や付き合ってきた人、考え方に大きく依存するが、最初から「育ってきた環境が違うから」「私にとってはこれが当たり前だから」「これが私にはベストだから」と考えてしまいがちだ。私も当初、いくつかの研修において「そんなことは当たり前だ」と思っていて「なぜわざわざ時間を割いて研修するのか」と非常に疑問だった（私の場合は私の感覚が過度だったわけなので、なおさらであった）。しかし、それはたまたま私の得意な分野だったからであり、別の誰かにとっては必要であったのだ。逆に定例会でのケーススタディなど、別の誰かにとっては不必要かもしれないものでも私にとって必要だったことは多くあった。振り返ってみると、このような研修や対話の機会がなかったら私は違いを自覚することはなかったのではないだろうか、と思う。私は時間が許せば研修に出席する、という積極的でも消極的でもない態度であったが、面白いことに結局、自分には不必要だと思っていたことは、すべて自分に必要なものであった。実感を伴わない知は実感を伴う知と比較して記憶に残りにくい、ということは多くの人が身をもって経験していることだと思うが、実感する／自覚する難しさには、その学習機会の得られにくさも相まっていると感じる。研修の時間というのは他の人も多く出席するので、SLA にとって、「違いを実感する」非常によい学習機会になっているのではないだろうか。

また通常人は、「自分ができて相手ができないこと」に向き合うほうが容易である。しかし利用学生の多くは SLA とのやりとりのなかで「相手ができて自分ができない」ことを実感するのである。もちろん利用学生と SLA では年齢の差や専門性があるので、あまりネガティブに捉える学生は多くないと思うが、我々 SLA も常日頃から自身もまた学習者であることを強く自覚し、対応にあたるのが大切である。「利用学生にとってよい対応」を考える節にそのような気持ちがあるのとならないのでは、また少し気持ちの向け方が変わり、謙虚な気持ちで対応に臨めるのではないだろうか。

違いを自覚したところで対応にどう活かしていくのかは、人それぞれであって正解はない。優しくれば、柔和であればよいというわけではなく、強い言い方や少し突き放すような対応も時には必要だ。重要なのは、常に自省の態度を忘れないことであると私は考えている。

4. おわりに

本稿執筆中に 2 年間の活動を振り返って、研修や定例会に多く出席したなという感想を抱いた。研修の内容はもちろんだが、私は他 SLA からの質問内容や考え、あるいはプレゼンターの方の受け答えの仕方から様々なことを学んだ。この人はこのように感じたのだな、とかこの人は私に近い意見だった、あるいはそういうアイデアが出てくるのか、といった驚きも含め様々である。これらは私の中で普段の生活や対応に生かすよう、善処している。研修と想像すると堅苦しい気もするが、内容と合わせてディスカッションの時間がとても身になり、他 SLA の考えを垣間見ることができるので、後輩には積極的な参加をおすすめしたい。

SLA は学部 3 年生以上が勤務しているため、卒業や留学などによって加入から 1, 2 年のうちに SLA から離れてしまう人が多い。個人としては、その期間に多くの研修に出席し、人との対話を通して「他者と違うこと」、「自身の長所や短所」を自覚し、気づき、学んで欲しいと思う。そして組織としては、そのような研修や対話の機会を多く持てるような環境を作れると良いのではないかと思う。

今後の SLA について

-私的な経験をもとに-

理学研究科 物理学専攻 博士課程前期 3 年
SLA 物理担当 五十嵐 聡

1. はじめに

私は 2013 年の 10 月から 2017 年の 3 月まで学習支援センターで SLA として活動した。その活動を振り返ると様々なことが思い出される。しかしながら、それらは断片的なことであって、その当時自分自身がどのように感じ、考えたかについては思い出し得ない。私は過去を振り返らないタイプなのだ。そのため本稿では私自身の成長や振り返りではなく、今、現時点において SLA ないし学習支援活動において、私が考えていることを書きたいと思う。具体的には今後の SLA の活動の課題なりを私的な経験に基づいて書いた。

2. 主体的な学習者

(1) 主体的な学習者と SLA の利用学生

私が高校生だった頃、周り大人たちには、大学生というのは主体的な学習者だ、自分で何を勉強するかを自分で決めるのだ、高校生のように受動的な姿勢ではいかんだよ、的なことを散々言われたと記憶している。そしてまた私もそう思っていたし、今でもそう思っている。主体的な学習者とは、ここでは、自ら学習の動機付けを行い、計画し、実行できる学習者と定義する。反対に高校などで一般的に行われている、カルキュラムが決められ授業を受けさせられる学習を受動的な学習ということにする。専門用語で言えば、それぞれアンドラゴジーとペタゴジーと言われる概念かもしれない。

では、SLA で私が接してきた学生たちはどうだっただろう。残念ながら、私が SLA の活動で出会ってきた多くの学生は主体的な学習者と呼べるものではなかったと思う。彼らの多くが、大学のカルキュラムで予め定められた授業を取る。そして、課題を出されるか、テスト前になるかして、学習をするのだ。そうして、科目の内容が全く理解できないことを自覚し、SLA に来るのである。つまり、彼らは少なくとも、それらの科目において主体的な学習者ではない。何故なら、外部から学習の動機付けが行われているからである。

(2) SLA としての実践

では、そんな彼らに私は何をしてきたであろうかと自問する。SLA の活動として私が目指していたことは、「彼らをどうにかして主体的な学習者へと変遷させよう」という試みであったということができる。しかしながら私はその活動において常に一抹の不安を抱かざるを得なかった。確かに彼らはそれらの科目において主体的な学習者ではない。しかし、他の科目においては主体的な学習者ではなかろうか。例えば、よく理系の窓口を利用する学生がいる。彼は物理の科目においては、主体的な学習者ではない。彼は同時にしばしば、英会話カフェも利用する。そこでは彼は主体的な学習者である。このようなケースは往々にして起こりうる。すべての科目にあるいは授業に関して主体的な学習者となるには無理である。当然、大学のカルキュラムによっては必ず取らなければならない科目が存在し、自ら動機付けのある科目だけを取ることはできない。ここにおいて私は一つの疑問に出会うわけである。果たして私は、「彼らをどうにかして主体的な学習者へと変遷させよう」とする必要があるのだろうか。「興味がないなら、ないで良いではないか」と私の脳が呟くのである。何故なら君たちは大学生なのだから。こうして私は、SLA の窓口対応において「彼らを、動機付けがどうであれ、自ら計画を立て、学習する、半主体的な学習者にしよう」と少しトーンダウンした目標をいつの間にか設定していた。もちろん SLA の中には物理や化学、数学を好きになってもらいた

いと思ひ窓口対応に入っている SLA もいるし、実際そのように対応しているかもしれない。しかしながら、SLA の活動のどれくらいが主体的な学習者としての動機付けに貢献できているかと問われればそれは微々たるものではないかと私は考える。そして、主体的な学習者として最も重要なのは、内部からの動機付けでないかと私は思う。そしてこの部分がこれからの SLA の主要な課題ではないだろうか。

3. 自らの経験としての主体的な学習者

(1) 私的な経験

さて、少し私の論述にも飽きてきたところで、私的な経験について語ろうと思う。私はつい最近、主体的な学習者となる機会があった。もちろん専門分野では、主体的な学習者というより研究者という割合が強い。私が述べようとしているのは、教養教育の範囲での主体的な学習者である。私は、この半年近く、主体的な学習者としてフランス哲学を学ぶことになった。私がフランス哲学に触れるきっかけとなったのは、研究の合間に見ていた YouTube でのことである（研究の合間に YouTube を見ていたのか、YouTube を見る合間に研究をしていたのか、については未だ議論の余地がある）。私が見たのは、サルトルというフランスの哲学者の特集の動画だった。当時私は、就職活動も終盤という人生の岐路にたっていた。そんな折に耳にしたサルトルの言葉は、私になんとも言えぬ強烈な印象を残した。そこで早速、Wikipedia 先生で調べてみると、サルトルの哲学は構造主義と呼ばれる考え方によって過去のものとなったということである。こうして私はどうしてサルトルの考え方は時代遅れとなったのか、その理由を知るために学習者となったのである。そうして自分の専門外の分野を学ぼうと思うと、なかなか難しい。初学者の私はどの本から読み始めれば良いのか、そもそも哲学書ってどのように読み進めるものなのか。私はこの時になってなぜ SLA に文学部会がないのかと憤慨した。


(2) 今後の SLA の活動として

この短いストーリーで重要な点は二つある。一つは主体的な学習の動機というのは日常のちょっとした偶然によって生まれるということだ。私はただ、研究の息抜きに動画を見ていただけであり、フランス哲学を勉強してみようなどとは 1 フェムトメートルほども考えてはいなかった。私とその動画を見たのは全くの偶然なのである。そして、もう一つは専門外の分野でこそ SLA の必要性を感じるという点である。私は専門の分野において SLA を利用したいと思ったことは記憶にない。何故なら専門であれば身近に聞くべき人はたくさん存在するからである。しかし、専門外の勉強をしようとするとうまくいかない。そして、学部 1、2 年生の教養教育とは自分の専門以外の分野を幅広く学ぼうとういう期間でもある。しかしながら、SLA に来る学生のほとんどは自らの専門的な学習における非自主的な学習者であることが多い。工学部の学生の物理数学などがその一例だ。

この 2 点を消化するために重要なのは、企画 SLA と窓口 SLA の連携ではないかと私は考える。企画 SLA の意図は、私の例で言えば YouTube なのである。学習の動機となるきっかけ、偶然を意図的に作り出すことはかなり難しいとは思いますが、それだけに今後の企画 SLA の活動を充実させてゆく必要があると感じる。また、その企画によって動機づけられる学生を窓口結びつけることができれば良いのではないかと考える。そのためには企画と窓口の SLA がより密なコミュニケーションをとっていくことが必要であり、窓口の SLA が企画 SLA に参入しやすいような体制を作り上げる必要があるだろう。

4. おわりに

最後に SLA の活動中にお世話になった SLA サポート室のスタッフ、SLA の皆様に感謝したい。皆様のおかげでとても楽しい活動をすることができました。いろいろ注文ばかりつけてしまったようですが、今後の健闘を祈っております。



成長が見える対応とは

— 2年間の活動を振り返って—

理学研究科天文学専攻 博士課程前期2年
SLA ライティング担当 林田 友利

1. はじめに

私は2015年度から2016年度までライティング部会で活動を行っていました。ライティング部会では唯一の理系メンバーでしたが、文系の人と深く関わる場面は今までありませんでしたので、なかなか面白い経験だったと思います。今回は私が2年間の活動の中で、対応時に心がけていたことについてお話しします。

2. 成長が見える対応

私が対応のとき心がけていたことの一つは、『おみやげ』を作ることでした。それは今日やったことのメモだったり、ライティングに関する教材資料の写しだったり、とりあえず対応終了時に学生側に残るものを作るようにしていました。これのきっかけは、部会かシフトか定かではないんですが、どこかで『対応のおみやげ』という単語を聞いたことだったと思います。

少し話題は変わりますが、プロ格闘ゲーマーとして有名な梅原大吾さんはゲームに飽きることの原因について、成長を実感できないことを挙げています。「ゲームに飽きるのは、ゲームがつまらないからではなく自分自身が変化しないからだ。成長を実感できれば飽きずに、前向きに努力を続けられる」と彼は言っています。これはゲームに限らず勉強でもそうです。せっかく一所懸命に勉強をしても、何も身につかなかったり何が身についたかがわからなかったりしたら、これからも頑張ろうという気持ちにもなりません。

おみやげを渡すことは、学生の成長を可視化することになります。そのため、学生にやる気をだしてもらうのには有効なアイテムです。ライティングの場合だと学生のモチベーションにしばしば差があり、まずはやる気を出してもらうという目的からこのようなことを行っていました。

実際の対応では、対応中にやったことのまとめメモをよく作っていました。やりはじめた当初は私の方でまとめることも多かったのですが、次第に「ここメモした？」などと声をかけて学生自身にメモしてもらうようになりました。ライティングの対応は会話が多かったり、「後で直しておいてね」などと実際の修正は対応中にしないことが多かったりして、アドバイスを書き留めることを忘れてしまうこともあったので、学生がきちんと対応の内容をメモできているかはよく気をつけていました。

ライティング以外の部会でも、対応の最後にまとめを行おうという動きがあります。まとめで対応中にできたことと課題として残ったことを確認すれば、成長を実感できる上に、これから何を努力すればよいのかがはっきりします。それらを形にのこすよう心がけてみると、よりよい対応ができるのではないのでしょうか。

3. 最後に

SLAでは『ともそだち』という言葉掲げているように、SLA側だけでなく学生側の努力も重要だと思っています。今回紹介したようなおみやげは学生成長を実感してもらい、前向きに努力できるよう促す方法の一つです。

最後にSLA活動中は学習支援センターの方々、そしてSLAメンバーの皆様に大変お世話になりました。この場を借りて、お礼申し上げます。

SLA の活動を通して感じた 3 つの多様性

理学研究科 数学専攻 博士課程前期 3 年
SLA 数学担当 千葉 俊平

0. はじめに

私は修士 1 年の前期の途中から SLA として活動を始めました。本業の学生対応だけでなく、同じ数学部会のメンバーや他部会の方々、サポ室の皆さんとの議論、交流からも多くのものを得られたと思っており、今回このような執筆の機会を頂いたことに心より感謝いたします。本年報では、私が学生対応を通して感じたことを、「多様性」をキーワードにまとめてみました。

1. 数学の「分からなさ」の多様性

① 数学対応における SLA の基本は、学生の「分からなさ」を見極め、整理し、解消すること

数学対応をする SLA は、まず、学生の「分からなさ」をきちんと見極めることが重要だと思う。この「分からなさ」が学生自身にとって顕在的な場合の対応は容易だが、そうでないケースも多い。大学の数学、特に 1 セメスターの数学の内容は高校数学と重複している部分も多く、それを改めて厳密な定義を用いて再構築するため (ϵ - δ 論法などが顕著な例)、今まで分かっていたつもり的事项が分からなくなり混乱することも多々ある。その潜在的な、モヤモヤとした「分からなさ」をまずは自分の体験に照らし合わせて受容し、整理・明確化することが重要である。この「分からなさ」、学生の躓きポイントは十人十色で、それを対応の中で見定めるのはとても難しかったが、対応前の十分なコンサルと、分からなさのラベル化はそれを発掘する上で有効だった気がした。

② 対応前コンサルについて

対応前コンサルとは、対応に入る前に学生の学習状況や当該単元の理解度を把握しておくことである。理系の質問を持ってくる学生の多くは、「この問題が分かりません。」という形で質問をしてくる。一方 SLA として対応する上で問題の内容以上に重要なのは、事前にどこまで考えてきたのか、問題を解く過程のどの部分が分からないのか、例題を探すなどの努力をしているか、といった学生の取り組み姿勢である。それを聞き出すことで、学生さんの混乱している部分が明確になり、ポイントを絞った効率的な対応ができる。また、対応の前に、その対応の終わりのゴール（問題を解けるようになるのが主目的なのか、その背後の理論との結びつきを知ることが目的なのか等）を見据えておくことも、双方にとって満足度の高い対応になるポイントだった気がする。

③ 「分からなさ」のラベル化について

上述の通り学生の「分からなさ」は人それぞれだが、その多様な「分からなさ」をある程度体系的にラベル化しておくことで、対応中に「ああまたこのパターンの躓きだな。」と腑に落ちることが多かった気がする。例えば、広義積分の収束を示す問題は、極限値を求めずに収束性を示すという手法に馴染みがないため、方針が分からないという学生が多い。これを（講義積分の）「あるある」として認識しておくことで、良対応の雛形を用意して対応に当たることができる。

2. 質問に来る学生のモチベーションの多様性

① 質問に来る学生のモチベーション

数学の理解度に個人差があることは当然意識していたが、質問に来る学生が求めている理解のレベル（モチベーション）にも差があることが印象的であった。同じレポート問題の質問であっても、取りあえず回答欄を埋めて提出したいという気持ちで来る学生（「A さん」とする）もいれば、授業の例題の方針に沿って解いて得られる答えと、それとは異なる自分なりの解法で解いた答えが合わなくて質問に来る学生（「B さん」とする）もいる。活動を始めた当初は、「A さん」の方が対応は容

易だと感じていた。「Aさん」はレポート問題の方針を理解すれば、そこで需要と供給がマッチして対応が終わるからである。一方「Bさん」に対しては、よりレベルの高い需要に応えるためSLA側も試行錯誤が必要となり、自分も理解が不十分であることに気付かされる場面も度々あった。

② 質問に答えるだけでなく、来た学生の「成長」を促す対応の工夫を

部会でのミーティングやサポ室の方々の考えを聞く機会を通して、「Aさん」に対して、聞かれたことに答えるだけでは学習支援者としては不十分だということに気付かされた。当時の自分には、学生の「成長」をサポートしようという視点が欠けていた。では、学生の「成長」をサポートする対応とはどのような対応か。そこには個性あふれるSLAの多様な対応の武器があった。「このあたりは理論を理解していないと単位危ないよ。」と注意喚起をする人もいれば、その学生が理解していない部分を徹底的に掘り下げ、どこから勉強しなおす必要があるかをアドバイスしている人もいた。最終的には、質問内容(問題)の背後にある数学の楽しさ、面白さを感じられるような話題を提供して「Aさん」のモチベーションを上げることが、自分にとっての武器となった気がする。レポート問題の計算と教科書の理論を結びつけてより深い理解につなげたり、別の問題の結果と見比べることで得られる考察についてコメントしたり、その問題を見た時に自分が見えている数学の世界を(おせっかいかもしれないが)出来る限り伝えられるよう心掛けた。この手の話題作りには、過去のSLAの対応記録やSLAの数学メンバー同士の議論も非常に役に立った。最初は全然やる気がなかったり、レポート問題に手が出ず絶望していたりした学生から「ちょっと頭がよくなった気がする」、「絶望だった統計に希望の光が見えた」といったコメントをもらった時は非常に嬉しかった。

3. SLA側の支援の仕方の多様性

① 数物演習の対応時における(数学部会×物理部会×数物TA)の力

私は水曜日に勤務することが多く、この曜日は工学部の「数物演習」に関する質問が多かった。この科目はその名の通り、微分方程式やベクトル解析などの数学的な事項と、それらの応用として運動方程式や電磁気学といった物理的な単元を網羅している。対応の際は、単元ごとに物理メンバーと数学メンバーで分担するが、時には一緒に対応に出ることもある。そういう時、同じ数物のテキストを見ていても、物理SLAと数学SLAで捉え方が違うと感じることも多かった。その違いをシェアすること自体有益であったし、学生も交え、問題から一步踏み込んだ当該単元のその先の話をしたことがあり、その対応は「ともそだち」を実感した対応として、強く印象に残っている。

② 数学SLA同士の知見を共有する力

数学部会では、よくある対応や上手くいった対応などの事例検討を行い、そこから得られる知見を共有してきた。その中で、熟年のSLAが培ってきた対応の技の数々や、Wolfram alphaの使い方を教えたり、教科書で類題を探すコツを学生に伝えたりといった対応を通じて学生を成長させる工夫は多いに参考になった。また、数学のメンバー同士でも、学生の「分からなさ」に対する見立て(本質的な原因分析)が異なることが多く、それに纏わる議論は日々の対応の改良に役立ったとともに、数学の奥深さを痛感した。

∞. さいごに

質問に来る学生のニーズ、モチベーションは様々あって、疑問を解消してより深い理解を得るに至るプロセスもまた多様にある。数学の答えは一つに決まると言われるが、解を導くまでの発想や過程、理解の仕方は一通りではなく、むしろ無限にある。その無限にある視点を一つでも多く吸収することで、数学の理解度は間違いなく向上する。そして何より、新たな視点を得ることは、数学を学ぶものにとって楽しいものであるに違いない。その楽しさが学習のモチベーションにつながり、モチベーションがまた、より質の高い疑問を生む。SLAが数学の、学問の楽しさを体感し、学生同士の「ともそだち」を実感できる場としてこれからも発展していくことを切に願っている。

半期の SLA 活動を通じた自分の中の変化

理学部 宇宙地球物理学科 天文コース 4年
SLA 物理担当 津久井 崇史

1. はじめに

私が SLA になったのは4年の後期で来年度からは別の大学に入学することにしたので、たったの半年の活動になってしまいました。本稿では、半期の活動を通じて考えたこと、成長できたことについて述べていきたいと思います。

2. SLA になったきっかけ

僕はそれまでゼミなどをやったりしたことがなく、物理を図書館にこもって一人で勉強していました、せっかく物理を勉強しているのに本を読んで詰め込むだけではよくないなと思っていたところに SLA をやっている友達に誘われて SLA の説明会を受けに行きました。SLA では大学1、2年生の学生の物理の勉強をサポートするだけでなく、SLA 全体としてより良い学習支援ができるように成長していく組織であるということを知り、物理の学習を支援することで自分の物理への理解が深まるだけでなく、将来、教育や人と関わるような仕事をしたいと考えていた自分にとって、人と関わり、学習支援を考えられる良い経験ができると考え SLA の採用試験を受けることにしました。

3. SLA をやってよかったこと

SLA の先輩や同期、後輩はとても優秀で面白い人たちで話しているといろいろな意味で刺激を受けました。サポート室の足立先生や佐藤先生はもちろん、長い期間 SLA に携わっている先輩たちは学習支援に対してとても深く考えていて経験の差を感じました。このような人たちと質の高い学習支援を提供するという共通の目標を持って活動することができ自分もすごく考えさせられました。

考えたことを人に話したりすることが今までの大学生活ではほとんどありませんでしたが、グループミーティングや足立さんとの振り返りなどでその場で自分の考えたことを言葉にするということが求められ最初はすごく言葉足らずになってしまっていたのですが、初めの頃よりかはずいぶんと自分の考えを簡潔にわかりやすく人に話すような能力は鍛えられたのかなと感じています。先輩たちには学部生で実感していなかった研究の厳しさや、卒業研究へのアドバイスももらったりすることができ物理に対する取り組みを見直すきっかけにもなりました。

4. 活動中での気づきと対応の変化

最初のうちの学生対応では対応をうまく進めることができず、学生にベストな支援をすることができず、終わってしまったことが何回かありました。

学生が問題につまずいてしまったときに、この問題どうすればよかったんだっけとひとりで考え、思い出すために、あれこれ教科書を調べたりしてしまいました。その結果対応が止まってしまう、学生の考えていることをうまく聞き出せず、学生を孤立させてしまいました。対応中は学生目線で考えわからなさを一緒に解決していくスタンスにいるよりも、わからない問題をすぐに把握して教えなければいけないんだという意識が強くなってしまい、わからなかったらどうしよう、間違っただけをいっただけでどうしようかと焦ってしまっていたのです。記憶が曖昧な分野は学生と一緒に学生目線で思い出しながら対応をすることができるチャンスだったなと今となっては思います。

対応を見てもらった先輩には忘れてしまった分野でも相手の考えを整理してあげるようなスタンスでやると良いというアドバイスをもらいました。学生にどう考えたかをまず聞き、わからない箇所や曖昧な箇所を一つ一つ教科書に戻って確認し、詰まっていたところは、自分で考えている過程を伝えながら、一緒に考えていければよかったなと反省しました。

対応に慣れていくと様々な学生のニーズを満たしつつどう SLA として良いサポートをするか考えさせられました。たとえば、物理の高度な知識は必要とされませんが、電磁気の授業でテストのために物理系の人が必要とするような高度な理解をしていきたい学生から、数学が苦手であまり授業についていけないため、必修科目の数学のレポート課題の締め切りまで時間がなく、理解は要らないから、答えを導く上で必要な式を教えてほしいという学生など、学習支援センターにくる学生のニーズは様々です。SLA では学生一人ひとりの背景に合わせた対応が必要になってきます、しかし学生のニーズを満たすことと、自分たちのしたい学習支援は必ずしも一致しません。

たとえば、テスト前日に、自分で解くと時間がかかるので答えをゲットしにサポート室にきました！と駆け込み寺のような使い方をする学生に対してニーズを満たしつつ、良いサポートするというのはどうすればいいのでしょうか。

何も考えないで手取り足取り解答に導くことはその場では学生は満足するかもしれませんが、学生の自立した学習を支援するという観点からすると、学生が自立する妨げとなってしまいます。そのような対応にならないように心がけたのは対応時間内で少なくとも学生が今抱えている問題に対して自力で少しでも解決に一步近づけたという実感を持てるような学習支援です。

たとえば授業についていけない生徒で、レポート問題に必要な公式を教えてほしいと要求するような学生はごく基礎的な問題を自分で参考書や教科書に戻って調べることができないことが課題であるといえます。そのような学生には、一人でも家で問題を解き進めることができるように参考書を渡して該当の箇所を自分で探し、読んでもらってから問題を解いてもらったりしました。時間がなかなか埋められない学生は、条件を整理することや計算を具体的に実行することが課題であるといえます。そうした場合には「こうしたら具体的には計算できないかな？」など背中を押してあげることで後は自分で計算してもらい、計算に自信を持ってもらいました。

5. 自分の中の変化

教えるという立場に立ってみると、教えるためには高い理解度が要求され、もっと理解度が高い人であったら学生により良い影響を与えられたのではないかと感じる部分が多かったです。そのため自信をもって簡潔にわかりやすく人に伝えられるくらい理解しているのかどうか、以前よりも厳しく自問自答しながら学習や研究に取り組むようになりました。

研究や日々の学習では問いかけるということが大事だと思います。SLA の対応では、学生に問いを重ねて、学生の問題となっている点を見つけるだけではなく、「何が今知りたくて、何が今わかっているの？」「こう考えたら何かわかるかな？」「この結果が出るためにはこの式はどうなっていたらいいかな？」のように問いかけによって問題の解決につながる新たな視点を提供するようにしていました。学生への問いかけるということを通じて、自分に対しても問いかける力がついたように思います。自分が学習しているときに、自分に問いかけることによって、いろいろな視点から問題を眺めることができ、以前よりも自分の力で教科書を読んだり、自分の力で研究を推し進めることができるようになったと感じました。

6. まとめ

半期でしたが非常に濃い経験をさせていただきました。この経験は何をするにも糧になると思います。半期でやめてしまうのはとてももったいない思いをしているところですが、SLA で学んだこと、得たものをさらにバージョンアップして次のステップに活かさせていけたらと思っております。

私が経験した「企画」という仕事

経済学部 経営学科 4年
SLA 企画担当 笹川 一平

1. はじめに

はじめまして、の方もいるかもしれません。今年度 11 月から発足しました SLA 企画部会の笹川です。就職のため半年間の活動ではありましたが、創設メンバーとしてメンバーと共に「前例」を作っていく難しさと楽しさを感じた大変充実した時間でした。そんな企画部会での経験を振り返りながら、前半では僕が活動を通じて学んだことについて特に大きく 2 つのことを取り上げます。後半では SLA メンバーへ向けたメッセージを書きたいと思います。

2. 企画を通じて学んだ 2 つのこと

企画 SLA には、①自分が大学で成長できた経験を多くの後輩たちにもさせてやりたいと考えたこと、②内定先の企業で将来的に企画に関わる仕事がしたいと考えていたので、その経験値を詰めるだろうと考えていたことの 2 つの理由から応募することを決めました。そして大学を学生にとってもっと魅力的な場所、意味のある場所にするために、「Academian Talk : 奏でる楽問」というイベントの実現に取り組みました。結果として当初の自分の目的が達成できただけでなく、これから仕事をするうえで、また人として大切な 2 つのことを学ぶことができました。

1 つ目は「自分の意見を伝えられるようになった」ことです。自分は学部 4 年で、就職活動を終えてから SLA の活動に参加しました。就職活動を通じて、自分は人の話を聞くのは得意であるものの、例えばミーティングの場などで自分の意見を言うのが苦手だと感じていました。今思い返せば、自分の意見が否定されるのが怖かったり、自分の意見に自信が持てなかったりしたためだと思います。しかし聞き役に徹しているだけでは少なくともミーティングという場においては組織に貢献できているとは言えないと思っていたので、そんな自分を SLA の活動をきっかけに変えようと思っていました。企画部会は繁忙期にはほぼ毎日ミーティングなど意見を交える場があったので、これを使わない手はないと思ったのです。「自分の経験に基づいて意見を言う」「自分の意見が否定されてたとしてもあくまでも意見が否定されただけであると理解する」などを実践することで、少しずつ自分の意見を言えるようになりました。

2 つ目は「相手を起点にした発想」ができるようになったことです。僕は今期の企画部会の活動のメインであったイベント企画チームのリーダーをやらせて頂きました。リーダーとして様々なタスクをメンバーに割り振る中で気を付けていたことは、①主体的に参加してもらうために権限を委譲したことと、②特定のメンバーに仕事が偏りすぎないようにしたこと。各自が自分で考え、工夫できる環境を作ることで、メンバーは楽しみながら主体的に参加してくれるだろうと考えていたので、「この仕事についてはあなたに一任するので好きなようにやって欲しい」と権限を特定の個人に大きく移譲するように心がけていました。ただし、負担が大きくなりすぎたり一人で抱え込みすぎてしまわぬよう、メンバーとこまめにコミュニケーションをとり、メンバーの状態を考えながら仕事の割り振りを行うよう努めていました(実際にできていたかはわかりませんが...笑)。その過程で、相手を意識して物事を考える癖のようなものが少しずつ身についたかなと思います。この考え方の癖のようなものは非常に汎用性が高く、資料一つ作る時であっても少しでも相手に親切なものを作ろうという考え方ができるようになったように思います。またこの「相手を起点にする発想」は、相手が情報をどのように受け取るかを良く考えなくてはならない広報活動でも、大いに鍛えられたと思います。

3. SLAの皆さんへのメッセージ

このように企画部会の仕事をしてきた僕ですが、「1、2年生への学習支援をする」という同じ志を持つSLAの皆さんに、伝えたいことが2つあります。1つ目は「僕らがやる意味」を考えることです。大学の組織である学習支援センターがやる意味があるもの、学生である僕らSLAがやる意味があるものかどうかを常に考えて、自分たちしかできない活動を追求してほしいと思います。企画で言えば、学習支援という枠組みは幅広く、やりたいことは無限に湧き出てくると思います。しかし、他の組織がやった方がいいことをわざわざ我々がやるのは無駄であり他の組織に任せたい方がいいわけです。僕らである意味のある活動を行うことが、SLAらしさにつながり、他の組織ではカバーできない範囲の学習支援に繋がると思います。それこそがSLAの存在する意味であると自分は思います。

2つ目は「よりよく」を追求する姿勢で臨むことです。来てくれた1年生によりいい経験をさせてあげるにはどうしたら良いか、より学習効果を高めるにはどうするか。よりよきの姿勢を持ってチャレンジすれば、SLAの仕事がより楽しく、より自分の糧になる活動になると思います。なんとなく・漫然と活動するのではなく、よりよきの追及を楽しみながら、SLAの活動をますます発展させてもらいたいと思います。

3. 最後に

最後になりましたが、佐藤先生、足立さん、真衣さん、ライさん、そして企画SLAメンバーの皆さん、本当にありがとうございました。特に奏でる楽問の企画では至らないことだらけでしたが、皆さんに助けを頂きながらなんとかやり切ることができました。たくさんのお話を学ばせて頂き、卒業前の半年間を皆さんとの活動に費やしたのは本当に自分の糧になったと思っています。尊敬できる皆さんと過ごせた充実した半年間は、僕にとって宝物です！本当にありがとうございました！！

今後のSLAおよび企画部会の益々の発展を祈っています。

SLA と学びあい

工学部 機械知能・航空工学科 3年
SLA 物理担当 早坂 遼一路

はじめに

2016 年前期より、私は学部三年に進級すると同時に、物理担当の SLA として活動を始めました。始めの 1 年間の活動を通して変化した、SLA の活動に対する私の考えをまとめます。

1. SLA を始めて

SLA として一年間活動した、私の感想を一言で表すならば、「SLA の仕事は難しい」です。

去年、学部 3 年の前期に物理担当の SLA に採用され、初対応は物理数学に関する質問だったと記憶しています。しどろもどろに問題の解法を、教科書を参照しつつ学生に教えました。自分の理解度が低く、明瞭な説明ができませんでした。対応を終えて、もっと上手な説明ができるように理解を深めなければ、と思いました。SLA の本分が学びあいであることを考えれば、少々の外れな反省です。

問題の答えを教えることが SLA としての第一目標であると本当に思っていました。ところが、実際は全く別次元にあることを、働き始めて知ることになりました。

2. 学びあいの理解と体験

「学びあい」は分かっているつもりでしたが、SLA にとっての学びは、学生の質問に答えることで自分の理解が深まることだと思っていました。しかし、「学びあい」に対するこの考えは勘違いでした。それを実感させられた印象深い体験を 2 つ合わせて書きます。2016 年度後期説明会で足立さんのお話にあった「学びあいの図」と、後期に力学演習の対応をした経験についてです。

「学びあいの図」は SLA が“わかりたいもの”に対して“学生”と対等の立場で取り組むことを示したものです（図 1）。この図を初めて見て、私は違和感を覚えました。SLA 側の“わかりたいもの”に関する理解なしに、SLA が目標とする、学生に考えさせる対応が成立することは困難であると考えていたからです。あくまで SLA は、学生より立場が上（指導タイプの図 2）でなければ、質問に答えることなど到底不可能であると思っていました。しかし、SLA の活動開始から約半年が過ぎた頃の対応で「学びあいの図（図 1）」を体験しました。その対応は、理学部の授業である「力学演習」の難問でした。工学部生である私には、その問題の解法の方針が立たなかったため、学生に彼の分かる範囲で説明してもらいながら考えました。自分と学生が考えていることを共有しながら、二人で意見を出し合い、最終的に解決に至りました。この時、まさに「学びあいの図」の状況にあり、「学びあいの図」が理想であることを理解しました。また、学びあいのためには SLA と学生の意識共有が肝心だと思いました。学びあいの状況下でこそ、学生は自分の力で問題を解くことのできた達成感を得ることができます。そして、解決に至ったプロセスは私にとっても、非常に勉強になりました。SLA が学生に教えることで、学びになることもあります。SLA が掲げるのは、本当に「学びあいの図」に示される学びあいでした。

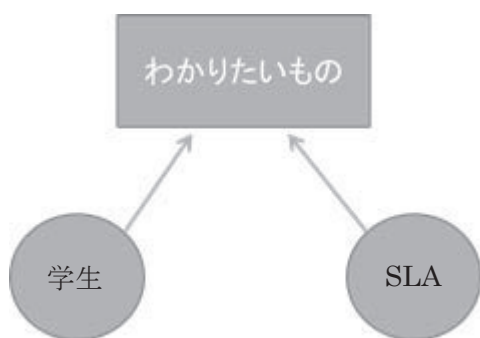
3. 学びあいに必要なこと

「学びあいの図」の中で必要な能力は何か、と考えたとき、学問の理解度以上に重要な点があると思いました。そして、それが SLA 以外のところでも非常に役に立つ能力であることに気が付きました。その重要な点は 2 つです。一つは「相手の考えを理解し促進する」こと、もう一つは「自分の考えをその場で説明する」ことです。両者とも学生と SLA の間で意識を共有するために必要なことです。これらが上達すれば、対応は飛躍的に改善されると思います。また、自分の考えをその場で説明

するというのは、SLA 以外でも大切なことです。しかし、研究室や授業ではプレゼンをすることは求められても、説明の大部分は準備されている内容なので、その場で簡潔に説明する機会にはあまりなく、練習していないと思い通りにできないことがあります。私が SLA を始めた頃は、大学 1、2 年で学んだことを深く理解することが重要であり、復習できることが大きなメリットであると思っていたのですが、今は前述の 2 つの点がそれ以上に重要であり、それらを練習できる SLA はとても勉強になると考えています。

4. SLA の楽しさ

工学部で唯一の物理 SLA である私としては、理学部の学生と比較すると、物理の力が不足していますが、彼らと議論することは得るものが非常に大きいと感じます。当初は理学部生のあまりの物理好きに少々困惑することもありましたが、自然に私も物理好きが増してきて、学生にも物理の面白さを伝えたいと思うようになりました。先輩 SLA が物理のエッセンスを分かりやすく説明するのを聞いて、自分も説明できるようになりたいと思いました。また、SLA には今までの授業で得た知識を活用できるだけでなく、他人の学びを促進する良い質問をする力や、コンサルティングなどの全く新しい能力も必要です。物理学以外に様々なことを考える必要がある、というのは難しいですが、それが SLA の楽しさでもあります。



<図 1. 学びあいの図>



<図 2. 指導タイプの図>

おわりに

1 年間の SLA としての活動を経て、あるべき SLA 像の輪郭が不鮮明ながらも、浮かび上がってきた気がします。それでもなお、理想とする対応は遠いと感じる理由は、後期から実施されたピアレビューでの意見や自己反省を通して、学びあいのための技術が未熟であることを実感するからです。例えば「効果的な質問をする」とか「お勧めの参考書を紹介する」、「敢えて分からないふりをして学生に説明させる」などの、今までは余裕がなくてできなかった技術を実践し、学生にとってより充実した時間を作る工夫をしたいです。学生だけではなく自分にとっても収穫のある活動をしていきたいです。



資料

■資料 A 利用学生アンケート（全データ） 理系

解決	満足	点数	コメント（ニックネーム）
○	○	100	$x \geq 0$ を示すところで困っていましたが、 $x < 0$ と仮定して矛盾を導くことで $x \geq 0$ を示せるという方針を教えてください、その方針で $x \geq 0$ を示すことができました。ありがとうございました
○	○		物理の大学の授業は、高校とは違うので理解するのが大変でしたが、今回質問したことですっきりしました。ありがとうございました。
○	○	100	定理の用語・記号から細かく解説していただいて助かりました。今後の勉強の方針も少し立ちました。
○	○	100	ていねいに対応していただき、予想以上に問題がサクサク解けてよかったです。ありがとうございました！
○	○	100	基本から丁寧に教えていただけて助かりました。自分が解き終わるまで待っててくださったのが嬉しかったです。隣で指導をしていらした SLA の方の声が大きかったのが気になりました。事前予約者のサービスはしていないのでしょうか…？
○	○	100	一緒に解き方を考えていただき、すぐ助かりました。
○	○	100	テキストの解答を見て分からなかったことが理解できるようになった。
○	○	100	物理化学がいまちよく分からなかったので、考え方を示してもらってよかったです。
○	○	100	とても分かりやすかった。
○	○	90	分からないことを具体的に、深く聞いても、それに対して的確な答えを出していただき、ありがとうございます。また来ます。
○	○	100	本当に助かりました
○	○	100	極限の近似の仕方を理解することができました。
○	○	100	解答より分かりやすかった。
○	○	100	行列のイメージをつかむことができました。これからさらに行列に触れて、慣れていけたらいいと思いました。
○	○	100	定義で少し勘違いをしていたことが原因で間違い詰まっていたのですが、見事に解決することができました。一緒に考えつつ進められるので理解が深まっていると思います。
○	○	90	問題の意味が理解できないという質問でも、丁寧に答えていただき、とてもよく理解できました。
○	○	100	とてもわかりやすい説明で、相談してよかったと思った。基礎的なところで、今後理解できないと大変なことになっていたと思うが、つぶせてよかった。丁寧に根気よく教えてもらってありがたかった。
○	○	100	式の説明を分かりやすくしていただきました。困ったらまた利用したいです。(汗)
○	○	85	問題が解決したのでよかったです。
○	○	90	解決できてよかったです。
○	○	100	SLA はいいぞ！！
○	○	90	物理非選択の私にもわかりやすい解説でした。しっかり復習したいと思います。
○	○	100	つまづいている部分と似た式で簡単に考えられるように導いていただき、すごくよく分かりました。
○	○	90	過度のイメージが深まった気がする。復習のやり方も教わったので、実践しやすい。頑張れそう。

○	○	100	細かいところまで教えてくれてとても参考になりました。また利用したいです。
○	○	100	問題を解く方針が経たず困っていたので、とても助かりました。新たな知識も増えたのでよかったです。ありがとうございました。
○	○	100	最後までしっかり考えていただきました。
○	○	100	優しく教えて頂きました。解決の糸口が分かったので良かったです！ありがとうございました！
○	○	100	赤い本が嫌になりそうでした
○	○	100	解き方を何通りか説明してくれて理解が深まった。
○	○	100	k T の件は未来の自分に任せておこうと思います笑 数学はまた明日お願いします！！
○	○	90	ライティングの時間外に来てしまいましたみませんでした。ていねいに対応して頂き、とても助かりました。これからもよろしくお願いします。
○	○		問題は解決できた上に途中で浮かんだ質問にも答えてくれたので、理解が深まった。
○	○	80	いっしょに考えて解決したのでよく分かってよかったです。
○	—	100	解き方を分かりやすく説明してくれて助かった。
○	○	100	スッキリしました！！
○	○	100	どうしてもできなかったところが解けてとても助かりました。
—	○		数弱ですが単位を取れるようにがんばります！これからよろしくお願いします！とりえず呪文の意味は分かり…そう…。たぶん
○	○	100	少し悩んでいたことがスッキリしてよかったです。これからも利用したいと思いました。
○	○	100	わからないところがわかるまで付き合ってもらってよかったです。わかりました！ちゃんとして！
○	○	100	写像を定める前に写像の定義域の任意の元が基底で表せることを確認するということが気づけなかったのですが、今回その部分を確認できてよかったです。また、任意の元が基底の一次結合で表せることの示し方も学ぶことができてよかったです。
○	○	100	問題が悪かったと思います。
○	○	100	半ばあきらめかけていた定義式をイメージすることができすっきりしました。ありがとうございました！
○	○	100	SLA はいいぞ！！
○	○	100	丁寧にわかりやすく教えてもらって助かりました。
○	○	100	問題が解決してよかったです。解くポイントも教えていただきました。ありがとうございました。
○	○	80	長時間丁寧にに対応していただきとてもありがたかったです。
○	○	100	分からないところがスッキリしただけでなく、さらに計算式を簡単にする方法も教えていただき、とてもためになりました。
○	○		丁寧に、疑問に答えてくださってありがとうございました。
○	○	100	もやもやしていた部分が解決できてスッキリしました！丁寧に教えていただきました。
○	○	100	理解できなかったところが分かってスッキリしました。ありがとうございました！！

○	○	100	数物の予習で回答の記述に不安があり SLA を利用した。初めての利用だったが、親切に対応していただけて満足している。
○	○	100	いっしょに考えて下さってとても楽しかった。
○	○	90	教えてもらいながら自分で考えることができてよかったです。これからもお世話になりたいと思います。
○	○	100	とても丁寧に対応していただきました。もう一度自分で解きなおそうと思います。
○	○	100	根気よく一緒に悩んでくれて、解決したときはとてもスッキリしました！！
○	○	100	授業でやった基礎の部分も自信なかったけどそこからフォローしてもらえて、かつ課題に + α のことも教えてもらえてスッキリした！
○	○	80	分かりやすくて良かったと思います。高校の教科書とか大学の参考書とかも何冊かおいてあると嬉しいです。
○	○	100	数式の具体的な状況の説明もしていただいたので、イメージがつかみやすかったです。ありがとうございました。
○	○		不安だった計算の確認ができた
○	○	100	とてもわかりやすかったです。また利用します！
○	—	80	問題いくつか解決したので良かったです。
△	○	100	丁寧に対応していただきありがとうございました。
○	○	100	授業内容のよくわからなかった点について、討論ができた。
○	○	90	遅くに行ったのにきちんと対応してくれたのがうれしかったです
○	○	100	同値類のイメージや、問題のイメージを図に表して方針を立ててくださったので、とても分かりやすかったです。式の計算に頼りすぎないで図を用いて視覚的に理解することが大事だと思いました。
○	○	100	なんとなくわかったつもりになっていた、分からなくなっていたところを理解できました。ありがとうございました。
○	○	100	とても分かりやすく教えていただいた。理解できた時のスッキリ感を久々に味わった。
○	○	100	ととても優しくお教えいただきました。ありがとうございました！
○	○	100	シュレディンガー方程式自体がよく分かっていなかったのが納得できてよかったです。
○	○	100	長い時間ペースに合わせて教えてくれて助かった。
○	○	100	定義からやさしくおしえていただき、理解することができました
○	○	100	Thanx
○	○	100	自分一人ではわからなかった方程式の解き方が分かりました。一緒に考えたので自分でも解いている感覚があつてよかったです。ありがとうございました！
○	○	100	質問したこと以外にもさらに加えて具体的にアドバイスをもらえてよかった。
○	○	100	問題以外のこともおしえていただき助かりました。
○	○	100	とても分かりやすく教えてもらえました。さらにグラフのツールなども教えてもらえてとても助かりました。
○	○	100	丁寧にゆっくりと教えてもらい、授業内容を理解できました。次回の授業に自信が持てそうです。ありがとうございました。
○	○	100	問題の意味から分らなかつたけれど、考え方解き方が分かりました。ありがとうございました。
○	○	100	とても分かりやすく教えていただけました。証明なども教えてもらい、参考になりました。ありがとうございました！
○	○	90	分らなかつたところが、少しスッキリしました。また利用したいと思います。ありがとうございました。
○	○	90	化合物の立体配置を考える際に模型を使いながら考えることができたので、イメージしやすかったです。

○	○	100	詳しく教えていただいて、これからも頑張れそうです。また、分からないことがあったら、お願いします。
○	○	100	丁寧に対応していただけてとてもありがたかったです。専門分野をわかりやすく教えていただけたのもうれしかったです。専門ではない部分も一緒に考えていただけたのが心強かったです。また機会があればぜひ利用させていただきたいです！
○	○	100	親切に対応してくださり、ありがとうございました。完全には理解できていませんが、考える手がかりや全体像が捉えられたとおもいます。家で復習して、理解を深めたいです。
○	—		教え方が丁寧でわかりやすかったです。
○	○	100	調べたら出てきました。お騒がせしました。
○	○	100	一緒に計算の過程を追ってくれてわかりやすかったです。
○	○	80	軽いノリで、でもわかりやすかったです。
○	○	100	非常に初歩的な質問だったにも拘わらず、かゆいところに手が届くような解説でした。
○	○	100	すごく丁寧にわかりやすく教えてくださってありがとうございました。ちゃんと定義を抑えることの大切さを学びました。
○	○	100	物理の考え方がはっきりしてよかったです。
○	○	100	わからないところがほぼ全てわかった
○	○	90	助かりました。ありがとうございました。
○	○	100	簡単にイメージを持てる例から始まり、少しずつ一緒に考えながら丁寧に時間をかけて教えていただけてよくわかりました
○	○	100	とても分かりやすくて、疑問点が全て解決しました。とても助かりました。ありがとうございました。
○	○	100	助かりました！ありがとうございました！！
○	○	100	同じような質問でも、丁寧にわかりやすく答えてもらい、助かった。先輩と数学トークもでき、楽しかった。
○	○	100	週 2〜3 くらいで本当に助かります。ありがとうございました
○	○	100	自力で読んででも到底理解できない教科書の文章をわかりやすく具体例を用いて教えてもらい、大変助かりました。今までの数物演習で丸暗記していた(?) 公式もきちんと意味が取れてよかったです。
○	○	100	分かりやすかったです。図で説明してくれて助かりました。
○	○	100	基礎的な内容にも丁寧に答えてくださって疑問が解決した。ありがとうございました！！
○	○	100	よくわかる解説でした！
○	○	100	意味不明のものが完璧にわかりました。
○	○	90	親切でした。
○	○	100	解き方が分かった。
○	○	100	とてもわかりやすく基本から教えていただきました！長い時間ありがとうございました！
○	○	100	4 題くらい分らない問題あったけど全部一緒にいろいろ考えてくれたのでよかったです。
○	○	100	初歩の内容も分かりやすく教えてくれて助かった。
○	○	100	概念的にも教えていただき、ありがとうございました。
○	○	100	大学数学は難解なものばかりなので、SLA の常連になりそうです。これからもよろしくお願いします。
○	○	100	基本まで立ち返って段階的に教えてくださってしっかり理解することができました。ありがとうございました。テスト頑張ります
△	○	80	問題の意味が分らなかつたが少しずつ見えてきたのでよかったです。
○	○	100	疑問点を具体的に答えてくれてスッキリしました
○	○	90	たくさん量があつて、長時間対応して頂いて助かりました。

○	○	100	分かりやすく教えてくれて助かった。
○	○	100	スッキリ！！SLAの方は1年生の内容まで覚えていて、すごいなと思った。
○	○	100	本当にありがとうございました。
○	○	100	悩んでいたポイントまで気づかせてもらって、本当に助かりました！また来ます！
○	○	100	問題を解決できました。ありがとうございます。
○	○	100	dr-dθわかりました。
○	○	95	役に立ちし詳しく話してもらったので楽しかった。
○	○	90	SLAの人は答えを教えるのではなく、一緒に答えを考えるとこの姿で教えてくれた。そのおかげで、自分で答えに行き着くことができた。
○	○	100	たくさん質問してしまいましたが、丁寧に教えていただきすべて理解することができました。
○	○	100	短い時間でたくさん解決してもらいました。
○	○	100	分子軌道はノリでがんばります。
○	○	100	実験の考察がよくわからなかったが、一緒にSLAさんが考えてくださって解決しました。スッキリしました。ありがとうございます！！
○	○	80	授業で意味わからなかったところが少しわかるようになったのでうれしかったです。
○	○	100	自力では解決しなかった問題もSLAと相談することで100%理解して解決できました。
○	○	100	テイラーの定理の使い方がわかってすっきりしました。物理ではなぜxを三角関数でおくのかわかったので活かしていきたいです。また来ます。
○	○	100	1時間半も長々と質問に付き合っただき、感激しました
○	○	100	解析学Aの問題が全く分からなかったのですが、どんなことを証明したらいいのか、詳しく教えてもらい、理解できました。自力でもできるように頑張ります。ありがとうございます。
○	○	100	神がかった。
○	○	100	とりあえず上に行ってみます。
○	○	100	立て込んで混んでいなかったので、ゆっくりと考えさせていいただきました。おかげで難しい問題でしたが、なんとか解決理解できました。ご対応ありがとうございました！
○	○		専門外の分野もていねいに指導してもらえました！
○	○	100	絶望的だった統計学に希望の光が差しました!!!!丁寧に分かりやすい対応ありがとうございます！またお願いします◎
○	○	100	すごく丁寧に初歩の知識にさかのぼって教えてくれたので、理解が深まった。
○	○	90	自分でちゃんと考えられるのがよかったです。
—	—	90	自分では「理解したつもり」であった点をクイズ形式でポイントをおさえた質問をくださるによりあぶりだすことができた。たいへんありがたかった。説明が分かりやすかった。
○	○	100	自分では全然手がだせなかった問題を理解できるようになりました。とても分かりやすく説明して頂きありがとうございます
△	○	70	また質問に来ようと思いました。ありがとうございます。
○	○	100	問題の意味を具体例を挙げながら説明してくださったので解き方だけでなく内容の理解も深まりました。
×	○	80	疲れました。
○	○	100	一緒に教科書を読みながら考えてくれて良かったです。
○	○	100	今回の範囲について、私はほとんど理解できていなかったが、演習後にはしっかり概要をつかむことができた。また、私が場

			所を移動しなくてもいいように、私が座っていた机で解説してくださった。とてもありがたかった。
○	○	90	必要な知識を知ることができるのが良い。他の問題にも生かせる。
○	○	100	中間テストの勉強でわからないところがあったので利用しました。わからないところが解決したのでよかったです。ありがとうございます。
○	○	100	全面的に教えるのではなく、行きつまったときだけ教えてくださるので自力で解き切るクセが付き、とても助かりました。
○	○	95	わかりやすかったです。
—	—	89	説明がわかりやすく助かった。問題解決のときに、始めに指針を示してくださるとありがたい。
○	○	100	とてもスッキリしました。
○	○	90	今さら積分の概念について質問するのも気が引けましたが、しっかり教えてくださって良かったです。
△	○	100	動画を使った説明で、イメージをつかみやすくてくれた。軌道のイメージが少しつかめた。
○	○	100	とても分かりやすく納得できてよかったです。また、来ます。ありがとうございます。
○	○	90	分かりやすかったです。ありがとうございます。
○	○	100	疑問が氷解しました。ありがとうございます。
○	○	100	数式を見て解法をばっと思いつくところがすごいと思いました。
○	○	100	何度も根気強く(笑)教えていただき理解できました。長時間ありがとうございます。
○	○	90	分かりやすい説明で理解をうながしていただいととても助かりました！！
○	○	95	腑に落ちた説明が多かった。また、研究室等、アドバイスがすぐタメになった。
○	○	90	毎週ありがとうございます。
○	○	90	ポイントがまとめられていて非常に分かりやすかったです。
—	—	90	イメージつかめました。
○	○	100	丁寧に一緒に考えてくださったのでよく分かりました。
○	○	100	ゆくり説明してくださてすごくよかったです。
○	○	100	分かりやすかったです。
△	○	83	間違いの原因である可能性をいくつかあげてくれたので、その部分を直そうと思います。ありがとうございます。(◎)
○	○	100	非常に丁寧に分かりやすかったです。ありがとうございます。
○	○	100	すっきりしました。説明が分かりやすかったです。
○	○	100	1人で2時間以上並んだところがあったり解決できました
○	○	100	二時間の間熱心に対応していただき本当に助かりました。雑談も適度に交えながらの説明楽しかったです。
○	○	100	とてもわかりやすく、私が納得するまで丁寧に教えて下さったので、本当に助かりました。ありがとうございます。
○	○	100	定義を一から教えていただいたおかげで難しい証明のときかたが分かりました。
○	○	100	よかったです。
○	○	100	とてもわかりやすく、別席も丁寧に教えていただけました。
○	○	90	どういう順に進めていかなど、とても計画的に考えていただきました。解き方も、何が分かっているかを明確にしてから始めてくれて、その部分以外は私が解くのを促してくれる感じで、自分で解けているかんじがしてよかったです！
○	○	90	1問は初歩的なミスでしたが気付いて良かったです。また自分の気づけないことに気づけたのでよかったです。

○	○	100	解決しました。ありがとうございました。
○	○	100	一緒に計算していただけだったので、自分の計算ミスをすぐに見つけてもらえてよかったです。
○	○	100	分かりやすくてまた利用しようと思いました。さらに勉強をもっとしようと思いました。
×	○	80	親身になってそうだんしていただけたのがよかったです。これからよろしくおねがいします。
○	○	100	一緒に考えて下さって優しく教えて頂きました！
○	○	100	思ったよりも楽しかったです。
○	○	100	もやもやが晴れました。分かりやすい解説ありがとうございました！
○	○	100	分かりやすかったです
○	○	100	とても難しく感じた問題も良く分かり、とても助かりました。
○	○	95	まだ理解が甘いと思うので、数をこなして解決できるようにしたい。
○	○	95	かみつきにくい間違ったがうまく説明してくださった。
○	○	100	最後までねばり強く対応してくれて嬉しかったです。2日連続で行ったかいがありました！
○	○	100	熱心に考えてくださり本当にありがたかったです。
○	○	95	短い時間でしたが、丁寧に教えて頂きました。
○	○	80	英語で調べてもらってよかったです。
○	○	100	解き方を丁寧に教えていただけてとてもよかったです。
○	○	100	よくわかりました。
○	○	100	わからなかった部分を丁寧に図を用いてわかりやすく説明してくださった。また、「わからないです」と言ったら、そこまで話の難易度を下げて説明してくださったので、話が理解しやすかった。
○	○	90	これからの勉強の指針になりました。
○	○	100	具体例を交えての説明で分かりやすかった。
○	○	100	順を追って説明してくれたので、スッキリした。
○	○		参考書をオススメしてもらえた
○	○	100	説明分かりやすかったです！
○	○	100	答えが合わなかったところで、どこが考え方が違うのか分かることができてよかった。図を使ったイメージがすごく分かりやすかった。ありがとうございました。
○	○	90	もっと早い段階でできるようにします。ごめんなさい。
○	○	100	エルミートについて前よりも少しわかったような気がします。
○	○	100	イメージがだいぶつかめました。3日間同じ問に対応してもらえたお陰です。ありがとうございます。
○	○	90	ありがとうございます。
○	○	80	質問にくる人が多いのが一番困りました。わかりやすくありがとうございました。
○	○	100	部分距離空間になると近傍の定義が変わるということが分かったので勉強になりました。
×	△	80	解き切れなかったのが残念でした。
○	○	100	とてもわかりやすかったです。
○	○	100	分かるまで丁寧に説明してもらって理解の助けになりました。また来たいと思っています。
○	○	100	理解できました。本当にありがとうございます。
△	○	80	たすかりました！

○	○	90	受け身の質問をしてしまいました・・・自分の疑問点をもっと能動的に解決できるようにしたいです！次利用するときもよろしくおねがいします！((°w°))
○	○	100	疑問が1つ残らず解決しました。いつもありがとうございます。
○	○	100	めっちゃすっきりしました！適切なアドバイスありがとうございました！
○	○	100	居心地が良くてつい居座ってしまいます。正直高校から苦手意識がありましたがおもしろいと思えるようになったのはSLAのお陰です。ありがとうございます。
○	○	90	助かった気がします。
○	○	85	はじめて利用したのですが、とても丁寧に対応していただき嬉しかったです。
○	○	100	遅くにすみません。すごかったです。
○	○	100	分かりやすかったです。
○	○	80	一緒に考えて下さったのでよかったです！
○	○	100	ありがとうございました。
○	○	100	課題のレポートを解く手がかりが得られました。家に帰ってから、自分でやってみます。ありがとうございました！
○	○	90	頼りにしてます！！
○	○	100	分かりやすく指導してくださった。
○	○	100	ある集合を和集合で表す方法について、詳しく教えていただきとても勉強になりました。
○	○	90	丁寧な対応でよかった。
○	○	85	難解な問題で時間もかかりましたが、根気強く対応していただけました！
△	○	90	丁寧な対応ありがとうございました
○	○	80	ちょっとわかりにくかったが、ポイントを教えてもらった。
○	△	70	わかりやすいととても助かります。
○	○	100	最後まで、しっかり解決できてとてもうれしかったです。ありがとうございました。
○	○	95	一緒に考えて下さって、考えが深まりました！
○	○	100	問題文を読んでいて自分が気がつかなかった条件に気づかせてもらって助かりました。
○	○		計算みてくれてあざした。
○	○	100	具体例から入って丁寧に教えてくれてあせらずできたのが良かった。
○	○	100	今回は、ただ疑問点を解決できただけでなく、数学の奥深さについての話も聞かせていただきました。大学数学の奥深さについて少し触れられたと思います。
○	○	100	今までの化学の授業で分からなかったことの導出・原理等がすごく分かりやすかった。またSLAに質問しに来たいと思います。
○	○	100	解を出すプロセスを丁寧に解決してくれたのでよく分かりました。
○	○	90	化学の質問なのに、答えていただき、嬉しかったし、解決でき、良かったです。
○	○	100	難問に学力のない私が取り組んでいたの方針すらたなかったのですが、長時間ご指導いただき、理解することができました。ありがとうございました。
○	○	90	ていねいにおしえていただきました。
△	○	95	難しいといにもしんせつに対応してくれた
○	○	100	いろいろな角度からの説明で分かりやすかった。

○	○	100	解くためのヒントをもらって、自分で解く時間をもらえたのが、とてもよかったです。理解が深まりました。
○	○	100	丁寧にご指導をいただいたおかげで、問題を解決できました。また利用したいと思います。
○	○	100	教科書にあった解き方以外にも教えていただけてとても助かりました。
○	○	97	質問したこと以外にもいろんなことを教えてもらえたので高得点です！
○	○	80	新たに分かったことが多くて良かったです。
○	○	100	3時間あざした。
○	○	100	高校で習った基本的な範囲を忘れていた。思い出させていただいて、助かりました。
○	○	90	礼をいくつか出してきて自分のイメージがもやもやしていたのがすっきりした
○	○	100	名前覚えていくくださったのが嬉しかったです。是非またお世話になりたいと思いました。
○	○		良かったです。
○	○	100	長い時間丁寧に教えていただき本当に助かりました！これからの授業も頑張ろうと思います。
○	○	90	いつも丁寧に対応してくださってとてもありがたかったです。
○	○	100	ていねいに教えて下さってありがとうございました！！
○	○	100	確率変数の期待値や確率密度関数の求め方、様々な用語の定義について詳しく教えていただいたので勉強になりました。
○	○	100	角運動量のミスが分かって良かった。
○	○	85	分かりやすく、教えてくれて良かったです。
○	○	100	筋道立てて説明してくれたので分かりやすかったです。
○	○	100	たのしく学べました。
○	○	100	長い時間ありがとうございました。図での説明が分かりやすかったです。
○	○	120	分からなかった問題を、おもしろく教えてくださいました。苦手だった物理がちょっと好きになりそうです！
△	△	70	方針を示してくださり、問題をどの方向がみえてきました。ありがとうございました。
○	○	85	担当とは違う教科だったが、一緒に丁寧に説明してくれた。例が分かりやすかった。
△	○	100	SLAでイメージができるとやる気も出てきます。ありがとうございます！
○	○	100	分からないことがいくつかあったが、すぐに解決して下さって分かりやすかった。
○	○	100	長い時間対応していただきありがとうございます。
○	○	100	解決しました。ありがとうございました。
○	○	98	時々途中経過を飛ばしているところがあって理解に時間がかかった。2時間ほど付きあってもらいありがたかったです！！
×	○		次回はテキストとノートを持ってくるようにする。
○	○	100	分からないことを丁寧に教えてもらい、かなり基礎的な質問にも対応してくれて、ありがとうございました。
○	○	100	よく分かりました。
○	○	100	実際の用途を踏まえ、汎関数の解説をしていただきとても納得できた。
○	○	100	方向の加速度はビビりました。
○	○	100	授業で分からないことを重点的に聞けたので良かったです。
○	○	100	最後までくわしく教えていただいて、とても理解が深まりました

○	○	100	優しくわかりやすく教えてくださって助かりました。ありがとうございました。
○	○	200	とってもわかりやすかったです！！想像の何倍も教えていただきました！ありがとうございました😊
○	○	100	また来たいです。
○	○	100	全くわからなかったのが、問題をとけるまでになった。また来たいです。
○	○	100	次も利用したいです。
○	○	100	色々教えていただいてありがとうございます。
○	○	100	全く分からなかった教科書の解説もとても分かりやすく教えていただきました。
○	○	100	(数物)未習範囲であったルジャンドル変換について、くわしく教えてくださり長い間疑問だったところが分かりました。ありがとうございました。 (数学)一緒に考えて下さり、解を求められました。ありがとうございました。
—	—	100	数学だけでなく、物理の理解、微分方程式の理解を深めることができ、とても感謝しています。よろしくおねがいします。
○	—	100	分からない部分を理解できた。
○	○	100	とても分かりやすく、また一緒に考えながら解き進めてくれてよかったです。
—	—	100	時間がほしい
○	○	100	わからないところを教えていただいた。
○	○	100	いろいろな話がきけてよかったです。
△	○	90	要領を得ない質問で申し訳なかったです・・・でも色々ためになりました！
×	○	70	新たに考え方が導入され参考になりました。
○	○	100	わかりやすかったです。
○	○	100	分かりやすく解法の流れを教えてもらった。
○	○	100	物理のひとと数学のひとの話を両方聴けたので良かったです。
○	○	100	理解できました。
○	○	100	とても分かり易かったです。
○	○	100	わかりやすかったです。
○	○	100	わかりやすく説明してくれてしっかり理解することができました。
○	○	100	教科書の定義からしっかり教えていただいたおかげで応用問題へのアプローチの仕方が分かりました。
○	○	100	授業の多くに出席できず、何をやったのかさえない状態でしたが、テスト勉強のやり方が分かりました。
○	○	100	ものすごくわかりやすかったです。少し延長してしまいましたが良かったです。
○	○	100	いつも丁寧に対応ありがとうございます。何度も利用させて頂いていますが、毎回疑問点を解消できています。
○	○	100	わかりやすかったです。根本から丁寧に教えていただいたので、深く理解できました。
○	○	90	座標変換を前日に忘れていて焦った。
○	○	100	分かりやすく教えていただきました。ありがとうございました。
○	○	100	一緒に問題を解決してくれたので次のテストの対策がはかどりました。
○	○	90	問題を解く方針は分かったので良かったです。
○	○	100	空きコマがないと利用できないので、土・日や月曜の午前中にも開講してほしい。
○	○	100	ありがとうございました！

○	○	100	ありがとうございました。助かりました！
○	○	100	最後まで付き合ってくださいました。
○	○	100	図形の極座標がテクニックも分かって良かった。
○	○	100	発想のしかたとかまでくわしく教えていただきよかったです。
○	○	100	丁寧に対応していただきありがとうございました。
○	○	100	自分より頭のいい人とギロンできて楽しかった。
○	○	100	わかりやすかった。
○	○	95	川村悟史先生説明が明決でした。
○	○	100	わかりやすく教えていただいた。
○	○	90	専門でない分野でも一緒に考えながら丁寧に対応してもらえても助かりました。
○	○	90	長時間考えてくれてありがとうございました
○	○	100	思いつきもしなかった解き方でとてもためになりました。
△	—	80	先生の問題の作り方におかしいところがあるみたいでした。
△	△	70	式の導出が難しいことが分かった
○	○	100	似た問題の区別ができてよかったです。
○	○	90	短時間で分かりやすく教えていただけました！
○	○	100	分かりやすかった
○	○	100	丁寧に教えていただきありがとうございました。いろいろな解き方を教えていただき助かりました。
—	—	100	わかりやすかったです。とても丁寧に1時間教えてもらい、テスト前だったので本当に助かりました。
△	○	100	長い時間対応してくれた。
△	○	100	なんとか方針が立ちそうです！ありがとうございました！
△	△	75	お腹すきました。
○	○	100	つめの甘さを認識させられた。 の考え方を再認識できた。
×	○	80	答えは出ませんでした。方針が出たので良かったです。
○	○		楽しかったです
○	○	100	神対応！！
○	○	100	納得できた。
○	○	100	今までになかった考え方を教わることができた。
○	○	100	解決しました
○	○	100	方針が立てられたのがよかった。
—	—	100	長い間、たくさんの質問に答えていただきわかりやすく、ありがとうございました。
○	○	80	ていねいに、納得できました。テストがんばります。
○	○	100	問題が解決してよかった。
○	○	90	群軌道の考え方について少しだけ理解できました。
—	—	100	一緒に考えてもらったので理解がとてもしやすかったです。今日一日で線積分・面積分がマスターできました！！
○	○	100	テスト前に確認して本当によかったです！
○	○	100	分からないところを、簡単に、分かりやすく教えて下さり、とても助かりました。
○	○	100	テスト頑張ります◎ありがとうございました◎！！
—	—	100	ていねいでした。
○	○	100	スマートな対応をありがとうございました！
○	○	100	テスト前の不安を解消できました！

○	○	100	単に問題を解決するだけでなく、知識をつなげてくれました。学習のアドバイスもかなりていねいしてくれました。
○	○	80	セントロイドが軌道を求めているということが分かって良かった
○	○	90	解き方や問題文に含まれている意図が分かりよかったです。
○	○	100	抽象的な概念を具体例を通すことで、理解することができてよかったです。
○	○	100	おしえてくれた人がかわいかった。あと、わかりやすかった。
○	○		2セメもよろしくです！！
○	○	100	疑問をすべて解決できたのでよかったです。
△	○	100	全く分からなかった状態から、頭の中でイメージができる状態にまでなりました。数学的な難しい内容を素人でも分かるように詳しく丁寧に教えていただきありがとうございました。
○	○	100	気持ちがすっきりしました。
○	○	100	分かりやすい説明をしていただき、理解することができました。
—	—	100	めちゃめちゃていねいであった。とても理解しやすかった。
○	○	100	わかりやすく教えてもらいました。考え方を教えてもらえて、助かりました。
○	○	100	1つ1つ丁寧に教えて下さり、とても助かりました。
△	○	100	質問が2コあり、1コ分かったけど、もう1コは分からないままでした。数物なので仕方ないと思います。
○	○	100	ひとりでは解決できなかったが、考え方を教えてもらったので問題の意図を理解し、解決できた。
○	○	100	デルタ関数の細かい点まで証明して下さい分かったです。
○	○	100	高校の復習になりました。
○	○	100	1人では解決できなかったら問題が解決できたので本当に感謝しています。
○	○	100	高校の復習をしないとイケないと思いました。
○	○	100	最後までしっかり解決できました！！ありがとうございました！
○	○	100	初めはなかなか噛み合わなかったが、図示のおかげでよく理解できたことで自分の分かっている部分も整理されて最終的に問題を解決することができた。助かりましたorz。
△	○	100	ありがとうございました！！がんばります。
○	○	80	知らないことをおしえてくださりありがとうございました。
○	○	100	結果がおかしくて悩んでいましたが、その時のレポートの書き方が分かりました。
○	○	100	片対数グラフの書き方を教えていただきました。一つ一つ丁寧に質問に答えて下さって安心しました。ありがとうございました。また来させていただきます。
○	○	100	とても丁寧に分かりやすかったです。考え方が少し身に付きました。
○	○	90	しっかり話を聞いて、丁寧に説明してくれたので、頭の中がきれいに整理することができ、解決することができた。
○	○	100	非常に丁寧に教えて頂きありがとうございました！
○	○	100	わかりやすかったです。
○	○	100	アルバイトしたくなりました。
○	○	100	迷っているところをアドバイスや考え方を教えていただき助かりました。ありがとうございました。
○	○	120	物腰やわからかに自分が読み込めていないところを気づかせてくれるような対応でとても分かりやすかった。非常に難しい問題だったが解けただけ終わらず、自分の理解できていないポイントまでまとめて頂いたので満点を超える点数とした。

○	○	100	レポートの書き方の不明点が明らかにできた。丁寧に代替案などを教えていただけてよかった。
○	○	100	とても分かりやすく助かりました。
○	○	100	スピーディなのにわかりやすかったです。ありがとうございました。
○	○	100	実験のことについて、本当に丁寧に考え方を教えていただきました。ありがとうございました！！
○	○	100	わかりやすかった。
△	○	100	先週から引き続き今週も教えていただきありがとうございました。
○	○	100	復習をしながら分かりやすく解決してもらえた。
○	○	100	問題の意味が分からなかったのを詳しく教えて下さり、分かりやすかったです。
○	○	100	問題やコンセプトを詳しく説明していただいたのに加えて、問題を解くコツなども教えていただき、来て良かったと思いました
○	○	100	自分の考えに自信ができました。ありがとうございました！
○	○	100	復習と予習の広い範囲にわたって、とても分かりやすく教えてもらいました。次の範囲で分からないのが出たら、また利用したいと思います。
○	×	90	専門ではないことなのに熱心に考えて教えてください、あるがありがとうございました。今度バイオ系で分からないことあったら、来ます！
○	○	100	すぐ説明が分かりやすくて自分でもできそうだという自信が持てました。
○	○	100	3日かけて考えたことが解決できてうれしかったです。
○	○	100	わかりやすかったです。
○	○	100	これからも頑張る
○	○	100	とても良かったです。ありがとうございました。
○	○	100	とても分かりやすかったです。
○	○	100	とてもわかりやすく教えていただけた。受付のお姉さんが顔を覚えてくれたことに驚いた。
○	○	100	解説が非常にいいのでわかりやすかった。また利用したい。
△	○	85	問題を解く上でかぎとなるのが分かった。
○	○	100	問題が解決できただけでなく、今までイメージできなかった概念がイメージできるようになりました。
○	○		かいつきました。
○	○	100	とてもよく分かりました。丁寧に教えて頂きました。
○	○	100	疑問点 5つ全て解決したので良かった。
○	○	100	また頼みます。
○	○	100	おかげさまで、とけそうです！ありがとうございました！
○	○	100	細かい疑念が解決できたので、堂々と答えが書けるようになった。問題が解けたので 100点としました。
△	○	80	時間内に終われなかったのが残念
△	△	60	時間が少なすぎました。次は時間に余裕を持って来ます。
○	○	100	自分で考えることを促しながら分かりやすく教えてもらった。
○	○	100	答えや解き方だけでなく検算のやり方も教えてもらってとても助かりました。また教えてもらった他の方法も自分のものになりたいです。
○	○		フーリエ恐ろしい
○	○	100	毎週毎週ありがとうございます。
○	○	100	ありがとうございました。

○	○	100	分かりやすかった。
○	○	100	解き方が全く分からなかったが、どのように考えたら良いのかわかり、解けるのが楽しかったです。
○	○	100	解き方だけでなく流れやゴールを意識して説明してもらえて良かった。
○	○	100	余談も含めてよく分かりました。
○	○	100	アドバイザーの方々との議論を通して、証明の構成を丁寧に考えることができた。難しい内容だったが、理解できるところまで落としてよかった。
○	○	100	テイラーの定理について議論でき、楽しかったです。
○	○	100	解決し楽しかった。
×	○	70	問題は解決できなかったが、次どうすればよいかわかりました。ありがとうございました。
○	○	100	教えてほしかった問題以外にも、今の章の物理的意味等、様々なことを教えていただいた。毎週教えてくださり、本当にありがとうございます。
○	○	100	わかりやすかった
○	○	100	物理初心者ですがわかりやすかったです！ありがとうございました。
○	○	100	つまづいた部分が分かりやすく教えてもらった。
○	○	100	とてもよく分かりました。ありがとうございました。
○	○	100	物理選択でなかったのですが、実験がよくわからなかったのですが、基本的なことから丁寧に教えてくださいました。ありがとうございました。
○	○	100	角運動量の一般式を導けた。また、これを使いZ軸成分を求めることができた。
○	○	90	色々議論ができて、自分の理解の浅さに気づかされました
○	○	100	内積を使うことに気づけなかったため、利用してよかったです
△	○	80	長い時間にわたってありがとうございました。集中力アップのトレーニングになりました。あと、問題の方も9割は解けたので良かったです。
○	○	100	全く検討がつかなかった問題に手引きをしてくださったので解決の糸口がみつかりました。
○	○	100	分かりやすかった。
○	○	100	問題の背景なども教えていただき助かりました。数物ががんばります。
○	○	100	共鳴構造の考え方が分からなかったが、とても分かりやすく説明してもらえたので、理解できた。
○	○	100	質問に対してすぐ丁寧に具体的に答えてくれました。
○	○	100	東北大学の指定テキストは間違えばかりで本当にあてにならないので、たよらざるをえませんでした。
○	○	100	線形写像について詳しく教えていただき、大体のイメージがつかめて良かった。
○	○	100	偏微分方程式は解の表し方が1つではないこと、計算メインなので実際に書き出して考えることが重要であることなど、問題の解決以外にも大切な考え方を教えていただけよかった。次からも利用したい。
△	×		あまり解説してくれなかったため、一時間ずっと一人で勉強しても変わらない気がした。
○	○	100	いろんな解答があると分かった。
○	○	100	一緒に考えて下さったので自分も頭を使うことができました。
—	—	100	偏微分方程式の判別式を行列の観点から示してくれたことがすごいと思いました。
○	○	100	ヤコビアンの意味が分かって良かった。

○	○	100	実験に失敗してしまったため考察をどう書くかとグラフの読み取り方を教えていただきました。レポートががんばります。ありがとうございました。
○	○	100	納得するまで何回も説明していただきました。図に書いて教えていただいたりして、丁寧にわかりやすかったです。
○	○	100	とても分かりやすかったです。
○	○	90	分からない所を何度も説明してくれたので何とか理解することができました。
○	○	100	線形の用語をまとめて整理して下さったので助かった。
○	○	100	極値や正値について分かって良かった。
○	○	100	1人ではできないところを、あっさりといて、ゆっくり説明してくれました。
○	○	100	文系として数学を勉強する手順を体系的に教えて下さり、大変参考になりました。
○	○	100	計算のつまるところすけていただきありがとうございました。
—	—		2次形式って便利！！
○	○	100	計算が全く分からなかったですがやり方を一から丁寧に教えていただいたので良かったです。ありがとうございました。
○	○	90	ヒントをもらいながら一緒に考えるというスタイルだったのでとても勉強になりました。
○	○	100	大変分かりやすく公式の使い方から丁寧に教えていただき助かりました。
○	○	90	かなりアバウトな質問でしたが丁寧にに対応して頂けて満足です。
○	○	120	質問範囲外も丁寧に教えて頂きました。助かりました！！
×	○	100	難しい問題へのアプローチの仕方のヒントを簡単な問題を解く方法で教えていただきました。
○	○	100	とてもすっきりしました！家に帰ってしっかり復習します。
○	○	100	助かりました！！
○	○	100	ありがとうございました。
○	○	100	とてもいいねい分かりやすかったです。
○	○	90	解法だけでなく、他の方法についても考察できたので良かったです。
○	○	100	他の範囲とかがぶっており、よく理解できていないところを一から教えていただきました。ありがとうございました。
○	○	100	見事に疑問が解決しました。親しみやすい教え方をしてくださったのでまた利用したいと思えました。
○	○	100	問題の解き方だけでなく、背景知識まで教えていただいたのでとてもためになりました。今後も利用させていただきます。よろしくお願ひします。
○	○	100	スピーディーに問題を解決できました。
—	—	120	毎日、しっかり理解できて気持ちいいです！！
○	○	100	包絡線の求め方について分かった。導出法、条件まで証明できたので良かったです。
○	○	100	腹と節の定義が分かったので良かった。
○	○	100	ありがとうございました。
○	○	100	すべて解決できました。とても分かりやすかったです。
○	○	100	実際に図をスマホで示してくれて、わかりやすくイメージできた。
○	○	90	●●の書き方が分からなかった。
○	○	100	久々の計算問題だったが、ポイントが分かって良かった。
○	○	100	どこが間違っているの分かり、助かりました。

○	○	100	難問を分かりやすく教えて下さったので助かりました！
○	○	100	ごり押しの計算も大切だということが分かった。
○	○	90	問題がしっかりと解決したのでよかった。
○	○	100	目からうろこでした。衝撃が大きすぎたので帰ります。
○	○		とてもお世話になりました。ありがとうございました。
○	○	100	教科書のさらっと終わらせてる式変形がとても長い経過をたどっていることが分かり、聞いて良かったと思った。
○	○	100	ヤコビアンについての理解が深まったので助かりました。
○	○	100	解決できただけでなく、他のことも色々教えていただき、とても良かったです！
○	○	100	数学の話だったので大丈夫だろうと思い、2年の専門の内容を持ち込んだのですが、見事解決していただけました。ありがとうございました。
○	○	100	1セムの復習であることが分かって良かった。
○	○	100	解説が分かりやすく丁寧に、質問側のレベルに合わせてくれたので非常によかった。ありがとうございました！
○	○	100	丁寧に対応していただきとても助かりました。無事にレポート仕上げられそうです。
○	○	100	いろいろな考えを出していただき、解決できました。
○	○	100	対応外の科目も親身に聞いてくださり、助かりました。ありがとうございました。
○	○	100	色々な質問をして下さりありがとうございました。
○	○	100	解き方が思いついたらとりあえず試せばよいことを学んだ。
○	○	100	丁寧に教えていただけました。疑問が解決できてよかったです
○	○	100	一日悩んでも理解できなかった記述が、5秒で解決しました(笑)自分だけで考えていると見えない部分が、他人のアドバイスで急に見えるようになる事も多くあります。おすすめです。
○	○	100	丁寧に説明でよく分かりました。
○	○	100	エレガントに証明していただきたいへんありがたかったです。
△	○	100	もう一度自分で解いて分からないところがあつたら質問に来ます！ありがとうございました。
○	○	100	解決した！
○	—	100	どうやって学習したことをいかしたら良いか、また、どう考えたら良いかを理解することができました。
×	○	80	よかった
○	○	100	ありがとうございました！！
○	○	100	ある程度考えさせてくれる点が良い
—	—	100	教科書の行間と一緒に読んでもらえて、本当に助かりました！ありがとうございました！
○	○	100	問題の意味から方針まで、とても分かりやすく教えていただき、理解できました。
△	△	80	混んでたので仕方ない。
×	○	100	長い時間、面倒な問題に対応していただきました。ありがとうございました。
○	○	80	分かりやすかったです！
○	○	100	限られた時間の中でありがとうございました。
○	○	100	表面張力の考えが忘れていたのを思い出せてよかった。
○	○	100	丁寧に説明してくださったのでよく分かりました。
○	○	90	一緒に考えてくれた。
—	—	100	疑問が全て解決しました。

○	○	100	根本に戻ると分かった。定義の大切さに気づかされました。
○	○	100	分からなかった問題が分かった。
○	○	100	ととても親切でした！！
○	○	100	難しい問題も一生懸命考えてくださって、最後には解き方や、その際に必要な知識・考え方を教えていただけて、自分でも解けるようになりました！！今回初めてでしたが、また利用します！！
○	○	100	問題演習の解説だけでなく、細かな質問にもその度対応していただけて、とても助かりました。ありがとうございました！
○	○	100	分かったのでテストに臨めそうでよかったです。ありがとうございました。
○	○	100	分かりやすかったです。
○	○	100	半年間数物演習の質問対応をしていただいてありがとうございました。おかげさまで理解が進みました。
○	○	90	本質的なところも教えてもらえ、すごく面白かったです。理解するという段階まで至ったのでかなり良いと思います。
○	○	100	きれいに証明できたので徐々にすっきりした。数学らしくて楽しかったです。
○	○	120	数物演習の知識と授業の内容が上手くつながり、自分の中で理解が大きく深まった。
○	○	100	解法が分からなかったが、始めに何をしてどのように進めていけば良いか理解できました。自力でできるように身に付けたいです。
○	○	100	今まで意味を分かっていなかった計算式が理解できました。使えるように頑張ります。
○	○	100	説明がとても分かりやすく目からウロコが取れました(*^。^*)ありがとうございました。予想時間よりかなり早く解決できてとても助かりました。テスト頑張ります！
○	○	100	わかりやすかったです😊ありがとうございました！
○	○	100	たくさん考えさせてもらったので、多くの理解を得ることができました。
○	○	100	わかりやすく、親身に相談いただきありがとうございました。
○	○	90	とてもわかりやすかったです。
○	○	100	問題の解説を中心に内容理解も丁寧にさせていただきありがとうございました。短時間で流体・弾性体の概念を理解し、問題を解けるようになったのはみなさんのおかげです。ありがとうございました。
○	○	100	2対1という形で少人数な授業でわかりやすかったです。物理に関しては完全にお手上げ状態だったので、基礎的な所がわかってとてもよかったです。
—	—	100	分かった！なるほど！！
○	○	100	もっと教えていただきたかったです！分かりやすかった。ありがとうございました。

英会話

解決	満足	点数	コメント (ニックネーム)
○	○	100	I'm not use SLA in English communication course, but my assistant is kind and I speak comfortably in English. I wanna come here next time maybe soon
○	○	99	今年もお世話になります！
○	○	100	一緒に音楽についてお話しできて楽しかったです！ありがとうございました

—	—	200	1日だけで全体の4分の3近くを理解できました。丁寧な分かりやすい教え方で、演習も含めながらとても分かりやすかったです。ありがとうございました。
○	○	100	分からなかった多重積分を理解できたので本当によかったです。
○	○	100	テストがんばります
○	○	100	1つ1つ確認して進んで下さったので、とてもわかりやすかったです。
○	○	100	人に質問することで自分の思考が整理されてよかったです。
○	○	95	時間が少ない中でも教えていただいてありがたかった。
○	○	90	時間がない中、方針を確認することで多くの問題に対応していただきました。
○	○	90	2次形式のMax, Minの求め方が分かり、スッキリした。
○	○	100	悩んでいた部分がスッキリ解決しました！
○	○	100	今までで一番長い証明だったが、やって理解できてよかったです。
○	○		ありがとうございました😊テスト頑張ります！！
○	○	100	分かりやすかった
○	○	100	テスト前日でしたが丁寧に教えて頂きありがとうございました。
○	○	100	証明の方法が分かって良かった。
○	○	100	回転行列について分かった。
○	○	100	丁寧な対応ありがとうございました。
○	—	100	どのように考えて解き進めていけば良いか分かりました。もっと極座標変換をうまく使えるように頑張ります。
○	○	100	最後まで解決はしてなかったが、ヒントまではたどりつけました
○	○	100	図を描きながら、段階を踏んで丁寧に教えて下さってわかりやすかったです。
○	○	100	分かりやすく、親切でした！
○	○	100	基本から丁寧に教えていただき、ありがとうございました。
○	○	90	色々なアプローチしてくれたので理解が深まりました。
○	○	100	答えが出てスッキリしました。ありがとうございました。
○	○	100	何度やっても分からなくて困っていましたが、一緒に長時間考えて下さり、本当に助かりました。今日使った考え方をしっかり修得したいです！ありがとうございました！
○	○	100	無駄話も含めて色々勉強になりました。
○	○	100	基本的なコトバの定義から1歩ずつ丁寧に確認してもらえてうれしかった。
○	○	99	定在波の式の意味が分かったのでスッキリしました。

—	○	100	英会話だけでなく、勉強のコツなども話して下さってめちゃくちゃありがたかったです。今回は初めてでしたが、今後も空きコマなどを利用して来たいと思います。
○	○	100	とてもいい対応していただきました。またきます。
—	○	100	長い間、自分のつたない英語に付き合ってもらって下さりありがとうございました。日々の英語の勉強をおこたることなく大学生活を過ごしたいと思います。
—	○	100	ありがとうございました。しゃべるのが遅くても手助けしてくださって、気軽にできました。今の私にとって英語学習のよいきっかけになりそうです。
○	○	50	初めての英会話で来ましたが、毎週来たりりました！

—	○	100	来るのが遅れてしまったので、次回はもっと早く来たいです。
—	○	80	初めて利用して雰囲気良かった。
○	○	100	Today I enjoyed free talking on variety topics. I was impressed that values are sometimes opposite even though we mentioned the same thing. Next week, I want to use more comfortably by using proper verbs.
—	○	100	初めての英会話でまだ言いたいことが言えないが少しずつしゃべることができるようになってほしい。非常に充実した時間を過ごせて良かった。
—	○	80	途中参加でしたが楽しめました。また利用したいです。
○	○	100	とても楽しい時間でした。
—	○	95	はじめて利用したのですがとても楽しかったです。がんばって継続したいです。
—	○	80	海外の話ができてとても勉強になったし、楽しかったです。
—	○	90	すべてのミス指摘されるのは萎えますが、致命的なミスは教えてほしい。ボキャブラリーとかも、いろいろ教えてほしい。流れを切らない範囲で。
○	○	100	英語が話せて楽しかったです。
○	○		楽しかったです。今後も利用したいと思います！
○	○	100	根気強くやってくれてありがたかった。
—	○	70	ディベート難しかったけど、できるようになりたいと思いました。
—	○	100	TOEFL がんばります。
○	○	90	プレゼンで日本語を使って自分の言いたいことを伝えるのも難しいのに、英語ではこんなに難しいことに驚いた。これからも精進していこうと思った。
○	○	100	楽しくできた。
○	○	100	It's very fun!!
—	○	100	政治、超自然、ドラえもんなど、いろんな話ができて楽しい時間でした。
—	○	100	英会話をできる機会というのがなかなかないので今後も暇なときはぜひ期待です。
○	○	90	自己紹介からどどん話が深まって勉強になりました。ゲームも楽しかったです。
○	○	100	It was nice.
○	○	100	中国語や日本語の違いなど、普段なかなかできない言語についてのお話しができて楽しかったです。
—	○	100	英語で話されていることが分からないと、わかりやすい英語に直してくれたので、会話についていたし内容も理解できた。
—	○	100	良かったです。
—	○	100	もっと話せるようになりたいです。
○	○	100	英語を話すことは難しかったです。とても勉強になりました。
—	○	83	英会話はどんな雰囲気なのか知りたくて来ました。楽しい空気が良かったです！担当の方になりたいと思っています。
—	○	90	自分がいかに英語ができないか、よくわかりました。
△	○	90	楽しかったです。
○	○	100	楽しく話せました。少しずつ英会話に慣れてきました。
○	○	90	発音の練習ができた。本当に良かった！
—	—	90	表現能力を高める必要があることに改めて気づいた。
○	○	100	話題があったので話しやすかった。

△	○	90	TOEFL の話しなどためになった。会話できてよかった。
—	○	100	おもしろかったです。
○	○	100	英語の基礎や基本的なディベートテクニックを知ることができた。
○	○	100	発音などの練習ができてよかった。
○	○	100	1 分間スピーチなどは、自分の考えを伝えるいい練習になった。
—	○	100	前回よりも会話が弾んだので良かった。またいきたいです。
—	○	95	アニメの話が面白かったです。'subtitle'と'censorship'は話のネタになりそうなので、知れてよかったです。また来たいと思いました。
○	○	100	自分の意見を伝えるいい練習になった。
—	—	100	前よりも、スムーズに会話できたと思います。
—	○	100	とても楽しかった。次回も利用したいです。
—	○	100	良かったです。
○	○	100	フリートークみたいな感じでたくさん話せたので、いい学習になりました。
○	○	99	自分の弱点がよく分かった。
○	○	100	英語を話す機会がなかったので、今日を機にもっと勉強したいと思った。
○	○	80	楽しく英会話できた。
○	○	100	いろいろなトピックについて話せたのが良かった。
△	○	90	楽しくスピーキング活動ができた。また参加したいです。(Yuya)
○	○	100	SLA さんによって、違うゲームやトークができるのでとても面白い。
○	○	100	ありがとうございます。
△	○	100	とても楽しかった。次につなげたい。
○	○	100	会話が続いたので良かったです。
△	○	95	楽しく英会話できました。継続的に参加して高めていきたいです。
—	○	100	We talked a lot. We talked about our dairy life. That was so fun.
○	○		英語を話してみるの初めてでしたが、とても親切に会話してくれました。
○	○	100	楽しく話せました。
○	○	100	いろいろな知識を知ることができた。動画を見ながらの会話が特に面白かった。
—	—	100	楽しかったです。
○	—	80	英会話楽しかった。
	○	100	初めて英会話に参加しました。楽しかったです。また参加したい。
△	○	100	トピックがおもしろい。
○	○	100	いろいろな話題を話せた。人によって話し方にけがあるのに対応できるようになりたい。
—	—		おもしろかったです。言語をいくつもお知りになられていてすばらしかったです。
○	○	99	あと 1 点！ 気になる・・・
○	○	100	2～3min プレゼンテーションに初めて挑戦できた。意外にできた気がした。
		80	ディスカッションは難しかったけどまたやりたい。
○	○	100	fun!

—	○	95	お話できて楽しかったです ありがとうございます！
—	○	100	英会話ははじめてでカタコトだったけれど、優しく楽しく接してくれて勉強になりました！
—	○	100	Tuさんはとてもcuteな先生です。
—	○	90	たくさん英語を話す機会がありとてもためになりました。ありがとうございます。
○	○	100	プレゼンテーションなど、自分の意見を発表する機会が多くあり、いい練習になった。
○	○	100	I can enjoy! Thank you!
○	○	100	We could enjoy talking freely. I'm willing to talk and to be able to express my feeling or information more!
○	○	100	長い間話げできた。
○	○	90	楽しかった。
○	○	100	Thank you!
—	○	100	わたしの乏しい英語力に合わせて話して下さったので、楽しく英会話ができました。
○	○	100	新しいゲームなどができて楽しかったです。
—	—	90	たのしかった。
○	○	100	プレゼンテーションについていろいろ考えた。たくさんのお話を教えてくれたのでとても助かった。
○	—	90	英会話カフェ楽しかった。
—	○	100	We talked about a lot of topics.
○	○	100	色々なトピックについて話せたので良かった。
○	○	90	自分がうまく表現できない時があった。
○	○	100	地理の勉強になった。
○	○	100	大阪風と広島風お好み焼きの違いを説明できるようになりました。
○	○	90	豆知識をたくさん知れたので良かったです。
○	○	100	色々な話題を話せたので楽しかったです。
○	○	100	留学について色々相談のってくださってありがとうございます。モチベーションが上がりました！
○	○	100	私の質問にもたくさん答えてくれて、楽しかったし、がんばろう！と思えました。
○	○	100	たのしかったです。
○	○	90	英語が話せてよかった。もっと自分の英語力をきたえていきたいなと思った。これからも通いたいなと思いました。ありがとうございます！
—	○		難しいけれど、とても勉強になった・・・！
○	○	95	ルールをつかむまでが難しかった。
○	○	95	レクリエーションを通して楽しく英語を話せてよかった。始める前は少し気を張っていたが、リラックスできてよかった。
○	○	100	久しぶりのSLAで、楽しめました。今セメも通わせていただくのでよろしく願います。
○	○	100	I wanted to develop the ability to speak English and write it. (Shunshun)
○	○	80	自分のスピーキングに対して、コメントをいただきました。楽しかったです。ありがとうございます。
○	○	100	文法だけではなく、内容についてもアドバイスをもらえて良かったです。
—	○	100	楽しかったです。毎週利用したいです。

○	○	100	英会話の練習だけではなく、ディスカッションのポイントや外国語の勉強についてのお話をもらえて、勉強になりました
○	○	80	英会話ができた。またきたいです。
—	○	85	ほどよく緊張感があり、アットホームな雰囲気よかったです。もっとたくさんしゃべれるといいかもしれません。
—	○	95	ゆっくりとわかりやすく話していただいたので、聴きやすかったです。
○	○	100	英語をもっと話したいという要望に応じて下さって、とても良い時間を過ごせました。ありがとうございます。もっと自分でも英語を勉強したいと思いました。
○	○	90	またきます！！来週も！！
○	○	100	また来たいと思いました。
—	○	100	楽しい時間を過ごさせてもらいました。初めての英会話で緊張しましたが、いろいろアドバイスやヒントをいただいたので良かったです。また来たいです。
○	○	100	丁寧にありがとうございます。辞書では伝わらないニュアンスについて教えていただきとても参考になりました。構成などにも気を付けて書くことを心がけたいと思いました。
○	○	100	I'll practice my vocabulary skill.
△	○	90	はじめて参加したのですが、とても優しく対応していただきました。また、こようと思います。ありがとうございます。
○	○	100	たのしかった・・・！
—	○	100	全く英語のしゃべれない自分にも一から丁寧に教えていただいて、とてもうれしかったです。これからも通いたいと思いました。
○	○	100	自分では気付けなかった発音の欠点に気付かせてもらえました。
—	○	100	優しく接してくださり楽しかったです。もっと話せるようになります。
—	—	100	とても親切で、僕のために勉強プランを考えて、僕に合った教材と一緒に学習していただけうれしかったです。英語は苦手ですが、これから2ヶ月がんばろうという気持ちになりました。
○	○	100	勉強になった！
○	○	100	自己紹介の仕方について具体的に教えていただいた。
○	○	100	ドナさんとの会話、楽しかったです。
○	○	100	発音の説明がとてもわかりやすかったです。発音の練習は今までしたことがなかったので、非常に勉強になりました。
○	○	90	大人数だとあまり話す量がない。
○	—	100	文法と発音について教えていただきました。
—	—	100	楽しくディスカッションできました。
○	○	100	無人島がみんなの意見おもしろいと思いました。
○	○	85	Thank you
○	○	100	今日も楽しかった。
○	○	90	今日はスピーキングとリスニングがやれてよかった。次はプロナウシエイションをやります！
—	—	100	楽しかったです。
—	—	100	ゲームで楽しく話す練習もでき、ディスカッションで実践的な練習もでき、ためになりました。
○	○	100	ディベート楽しかったです。
○	○	100	とても楽しく会話が出来良かった。ありがとうございます。
○	○	80	長く話せてよかった。
△	○	80	リスニング強化になりました。ありがとうございます。

—	○	100	ワンの言葉に関する話がとても面白かったです！また来たいです。
○	○	100	hang man が意外に出てこなかったけど面白かったです。
○	○	90	Thanks.
—	○	100	初めて長い時間英語で会話をしました。今度海外にも行くかもしれないので、そのために知っておくべきことも教えて頂けたので良かったです。
○	○	100	ドナさんは今日も明るかったです。
○	○	100	とても分かりやすかったです。
○	○	100	discussion が楽しかった。
○	○	100	楽しくディスカッションできました。
○	○	100	今日もドナさんは楽しかったです。
—	○	90	楽しかったです。
×	○	100	1対1を希望してましたが、グループの英会話でとても緊張しましたが、改めて英会話ができないことを再認識し、残り1ヶ月の過ごし方を大きく変えるいい機会になりました。
—	—	100	1時間以上も英会話の練習をしていただきありがとうございました。
○	○	100	ユニークなゲームやディスカッションで楽しく、英会話できました。
○	○	90	授業の準備ができた。いろいろな話ができたとのしかなかった。
△	○	90	このSLAにきた目的をきちんと理解し、私個人に合わせた内容の会話をしてくださって、本当にありがたかったです。すごく勉強になりました！！
○	○	100	神です。英会話だけでなく英語のプレゼンテーションの原稿も考えてもらい、とても助かりました。
—	○	90	短い時間でしたが内容の濃い会話ができました。
—	—	100	発音を学んだ。とても難しかったので、これから練習したいです。もっと頻繁にこうと思います。
△	○	90	今までで、一番しゃべれました。たのしかったです。少し自信がつかました。ありがとうございました！
○	○	100	他の学生さんとも話せたのがよかったです。
○	○	90	英語をとにかく話しがたかったので、今日沢山話せたのでよかったです。
○	○	100	英語をたくさんしゃべるシチュエーションがあったものの簡単なゲーム形式で、しゃべりやすかったです。
—	○	100	英語を使って説明するいい機会でありたいです。
○	○	90	英語力がつけられたと思いました。役に立つフレーズも身に付けられたのでよかったです。
○	○	100	今日も楽しかったです。
○	○	100	TOEFL iBTの対策してくださり助かったです。
○	○	100	今日も楽しかったです。明るいドナさんでした。
○	○	95	今日も英語が話せてよかったです。来年も来ます！！
○	○	100	とても楽しく英語を話すことができました。
—	○	100	初めての参加だったが、とても有意義な時間でした。また参加したいです。
○	○	90	英語を話せたのが良かった。来年も来ます！！
—	○	100	私がいまだ聞きとれなかったり話せなかったところをすごく丁寧に教えていただけて、嬉しかったです！！ありがとうございました(^_^)
○	○	100	頑張っってしゃべる。
○	○	100	楽しかったです。

○	○	100	楽しかったです。
○	○	100	色々な文化を教えてください英語も聞きやすかったです。
○	○		英語を話す機会をくれてありがとうございます。
—	—	100	1時間くらい1on1でも丁寧に対応してくださいました。日本語と英語で教えてくださったり、私の英語がつまっても最後まで丁寧にきいてくださって、本当にありがとうございます！！ありがとうございました(^_^)
○	○	95	冬休みにぶっていたspeakingを使えてよかったです。これからもっと上達していきたい。
○	○	100	今年もよろしくお祈りします。
—	○	80	Listeningの練習が十分にできた。自分の会話力が低いこともあり、あまり話せなかったのも、また来て会話力をのばしたい。
○	○	100	すいません。
—	○	100	フリートークで楽しく話せました。
○	○	95	今日も英語をはなせてよかった！！
○	○	100	Thank you!
○	○	98	SAPプログラムのプレゼンの問題解決に役立った。
—	—	95	前回よりお互いたくさん話せて楽しみながら英会話力をのばせたと思う。
○	○	100	分からなかった所は何度もゆっくりと話していただいたりとても丁寧に対応していただきました。ありがとうございました。
○	○	95	今日はラストのSLAでしたが、沢山はなせてよかったです。
○	○	90	初めてでしたが、いろいろ楽しくお話できてよかったです。
○	○	100	英会話をお願いするのは勇気がいりましたが、お願いして良かったです。普段英語を使う機会があまりないのですが、勉強を続けたいと思います。
—	○	100	英会話に来ようと思うと準備をするので、そういった意味でも利用させていただけるのは嬉しいです。
○	○	100	理想の家について話しました。楽しかったです。
○	○	100	SAP前に英会話をしゃべる機会がないため、とてもよい経験になりました。自分はまだ英語力が足りてないので、これからも来たいです。
—	○	100	色々な課題で話ができたと良かったです。
—	○	95	今回は初めてカフェで英会話をしましたが、ゲームやフリートークなど、ためになる情報をたくさん知ることができました。今後も、英会話をしたいと思います。
—	○	95	多少日本語を交えながら、難しい言葉について解説してくれたので、深く理解できました。
○	○	100	英語にふれたかったので、とても楽しかった。まだまだ、実力が足りないなと思った。
○	○	100	どんどん話題が進んでいて楽しかった。
○	○	100	英語で違う分野の学問の話が聞けておもしろかったです。
		100	Thank you!
—	○	100	スムーズに会話を楽しめました。
—	○	100	面白かった。マーシャルアーツな武道。
○	○	100	楽しかったです。
—	○	70	短い時間でしたがありがとう。
○	○	99	きょうけいが適宜入るとよりよい
—	○	100	来セメも来ようと思います。
○	○	100	楽しかった。

—	○	100	いっぱい話せたい、内容も興味のあることで楽しかった！
○	○	100	とても助かりました。英語のことだけでなく、大学生活の相談をしんみに聞いてくれてうれしかったです。
○	○	100	遊びに来た感じでしたがとても楽しかったです。
○	○	100	英語はやいです（笑）

○	○	100	SAPに行く前、英語をしゃべる機会ができて、よかったです。Discussionをやっていたいです。
○	○	100	今回はスピーチも経験できたので、英語力の向上をめざす良いモチベーションになりました。
—	○	80	英語の練習になった。難しく言葉に詰まることもあったが、良い経験だったと思う。素晴らしい企画なのでもっと宣伝して人数が増えてほしい。

ライティング

解決	満足	点数	コメント（ニックネーム）
○	△	70	レポートの書き方の基礎を知ることができたのは良かった。話がかみ合わないことがあったのが少し困った。
○	○	100	レポートの構成など詳しく聞く事ができて良かった。不安が減った。
○	○	90	わかりやすく、自分のレポートの問題点もわかったので良かったです。
○	○	90	英会話がとてもよかったです！
○	○	80	自分では気付けなかった部分を指摘して頂いてありがとうございました。
○	○	95	レポートの書き方について丁寧に教えてもらった。またSLAを利用したいと思う。
○	○	100	丁寧に分かりやすかったです。
—	○	80	今まで漠然としていたレポートへのイメージががらりと変わりました。難しそうだけど頑張ってみます。
○	○	100	疑問点をわかりやすく教えていただき、とても参考になりました。また、困ったとき相談しにきたいです。
○	○	90	レポートの形式から教えていただいたので、自分の構成の仕方の間違いなどに気づけてよかったです。
○	○	100	対応が親切で分かり易かった。
○	○		レポートの本質的なところを理解することができた。
○	○	100	今まで何となくレポートを書いていたのですが、今回しっかりした書き方を教えてもらって、大変参考になりました。
○	○	100	アドバイスの的確で感動しました。ありがとうございました。
○	○	80	客観的に見て自分でまとまらなくなっていたものを整理していただけたので考えがすっきりしました。
○	○	90	本当になめくさった私のレポートを読んでくださってありがとうございました。内容のふくらませ方とか、引用の仕方が分かってよかったです。
○	○		レポートの書き方についてわかった。引用の方法がわかった。
○	○	100	レポートの書き方が分からないままに書いていたので、今日構成であったり、引用のマナーであったりを知ることができて良かったです。
○	○	95	レポートの形式など、あいまいな問題も一緒に考えてくれてありがとうございました。また、内容も一通り目を通してもらえて助かった。

○	○	100	悩んでいた部分だけでなく、レポート全体の作成技術向上に役立たせていただきました。本当に助かりました。
○	○	100	レポートの書き方について分からなかった点や悩んでいた点が解決できたので良かったです。ありがとうございました。
○	○	100	めっちゃ助かりました！ありがとうございました。
○	○	100	もやもやしていたものを解決することができました。親身に相談にのっていただき大感謝です！（かおかお）
○	○	90	期待していたよりもずっと丁寧に指導して下さいとても助かりました。また機会があれば積極的に利用したいと思います。
○	○	100	レポートとは何かが根本的に分かりました。テーマはほとんど変わらずに内容の深いものが書けそうで良かったです。ありがとうございました！！
○	○	100	困っていた部分に的確にアドバイスをくださったのでとても助かりました。ありがとうございました。
○	○	100	足立さんはとても丁寧に親切に日本語をチェックしていただき、役に立つ助言をしていただき、いい勉強になり、誠にありがとうございます！
○	○		とても丁寧に対応していただいて、教えていただいた内容がしっかり定着したと思います。
○	○	100	自分では思いつかなかったレポートの構成法を教えていただいたため、大変参考になりました。
○	○	100	ためになって面白かった。
○	○	100	自分で気づけなかった問題設定のしかた、文語表現（レポート表現）を聞くことができてよかった。
○	○	95	中川教授の最終レポートを書くために来ました。ていねいに対応して頂き、疑問を解決することが出来ました。
○	○	95	参考文献の利用法・活用法がよくわかった。今後も活用していきたい。
○	○	100	レポートの書き方の見直しができる。今後も忘れずに意識してレポートの取り組みようと思った。
○	○	100	今まで不安を抱えながらレポートを書き続けてきましたが、今回初めて利用しました。ポイントを押さえた指導をしていただき、とてもありがたかったです。レポートを書くうえでの不安が少し消えた気がします。また利用します。ありがとうございました！
○	○	95	短時間できちんと一つに焦点をあててもらって分かりやすかったです。

■資料 B 研修合宿ワークショップ成果物

「フレッシュャーズ」グループ

<p style="text-align: center;">2016年度SLA研修合宿ワークショップ成果物</p> <h2 style="text-align: center;">ワークショップ 成果発表 フレッシュャーズ</h2> <p style="text-align: center;">玉田優花子、川村悟史、 鄧暁嘉、早坂遼一路</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 共通ワード「学習支援」 2. 挙げたフレーズ・ワードすべて 3. ワード5選
<p>1. 共通ワード「学習支援」</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p>学習支援</p> </div> <p> = 教科の専門性 + コミュニケーション + 意欲 × 議論 </p> <p style="text-align: center;">} 学びあい</p>	<p>1. 共通ワード「学習支援」</p> <ul style="list-style-type: none"> • 教科の専門性はSLAには必要不可欠な能力である • 学生とのコミュニケーションによってニーズを明らかにすることができる • SLAの目的は学び合い 意欲・議論なくして学び合いなし
<p>2. 挙げたフレーズ・ワードすべて</p> <ul style="list-style-type: none"> • 答えがひとつではない • 選択肢の提示 • 最初はあいまいな質問 • 前提(理想)は〇〇だけど、今日は□□ • 「なぜ？」をつみかさねる • ライティング(学問)の楽しさを伝える • SLA後輩へのTips(辞典) • SLA内部のスキルアップ • できない対応 	<p>2. 挙げたフレーズ・ワードすべて</p> <ul style="list-style-type: none"> • 学生に考えさせる • 勉強方法の提示 • 良い沈黙、悪い沈黙 • 当たり前とは何か • 知らないふりゲーム • 暴走モード • 合理性の度外視 • 高校レベルの知識
<p>3. ワード5選</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 「なぜ？」を積み重ねる ② 英語力の低い学生 ③ 学習方針の提案 ④ 良い沈黙、悪い沈黙 ⑤ 知らないふり 	<p>① 「なぜ？」を積み重ねる</p> <p>学生の思考を掘り下げるテクニックのひとつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 「なぜ？」と問いかけることで学生の思考を引き出し、整理する • 特にライティングにおいて有効 レポートを書くことは一種の自己表現だが、本当に書きたい内容を初めから書けていることは少ない 「なぜこれに興味を持ったの？」などと「なぜ」の問いを積み重ねることで、書き切れていない内容を掘り下げることができる

② 英語力の低い学生

会話力が不足するため、英語でのコミュニケーションが難しい学生。

- 対応方法
 - ホワイトボードを学生に使わせる
 - 読み書きはできる場合、伝えたい英語を学生に書いてもらって、SLAは、これに対しての英語を教える
 - 読み書きが苦手な場合、SLAが日本語を使って、学生に英語で答えてもらう。または学生に日本語で言ってもらい、その英訳を伝える
 - 辞書をそばに置いて、分からないときに引いてもらう
 - 文法がめちゃくちゃでもとりあえず言わせてみて、SLAで正しく直す
 - 簡単な説明を互いに使うよう心がける

③ 学習方針の提案

SLAの仕事のひとつ。

- 単発の対応にとどまらず、将来につながる継続的な学習方針をアドバイスする
- **Andragogy**
- これくらいできれば大丈夫だろうというラインの提示
- とにかくたくさんの方を提示
- 提案の例
英語：単語力の向上法、会話力の向上法の提示

④ 良い沈黙、悪い沈黙

良い沈黙：互いに思考中である状況。

悪い沈黙：コンサルでの最初の関係づくりに失敗し、問題も解けずに膠着する状況。

- 問題が解ける＝満足、ではない！
- 悪い沈黙を避けるための工夫例
 - 雑談を盛り込む
 - 聞くだけでなく自分の話をする

⑤ 知らないふり

コンサルや対応中に、学生が目の当たりにしている問題について、学生自身に考えさせるためのひとつのテクニック。

- 学生にくどいと思わせない演技力が必要
- 対応に時間もかかる
- 質問内容をSLAが知っていると思ってくる節があるが、ある意味でそれを打ち破り、対等な立場でふるまう
- ライティングの例：他人の意見を自分の意見として書いてしまう学生に「これ君の意見なの？」とわざと聞く

2016年度SLA研修会宿ワークショップ成果物

中年SLAが選ぶ！！ 後世に残したい キーワード6選

チームのぶりん
浅野、澁川、林田

1. 共通ワード

(学習支援)

= (学生の目線)

+ (分析力+適度な期待+粘り強さ)

× (学生の考えの整理 + ヒントを与える + プロセスを気づかせる)

1. 共通ワード

(学習支援)

= (学生の目線)

+ (分析力+適度な期待+粘り強さ)

× (学生の考えの整理 + ヒントを与える + プロセスを気づかせる)

気持ち

行動

2. 挙がったフレーズ・ワード

- ・ SLAはTAじゃない
- ・ リピーター学生
- ・ 待つ心
- ・ ホワイトボード活用
- ・ コンサル
- ・ 学生との議論
- ・ SLAのスキルアップ
- ・ 考えさせる対応
- ・ 問題ではなく人を見る
- ・ 「感覚で分かるよ」ショック
- ・ (説明の中で) 気持ち悪いところがあれば言ってください
- ・ ハッピーな終わり方
- ・ アカスキセミナー
- ・ 学生のわからなさ、考える道筋を可視化する
- ・ 図示
- ・ 学生「メ切明日です。」
- ・ 学生「とりあえず見てください。」
- ・ SLA「自分でどこか気になるところある？」
- ・ 学生のニーズ

3. ワード6選

判断基準

「後世に残す価値があるもの」
「よく言われている話題、フレーズ」

最終結果

- ・ SLAはTAじゃない
- ・ 学生のニーズ
- ・ 図示(可視化)
- ・ ハッピーな終わり方
- ・ 「メ切、明日です」
- ・ 「とりあえず見て欲しい」

SLAはTAではない

「SLAはTAではない」とは、SLAの基本姿勢である。

何が違うのか？

SLA

- ・ 学生のわからないことを明らかにして、共に問題を考える。
- ・ 学習支援とは何か常に考え続ける。
- ・ 対応に教育的な見地を要求される。

TA

- ・ 質問に答える。
- ・ レポートの採点をする。

この意味で、SLAとTAは違うと考えられる。

学生のニーズ

コンサルをとおして探る

学生に必要なSLAの対応 **need to**

または

学生が求めるSLAの対応 **want to**

イコールとは限らない

Ex.
「早く答えが知りたい」と学生が望んでも
学生の成長のために考えさせる対応をする必要もある

Ex.
「この問題が解きたい」と学生が質問してきても
もっと基礎に戻って確認する必要がある

図示(可視化)

図示(可視化)とは、対応中に使われる手法の一つ。
次のように役に立つことがある。

- ・ 学生のわからないこと・これから議論することをきちんと学生と共有できる。
- ・ 学生の考えの整理。
- ・ 学生の理解を高める。
- ・ 学生の満足度を高める。
- ・ 説明がスムーズになる。

例：フローチャート、グラフ、文章構造、フォーマット

ハッピーな終わり方

対応スタート

いろいろ考えたが...

答えが出なかった!!! 😞😞😞

終わりどき

答えは出なかったけど... ここまでではできるようになったね
あとは〇〇も試してみましょう

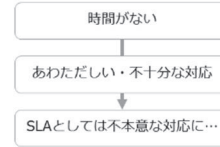
進歩した点 & 見えた課題を確認し、**成長を実感**

HAPPY



「〆切、明日です」

学期末によく聞くフレーズ。



対応方法

- やれるとこだけ
- 簡単なものから
- 事前の注意

今日は時間がないので、
やれるとこだけやりましょう

SLA



「〆切、明日です」

学期末によく聞くフレーズ。

学生に考えさせる時間を十分にとれないため、あわただしい対応になるケースが多い。SLAとしては不本意な対応になることもある。

対応方法として、「簡単な所からやる」といったことが挙げられる。コンサルで「今日は時間がないので、やれるだけやってみましょう」という風に前置きをしてはじめると、

「とりあえず見て欲しい」

対応の最初によく聞くフレーズ。

類義語 「解こうとしたけど、よくわかりません」



対応方法

- SLA 「何か気になるところある？」
- 根気強く問いかけを行う

おわり

冷やラー式継承案

冷やラー
相澤、珍田、酒井

1. 冷やラー式学習支援

学習支援

= (整理 + 楽問 - 完結) × (相互作用)
+ (将来像)

1-1. ワードの解説

整理・・・まずは、混乱している学生を落ち着かせる。
その上で学生の疑問点、考えを引き出し、一緒に状況整理を行うことで、対応の道筋が見えてくる。

楽問・・・SLAは“学問は楽しい”ということを知っているが、学生は分かっていないかもしれない。そこで、最後まで対応しないことで残りの部分を自分で考えることの面白さや、関連するおもしろい話題を提供したい。⇒“楽”問

1-1. ワードの解説

-完結・・・今回の対応を振り返り、カルテに残すことで連続性を意識できる。また、学習には終わりが無い(完結させるべきではない)。

× (相互作用)・・・SLA・学生の双方のやりとりによって、共に問題解決に向かっていく。

1-1. ワードの解説

将来像・・・対応を通して、学生・SLA(個人)双方の将来を考える:

学生→将来こんな先輩みたいになりたい(学問に対する姿勢を見習う、専門性を磨く)。

SLA→様々な考え方や、発想をもつ人がいることを知ることが出来る。将来そのような人に出会った時に、どのような接し方をすればよいかのヒントになる。

2. 挙がったフレーズ・ワードすべて

クロージング
アイスブレイク
カルテ
試験期間
鬼問系
岩成マジック
誤植ゲー
ググる
つきはなす
最後までやらない
解かない

図が書けない学生
計算確認して系学生
教えすぎない
なだめる
複数人対応
有機的つながり
「今は理解しなくても大丈夫」
一緒に問題を読む
言い直し
任せる
説明させる

2-1. ワード5選

- ①「クロージング」
・・・文理問わない、最近の理系のホットピック
- ②「複数人対応」
・・・文理問わない、後輩が最初戸惑いそう
- ③「鬼問」
・・・面白そう
- ④「今は理解しなくても大丈夫」
・・・唯一のフレーズ、実際によく使う
- ⑤「共感」
・・・文理問わない、相手を慮るのが大事

①「クロージング」

対応の最終段階に、お互いに気持ちよく対応を終われるように意識的な働きかけをすること。次回につなげる意味もある(英語部会)。

- 対応例
- ・出来ていることを褒める
 - ・その日出来るようになったことを学生に説明してもらう
 - ・次回につなげる→来週は～してみよう、など提案
 - ・応援(問題が難しかった場合など)

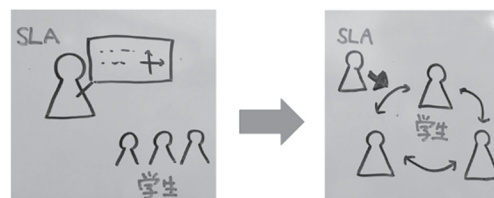
②「複数人対応」

複数人の学生が同時に来訪し、SLAが一对多の対応を強いられる状況。科目の理解度(理系部会)や語学力(英語部会)の異なる学生を同時に相手にするため、苦慮することが多い。

対応例

- ・<英語>しゃべれる人に準ホスト役を受け持ってもらおう。
- ・<理系>最初の誘導はSLAで行う必要がある。わかった学生がいたら、その人に説明してもらう。

②「複数人対応」(図)



③「鬼問」

SLAでも解くのが鬼のように難しい問題や解釈が鬼のように難しい問題のこと。なお数学においては岩成先生の問題が難しいことで有名であり、これは**岩成マジック**と呼ばれる。

対応例

- ・「一緒に考えよう」と伝える
- 完璧な対応にはならないかもしれない、最初に伝え、コンセンサスを得る。

④『今は理解してなくても大丈夫』

- ・理系SLAがよく口にする言葉。主に二つの状況で口にされる。

- ①締め切り間近で全てを理解しようとする学生の無謀さをなだめる。
- ②設定した目標に向けては本筋でない疑問点を迂回する。

- 限られた時間内で出来ることに対応の焦点を絞る
- やるべきことを整理し、別の疑問が浮上しても「まずは先に進んでみる」大胆さも必要だと知ってもらう

⑤「共感」

学生にとって問題や課題が難しいものだった時や、テスト前で学生が焦っていた時に、学生と同じ目線に立ってみせて、安心感を与えるような気遣い。

対応例

- ・「この問題・先生いつも難しいんだよね」
- ・「こういう説明だとわかりづらいよね」
- ・「最初は大変だよ」
- ・やって来た時点で出来ていることを褒める

→慌てている学生のペースに吞まれないようにする効果。

2016年度SLA研修会宿ワークショップ成果物

後輩に引き継ぎたい キーワード

SMAP
紅林 五十嵐 寺岡 久守

$$\text{学習支援} = \left(\begin{matrix} \text{楽しさ} \\ + \\ \text{学習経験} \end{matrix} \right) \times \text{コミュニケーション}$$

+ 共同作業

+ 場作り

$$\text{学習支援} = \left(\begin{matrix} \text{楽しさ} \\ + \\ \text{学習経験} \end{matrix} \right) \times \text{コミュニケーション} + \text{共同作業} + \text{場作り}$$

楽しさ... 学問としての楽しさ
学習経験... 知識、体験談、スキル } 「先輩らしさ」を活かす

コミュニケーション... 伝える(口頭、姿勢)、対話、議論、共感、相手を知る、聞くなど

共同作業... 問題と一緒に取り組む

場作り... 機会の提供と雰囲気を作る(ex. 自主ゼミ支援、「分からない」と言える雰囲気)

挙がったフレーズ・ワードすべて

ニーズ(希望・必要) 数物対応 岩成レボ 西谷君 コンサル SLA複数対応 「授業についていけない」 SLAが分からない問い 待ち札対応 BMTG(意義)	リピーター 超上級者 SLAが対応を楽しむ 学生の進捗、レベル 態度の大切さ 未対応時活動 カルテ、活動報告書 分からなさ 締めの一言 目標設定	考えさせる対応 今後に繋がる対応 解決 学部別対応 難しい・簡単 具体例 分からないフリ 勉強法 共有 「今日の質問は？」
--	---	--

「後輩に引き継ぎたい」ものを厳選

↓

SLAが分からない問題

ニーズ

目標設定

分からないフリ

複数対応

▶「SLAが分からない問題」

SLAが分からない問題とは、超難問・専門外の問題である。

新規SLA 分からない問題を質問されるのは不安
しかし問題を解決することがSLAの目的ではない

TIPS 学生が持参した教科書を一緒に勉強する
対応開始時にこの方針を学生に伝える

重要なのは学生と共に考えること。自分も学が気持ちでいること。それにより、解けない問題へのアプローチ・姿勢を学生に示すことができる。

▶「ニーズ」

「ニーズ」には2種類ある。

①主観的「ニーズ」：学生が必要だと思っていること。
②客観的「ニーズ」：SLAが学生に必要だと思うこと。

この2つにはズレが生じることが多々ある。
この際には②を学生と共有する必要がある。

例：工学部の学生が高度な数学の問題を持ってきた。

学生：数学の厳密な証明を教えてください
SLA：工学部は原理の理解より応用が大切

▶「目標設定」

目標設定とは、コンサルティングにおいて学生対応の方針を立て学生と共有することである。

目標設定する理由
学生の当初のニーズが達成されなくとも満足感・達成感を得てもらうため。

例：学生がレポート問題を持ってくる
SLA：今日は類題を解けるようになろうね

※目標設定時は、学生のレベル・進捗・学部を踏まえる

資料

▶「分からないフリ」

分からないフリとは、学生に説明を促すための対応スキルである。

メリット

1. 学生自身が頭の整理をできる
2. 学生の理解度をSLAが把握することができる
3. 学生の主体性を促すことができる

使えるフレーズ

「僕習ったの昔すぎて忘れちゃったから教えて」
「定義教えて」
“What do you mean?”

9

▶「複数対応」

「複数対応」とは、1つの対応にSLAが複数人数入ることである。

メリット

- 多角的視点・アプローチ
- SLAの負担軽減
- 楽しい対応ができる

デメリット

- 対応計画が狂う
- 学生主体の対応でなくなる (SLA間で議論をしてしまう)

TIPS mainとsubを予め決めておく
普段から複数対応に関して議論しておく

10

▶「学生の分からなさ」

学生が感じている分からなさをSLAが理解してあげよう？
SLAが学生の潜在的な分からなさを見極めてあげよう？
「分からなさ」の意味が分からなくなり断念

▶「今後に繋がる対応」

SLAハンドブックの説明と差異化が図れず断念

11

Tohoku University Student Learning Adviser

気軽に SLA de 英会話

Let's 駅前より近いM棟留学!

◎マルチメディア教育研究棟 1階 SLAラウンジ



気軽にふらりと英会話してみよう!

超ビギナー向けカフェできました!(月4回)
英会話とかムリムリ...というもぜひ!やればできるようになるよ!!

複数人で話す「英会話カフェ」,担当SLAが会をコーディネートします♪みんな英語で会話をしてみたい人はぜひの出入り自由です!

マンツーマン形式の「1on1」,友達と一緒にの利用でもOK♪それぞれのニーズに応じた活用をどうぞ!※予約は不要ですが,利用者が満った場合は1人30分とします。

時間	MON	TUE	WED	THU	FRI
昼休み	カ Wake Up and Talk	カ Exciting Tuesday	←お昼食べながらでもOK!→	カ	カ
3コマ	白井	トウ&加藤		白井&ドナ	ドナ&ワン
4コマ	カ	カ	カ	カ	カ
5コマ	カ	カ	カ	カ	カ
	酒井	トウ	ホセ	ワン	寺岡
				ドナ	未定
				ワン	アハド

▲昼カフェは12:10~14:10,夕カフェは14:50~17:30です(10分短く,20分早く終了)
▲カフェは昼と3コマ,4コマと5コマの間は一度区切りです。3コマから,5コマからの参加もお気軽にどうぞ♪
※日程や担当者が変更になる場合もあります。最新情報・詳細はHPやM棟入口の看板をチェック!

■問い合わせ先:東北大学学習支援センター(SLAサポート) 詳細は窓口 or HPへ!
☎ 022(795)3374 http://sla.cls.ihe.tohoku.ac.jp @sla_tomosodachi
✉ sla-support@grp.tohoku.ac.jp (←問い合わせはメール推奨) 作成日 2016/6/16

ともぞ学ぼう,ともぞ育とう,ともぞたが Together we learn, Together we grow, TOMOSODACHI!

▲⑤前期英会話2

Tohoku University Student Learning Adviser

一緒に英会話やってみよう! Shirai (経3)



Sakai (文M2) 親身な対応なら彼に1リゼーターさんと会えるのとても楽しみになります!英文学の話もOK!

Tu (経M2) 英語が苦手な人も,ゆっくり一緒に英語が得意な人も,多岐関係が専門の便宜,TOEIC対策などの質問もOKとのこと。

Kato (情M2) 英語が苦手な人も,ゆっくり一緒に英語が得意な人も,多岐関係が専門の便宜,TOEIC対策などの質問もOKとのこと。

Jose (理D1) 間違えを恐れないで!シャイな人の気持ちがわかるホセくん,安心してきてくださいわね!

Wang (国M1) 言語学専攻の彼女は,文法や発音のアドバイスが得意!1on1でじっくり英会話の練習ができますよ!

Teraoka (理M2) 彼女のカフェは楽しい雰囲気満載!SLA英会話に不安がある人も気軽にきてみてくださいわね!

Dona (経M1) スポーツに旅行に写真に...色々な話題で楽しませます!楽しくなると一緒に英会話もしてみませんか?

Cho (工M1) 発音練習,プレゼンテーション,TOEFL対策は持っている!のほ,地道に英語を習得した彼からコツを!

Ahmed (理3) 物理の勉強も頑張る3年生,学校の話も,サッカー等のスポーツの話も,どちらも楽しめます!

Sumit (情M2) 英語は楽しく続けるのが一番!いつも楽しいゲームでみんなを盛り上げてくれます!

Come on! Join us!

※日程や担当者が変更になる場合もあります。最新情報・詳細はHPやM棟入口の看板をチェック!

日	月 Mon	火 Tue	水 Wed	木 Thu	金 Fri
昼休み	café 白井	café トウ&加藤	←お昼食べながらでもOK!→	café ドナ&白井	café ドナ&ワン
4コマ	café 酒井	1on1 トウ	café ホセ	1on1 ワン	café 未定
5コマ			café 寺岡	1on1 ドナ	café 未定
				1on1 ワン	café アハド

■問い合わせ先:東北大学学習支援センター(SLAサポート) 詳細は窓口 or HPへ!
☎ 022(795)3374 http://sla.cls.ihe.tohoku.ac.jp @sla_tomosodachi
✉ sla-support@grp.tohoku.ac.jp (←問い合わせはメール推奨) 作成日 2016/6/28

▲⑥前期英会話3

Tohoku University Student Learning Adviser

自主ゼミ

自主ゼミに 興味がある やってみたい やり始めた人へ

って何? ー自主ゼミ経験者の体験談からヒントをつかおう!ー

6月15日(水) 16:30~17:15 @M棟1階 SLAラウンジ

Today's SEMPAL 石川遼太郎 /理学部4年 (SLA・物理担当)

「自主ゼミ」と聞いてどんなものを思い浮かべますか。一口に「自主ゼミ」と言っても色々なタイプがあります。オーソドックスな輪読会から,少し変わったものまで,僕の体験談をお話します!

Today's SEMPAL 大沼竜也 他 /教育学部2年 (教育学研究ゼミ)

現在活動中のゼミです!教育に関する幅広い題材を基に読書会やセミナー参加などを行っています。当日は,具体的な内容をお話ししたいと思っています!

■問い合わせ先:東北大学学習支援センター(SLAサポート) 詳細は窓口 or HPへ!
☎ 022(795)3374 http://sla.cls.ihe.tohoku.ac.jp @sla_tomosodachi
✉ sla-support@grp.tohoku.ac.jp (←問い合わせはメール推奨) 作成日 2016/6/6

ともぞ学ぼう,ともぞ育とう,ともぞたが Together we learn, Together we grow, TOMOSODACHI!

▲⑦自主ゼミイベント

Tohoku University Student Learning Adviser

期末レポートを書く前に!!

短期集中レポートセミナー

アカデミックスキル入門セミナー追加版

7/7(木)16:30~17:15 @SLAラウンジ

レポート作成には,いくつかのステップがあります。これまでのセミナーの内容も紹介しながら,レポート作成の各ステップに必要なコツをお伝えします!

レポートはテスト前に少しやっておかないと後で大変なことになるよ!

これまでのセミナーを聞きのがした人にもオススメ!!

セミナーを担当するのはSLA(Student Learning Adviser)の先輩学生たち!ただ知識を伝えるだけではなく,先輩の経験値を踏まえたコツなどを盛り込んでいます!ぜひ皆さんの学びの充実に役立ててください!

東北大学 高度教育推進・学生支援機構 学習支援センター(SLAサポート)
☎ 022-795-3374 ㊚ sla-support@grp.tohoku.ac.jp
http://sla.cls.ihe.tohoku.ac.jp/information_tomosodachi 2016/6/28提示

ともぞ学ぼう,ともぞ育とう,ともぞたが Together we learn, Together we grow, TOMOSODACHI!

▲⑧前期ライティング3

Tohoku University Student Learning Adviser

先輩が1・2年生の学びをサポート!

ラウンジ開室：平日 8:30~18:00

出入自由 飲食OK 雑談OK 勉強OK

物理・数学・化学(実験他)
英会話 ライティング(レポート)
自主ゼミ支援 その他企画

2016後期セミナー

	月 Mon	火 Tue	水 Wed	木 Thu	金 Fri
1コマ	—	—	—	—	—
2コマ	—	—	物数	物数	物数
昼休み			物数	物数	物数
3コマ	物数 化	物数 化	物数 化	物数 化	物数 化
4コマ	物数 化	物数 化	物数 化	物数 化	物数 化
5コマ	物数 化	物数 化	物数 化	物数 化	物数 化

日時等の詳細は、別途ポスター・HPなどでCheckしてください!

問い合わせ先: 東北大学 高度教養教育・学生支援機構 学習支援センター (SLAサポート)
TEL 022(795)3374 E-MAIL sla-support@grp.tohoku.ac.jp (英・日・中・韓・露)
http://www.sla.cls.ihe.tohoku.ac.jp @sla_tomosodachi

〒980-8579 仙台市青葉区中央1-1-1 仙台駅前ビル16階
TEL 022(261)2111 FAX 022(261)2112

ととと学ぶ、ととと育つ、ととと成る Together we learn, Together we grow, TOMOSODACHI!

▲⑨後期常設

Tohoku University Student Learning Adviser

SLA理系サポート

2016後期セミナーの窓口紹介! ※補講期間終了日までOPEN

■ PICK UP ■ 統計も歓迎♪

■ PICK UP ■ 有機化学歓迎♪

	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri
2コマ			物理 数学	物理 数学	物理 数学
昼休み					
3コマ	物理 数学	物理 数学	物理 数学	物理 数学	物理 数学
4コマ	物理 数学	物理 数学	物理 数学	物理 数学	物理 数学
5コマ	物理 数学	物理 数学	物理 数学	物理 数学	物理 数学

■ PICK UP ■ 工学部(部パイ)のSLAがいるよ! 生物系もOK♪

■ PICK UP ■ 工学部(機知)のSLAがいるよ! 材料などOK♪

! 窓口の科目名は目安です!

Q. 文系でも質問していいんですか?
A. もちろんです! 統計や線形代数の質問を数学の窓口にかけてくれる学生さんもいます。

Q. 実験(レポート)の質問はどの窓口ですか?
A. 内容(種)によって異なりますが、主に「化学」や「物理」のメンバーが対応しています。

Q. 材料科学や流体力学などのはどの窓口ですか?
A. 主に「物理」メンバーがカバーしています。ただ、SLAも得意不得意があります。対応が難しい場合は、他のSLAを紹介いたします。

Q. 「物理」「数学」「化学」以外はないですか?
A. 特設しているSLAによって他の対応も可能な場合があります。また、「質問」ではなく「議論」や「学習相談」などの利用もOKです!

後期セミナー予報

物理: 前期と変わらず幅広い勉強が必要。式が表す意味や現象をイメージできると理解が深む!

数学: より数学が大学で学ばしくなる。多変数関数の微分や積分が、全般的に注意!

化学: 化学は分子模型等を活用し、思いがわかったところになっていないかの定期確認が吉!

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 学習支援センター (SLAサポート)
http://sla.cls.ihe.tohoku.ac.jp 川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟1F

ととと学ぶ、ととと育つ、ととと成る Together we learn, Together we grow, TOMOSODACHI!

▲⑩後期理系

Tohoku University Student Learning Adviser

SLA de 英会話

気軽に

秋から始めよう!
活動は2種類あるよ
Which would you like?
好きな方を選んでね!

カフェ
☑ みんなで楽しくて話したい
SLAが会をコーディネート!
企画・ゲーム等で英会話しよう!
【予約不要、出入り自由】
軽食持ち込みOK!

1on1
☑ 一人でじっくり練習したい
(友達と一緒にOK!)
マンツーマン形式
【予約不要、1回30~40分程度】

M棟1階SLAラウンジで活動中! SLAに声をかけてね!
初めての人は窓口でユーザーズカードを作成してください

授業開始 10分後~ 約1時間

旅行・留学・就職・大学院...
これから使う英語を
話せるようになろう!

2016後期スケジュール

カフェ	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri
昼休み					
3コマ 13:10~		カ	カ		カ
4コマ 14:50~	カ	カ	カ		カ
5コマ 16:30~		カ	カ	カ	

1on1	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri
昼休み					
3コマ					
4コマ	1				
5コマ		1	1	1	

カフェは10月17日から!

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 学習支援センター (SLAサポート)
http://sla.cls.ihe.tohoku.ac.jp 川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟1F

ととと学ぶ、ととと育つ、ととと成る Together we learn, Together we grow, TOMOSODACHI!

▲⑪後期英会話

Tohoku University Student Learning Adviser

SLA de 英会話

気軽に

各曜日のご紹介!

カフェ ☑ みんなで楽しくて話したい!

月 with ホセ (理D2)
♪ Really useful English ♪
▶ 中級者向け (少し話せる人)
日常会話から学業まで能力を高めてほしい学生、できる限り助けます。特に、高度な自分の意見を述べられるように助けます。
※ホセは帰国生
※英検2級・宇都宮大学グループ所属、TOEFL iBT 98/120
日本語を母国語とする (日本語能力試験N2)

火 with 加藤 (情M1)
♪ 初めての英会話 ♪
▶ 初心者向け
英語は勉強しただけ、会話は実践したことがないという人、大歓迎です!
まず、簡単な英会話から始め、徐々に自分の好きな話題について英語で話せる、他人に紹介できるようになることを目標に一緒にがんばりましょう。

水 with 張 (工M1)
♪ 英語でキャッチボール ♪
▶ 誰でもOK
英語はなかなか聞き取れない、喋れないなどという悩みから英語の基礎を学ぶ、他人の意見を聞き取り、自分の意見を述べるキャッチボールの練習をメインに行います。具体的には、面白いニュースや話題について、自分の意見をその場で考え、カフェ内で共有します。

金 with 酒井 (文M2) & 樋口 (工3) NEW
♪ ゲーム&ディスカッション ♪
▶ 初心者~中級者向け
勉強以外でゲームの楽しみ方、ディスカッションの楽しみ方、英会話の楽しさを一緒に学びたい人、ぜひ参加してください。また、英会話の楽しさを一緒に学びたい人、ぜひ参加してください。

1on1 ☑ 一人でじっくり練習したい!

月 with ドナ (経M2)
もし英語で話す機会を伺いたい?
もし英文筆力も高めたい?
英SLAの1on1に来てみてね♪♪

水 with 寺岡 (理M1)
近い頃に海外に住んでいて、
大学ではSAPACCOLABSで経学経験があります。
カフェに参加する方が少ない人、また英会話の楽しさを一緒に学びたい人、ぜひ参加してください。

火・木・金 with ワン (国M2)
中国語で、英語が母国語話者として上手ではないですが、教える方に自信を持っています。英会話が高手でも不安な方も気軽に一緒に練習しましょう!
今では3つの企業を準備しています。ぜひぜひ~
○分詞や前置詞の活用を練習
○英語力アップは会話力~会話の活けようとするツール
○留学前、専門の英語を身につけよう

ゲームや企画を用意しています
お気軽にどうぞ!

★Strange English
Who am I?
★Picture Game
★Karuta
★Let's make a travel plan

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 学習支援センター (SLAサポート)
http://sla.cls.ihe.tohoku.ac.jp 川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟1F

ととと学ぶ、ととと育つ、ととと成る Together we learn, Together we grow, TOMOSODACHI!

▲⑫後期英会話2

資料

企画担当
SLA募集!

SLAは、多くの先輩・後輩とかわかることができ、
その中で、リーディング、発想力、コミュニケーション力、
学習に係る経験と知識・スキル等を高めたいと思います!



学びを創るシゴト してみませんか?

募集・採用の流れ

■まずはメールで応募! 締切: 10月17日(月)
下記5点を記入し、sla-support@grp.tohoku.ac.jp
にメールを送信してください。
①名前 ②所属学部・学年
③電話番号 ④応募の動機など
⑤面接・試験の実施可能日
(10月13日~31日のあいだに可能な日)

■面接・試験の実施(約90分) (~10月31日)

- 1) 概要説明(約15分)
SLA業務の概要などについての説明を行います。
- 2) 面接(約30分)
志望の理由や活動に対する意欲などをお聴きします。
- 3) 採用試験(約45分)
学習を促進・支援するための企画力や分析力、広報・
発信等に関係するスキル・能力を見ていただきます。

■結果の通知(面接・試験から1週間以内)

■こんなことします■

- 学生の学習ニーズ調査
- 学習企画のマーケティング
- 講座・ワークショップの企画・実施
- 企画に関する広報活動
- 企画の準備・実施・評価
- センターの活動全般に関する広報・
情報発信
- 学内の学習機会の情報収集・取
材・広報活動 など

6名程度募集!

文理は問いません
特に、3年生・修士1年生大歓迎!

SLA募集要件

- ①東北大学の学生である
- ②学部3年生以上である(学部は不問)
- ③自分自身の学業上の向上ができる
- ④SLAのイベントを理解し、学生が学びたい学習支援に関心と意欲がある
- ⑤SLA同士の学び合い、SLA研修を通じたスキル・能力アップに意欲的である

勤務条件

雇用期間: 2016年11月~2017年3月(※継続あり)
勤務時間: 主に平日で、週に計3~8時間程度(応相談)
時給: 学部生1,200円、修士生1,300円

SLAとは?

SLA (Student Learning Adviser) は、学生のための学
習支援を行う学生スタッフです。
SLAのコンセプトは「ともと学ぶ、
ともに育つ、ともそだち!」学生
同士が学び合う文化を創っていく
ことで、大学の学びがより豊か
で深いものになることを目指して
います。

積極的に活動したい方お待ちしています!

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 学習支援センター(SLAサポート)
http://sla.cls.ihe.tohoku.ac.jp 川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟1F

ともと学ぶ、ともに育つ、ともそだち Together we learn, Together we grow, TOMOSODACHI!

▲13後期公募(企画)

ライティング窓口 OPEN!

期末レポートは SLAでチェック!

意外と、できているようで、できていないレポートの型!
自分では気づかないところに修正点があるかも!?
SLAでチェックして、よりよいレポートを提出しよう!
レポートを書き始める前、途中の相談も大丈夫ですよ。
※レポート以外で「文章」の相談なら何でも受け付けています!

今semの対応...2月10日まで!!

対応時間・SLA

	月	火	水	木	金
2コマ					
経					
3コマ				文 M1	
4コマ	文 M2	理 M2		教 D3	文 D2
5コマ					

こんな質問OK!

- 言葉遣い・表現・構成これだけの?
 - テーマについてどう決めれば/調べればよい?
 - この内容レポート課題にあっている?
 - どこをもう少し深めたいですか?
- 課題が書いてあるプリント等を
持って来て下さい

● 川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟1階 SLA ラウンジ内にて●

■問い合わせ先: 東北大学高度教養教育・学生支援機構 学習支援センター(SLAサポート)
☎ 022(795)3374 ✉ sla-support@grp.tohoku.ac.jp (メール受付は24時間受付)
http://sla.cls.ihe.tohoku.ac.jp @sla_tomosodachi

ともと学ぶ、ともに育つ、ともそだち Together we learn, Together we grow, TOMOSODACHI!

▲15後期ライティング



SLA de 英会話

各曜日のご紹介! 来てみてね!

カフェ みんなで楽しんで話したい!

月 with ホセ (理D2)

♪ Really useful English ♪
♪誰でもOK (簡単な英会話ができる人)
日常会話から学習意欲まで能力を高めたい学生、できる限り協力し
ます。特に、英語で自分の意見を伝えられるようサポートします。
※スキル情報
・資格: 宇津理論7グループ所属、TOEFL iBT 98/120
・日本在住年数: (日本語能力試験N2)

火3・4 with 加藤 (情M1)

♪初めての英会話♪
♪初心者向け
「英語は勉強したいけど、会話は実践したことがない」という人大歓迎で
す! 簡単な英会話から始め、徐々に自分の好きなトピックで英語で話
せることが大切だと思います。まずは自分の好きなトピックについて英語で
話して、他の人に紹介できるようにすることで目標に向かってがんばりま
しょう。

水 with 張 (工M1)

♪英語でキャッチボール♪
♪誰でもOK
英語がほとんど聞き取れないけど、喋りたい学生へ! このカフェでは会
話の基本である、他人の英語を聞き取り、自分の意見を伝えるキャッ
チボールのゲームをメインにしています。興味があれば、面白いニュースや
話題について、自分の意見をその場で発表、お互いに共有します。

火4・5 with 樋口&米田

♪E3&教3♪
♪からっと英会話♪
♪そのあなた、are you?
様々なトピックについて、楽しく英語で話せる力を目標に
しています! 英語が聞き取れて話せない人もOKです。自然に話せるよ
うな雰囲気を作りたいと思っています。第二で60分くらい
の1人1人授業を予定しています!

月 with ドナ (経M2)

もし英語で話す機会を作りたい?
もし英語が得意な人になりたい?
ぜひSLAの1 on 1に来てみてね♪♪

金 with 酒井&樋口

(文M2&工3)
♪ゲーム&ディスカッション♪
♪初心者~中級者向け
創造力、プレゼンテーション能力、異文化理解力、英語のリスニング力、通訳力
の向上が目的です。ゲーム、ディスカッションを通して、お互いの
個性を出し合い、英語を楽しく学びたい人、特に相手になりやすい!

火・木・金 with ワン(国M2)

中国出身で、英語が母語話者ほど上手ではない
ですが、教える方に自信を持っています。英会話が
苦手な方も気軽に一緒に参加しましょう!
今semは3つの企画を準備しています。ぜひぜひ~
o分かりやすいアメリカ英語発音練習
o英語が聞き取れない人は、英語の発音をよくするツール
o学習意欲、相手の英語を聴き取りよう

水 with 寺岡 (理M1)

幼少時に海外に住んでいて、
大学ではSAP/COOLABSで留学経験があります。
力に自信があるが不安な人、また英会話を楽しみまし
たい人、英語を練習したい人、特に相手になりやすい!

1on1 一人でじっくり練習したい!

Twitterで英会話の予定/様子を発信しています。チェックしてみてください!

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 学習支援センター(SLAサポート)
http://sla.cls.ihe.tohoku.ac.jp 川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟1F

ともと学ぶ、ともに育つ、ともそだち Together we learn, Together we grow, TOMOSODACHI!

▲14後期英会話3

ACADEMIAN TALK+

相手に伝わりやすい日本語、
一緒に学ぶニヤード

やさしい日本語

伝わりやすい日本語とは?

留学生在が勉強してきた日本語は、
日本人が話している日本語と、何が違う?
言いたいことが伝わる日本語のコツを分かろう!
「やさしい日本語」とは、日本人にも、留学生にも、
わかりやすい・伝わりやすい日本語のことです。
「なるほど!」こう表現すれば、相手に伝わりやすいんだ!
そんな嬉しい発見ができる「目からウロコ」の日本語講座です。

1月18日(水) 18:00-19:00
東北大学川内北キャンパス
マルチメディア教育研究棟1階 SLAラウンジ
※申し込み不要です。当日は会場に直接来てください。

- ~対象~
- コミュニケーション力を上げたい!と感じている日本人学生の皆さん
 - もっと自然な日本語を話したい!という留学生の皆さん
 - 留学生在に日本語を教えるのって難しい...と感じているチューターの
皆さん

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 学習支援センター(SLAサポート)
http://sla.cls.ihe.tohoku.ac.jp 川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟1F

ともと学ぶ、ともに育つ、ともそだち Together we learn, Together we grow, TOMOSODACHI!

▲16後期企画

学習支援センターシリーズ企画 **Academician Talk**+

目指せ! カタカナ語マスター!!

カタカナ/チカラ

がたかなのちから

私たちの生活には、様々なカタカナ語があふれています。日本人と留学生2つの視点から、ふだん何気なく使っているカタカナ語の奥深い世界に触れてみましょう。

2月7日(火) 16:30-18:00
 東北大学川内北キャンパス
 マルチメディア教育研究棟1階 SLAラウンジ
 なにか分からないことがあれば、下記アドレスにご連絡ください!
sla-support@grp.tohoku.ac.jp

- やさしくないカタカナ**
 留学生にとって「カタカナ語」はとても難しいと知っていましたか? なぜ難しいのか、中国からの留学生をプレゼンターにお迎えして皆で考えてみましょう。
 (文学部言語学研究室 研究生・謝韜)
- カタカナから生まれる意味**
 生活に身近な物事を表す言葉が生まれ、多様化すること、言葉と概念が密接に結びついていることをカタカナ語などの具体例を用いてお話しします。
 (文学部言語学研究室 4年・桑原佑司)

Tohoku University Student Learning Adviser
 東北大学 高度教養教育・学生支援機構 学習支援センター (SLAサポート)
<http://sla.cis.ihe.tohoku.ac.jp> 川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟1F
 ともと学ぼう、ともに育とう、ともそだち Together we learn, Together we grow, TOMOSODACHI!

▲⑰後期企画2

学習支援センター シリーズ企画 **ACADEMIAN TALK**

学びが
楽しくなる
音楽の話

奏でる“楽”問

「音楽についての教養を広げたい!」
 「大学のパンキョーが面白くない!」
 「自分の先輩の話を聞きたい!」 そんな1,2年生のみなさんへ

1st 2月6日(月) 17:30~19:30

- 音楽と消費行動 (笹川一平・経済学部経営学科 4年)
- 宗教と音楽 (渡辺大貴・文学研究科 修士1年)
- 数学でみる音 (中島啓貴・理学研究科数学専攻 修士2年)

2nd 2月13日(月) 13:00~15:00

- 音のカタチ (澁川友菜・理学研究科物理学専攻 修士1年)
- 音楽とこころ (手島啓文・教育学研究科 修士1年)
- 手話と歌 (林明澄・医学部医学科 2年)

川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟(1棟)1階 SLAラウンジ

Tohoku University Student Learning Adviser
 ■問い合わせ先: 東北大学 高度教養教育・学生支援機構 学習支援センター (SLAサポート)
 ☎ 022(795)3374 <http://sla.cis.ihe.tohoku.ac.jp>
 ✉ sla-support@grp.tohoku.ac.jp [@sla_tomosodachi](https://twitter.com/sla_tomosodachi)
 ともと学ぼう、ともに育とう、ともそだち Together we learn, Together we grow, TOMOSODACHI!

▲⑱後期企画3

Tohoku University Student Learning Adviser

2017年4月活動開始

SLA募集

自身の学びを1・2年生にも役立てたいあなたへ!

SLA (Student Learning Adviser) とは、「学生による学生のための学習支援スタッフ」のことで、学部3年生以上の先輩学生が、学部1,2年生の学習サポートを行っています。
 SLAのコンセプトは、「ともと学ぼう、ともに育とう、ともそだち」! 1年生周士の学び合い文化を創っていくことで、大学での学びがより豊かになることを目指しています。
 ここで必要なのが、**学生である皆さんの力**です!
 あなたの力と経験をSLAで活かしてみませんか?
 皆さんからの応募を心よりお待ちしております!!

SLA同士の学び合いは積極的な人、チームワークができる人歓迎

●募集(各担当2~3名程度)●

- ①理系科目(物理、数学、化学)担当**
 1,2年生範囲の理系科目に関する質問対応
 ※化学担当者歓迎!
- ②ライティング担当**
 レポートを中心とした文章作成に関する質問対応
 (留学生の日本語文章を含む)
- ③英会話担当**
 英会話対応や英会話カフェの企画・実施
- ④企画担当**
 学習イベントの企画・実施、広報等
 ※2016年度後期から新しく始まった「学びを創る」活動です!
 ※学部生、文系学生歓迎です!

興味を持った方は...

●説明会への応募 締切: 2017年2月7日(火)
 下記5点を記入し、学習支援センターにメールを送信してください。

①名前 ②所属学部・学年 ③電話番号 ④希望する担当

⑤下表、説明会候補日の<参加可・不可>

	2/8 水	2/10 金	2/14 火	2/16 木
A. 12:15-12:45	○/×	○/×	○/×	○/×
B. 15:00-15:30	○/×	○/×	○/×	○/×

(アドレス: sla-support@grp.tohoku.ac.jp)

●採用までの流れ

- 1) 説明会への参加 (約30分)**
 SLAの活動全般について事前・試験についての説明を行います。説明会参加者として、正しく応募するのちから考えください。
 ▼ 正式メンバーになった場合 ▼
- 2) 面接・試験の実施 (約90分) (2月中旬)**
 正式メンバーの前に、個別に面接を実施します。試験内容は希望担当ごとに異なります。
- 3) 結果の通知 (3月上旬)**

詳しくは、ホームページの「SLA募集」欄をご覧ください!

●応募条件

- ① 東北大学の学部3年生以上の学生である
- ② 自分自身の学習との関わりができる
- ③ SLAのコンセプトを理解し、学生周士の学び合いや大学の学習支援に関心と意欲がある
- ④ SLA同士の学び合い、SLA研修を通じたスキル・能力アップに意欲的である
- ⑤ 理系科目担当は、関連する授業成績が優秀である
- ⑥ 留学生は、日本語でのコミュニケーションが可能なものである

●勤務条件

雇用期間: 2017年4月~9月 (※更新有)
 活動時間: 月曜日から土曜日まで
 勤務時間: 平日、朝7:30~8時(朝程度(夜程度))
 給料: 学部生、2,000円/月(学生、3,000円)

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 学習支援センター (SLAサポート)
 川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟1F <http://sla.cis.ihe.tohoku.ac.jp>
 ともと学ぼう、ともに育とう、ともそだち Together we learn, Together we grow, TOMOSODACHI!

▲⑲後期公募

資料

■資料 D 2016 年度学習支援センター活動略歴

4 月	4 日	センター定例ミーティング (第 1 回)
	5 日	2016 年度前期活動説明会・新規採用者向け研修会
	11 日	数学、英語、ライティング部会キックオフミーティング
	12 日	物理部会キックオフミーティング
	13 日	化学、英語部会キックオフミーティング
	18 日	【SLA 通常活動開始 (窓口 OPEN)】
	25 日	第 1 回アカデミックスキル入門セミナー
	26 日	第 2 回アカデミックスキル入門セミナー
5 月	12 日	ライティング部会 第 2 回定例ミーティング
	13 日	センター定例ミーティング (第 2 回)
	16 日	数学部会 第 2 回定例ミーティング
	17 日	英語部会 第 2 回定例ミーティング
	18 日	化学部会 第 2 回定例ミーティング
	19 日	物理部会 第 2 回定例ミーティング
	20 日	シニア SLA 第 1 回ミーティング
	23 日	第 3 回アカデミックスキル入門セミナー開催
	27 日	共通研修 No.1
	30 日	第 4 回アカデミックスキル入門セミナー
6 月	2 日	ライティング部会 第 3 回定例ミーティング
	7 日	第 5 回アカデミックスキルセミナー センター定例ミーティング (第 3 回)
	13 日	英語部会 第 3 回定例ミーティング
	14 日	第 6 回アカデミックスキル入門セミナー
	15 日	自主ゼミイベント「大学的学び方—自主ゼミって何?」開催 物理部会 第 3 回定例ミーティング
	17 日	数学部会 第 3 回部会定例ミーティング
	21 日	第 7 回アカデミックスキル入門セミナー
	22 日	化学部会 第 3 回定例ミーティング
28 日	第 8 回アカデミックスキル入門セミナー	
7 月	5 日	センター定例ミーティング (第 4 回)
	6 日	課外活動・ボランティア活動支援センター情報交換会
	7 日	第 9 回アカデミックスキル入門セミナー
	8 日	関西大学・同志社大学様ご来訪
	14 日	ライティング部会 第 4 回定例ミーティング
	19 日	センター臨時ミーティング
	20 日	同志社大学様ご来訪
	21 日	物理、数学、化学、英語部会 第 4 回定例ミーティング
27-28 日	オープンキャンパス	
8 月	1 日	センター定例ミーティング (第 5 回)
	5 日	化学部会 第 5 回定例ミーティング
	9 日	物理、数学、英語、ライティング部会 第 5 回定例ミーティング
	10 日	【SLA 通常活動終了 (窓口 CLOSE)】
	31 日	『学習支援センター 年次活動報告書 2015』発行
		* 学期末採用活動

9月	6-8日	SLA 研修合宿実施
	14日	センター定例ミーティング（第6回）
	20日	早稲田大学ライティングセンター訪問調査（教員3名）
	30日	2016年度後期活動説明会
10月	*企画 SLA 採用活動	
	4日	センター定例ミーティング（第7回） 物理、化学部会 後期第1回定例ミーティング
	5日	ライティング部会 後期第1回定例ミーティング
	7日	数学、英語部会 後期第1回定例ミーティング
	11日	【SLA 通常活動開始（窓口 OPEN）】
	28日	共通研修 No.2
11月	1日	センター定例ミーティング（第8回）
	5日	CLS“学びの転換”セミナー（第1回） 兼 共通研修 No.3
	7日	早稲田大学ライティングセンター公開研修参加（教員2名、SLA1名） 物理、ライティング部会 後期第2回定例ミーティング
	8日	英語部会 後期第2回定例ミーティング
	10日	化学部会 後期第2回定例ミーティング
	11日	数学部会 後期第2回定例ミーティング
	29日	共通研修 No.4
12月	1日	共通研修 No.5
	5日	ライティング部会 後期第3回定例ミーティング
	9日	センター定例ミーティング（第9回）
	13日	英語部会 後期第3回定例ミーティング
	19日	物理、化学部会 後期第3回定例ミーティング
	20日	数学部会 後期第3回定例ミーティング
1月	17日	センター定例ミーティング（第10回）
	18日	第1回企画 SLA イベント「やさしい日本語」開催
	23日	ライティング部会 後期第4回定例ミーティング
2月	*学期末採用活動 *SLA 年度末ヒアリング	
	6日	第2回企画 SLA イベント「奏でる”楽”問」prat1 開催
	7日	第3回企画 SLA イベント「カタカナの子カラ」開催 化学部会 後期第4回定例ミーティング
	8日	ライティング部会 後期第5回定例ミーティング
	9日	英語、物理部会 後期第4回定例ミーティング
	10日	【SLA 通常活動終了（窓口 CLOSE）】
	13日	センター定例ミーティング（第11回） 第4回企画 SLA イベント「奏でる”楽”問」prat2 開催
	15日	CLS“学びの転換”セミナー（第2回） 兼 共通研修 No.6
	16日	数学部会 後期第4回定例ミーティング
	27日	2016年度後期活動報告会・卒業生送別会
3月	*各種次年度準備作業	
	2-3日	同志社大学良心館ラーニングcommons合同研修開催
	13日	センター定例ミーティング（第12回）

＝編集後記＝

『学習支援センター（SLA サポート）年次活動報告書』の発行も3回目を迎えます。2016年度は、SLA活動開始から7年目、学習支援センターの発足から3年目となり、センタースタッフ体制が大きく変わったことに始まった年でした。

2016年度中の学習支援活動における最大の挑戦の一つは「企画担当 SLA」の発足です。これまで、支援形態の一つの柱でありつつも専任の SLA を配置してはこなかった企画発信型学習支援でしたが、本年度着任された佐藤智子副センター長の主導のもと、「学びの機会を創造する」支援の充実強化が図られました。

スタッフ体制の拡充は、SLA の研修体制の整備を進める契機ともなりました。これまで OJT を基本としてきた SLA 育成の取組に、Off-JT として「学習とは何か?」「学習支援者とは何か?」という知識理解を得る機会が加わり、初任者研修の整備などが進められました。また実践の蓄積とセンターの組織的発展段階に呼应し、先輩 SLA が後輩 SLA を育成する体制が強化されたこと、開発・実践が先行する理系学習支援や英会話支援において学生対応（チュータリング）・活動の基本形が共通基盤化されつつあることなどが本年度の新たな動向です。

併せて、学習支援事例の一定の蓄積をもとに、正課教育にその知見・情報をフィードバックする体制の整備に着手しました。これにより、大学全体のラーニングコモンズ化を推進する大学教育改革において「高年次学生」が支援者となる本センターの特徴に、さらに新たな意義・機能が見出されつつあります。

こうした「新たなチャレンジ」を重ねてきた 2016 年度の活動は、その成果も課題も多く見出され、一冊の報告書として纏めるまでに例年以上に時間を要してしまいました。既に 2017 年度後半を迎える中での発行となりましたことを関係各位にお詫び申し上げます。

末筆となりましたが、本報告書作成にあたっては、センター外の方々に論稿執筆を多数お願いいたしました。ご協力に心より感謝申し上げます。

大学等の高等教育機関において、学生の学びと成長を多方面から支える教育・学習支援活動に従事される皆様へ、本報告書がその動向推進の一助となることを願っております。

(足立佳菜)

学習支援センター（SLA サポート）年次活動報告書 ー2016 年度ー Annual Report 2016 / Center for Learning Support(SLA Support Office)

発行 2017 年 10 月 31 日
編集 東北大学 高度教養教育・学生支援機構 学習支援センター
連絡先 〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41 番地 マルチメディア教育研究棟 1F
学習支援センター（SLA サポート）
WEB <http://sla.cls.ihe.tohoku.ac.jp/>

印刷 北日本印刷株式会社

※SLA 学生の各種作成物の情報は、学生個人の見解によるものも含まれることをあらかじめご了承ください。
※本冊子掲載の写真データの無断使用を固く禁じます。

*Together we learn,
Together we grow,
"TOMOSODACHI"!
with Student Learning Adviser*